

文化庁委託事業報告書

---

# 東日本大震災において危機的な状況が危惧される 方言の実態に関する予備調査研究

---

2012年3月

東北大学大学院文学研究科  
東北大学方言研究センター



## まえがき

—なぜ、今、方言なのか—

昨年(2011年)の3月11日に発生した大地震は、東日本に未曾有の被害をもたらした。たくさんの命が奪われ、生活の場が崩壊した。長年住み慣れた土地を離れざるを得ない人々も多く出た。しかし、まもなく一年になろうとする今、被災者たちは、ふるさとの復興に向けて立ち上がりつつある。まず何よりも人間の生存、すなわち、衣食住に関わることがらが重要な課題となっている。生活の糧を得るための産業の立て直しも急務である。医療や教育の問題も解決しなければいけない。

そうした、人間の生存に直接関わる課題に比べると、地域の文化に関する問題への取り組みは一見緊急度が低いように思われる。しかし、地域の復興は文化の復興とセットにならなければ成し得ないものであろう。なぜならば、人々の暮らしは、地域の文化のなかで営まれてきたものだからである。単に生存するということを超え、これまで通り人々がその地域に根をおろして生活していくためには、その土地土地の文化的な環境の支えがどうしても必要となる。

そのような意味で、地域の文化の保全・復興に関わる取り組みが進められているのは非常に重要なことである。それらの取り組みは、例えば、神社仏閣等の文化財や、古文書・古記録などの保存・修復の作業として行われている。あるいは、祭りや舞踊などの伝統行事・芸能も対象になっている。取り組みの対象は、ひとことで言えば、形のあるもの、目に見えるものであると言える。

それでは方言はどうだろうか。方言はいわゆる文化財や伝統芸能とは異なり、形のないもの、目に見えないものである。そのせいか、方言を文化として捉える姿勢は一般には弱い。また、方言が人間の生き死にに積極的に関わるものとは思えないというのが普通の理解であろう。確かに方言は、われわれにとってあまりにも日常的で当たり前の存在でありすぎた。しかし、今回のような大災害のなかに身を置くと、文化としての方言、さらには生存に関わる方言の意義が重く理解されてくる。

人間を人間たらしめている最たる要素は言葉であろう。その言葉がさまざまな文化の根底にあることは疑い得ないのではないか。そして、日本列島に豊かな文化の地域差が存在するとすれば、それをもたらす基盤に言葉の地域差、すなわち方言があることは間違いない。しかも、各地の方言は、一朝一夕にしてできあがったものではない。長い歴史のなかで、時間をかけて作り上げられてきたのが方言であり、そこには日本列島に展開したさまざまな文化の歴史が投影されている。その点では、方言はわれわれにとって、最も貴重な文化遺産であると言っても過言ではない。

言葉は人間と共にある。地域の言葉である方言は、地域の人々と共にある。社会の効率化、文化の画一化の流れのなかで、人々は方言にその土地らしさを求めるようになってきた。都会化の波が各地に及ぶなかで、ふるさとの温かみを方言に感じ取ろうとし始めている。方言は今や人々の地域的アイデンティティーの拠り所と言えるものなのである。これまで、当たり前の言葉であった方言が、現代においては、人間の生存を心理的に支える存在にまでなってきたのである。

以上、見てきたように、方言はわれわれの貴重な文化遺産であり、地域文化の象徴的存在である。また、そこに暮らす人々の精神的支柱でもある。今回の大震災は、そうした方言にどのような影響を与えるのだろうか。また、生きた言葉としての方言は、地域の復興にいかなる役割を果たし得るのだろうか。そして、この震災を機に、今後方言をどうしていくべきであろうか。そうした問いに答えることは、われわれ、方言に関心を持つ者にとって、今、ぜひとも取り組まなければならない課題であるとする。

さて、本書は文化庁の委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究事業」の報告書である。全体は大きく2部からなっている。第Ⅰ部「東日本大震災の中の方言」は、震災と方言をめぐるさまざまな問題を概観し、具体的な取り組みに向けて第一歩を踏み出したことの報告である。また、第Ⅱ部「被災地方言の記録に向けて―三陸地方南部の方言調査報告―」は、今回の被災地であり、それゆえに、「危機的な状況が危惧される」宮城県気仙沼市方言、および、それを含む三陸地方南部地域の方言についての記録調査の報告となっている。

この報告書をまとめるにあたっては、被災地の方々や支援者の方々にたいへんお世話になった。第Ⅰ部の取り組みでは、気仙沼市において聞き取り調査を実施したが、市役所をはじめ、教育委員会、ボランティアセンター、避難所、仮設住宅などの方々にご協力いただいた。また、研究文献の調査では国立国語研究所図書館のお世話になり、河北新報社からも情報提供を受けた。震災の非常時の中にあいながら、私どもの取り組みに理解を示してくださったみなさまに、心から感謝したい。また、第Ⅱ部の方言調査においては、気仙沼市、および、宮城県・岩手県にまたがる三陸地方南部地域の話者の方々のお世話になった。また、各地の教育委員会や博物館など、協力機関の方々に調査のためのさまざまな便宜を計らっていただいた。ふるさとの方言を記録として残すために、貴重な時間を割いて協力してくださったみなさまに、心よりお礼を申し上げたい。

この報告書が多くの方々の目にとまり、被災地の方言の将来について考えるひとつのきっかけとなることを期待する。

2012年3月8日

東北大学大学院文学研究科・  
東北大学方言研究センター教授  
小林 隆



東日本大震災において危機的な状況が危惧される  
方言の実態に関する予備調査研究 報告書

目 次

第Ⅰ部 東日本大震災の中の方言

東北大学方言研究センターの取り組み .....	小林 隆	1
被災地の方言の特徴 .....	田附敏尚	4
消えゆく被災地の貴重な方言 .....	中西太郎	20
被災者を支える方言 .....	魏ふく子	71
支援者の方言理解のために .....	坂喜美佳	111
方言保存のさまざまな方法 .....	津田智史	127
未来に残す被災地の方言 .....	川越めぐみ	139

第Ⅱ部 被災地方言の記録に向けて  
—三陸地方南部の方言調査報告—

研究の概要 .....	小林 隆	185
音韻 .....	大橋純一	191
アクセント—気仙沼市— .....	佐藤亮一	205
アクセント—三陸地方南部地域— .....	田中宣廣	217
動詞の活用 .....	田附敏尚	228
格助詞相当形式「ンドゴ」 .....	玉懸 元	243

終助詞「ゴド」 .....	玉懸 元	249
ヴォイス（受身・可能） .....	竹田晃子	257
テンス・アスペクト .....	竹田晃子	271
想起表現 .....	吉田雅昭	283
伝統的方言語彙 .....	作田将三郎	302
新しい方言語彙・三陸地方特有語彙 .....	武田 拓	321
方言特有の「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の分布状況 …	櫛引祐希子	325
グイラ・ボット系オノマトペの個人差について .....	川越めぐみ	337
驚きの感動詞「バ」 .....	小林 隆・澤村美幸	349
あいさつ表現 .....	中西太郎	373
寝かせつけ場面を中心とした育児の言語行動 .....	椎名渉子	393
付録 調査票 .....		407

## 第 I 部

### 東日本大震災の中の方言



# 東北大学方言研究センターの取り組み

小 林 隆

東北大学方言研究センターでは、学生たちとともに、この1年間、震災と方言をめぐるさまざまな課題に取り組んできた。すなわち、小林の担当する方言学の授業のなかで、具体的な問題を洗い出し、複数のチームに分かれて検討を行った。そこでは、インターネットや図書館などを通じて基礎的な情報・文献を入手する一方、さまざまな公共機関や新聞社にも足を運んだ。また、現地を訪れ被災者や支援者の方々から直接お話をうかがうとともに、被災地の言語景観を調査した。それらの結果は、授業のなかで発表され議論された。この報告書の第Ⅰ部の内容は、そうした活動の成果であり、チームごとの報告を最終的にリーダーの大学院生たちがまとめたものである（注）。

さて、このような取り組みを開始するに当たり、まず、震災と方言に関するさまざまな問題点を概観した。具体的には次のような課題を見出した。

## 課題1 被災地についての情報収集（＝取り組みの前提を準備する）

- ・どのような被害が起こっているか。  
→災害の種類と被災の実態について状況を把握する。
- ・被災地とはどこなのか。  
→被災地地図を作成し、地理的な広がりの中で被災地を認識する。
- ・被災地の人々（被災者）はどうなったのか。  
→人口の減少や避難の状況について把握する。

## 課題2 被災地の方言の特徴（＝方言学的に方言を把握する）

- ・被災地の方言とはそもそもどのような方言なのか。  
→従来の研究を整理し特徴を把握する。区画論的位置づけと体系的・地理的特徴。
- ・それらについてどのような研究が行われてきたのか。  
→研究文献や資料の目録を作成することで、研究の現状を把握する。
- ・方言の記録として不足している部分は何か。  
→上記の作業を通して、今後取り組むべき課題を見出す。

## 課題3 被災地の方言の現状と将来（＝方言と方言学の将来について考える）

- ・どのような方言が消滅の危機に瀕しているのか。  
→被災地地図と方言地図との対比により消えていく方言を把握する。
- ・その方言の消滅は方言学にどのような影響を与えるのか。  
→類型論や方言圏論などの観点から影響を考える。
- ・今後、被災地の方言はどうなっていくのか。

→消滅・統合・拡散、あるいは共通語化などいなる現象が予想されるか。

#### **課題4 被災地の方言の保存** （＝方言学的な支援のあり方を検討する）

- ・被災地の方言を記録するにはどうしたらよいか。
  - 被災・避難という状況下での方言調査の計画について考える。
- ・被災地の方言の継承を考えるには何が必要か。
  - 若い世代への継承の必要性和その方法について検討する。
- ・被災地の方言はどのように保存されるべきか。
  - 学術的な保存と社会的な保存の方法の両面を考える。

#### **課題5 被災地の方言をめぐる社会的問題** （＝社会方言学・実践方言学に踏み出す）

- ・被災地において見られる方言の社会的問題とはどのようなものか。
  - 救援隊・医療関係者・ボランティアと被災地方言との関係についてなど。
- ・住民の避難に伴い方言にどのような問題が生じているのか。
  - 避難先の方言との間に起こる摩擦・トラブルについて考える。
- ・それらの問題に対して、どのような取り組みを行うことができるか。
  - 摩擦・トラブルを回避・解消するための方策について考える。

#### **課題6 被災地における方言の意義** （＝方言機能論の立場から方言をとらえる）

- ・被災地の住民は地元の方言に対してどのような感情を抱いているか。
  - 方言を自覚的に意識しコミュニティや避難先での連帯感維持に役立てているか。
- ・復興支援者は被災地の方言をどのような目で見ているか。
  - 外から入り込んだ人々の、地元方言に対する見方はどのようなものか。
- ・方言は被災地の住民を励ますためにどのように利用されているか。
  - 救援隊やタレント、あるいは行政が作成する標語などの方言利用について。

以上のように、震災と方言をめぐる課題は、方言研究の基礎から実践的な側面に至るまで広範囲に及ぶ。また、今すぐ取り組める課題と、長期的展望に立って慎重に進めるべき課題とが存在する。その点を見極めながら、われわれスタッフができうる範囲でテーマを設定し、取り組みを行った。この報告書では、それらの成果を次の6つの角度から紹介する。

- (1) 被災地の方言の特徴
- (2) 消えゆく被災地の貴重な方言
- (3) 被災者を支える方言
- (4) 支援者の方言理解のために
- (5) 方言保存のさまざまな方法
- (6) 未来に残す被災地の方言

地震発生直後、われわれの最初の取り組みは、これまで調査でお世話になった方々にお見舞いの手紙を送ることや、ホームページに被災者を励ますメッセージを掲載することから始まった。しだいに、震災の様子が明らかになる中で、方言をとりまくさまざまな課題が見えてくるようになり、今回の取り組みへと発展していった。

最初に記したように、今回の取り組みは学生たちが主体となって行ったものである。学生たちがこの活動を通して、震災の中にある方言という存在に真摯に向かい合ったことは間違いない。そこで得られたものは、学生ひとりひとりにとって大きな意味をもつはずである。しかしながら、一方で、この種の取り組みとしてははなはだ不完全であり、不十分さが残ることは否めない。今回のものは、文字通りの中間報告であると言わざるを得ない。

その点では、この報告書をご覧くださいの方々に、いろいろご教示をいただければありがたいと思っている。また、ここで示したような多くの課題が、われわれだけで解決できるとはとうてい思われぬ。本格的な活動のためには、たくさんの方々の参加が必要であることは、最初から目に見えているのである。これを機に、こうした取り組みが大きく前進することを願うとともに、そうしたことのひとつのきっかけに、この報告書がなることを期待している。

最後に、今回の活動に参加したわれわれのメンバーを紹介しておく。

専門研究員：中西太郎

大学院生：椎名渉子、田附敏尚、川越めぐみ、内間早俊、津田智史、魏ふく子、坂喜美佳、  
石山理恵、貝野瀬美那、小原雄次郎、佐藤亜実、趙倩婧、劉玉濛、金美英

学 部 生：田茂慧祐、浦藤駿気、飯塚敦史、猪狩慶紀、大場雄司、尾形千里、奥山浩佳、  
菊地恵太、工藤千桜秀、佐倉友季絵、佐々木遥子、佐藤加奈、平松且企、青木佳世  
学部研究生：黄川川

学部特別聴講生：エディリマンナ・ジャーヌーカ

注：この報告書の第Ⅰ部として提示する内容は、昨年10月9日に行った研究報告会「東日本大震災と方言」（於 仙台国際センター）のために作成した報告書、『東日本大震災と方言』をもとにしたものである。ただし、今回の最終報告を作成するに当たり、新たな観点からの分析を加えたり、文献目録を改訂したりするなど、その後の活動の成果も取り込んである。

# 被災地の方言の特徴

田 附 敏 尚

## 1 はじめに

ここでは、全体にかかわる二つの基本的な事項を確認していく。

一つは、東日本大震災における「被災地はどこか」という点であり、もう一つは、「被災地の方言はどんな方言か」という点である。以下において、総務省統計局や警察庁、経済産業省のデータなどにより被災地と被害状況を確認したのち、その被災地のごく基本的な方言の特徴を概観していく。

## 2 被災地はどこか

今回の震災において、被災地と考えられる地域は大きく2つに分かれる。一つは、津波による被害地域、もう一つは福島第一原発事故の影響が大きい地域である。

まず、以下に総務省統計局・政策統括官（統計基準担当）・統計研修所の web サイト（<http://www.stat.go.jp/info/shinsai/index.htm>）にある浸水地域の統計情報と地図情報を掲げる。

浸水範囲概況にかかる人口・世帯数（平成22年国勢調査人口速報集計結果による）

地域		浸水範囲概況にかかる人口及び世帯数(a)		当該市区町村の人口及び世帯数(b)		浸水範囲概況の割合(%) (a)÷(b)×100	
		人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
02 青森県	203 八戸市	5,229	1,760	237,473	91,925	2.2	1.9
	207 三沢市	1,924	589	41,260	16,246	4.7	3.6
	411 六ヶ所村	3,453	1,349	11,092	4,751	31.1	28.4
	412 おいらせ町	3,820	1,203	24,188	8,329	15.8	14.4
	424 東通村	223	81	7,253	2,710	3.1	3.0
	446 階上町	1,189	393	14,702	5,705	8.1	6.9
	合 計	15,838	5,375	335,968	129,666	4.7	4.1

県		市区町村	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
03 岩手県	202 宮古市		18,378	7,209	59,442	22,504	30.9	32.0
	203 大船渡市		19,073	6,957	40,738	14,814	46.8	47.0
	207 久慈市		7,171	2,553	36,875	14,015	19.4	18.2
	210 陸前高田市		16,640	5,592	23,302	7,794	71.4	71.7
	211 釜石市		13,164	5,235	39,578	16,095	33.3	32.5
	461 大槌町		11,915	4,614	15,277	5,674	78.0	81.3
	482 山田町		11,418	4,175	18,625	6,605	61.3	63.2
	483 岩泉町		1,137	431	10,804	4,355	10.5	9.9
	484 田野畑村		1,582	526	3,843	1,309	41.2	40.2
	485 普代村		1,115	380	3,088	1,042	36.1	36.5
	503 野田村		3,177	1,069	4,632	1,576	68.6	67.8
	507 洋野町		2,733	932	17,910	6,117	15.3	15.2
	合 計		107,503	39,673	274,114	101,900	39.2	38.9



地域				浸水範囲概況にかかる 人口及び世帯数(a)		当該市区町村の 人口及び世帯数(b)		浸水範囲概況の割合(%) (a)÷(b)×100	
県		市区町村		人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
04	宮城県	102	宮城野区	17,375	6,551	190,485	85,790	9.1	7.6
		103	若林区	9,386	2,698	132,191	58,891	7.1	4.6
		104	太白区	3,201	1,136	220,715	91,585	1.5	1.2
		202	石巻市	112,276	42,157	160,704	57,812	69.9	72.9
		203	塩竈市	18,718	6,973	56,490	20,314	33.1	34.3
		205	気仙沼市	40,331	13,974	73,494	25,464	54.9	54.9
		207	名取市	12,155	3,974	73,140	25,150	16.6	15.8
		209	多賀城市	17,144	6,648	62,979	24,047	27.2	27.6
		211	岩沼市	8,051	2,337	44,198	15,530	18.2	15.0
		214	東松島市	34,014	11,251	42,908	13,995	79.3	80.4
		361	亘理町	14,080	4,196	34,846	10,899	40.4	38.5
		362	山元町	8,990	2,913	16,711	5,233	53.8	55.7
		401	松島町	4,053	1,477	15,089	5,149	26.9	28.7
		404	七ヶ浜町	9,149	2,751	20,419	6,415	44.8	42.9
		406	利府町	542	192	34,000	10,819	1.6	1.8
		581	女川町	8,048	3,155	10,051	3,968	80.1	79.5
		606	南三陸町	14,389	4,375	17,431	5,295	82.5	82.6
		合 計	331,902	116,758	1,205,851	466,356	27.5	25.0	

	県		市区町村	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
07	福島県	204	いわき市	32,520	11,345	342,198	128,516	9.5	8.8
		209	相馬市	10,436	3,076	37,796	13,240	27.6	23.2
		212	南相馬市	13,377	3,720	70,895	23,643	18.9	15.7
		541	広野町	1,385	444	5,418	1,810	25.6	24.5
		542	楡葉町	1,746	543	7,701	2,576	22.7	21.1
		543	富岡町	1,401	552	15,996	6,141	8.8	9.0
		545	大熊町	1,127	359	11,511	3,955	9.8	9.1
		546	双葉町	1,278	402	6,932	2,393	18.4	16.8
		547	浪江町	3,356	1,006	20,908	7,171	16.1	14.0
		561	新地町	4,666	1,400	8,218	2,461	56.8	56.9
				合 計	71,292	22,847	527,573	191,906	13.5

県	市区町村	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
08 茨城県	201 水戸市	1,209	379	268,818	111,992	0.4	0.3
	202 日立市	7,211	2,791	193,129	77,932	3.7	3.6
	214 高萩市	1,519	596	31,014	11,656	4.9	5.1
	215 北茨城市	7,212	2,725	47,026	16,965	15.3	16.1
	221 ひたちなか市	5,616	2,049	157,012	60,276	3.6	3.4
	222 鹿嶋市	3,794	1,163	66,030	25,222	5.7	4.6
	232 神栖市	3,752	1,190	94,823	35,760	4.0	3.3
	234 鉾田市	3,667	1,160	50,161	16,946	7.3	6.8
	309 大洗町	3,982	1,482	18,331	7,020	21.7	21.1
	341 東海村	2,172	748	37,430	14,109	5.8	5.3
	合 計	40,134	14,283	963,774	377,878	4.2	3.8

県		市区町村	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
12	千葉県	202 銚子市	2,088	856	70,225	26,948	3.0	3.2
		215 旭市	8,303	2,844	69,074	23,121	12.0	12.3
		235 匝瑳市	2,892	909	39,826	12,869	7.3	7.1
		237 山武市	5,358	1,719	56,086	19,297	9.6	8.9
		402 大網白里町	922	330	50,122	18,117	1.8	1.8
		403 九十九里町	7,766	2,937	18,009	6,617	43.1	44.4
		410 横芝光町	1,813	615	24,679	8,278	7.3	7.4
		421 一宮町	2,293	851	12,042	4,452	19.0	19.1
		423 長生村	378	126	14,751	5,030	2.6	2.5
		424 白子町	3,718	1,303	12,151	4,257	30.6	30.6
		合 計		35,531	12,490	366,965	128,986	9.7

合 計	602,200	211,426	3,674,245	1,396,692	16.4	15.1
-----	---------	---------	-----------	-----------	------	------

注)

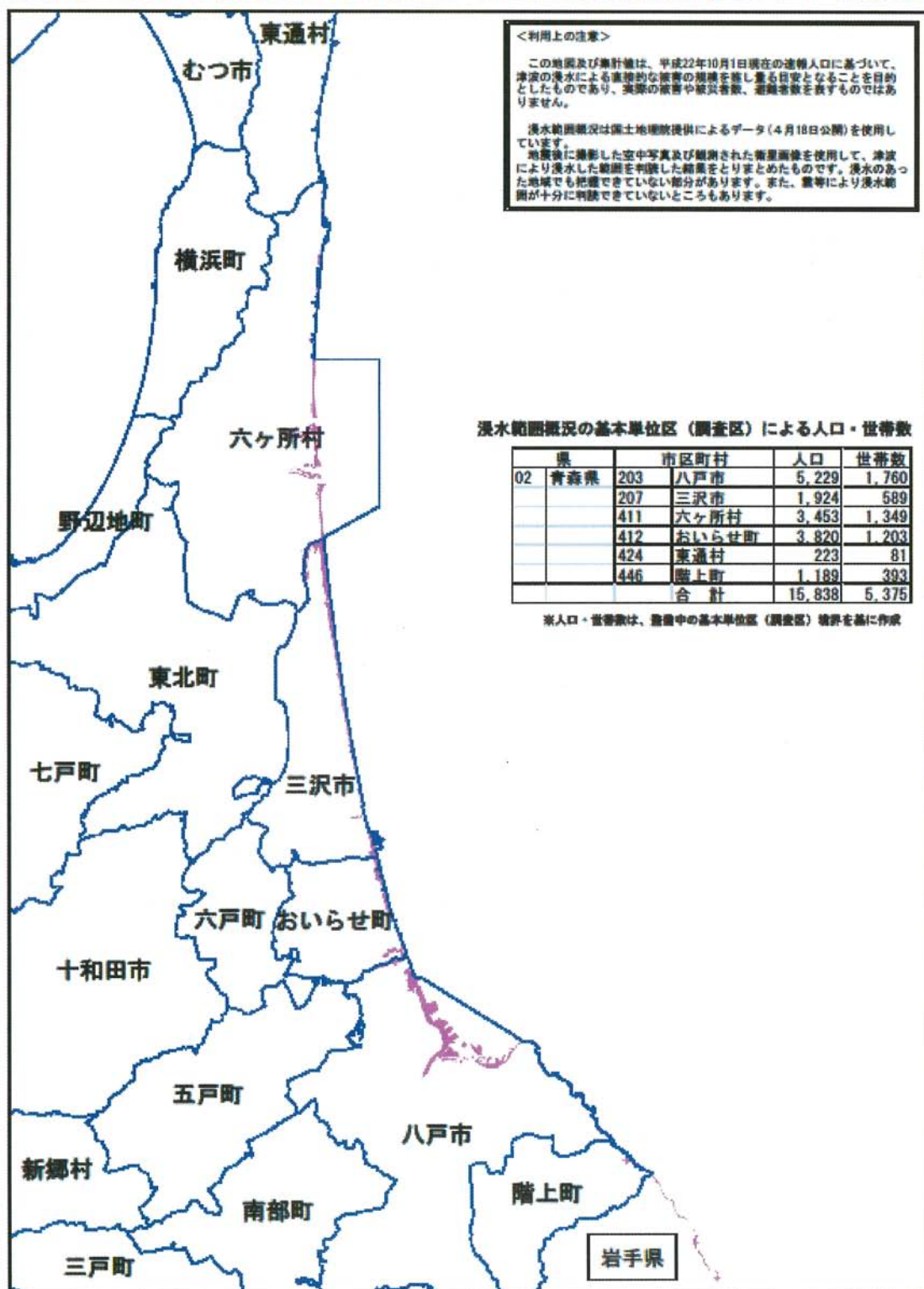
○ この集計値は、平成22年10月1日現在の速報人口に基づいて、津波の浸水による直接的な被害の規模を推し量る目安となることを目的としたものであり、実際の被害や被災者数、避難者数を表すものではありません。

○ 浸水範囲概況は、国土地理院提供によるデータ(4月18日公開)を使用しています。

航空写真・衛星画像等から推定したものであり、現地踏査で確認したものではないため、実際とは異なる場合があります。

総務省統計局

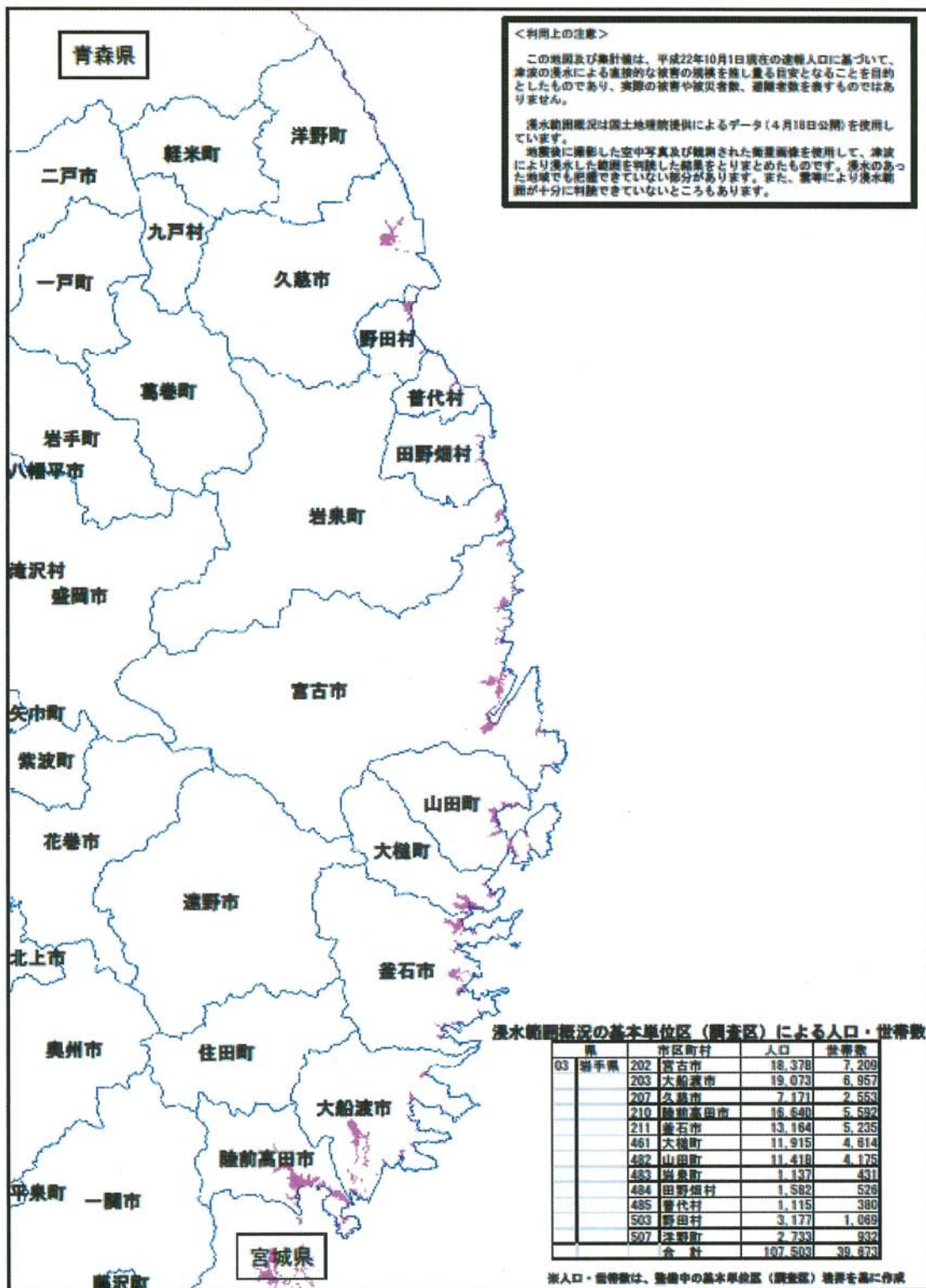
## 青森県の浸水範囲概況にかかる基本単位区(調査区)による人口・世帯数



出典 平成22年国勢調査(速報集計)

総務省統計局 統計調査部地理情報室

## 岩手県の浸水範囲概況にかかる基本単位区(調査区)による人口・世帯数

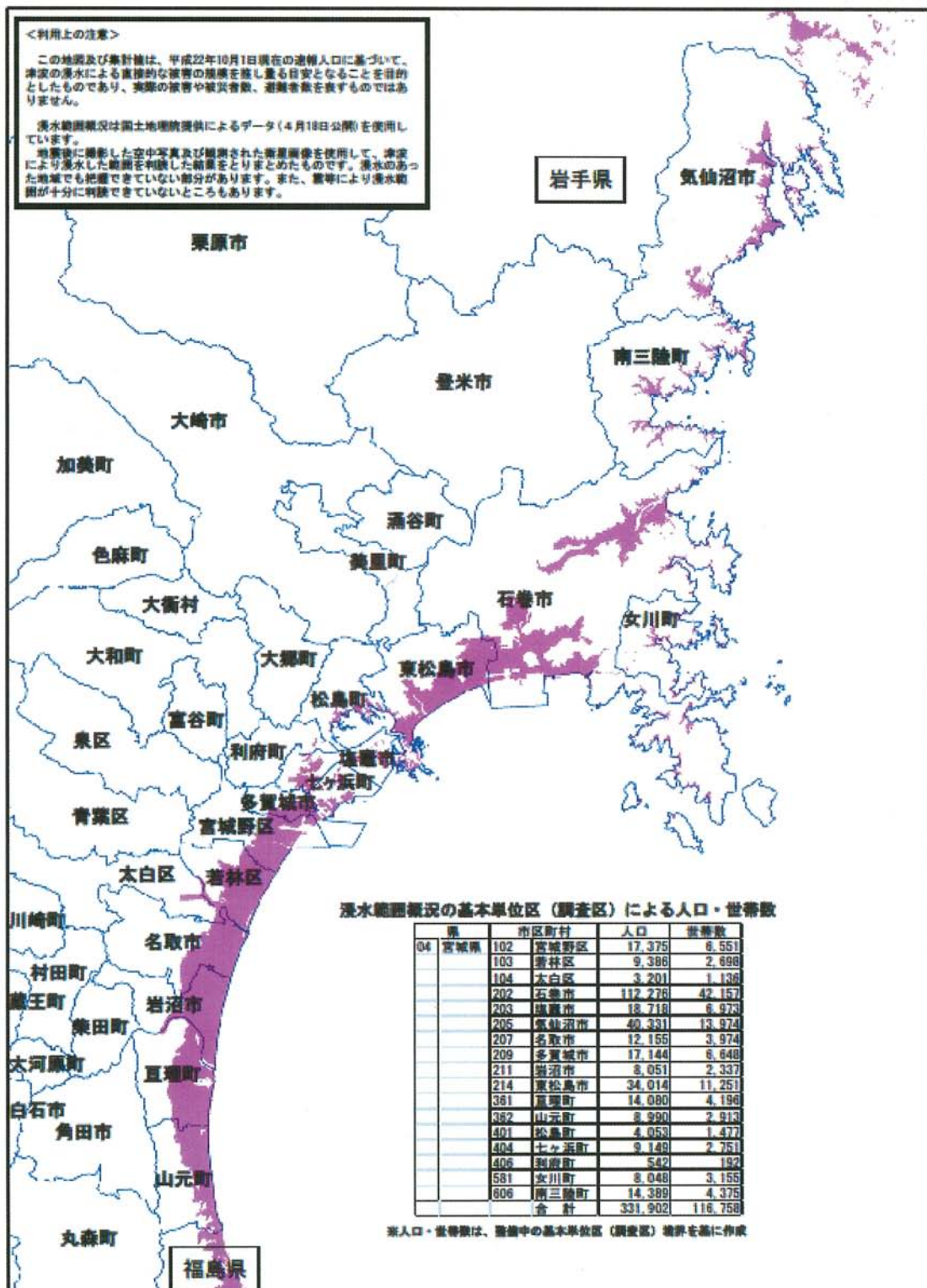


出典 平成22年国勢調査(速報集計)

総務省統計局 統計調査部地理情報室



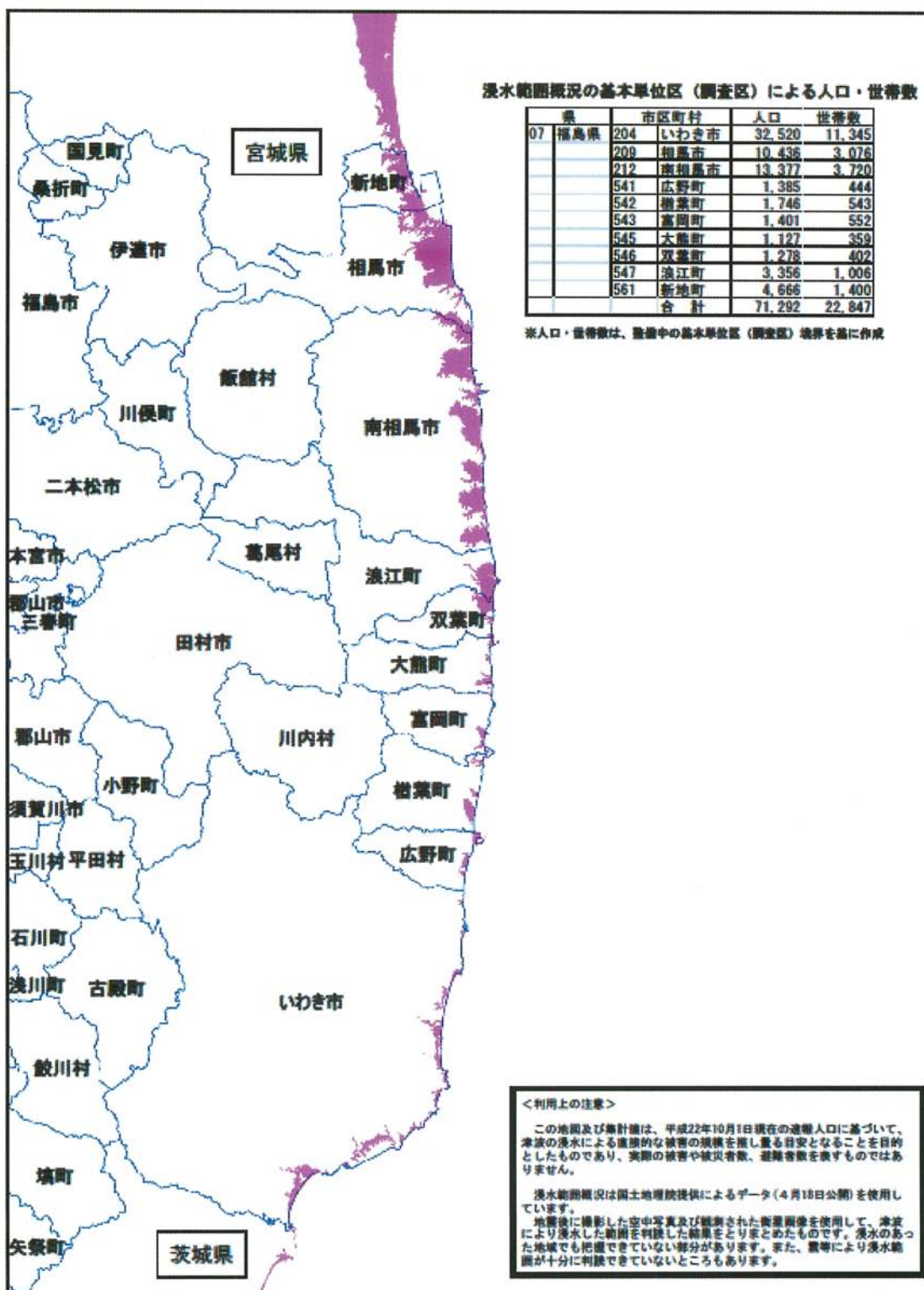
## 宮城県の水浸範囲概況にかかる基本単位区(調査区)による人口・世帯数



出典 平成22年国勢調査(速報集計)

総務省統計局 統計調査部地理情報室

## 福島県の浸水範囲概況にかかる基本単位区（調査区）による人口・世帯数



出典 平成22年国勢調査（速報集計）

総務省統計局 統計調査部地理情報室

**福島県**

**栃木県**

**千葉県**

北茨城市  
高萩市  
日立市  
常陸太田市  
常陸大宮市  
城里町  
那珂市  
東海村  
ひたちなか市  
水戸市  
笠間市  
茨城町  
石岡市  
小美玉市  
鉾田市  
土浦市  
かすみがうら市  
行方市  
阿見町  
美浦村  
牛久市  
稲敷市  
潮来市  
鹿嶋市  
神栖市  
利根町  
河内町  
龍ヶ崎町  
取手市

**洪水範囲概況の基本単位区（調査区）による人口・世帯数**

区	市区町村	人口	世帯数
08 茨城県	201 水戸市	1,209	379
	202 日立市	7,211	2,791
	214 高萩市	1,519	596
	215 北茨城市	7,212	2,725
	221 ひたちなか市	5,616	2,049
	222 鹿嶋市	3,794	1,163
	232 神栖市	3,752	1,190
	234 鉾田市	3,667	1,160
	309 大洗町	3,982	1,482
	341 東海村	2,172	748
	合 計	40,134	14,283

※人口・世帯数は、国土地理院提供によるデータ（4月18日公開）を使用しています。

**<利用上の注意>**

この地図及び集計値は、平成22年10月1日現在の速報人口に基づいて、沖波の洪水による直接的な被害の規模を推し量る目安となることを目的としたものであり、実際の被害や被災者数、避難者数を表すものではありません。

洪水範囲概況は国土地理院提供によるデータ（4月18日公開）を使用しています。

地盤後に撮影した空中写真及び抽出された衛星画像を使用して、沖波により浸水した範囲を判別した結果をとりまとめたものです。浸水のあった地域でも把握できていない部分があります。また、数等により洪水範囲が十分に判別できていないところもあります。

総務省統計局 統計調査部地理情報室



**浸水範囲概況の基本単位区（調査区）による人口・世帯数**

区	市区町村	人口	世帯数
12 千葉県	202 船子市	2,088	858
	215 船子市	8,303	2,844
	235 船子市	2,892	906
	237 山武市	5,358	1,719
	402 大網白里町	922	330
	403 九十九里町	7,766	2,937
	410 横芝光町	1,813	615
	421 一宮町	2,293	851
	423 長生村	378	126
	424 白子町	3,718	1,303
	合計	35,531	12,490

※人口・世帯数は、調査中の基本単位区（調査区）境界を基に作成

**<利用上の注意>**

この地図及び集計値は、平成22年10月1日現在の速報人口に基づいて、津波の浸水による直接的な被害の規模を推し量る目安となることを目的としたものであり、実際の被害や被災者数、避難者数を表すものではありません。

浸水範囲概況は国土院提供によるデータ（4月18日公開）を使用しています。

衛星画像に撮影した空中写真及び縮刷された衛星画像を使用し、津波により浸水した範囲を判別した結果をとりまとめたものです。浸水のあった地域でも把握できていない部分があります。また、雲等により浸水範囲が十分に判別できていないところもあります。

総務省統計局 統計調査部地理情報室

これらを見ると東北地方と茨城県、千葉県のパ洋沿岸地域において、いかに広範囲にわたって津波による浸水があったかがうかがえるだろう。

また、この地震及び津波による人的被害や建物被害も当然被災地を考える上では考慮されるべき事柄である。以下にあげるのは、警察庁発表の各地の震災の被害状況を示した表である（被害状況と警察措置（2012/03/05） <http://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf>）。ここからも、やはり岩手県、宮城県、福島県を中心とした太平洋沿岸一帯が被害を被っている様子がうかがえる。

平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置

災害種別	人的被害					建 物 被 害								道 路 損 壊	橋 梁 被 害	山 崖 崩 れ	堤 防 決 壊	鉄 道 損 壊
	死 者 人	行 方 不 明 人	負 傷 者		全 壊 戸	半 壊 戸	流 失 戸	全 焼 戸	半 焼 戸	床 上 浸 水 戸	床 下 浸 水 戸	一 部 破 壊 戸	非 住 家 被 害 戸					
			重 傷 人	軽 傷 人														
都道府県別	人	人	人	人	人	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	箇所	箇所	箇所	箇所	箇所
北海道	1			3	3		4				329	545	7	469				
東北	青森	3	1	16	45	61	311	852					832	1194	2			
	岩手	4671	1302			198	20185	4562		15	1761	323	7716	4752	30	4	6	
	宮城	9512	1754			4133	83932	138721		135	15403	12842	216414	34094	390	29	51	45
	秋田			4	8	12							3	3	9			
	山形	2		8	21	29	37	80							21	29		
	福島	1605	214	20	162	182	20141	65123	77	3	1053	340	147334	1116	187	3	9	
東京	7		14	76	90		11	3					257	20	13	3		
関東	茨城	24	1	33	674	707	3080	24129	31	1721	713	174561	14597	307	41			
	栃木	4		7	127	134	265	2074					69285	295	257	40		2
	群馬	1		13	25	38		7					17246		36	9		
	埼玉			6	36	42	24	194	1	1		1	1800	33	160			
	千葉	20	2	25	226	251	798	9861	15	154	722	44162	660	2343	55			1
	神奈川	4		17	115	132		38					407	13	162	1	3	
	新潟				3	3							9	7				
	山梨				2	2							4					
	長野				1	1												
中部	静岡			1	2	3						5	13	9				
	岐阜														1			
	三重				1	1					2		9					
四国	徳島										2	9						
	高知				1	1					2	8						
合 計	15854	3274			6023	128773	245056		281	20427	15508	680050	57271	3918	78	205	45	29

※ 未確認情報を含む。

※ 4月7日に発生した宮城県沖を震源とする地震、4月11日に発生した福島県浜通りを震源とする地震、4月12日に発生した福島県浜通りを震源とする地震、5月22日に発生した千葉県北東部を震源とする地震、7月25日に発生した福島県沖を震源とする地震、7月31日に発生した福島県沖を震源とする地震、8月12日に発生した福島県沖を震源とする地震、8月19日に発生した福島県沖を震源とする地震、9月10日に発生した茨城県北部を震源とする地震、10月10日に発生した福島県沖を震源とする地震及び11月20日に発生した茨城県北部を震源とする地震の被害を含む。



地震、津波だけでなく、福島第一原発の事故による影響が大きい地域もまた被災地と考えられる。下の地図は原発の影響による警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域及び特定避難勧奨地点がある地域の概要図である（経済産業省 web サイト内 <http://www.meti.go.jp/press/2011/09/20110930015/20110930015-12.pdf>）。



以上のような概況から、今回の研究報告では、地震・津波の被害が大きかった青森県から千葉県までの太平洋沿岸市町村と、福島県の警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域の全域を被災地として考えることとした（緊急時避難準備区域は2011年9月30日に解除されたが、本報告では当初の設定のままこれを被災地として考えることとする）。ただし報告内容によっては、被害の大きかった東北地方を中心に据えたり、より地域を限定した上で議論を展開しているものもある。

### 3 被災地の方言の特徴

ここでは、被災地と方言の関係を考えていく上で土台となる、被災地の方言の特徴を概観していくこととする。方言的には茨城県や千葉県も東北の方言に類する点もあるので、主に東北方言を中心に話を進める。

#### 3.1 ズーズー弁 —「ジ」と「ズ」の区別—

東北方言と言えど「ズーズー弁」と言われるように、東北以外の人にとってはこの「ズーズー弁」と呼ばれるような発音が耳につくようである。一般にジ（ヂ）とズ（ヅ）（及びシとス、チとツ）を区別しないものを「ズーズー弁」と呼んでいるが、同じ東北内でもその現れ方には若干の差異がある。すなわち、「ジ（ヂ）、ズ（ヅ）」が「ジ」に近くなる地域と「ズ」に近くなる地域があり、また、東北にあっても「ジ」と「ズ」の区別がある地域がある。

今回の被災地に当てはめると、青森県とそれに隣接する岩手県の一部が「ジ」に近い音となる地域であり（例：「知事」「地図」→「チジ」）、岩手県沿岸中部から宮城県、福島県北部は「ズ」に近くなる地域（例：「知事」「地図」→「ツズ」）、岩手県の岩泉町、田野畑村付近と福島県南部以南は「ジ」と「ズ」を区別する地域、ということになる（図1参照）。

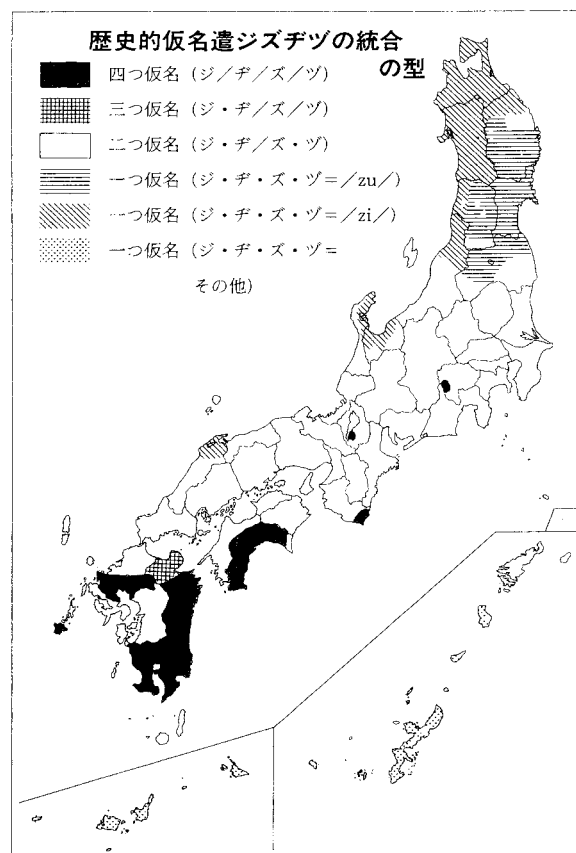


図1：ジズヂヅの統合の型  
〔上野他編（1989）より引用〕

### 3.2 「柿」と「鍵」、「的」と「窓」 — 語中・語尾の濁音化、鼻濁音化 —

「柿」が「カギ」[kagi]、「的」が「マド」[mado]となるような、語中・語尾のカ行・タ行子音が濁音化するという現象も被災地域を含む東北一般に見られるものである。

それでは「柿」は「鍵」と、「的」は「窓」と区別できなくなるかと言うと、必ずしもそうではない。「鍵」の場合、共通語と同じく発音は [kani] となり、「ギ」の部分が鼻にかかった音（鼻濁音）となるため、区別できる。「窓」の場合は大部分の地域では [mãdo] となり、これも「ド」の部分が鼻にかかった音となり、「的」とは区別される。ザ行やバ行の音も同じく鼻にかかった音になり、「数」は [kãzu]、「壁」は [kãbe] となる。ただし、岩手県の三陸沿岸地域の一部や福島県以南にはダ行、ザ行、バ行の鼻濁音はなく、「的」と「窓」が同じく「マド」[mado]となっている（図3、図4参照）。

	「柿」		「鍵」
共通語	[kaki]	←kとηの対立→	[kani]
方言	[kagi]	←gとηの対立→	[kani]
	「的」		「窓」
共通語	[mato]	←tとdの対立→	[mado]
方言	[mado]	←dと̃dの対立*→	[mãdo]
	（※岩手県三陸沿岸地域の一部や福島県以南にはこの対立はない）		

図2：「柿」と「鍵」、「的」と「窓」の音素の関係

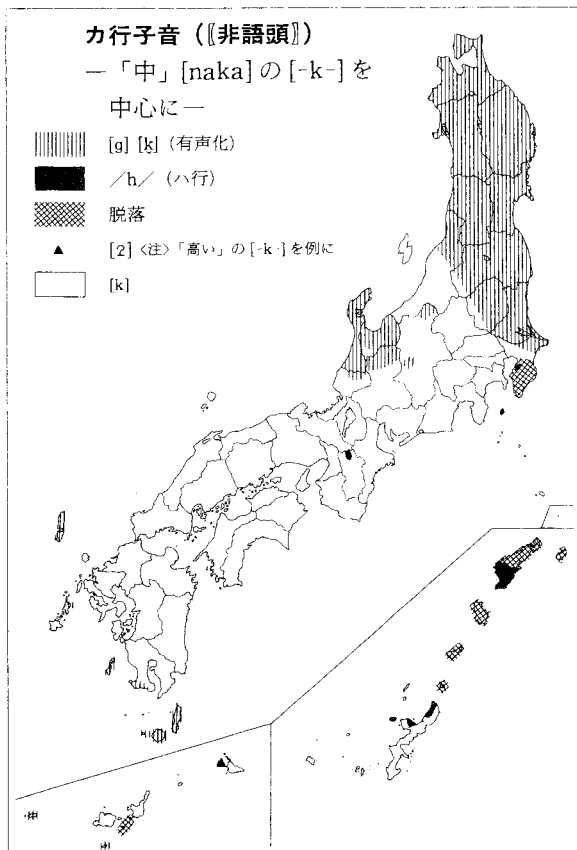


図3：カ行子音（非語頭）の音韻の分布  
〔上野他編（1989）より引用〕

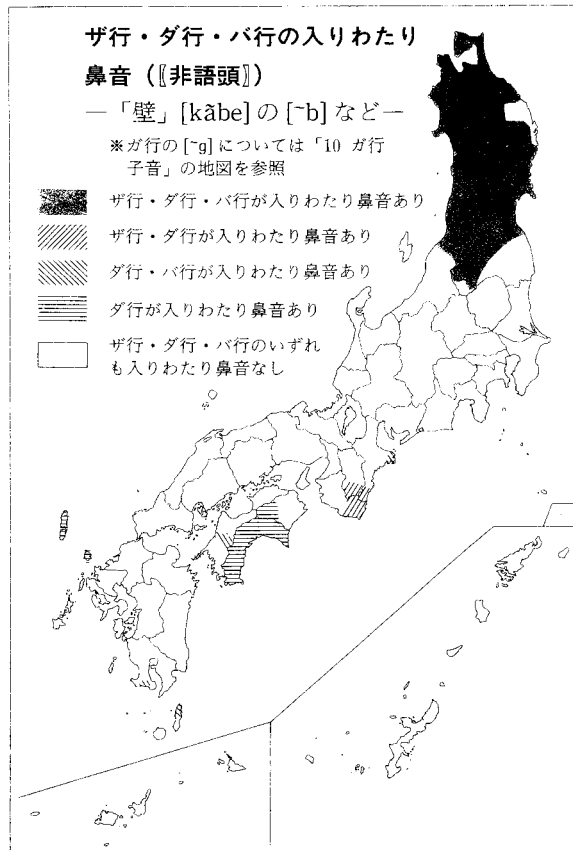


図4：ザ行・ダ行・バ行の入りわり鼻音（非語頭）の分布  
〔上野他編（1989）より引用〕

### 3.3 「雨」と「飴」、「箸」と「橋」 — アクセント —

例えば「雨」(アメ)と「飴」(アメ)、「箸」(ハシ)と「橋」(ハシ)などは、共通語ではその音の高低(アクセント)によってそれぞれの単語が区別される。しかし、宮城県南から福島県、茨城県にかけて、これらの区別を持たない無アクセント地域が広がっている(図5における▲の地域)。これも被災地の方言として大きな特徴と言えるだろう。

被災地の中でも上記以外の地域は、アクセントを有している地域である。その中で、岩手県三陸沿岸中部の山田町や宮古市では、重起伏調という特徴的なアクセントが用いられていることが報告されている。多くの方言において、1つの単語の中で高い部分は1箇所であるが、重起伏調の方言では、1つの単語の中で高い部分が2箇所出てくることがあるのである。

例) 「鶏」 ⇒ ニワトリ (共通語) / ニワドリ (宮古市方言)  
「喜ぶ」⇒ ヨロコブ (共通語) / ヨロコブ (宮古市方言)

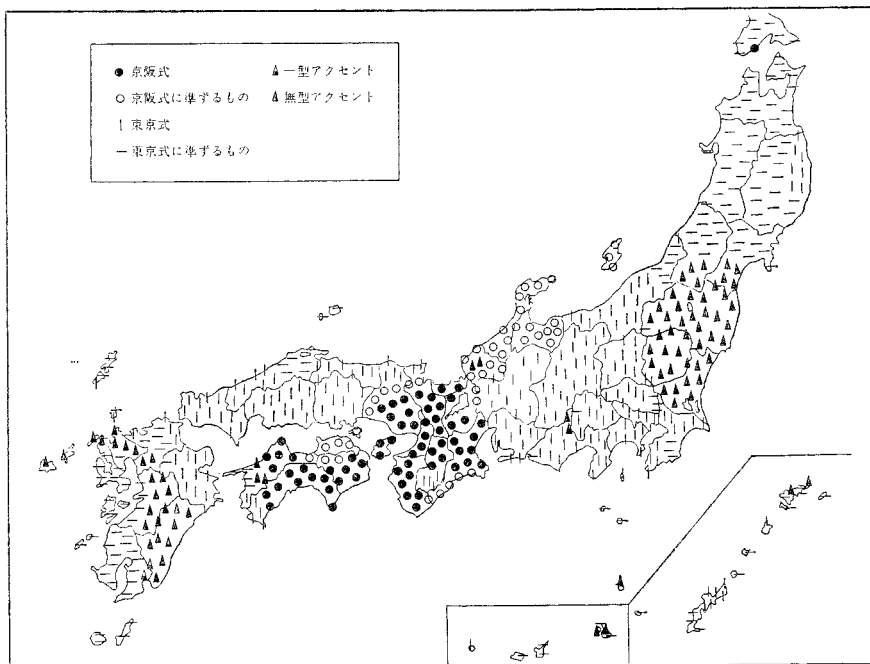


図5：アクセントの分布

〔佐藤亮一(2007)より引用〕

### 3.4 「東の方サ行け」と「ここサある」 — 方向を示す助詞「サ」 —

「東京サ行く」のように、方向を示す「サ」も東北方言として有名であるが、これは東北六県のほか、栃木県や茨城県などにも分布している。この「サ」の用法は共通語の「へ」だけでなく「に」の分野をも一部占めているが、被災地においてもその用法の幅は様々である。

例えば「東の方へ行け」（移動の目標、図6参照）という文では被災地のほぼ全域で「サ」を用いることが出来るが、「おれに貸せ」（授与の相手、図7参照）という文では茨城県全域と福島県で「サ」を用いることが出来なくなる。また、「見に行く」（移動の目的〈動詞連用接続〉、図8参照）という文では茨城県と青森県で使用出来ないところが出てくる（日本海側はほとんど使用できない）。「ここにある」（存在の場所、図9参照）という文にいたっては福島県と青森県の一部を除いてほとんどの被災地で「サ」は使えない、という具合である。

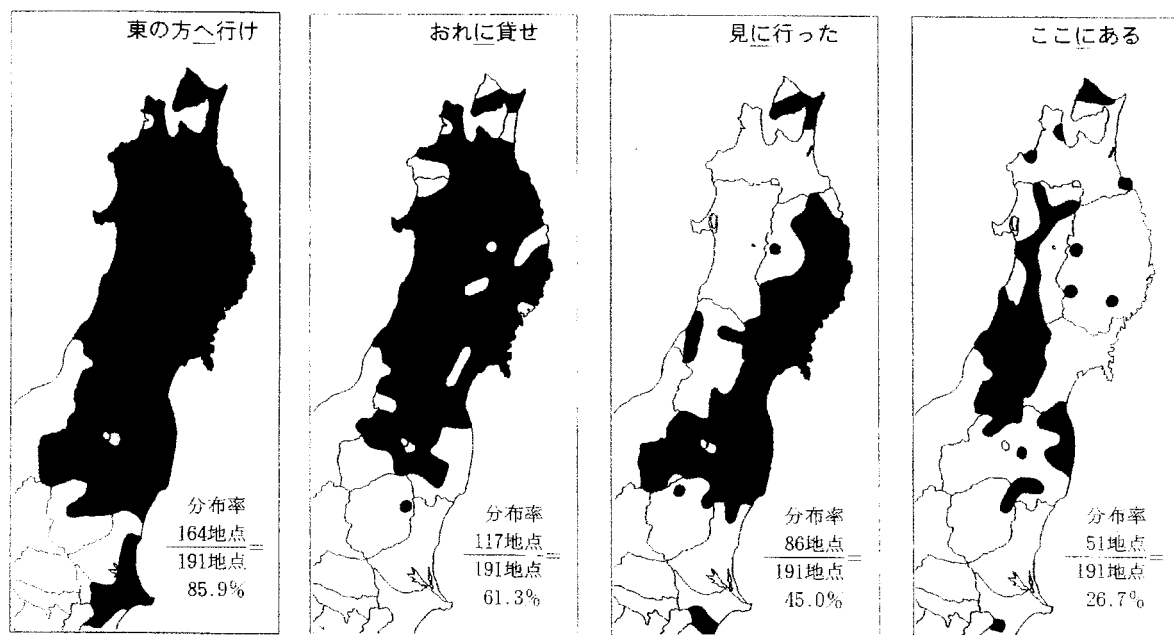


図6：東の方へ行け

図7：俺に貸せ

図8：見に行った

図9：ここにある

〔図6～図9：小林（1995）より引用〕

### 3.5 「がんばっぺ！ みやぎ」—意志をあらわす「べ」—

街中で「頑張っぺ 東北」などというスローガンが書かれているポスターや看板を目にしたことはないだろうか。震災の救援活動に取り組む自衛隊員がヘルメットに応援メッセージが入ったステッカーを貼っているとニュースにもなったが、そこに書かれていたのも「がんばっぺ！ みやぎ」だった。

これらは「頑張ろう東北」「頑張ろう！ みやぎ」といった意味であるが、このような意志（勧誘）表現で「べ」や「ぺ」が使われるのも東北や関東の方言として有名なものである。

ただ、図10をよく見てみると、東北でも全体で使われているわけではなく、日本海沿岸ではあまり用いられていないことがわかる（▲▼△▽の記号が日本海沿岸にあらわれていない）。ここから、「べ」や「ぺ」を使った意志表現は、特に被災地がある太平洋側で活発に用いられている表現だといえよう。



#### 4 おわりに

以上、被災地の概況とその被災地の方言の基本的な特徴を見てきた。方言に関しては、被災地全体に通じる特徴もあれば、被災地の中でも地域によって異なるものもあることがわかる。もちろんここであげたものだけが方言の特徴というわけではない。より細かい各地の方言の特徴に関しては以降の報告に譲ることとする。

ここであげたものを基本的な情報として、以降では、このような方言が震災の影響によってどのように変化し、それをどのように記録・保存するのかといった点や、被災地において方言をどう利用するか、逆に被災地において方言がどのような問題を持つかについて、詳しく見ていく。

#### 文 献

上野善道他編（1989）「音韻総覧」尚学図書編『日本方言大辞典』下 小学館

大西拓一郎（1989）「岩手県山田町方言のアクセント」『国語学研究』29

加藤正信（1969）「東北方言概論」『言語生活』210

小林隆（1995）「東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44

佐藤喜代治（1966）「岩手県三陸地方北部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』4

佐藤亮一（2007）「方言のアクセント」飛田良文他編『日本語学研究辞典』明治書院

柴田武（1962）「岩手県岩泉付近の非ズーズー弁」『国語学研究』2

田中宣廣（2005）『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう

彦坂佳宣（2002）「地方語史の開拓と方言地理学——一段活用類意志形の五段化をめぐって——」馬瀬良雄監修；佐藤亮一他編『方言地理学の課題』明治書院

#### **参照 web サイト（すべて 2012/03/06 アクセス）**

経済産業省「東京電力株式会社福島第一原子力発電所について—原子力被災者支援—」

<<http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/kinkyu.html>>

警察庁「東日本大震災について」<<http://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/index.htm>>

総務省統計局・政策統括官（統計基準担当）・統計研修所「東日本大震災関連情報—総務省統計局・政策統括官（統計基準担当）の統計調査等関連の取り組み」

<<http://www.stat.go.jp/info/shinsai/index.htm>>

YOMIURI ONLINE「がんばっぺ！お国なまりで自衛隊員、被災地応援」

<<http://www.yomiuri.co.jp/national/news/20110329-OYT1T00428.htm>>



# 消えゆく被災地の貴重な方言

中 西 太 郎

(担当者：中西・石山理恵・田茂慧祐・平松且企)

## 1 はじめに

2011 年 3 月 11 日に東日本を襲った M9.0 の地震と大きな津波は、東北地方を中心とした地域の住民に未曾有の被害をもたらしている。死者・行方不明者 20,000 人近く、家屋の損壊 108 万棟以上(2012 年 2 月)、地元を逃れた避難者が最大時 30 万人に上るという戦後最悪の災害となった。

このように、東日本大震災(以降、本章では「大震災」と略する)は各地に甚大な被害を与えた。その影響で、慣れ親しんだ土地を離れざるを得ない人も、多く現われている。

東日本大震災で津波被害の大きかった岩手、宮城、福島3県の沿岸部にある市町村で、震災後に人口が計約5万人減少したことが9月8日、分かった。共同通信が住民基本台帳に登録された人口を沿岸部の37市町村に取材したもので、住民票を移さずに転居した人も多く、実際の人口減少はさらに進んでいるとみられる。

○福島県の人口200万下回る 33年ぶり

○宮城県沿岸部の推計人口が2万4千人減少

被災地では雇用情勢の悪化が続いているほか、住宅再建のめどが立たない被災者も多く、復興の遅れがさらなる人口流出につながる恐れもある。

各市町村の震災前(2月末～3月11日)と震災後(7月末～9月初め)の人口数を比較した。沿岸部の自治体では人口流出のほか津波による犠牲者も多い。

減少数が最も多かったのは宮城県石巻市で約9000人。減少率が最も大きかったのは、岩手県大槌町(おおつちちょう)で13%以上だった。

石巻市の担当者は「津波の浸水域は事業所の9割近く、世帯で7割以上。国には早く復興の制度を示してほしい」と訴える。

福島第1原発事故のため一部が立ち入り禁止の警戒区域となっている福島県南相馬市の人口は、震災前より約4500人減って約6万7000人。しかし、南相馬市が9月5日現在で確認したところ、市内で生活する住民は4万人ほどだったという。住民票は動かさずに避難した人が多いとみられる。

(<http://www.iza.ne.jp/news/newsarticle/event/disaster/527117/>より)

このような報告記事に示される通り、現在も被災地各地で人口の流出が進んでいると考えられる。こういったその土地に暮らす人々が各地へ流出するということは、その地域の方言を日常的に話し支える人が、その土地から減るということでもある。自然、土地土地に暮らす人とともにあるその土地の方言も、様々な形で影響を受けてくるだろう。

例えば、そういった人口流出が進む地域で話されていた方言の中には、その土地でしか用いられないものもあるだろう。そういった言葉を話す人が減れば、消滅へ向かう方言というのも少なから



ず出てくると思われる。

そこで本発表では、第一に、従来の方言学の研究成果、特に方言の地理的分布が分かる方言地図を用いて、どのような方言が被災地にあり、消滅の危機に瀕しているのかを確かめる。

そして、第二に、被災地の方言が仮に消滅すると方言学の分野にどのような影響を与えるかといった視点から、被災地以外の地域の方言分布と被災地の方言との関係を踏まえた分類を行い、消滅の危機にある被災地の方言の中でも、とりわけ方言学的見地から価値があると思われる語形の検討を行う。さらに、そういった方言学的見地から価値が見い出せる語形がどの地域に多いか、地域ごとに集計をとることで、特にどの地域の記述が早急に求められているかを見出す。

第三に、消滅の危機にある被災地の方言が、どのように影響を受け、今後どうなっていくのか、それを予測するとともにその変化に関わる要因を検討し、その要因の内、利用できる既存のデータを用いて危機にある方言の検証を行う。

I どのような方言が消滅の危機に瀕しているのか。

→被災地地図と方言地図との対比により消えていく方言を把握する。

II その方言の消滅は方言学にどのような影響を与えるのか。

→類型論や方言圏論の観点から影響を考える。

→どの地域に貴重な方言が多く存するか明らかにする。

III 今後、被災地の方言はどうなっていくのか。

→消滅・統合・拡散、あるいは共通語化などいかなる現象が予想されるか。

最後に、問題点 I ～III を総括し、貴重な方言が多く分布するという意味での方言衰退の危機にある地域（問題点 I ・ II の結果より）と、方言に影響を与える言語外的要因の現状から方言衰退の危機にあると考えられる地域（問題点 III の結果より）とを対照することで、貴重な方言が衰退の危機に晒され、何らかの早急な対処が必要な地域を導き出す。

## 2 被災地域の方言分布

### 2.1 被災地域の方言分布の特定

#### 2.1.1 方言分布資料

本節では、まずはじめに、被災地域を中心に、ことばの地域差が分かる、これまでの方言地理学の成果にどのようなものがあるかを振り返る。

- ① 佐藤喜代治(1966)「岩手県三陸地方北部の言語調査報告」『日本文化研究所報告別巻』4号
- ② 佐藤喜代治・加藤正信(1972)「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所報告別巻』8・9号
- ③ 小林隆・篠崎晃一「消滅する方言語彙の緊急調査研究」

(小林隆・篠崎晃一(2003)『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』として一部既刊)

研究目的：日本語における消滅の危機に瀕する方言語彙を、全国にわたる方言地理学的な分布調査によって記録する。

調査地点：全国約 3200 市町村中 2000 市町村

④ 小林好日氏東北通信調査(1940)資料

(小林好日(1944)『東北の方言』他で一部公表)

調査目的：言語地理学的手法と文献国語学的研究によって日本語の歴史を解明することと東北地方における伝統的方言の分布把握にあったと考えられる。

調査地点：2000 地点

⑤ 小林隆編(2003)『宮城県石巻市方言の研究』

⑥ 国立国語研究所『日本言語地図』(LAJ) (詳細は後述)

⑦ 国立国語研究所『方言文法全国地図』(GAJ) (詳細は後述)

⑧ 多賀城市史編纂委員会(1984)『多賀城市史 第3巻 民族・文学』

⑨ 国語学研究室 2007 年度南三陸地方調査資料 (本書掲載)

これら、被災地域と関係のある資料の中から、本発表で検討材料としたのは、『日本言語地図』(“Linguistic Atlas of Japan”、以降 LAJ と略する)と『方言文法全国地図』(“Grammar Atlas of Japanese Dialects”、以降 GAJ と略する)である。これは、全国の分布を視野に入れて考えることで、問題Ⅱの方言学的影響の推定に際して、より多様な視点で被災地域の方言の位置づけの検討を行うことができるためである。

### 2.1.2 日本言語地図と方言文法全国地図について

#### <日本言語地図 (LAJ) >

『日本言語地図』は、全国各地の方言でどのような語形や発音がどこに現れるかを項目ごとに地図で表示したものであり、日本全国の方言の地理的分布を一望できる資料である。調査地点は全国 2400 地点に及び、各地でその土地生え抜きの話者が被調査者として選ばれている。

#### <方言文法全国地図 (GAJ) >

『方言文法全国地図』は、とりわけ文法事象を扱った、日本全国の方言の地理的分布を一望できる資料である。調査地点は 807 地点に及び、各地でその土地生え抜きの話者が被調査者として選ばれている。

### 2.1.3 被災した LAJ、GAJ の調査地点

まずは、津波の浸水地域及び原発の警戒区域の範囲を LAJ 及び GAJ に重ね、それぞれの分布地図の調査地点で、津波及び福島第一原子力発電所事故（以降、原発と略する）の影響を受けている

地点を割り出した。それが図 1a、図 1b である。1～23 までの数字が付された緑の地点は津波及び原発の影響を受けている LAJ の調査地点で、A～P までのアルファベットが付された赤丸の地点は GAJ の調査地点を示している。



図 1a. LAJ・GAJ の被災調査地点（北東北）

地点名	LAJ地点番号	地点名	GAJ地点番号
1 階上町道仏	3716.27	A 八戸市白金	370618
2 洋野町種市町	3717.90	B 九戸郡種市町	371648
3 洋野町横手	3716.58	C 下閉伊郡田野畑村	374746
4 岩泉町茂師	3746.09	D 宮古市愛宕	375718
5 宮古市田老	3757.59	E 下閉伊郡山田町	377719
6 宮古市第17地割	3767.18	F 釜石市松原町	378745
7 大槌町桜木町	3777.86	G 気仙沼市東八幡前	470643
8 大船渡市三陸町	3797.32		
9 陸前高田市高田町	3796.95		
10 気仙沼市内の脇町	4706.53		

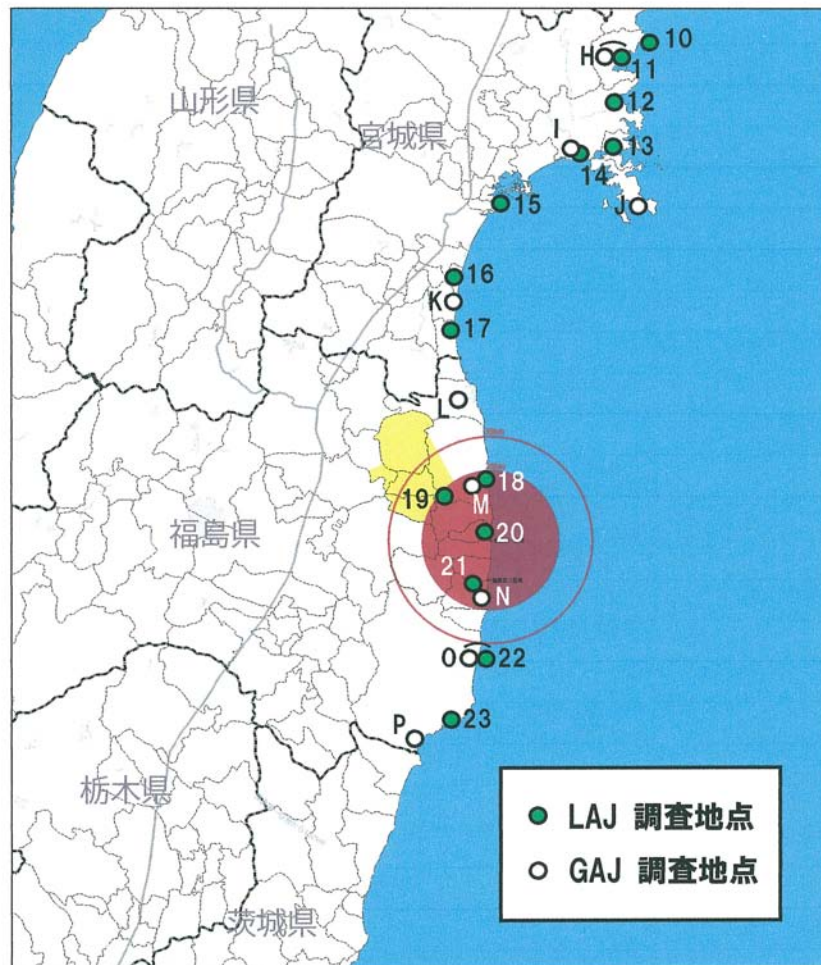


図 1b. LAJ・GAJ の被災調査地点（南東北）

地点名	LAJ地点番号	地点名	GAJ地点番号
11 南三陸町歌津馬場	4716.72	H 本吉郡志津川町	471598
12 石巻市長面	4725.68	I 石巻市新中里	473532
13 女川町鷺の神浜	4735.37	J 牡鹿郡牡鹿町	474620
14 石巻市門脇町	4735.42	K 亶理郡亶理町	475376
15 七ヶ浜町松ヶ浜町	4744.32	L 相馬市北町	477326
16 岩沼市押分	4753.36	M 相馬郡小高町	478369
17 亶理町荒浜	4753.76	N 双葉郡櫛葉町	570430
18 南相馬市原町区上太田	4784.41	O いわき市久之浜	571410
19 浪江町昼曽根字昼曽根	4783.74	P いわき市植田町	572351
20 双葉郡双葉町新山	4794.30		
21 櫛葉町上繁岡	5703.19		
22 いわき市久之浜	5714.10		
23 いわき市小名浜下神白	5723.36		

#### 2.1.4 被災地点の方言の特徴

本節では、前節で洗い出した被災地点にどのような方言が存するのか、それぞれの地点で話されている方言はどのように異なるものなのか、ここでは一例として、GAJ の幾つかの質問項目についての結果を概観する。



表1. 被災地点の分布図形の特徴

地点番号	市町村名	GAJ第321図 親しい友達にむかって、 「今日は寒いな」と言うとき、 「寒いな」と言うところを どのように言いますか。	GAJ第323図 この土地の目上の人にむかって、 ひじょうにいいねいと言うときは どうですか。	GAJ第327図 近所の知り合いの人が 珍しい本を見せてくれました。 そこで、その人にむかって、 ややていいねいに 「これは珍しい本ですね」と言うとき、 「珍しい本ですね」のところを どのように言いますか。	GAJ第329図 この土地の目上の人にむかって、 ひじょうにいいねいと言うときは どうですか。	GAJ第349図 朝、近所の目上の人に 道で出会ったとき、 どんなあいさつをしますか。 ふつう良く使う言い方を 教えてください。
370681	八戸市白金1丁目	サムエナ	サムエスナ	メヅラスホンデスナー メヅラスホンデスネー	メヅラスホンデスネー	マエドリガドガス
371648	九戸郡種市町	シバレルナー	シバレルナッス	メヅラシーホンダナス	メヅラシーホンデスコト	オハヨーゴザンス
374746	下閉伊郡田野畑村	サブエガナンシ	サブゴザンス ナンシ	メヅラシーホンダナンシ	メヅラシーホンダナンシ	オハヨーゴザイマス オハヤゴザンス
376718	宮古市愛宕1丁目	サンビーナー	サンビゴゼンシ	メヂラシーホンデゴゼンシ	メヂラシーホンデゴゼンシ	オハヤゴゼンシ
377719	下閉伊郡山田町	サビーナー	サムーゴアンス	メヅラシーホンデゴザンスナー	メヅラシーホンデゴザンスネー	オハヨーゴザンス
378745	釜石市松原町	サミーナー	サムイ ナンス	メヅラシーホンダネー	メヅラシーホンダナンス	オハヨーゴザンス
470643	気仙沼市東八幡前	サムエナー サムイ	サムイネエアエス	メヅラシーホンダゴトアー	メヅラシーホンダネアエシ	オハヨーゴザラス
471598	本吉郡志津川町	サンメーナー サンメーゴダー	サンメーネス	メヅラスーホンダゴタ	メヅラスーホンデゴザリスネ	オハヨーゴザリス
473532	石巻市新中里	サムエナー	サムエネ	メヅラシーホンダネー	メヅラシーホンデスネー	オハヨーゴザイマス
474821	牡鹿郡杜鹿町	サムイナン	サムイネン	メヅラシーホンダナー	メヅラシーホンデスネー メヅラシーホンダネー メヅラシーホンダネー	オハヨーガス
475376	亘理郡亘理町	サムエナエ	サムエネー	メヅラシーホンダネ	メヅラシーホンダネヤ	オハヨー オハヨーゴザイマス
477326	相馬市北町	サムイナ	サムイゴトネ	メヅラスーホンダネ	メヅラスーホンデスネ	オハヨーゴザイマス
478369	相馬郡小高町	サムイナ	サムイネ	メヅラスーホンダナ	メヅラスーホンダナス	オハヨーセンセー
570430	双葉郡楢葉町	サムイナ	サムイナエ	メヅラシーホンダナエ	メヅラシーホンデスネ	オハヨーゴザイマス
571410	いわき市久の浜町	サムイナ	サムイネ	メヅラシーホンダネ	メヅラシーホンデスネ	オハヨーゴザイマス
572351	いわき市植田町	サムイデスネ	サムイナエ	メヅラシーホンダネ	メヅラシーホンデスネ	オハヨーゴザイマス

表1は、GAJのいくつかの項目について、それぞれの地点の解答を横断的に示したものである。例えば、323図、329図、349図の結果を見てみると、「寒いですね」「本ですね」などの、丁寧に答える時の敬語形式の地域差が窺える。共通語では「デス」「ゴザイマス」にあたるような敬語形式が、「ガス」「ゴザンス」「ゴザリス」「ゴザリマス」となっていることから分かるように、被災地点それぞれに、地域に根差した言い回しがあることが分かる。

ただし、この結果を以て、即これらの言い回しが消滅の危機に瀕しているとは言えない。なぜなら、例えば志津川町で見られる「オハヨーゴザリス」という言い回しは、宮城県内陸部の築館町でも「オハヨーゴザリス」と回答されていることから分かるように、被災地点以外の地域で、同じような言い回しが行われている可能性が存する。

一方、釜石市で回答された「オハヨーゴザンス」などは、地域を隔てたはるか遠く、宮崎県西都市でも、同じ形式が回答されている。これは「ゴザイマス」という形の前身と思われる表現「ゴザンス」が、はるか地域を隔てて、北の東北、南の九州に、文化の中心地であった京都から広まったものとして対応するように見られるものと推定することができ、その意味で、方言の分布から日本語の歴史を推定する補強材料となる、貴重な方言形の分布と認められることになる。

従って、被災地点の方言の、方言学的な価値を見定めるには、隣接する他地域や、ひいては全国の分布を視野に入れて考える必要があるということになる。

次節では、被災地の方言が仮に消滅すると方言学の分野にどのような影響を与えるかといった視点から、被災地以外の地域の方言分布と被災地の方言との関係を踏まえた分類を行い、消滅の危機にある被災地の方言の中でも、とりわけ方言学的見地からみて貴重な方言の検討を行う。

## 2.2 分布から見た被災地方言の分類

被災地域に分布する語が、方言学的見地から見て貴重かどうか判断するためには、前節で述べたように、その方言と類似の方言が、全国的に見てどこにどれくらい分布するかということが関わってくる。例えば、全国的に見ても、被災地にしかない語形だとすれば、それはきわめて貴重なものと判断できる。さらに、近畿地方など、かつての文化の中心地を挟んで、九州や沖縄などに、類似した語形が見られれば、それは、中央から時間をかけて広がった古形の残存とも推定することができる分布と認められ、その意味で、被災地の該当方言が残っていることが、方言学にとってきわめて意義があることと認められる。

そういった、分布の解釈の異なりに関わる分布様相ごとに、分類を作ると以下のようなになる。

被災地域に分布する語形が

⇒①被災地域に特有の語形。

A. 被災地域内にのみ存在する語。

=①A

B. 被災地域内とその近辺に少数存在する語。

=①B

⇒②被災地域に特有で、離れた他地域に同系統の語が存在する。



らはそれぞれ周囲の語形から独立しているが、この場合、この分布の形が保持されることで、航路による方言の伝播解釈の可能性が検討できる。このように東北地方内に分断された形で分布するものが②Aに分類される。

#### ②Bに分類される方言地図

##### 【例】LAJ 87 図 せき（咳）をする—前部分—／IKI 系

咳をするの語形の中で、津波の浸水地域には 2 つの特徴的な語形がある。岩手県洋野町の IKIGA、同じく岩手県洋野町の IGI の 2 つである。この 2 つは両方とも IKI 系の語形で、周りに多く分布する SEGI や SYEGI などの SEKI 系とは異なったものである。IKI 系の語形は九州に多く見ることができるが、全く同じ語形は IKIGA は宮崎県に 1 つ、IKI は鹿児島県の島に 1 つだけしかなく、岩手県洋野町にあるこの語形が消えた場合、方言圏論を考える際に影響が出るように思われる。したがって、この 2 つの語形が②Bに分類される。

#### ②Cに分類される方言地図

##### 【例】LAJ215 図 とさか（鶏冠）／YAMA (KO)

YAMA (KO) は、東北地方内では大きく分けて岩手県・秋田県・宮城県から山形県にかけて地域の 3 点での分布を確認できる一方、西日本に主に香川県全域での局地的分布が認められる。このような分布は、②A・②Bとは異なった解釈が考えられるので、②Cに分類される。

これらの分類の観点による地図の一覧は別表（別表 A：LAJ、別表 B：GAJ）に示す。また、分類別による特徴的な語形の集計は、以下の表 2 のようになる。

表 2.LAJ、GAJ における、特徴的な語形の分布の分類別の集計結果

	①A	①B	②A	②B	②C	総計
LAJ	45 36.0%	24 19.2%	20 16.0%	19 15.2%	17 13.6%	125 100.0%
GAJ	98 27.7%	119 33.6%	6 1.7%	113 31.9%	18 5.1%	354 100.0%
LAJ & GAJ	143 29.9%	143 29.9%	26 5.4%	132 27.6%	35 7.3%	479 100.0%

①A、①B、②B が、LAJ と GAJ を合わせた場合、同数程度あるが、この中で特に重く見なければならぬのは、被災地域にのみ存在する語形の分布を示す①A の総数が、他の分類に比しても、ほぼ同率で 1 位だという点である。これは、被災地域のことばが、日本全国の方言を見渡しても独特である特徴を多く持つということを示唆するものであり、言語の多様性の記録・保存という意味でも、被災地の方言の記述が緊急を要する所以と言える。

また、②B などが、それに次いで多いことも注目に値する。これは、方言学的見地からの考察を行う上で重要な証拠となる、例えば、圏論的解釈の可能性を促すような語形の分布が、数多くその地に存するという点も意味している。



## 2.3 浸水・原発被災地域における特徴的な語形の分布分析

### 2.3.1 浸水・原発被災地域における特徴的な語形の分布分析（LAJ）

まずは LAJ についての分析結果を示す。浸水・原発被災地域における特徴的な語形の数を地域・地点ごとに集計すると以下ようになる。

表3. 被災地域の特徴的語形数集計（地点別）

地名	①A	①B	②A	②B	②C	総計
青森県	4	1	1	1	1	8
階上町道仏	4	1	1	1	1	8
岩手県	21	7	11	7	8	54
洋野町種市町	8	1	3	2	3	17
宮古市第17地割	6		5	3	2	16
大槌町桜木町	2	3		1		6
大船渡市三陸町	2	1		1	2	6
陸前高田市高田町	2	2			1	5
岩泉町茂師			2			2
宮古市田老	1		1			2
宮城県	12	10	5	9	7	43
気仙沼市内の脇町	1	4	2		2	9
亘理町荒浜	2	1	2	1	1	7
七ヶ浜町松ヶ浜町	3	2		1	1	7
石巻市門脇町	3				2	5
石巻市長面		2		2	1	5
岩沼市押分	2			2		4
南三陸町歌津馬場		1		2		3
女川町鷺の神浜	1		1	1		3
福島県	8	6	3	2	1	20
南相馬市原町区上太田	3	4		1		8
いわき市小名浜下神白	3	1	1	1		6
双葉郡楢葉町上繁岡	1				1	2
双葉郡双葉町新山			2			2
双葉郡浪江町屋曽根	1	1				2
計	45	24	20	19	17	125

表3'. 被災地域の特徴的語形数集計（市町村別）

市町村名	①A	①B	②A	②B	②C	総計
宮古市	7		6	3	2	18
洋野町	8	1	3	2	3	17
石巻市	3	2		2	3	10
気仙沼市	1	4	2		2	9
南相馬市	3	4		1		8
階上町	4	1	1	1	1	8
亘理町	2	1	2	1	1	7
七ヶ浜町	3	2		1	1	7
大槌町	2	3		1		6
いわき市	3	1	1	1		6
大船渡市	2	1		1	2	6
陸前高田市	2	2			1	5
岩沼市	2			2		4
南三陸町		1		2		3
女川町	1		1	1		3
浪江町	1	1				2
双葉町			2			2
楢葉町	1				1	2
岩泉町			2			2

表3より、各県の対象語形の総数は、

青森県 8 語形（6%：特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合）

岩手県 54 語形（44%：特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合）

宮城県 43 語形（33%：特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合）

福島県 20 語形（16%：特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合）

となっており、とくに、宮城県と岩手県の調査地点に多くの特徴的な語形、方言学的に貴重な語形が存在していることが分かった。また、市町村別の集計では、宮古市と洋野町がそれぞれ、18 語形、17 語形と、他市町村に比べてかなり多い。

ところで、特徴的な語形の多い宮城県、岩手県の 2 県でもその散らばり具合と言う点では差があるということが、市町村別の集計（表3右）に注目した時にわかる。岩手県は、宮古市、洋野町が 18 語形、17 語形であり、同県内のそれに次ぐ数を示す、大槌町の 6 語形に比して倍以上が 2 地点それぞれに見られる。一方、宮城県は、特徴的な語形の総数が 43 語形と、岩手県に次ぐほど多いが、一番多く特徴的な語形が見られる石巻市でも 10 語形ほどであり、以降、気仙沼市の 9 語形、

亘理町・七ヶ浜町の 7 語形と、散らばり方が平均的である。

これは、宮城県の特徴的な語形が、県内の各市町村に、比較的均等に散らばっているのに対し、岩手県では、特定の地域に特徴的な語形が偏って分布すると読み取れるということである。これは、両県の特徴的な語形の分布の仕方の違いと認めてよいだろう。

さらに、より細かい単位として、地点ごとに数の多い順に並べて分析を行うと、以下のようになる。

1. (岩手県)洋野町種市町 . . . 17 語形
2. (岩手県)宮古市第 17 地割 . . . 16 語形
3. (宮城県)気仙沼市内の脇町 . . . 9 語形
4. (青森県)階上町道仏  
(福島県)南相馬市原町区上太田 . . . 8 語形
5. (宮城県)七ヶ浜町松ヶ浜町  
(宮城県)亘理町荒浜 . . . 7 語形
6. (岩手県)大槌町桜木町  
(岩手県)大船渡市三陸町  
(福島県)いわき市小名浜下神白 . . . 6 語形
7. (岩手県)陸前高田市高田町  
(宮城県)石巻市門脇町  
(宮城県)石巻市飯野 . . . 5 語形
8. (宮城県)岩沼市押分 . . . 4 語形
9. (宮城県)女川町鷺の神浜  
(宮城県)南三陸町歌津馬場 . . . 3 語形
10. (岩手県)岩泉町茂師  
(岩手県)宮古市田老  
(福島県)双葉郡檜葉町上繁岡  
(福島県)双葉郡双葉町新山  
(福島県)双葉郡浪江町昼曾根 . . . 2 語形

先に観察された宮古市の 18 地点の内訳でも、集計を見て分かる通り、宮古市第 17 地割に 16 語形と極端な偏りがみられる。つまり、三陸地方沿岸部は、特徴的な語形が狭い地域に集中して分布することがあるということであり、保全のための記述を行う上では、そのような狭い地域に分布する特徴的な語形を逃さないためにも、細やかな地点設定の調査を考えなければならないということを示唆している。

### 2.3.2 浸水・原発被災地域における特徴的な語形の分布分析（GAJ）

次に、GAJ についての分類別の集計結果を表 4 に示す。

表 4. GAJ における、県別、地点別の被災特徴的語形集計

地点別	地名	①A	①B	②A	②B	②C	総計
	1 気仙沼市東八幡前	29	16	1	16	2	64
	2 宮古市愛宕1丁目	9	9		15	2	35
	3 本吉郡志津川町	9	16		8		33
	4 亶理郡亶理町	4	10	2	12	2	30
	下閉伊郡山田町	6	3	1	16	4	30
	5 釜石市松原町	15	7	2	4		28
	下閉伊郡田野畑村	12	4		10	2	28
	6 石巻市新中里	4	11		10	1	26
	7 九戸郡種市町		11		7	2	20
	8 牡鹿郡牡鹿町	3	8		5	2	18
	9 相馬郡小高町	4	6		3		13
	10 八戸市白金1丁目	1	7		3		11
	11 双葉郡楡葉町		5		2		7
	12 相馬市北町	2	2			1	5
	13 いわき市植田町		2		2		4
14 いわき市久ノ浜町		2				2	
	計	98	119	6	113	18	354
県別	県名	①A	①B	②A	②B	②C	総計
	青森県	1	7		3		11
	岩手県	42	34	3	52	10	141
	宮城県	49	61	3	51	7	171
	福島県	6	17		7	1	31

まず、GAJ の集計結果では特徴的な語形の総数が 354 と、LAJ に比べてかなり多いことが注目される。これは、GAJ の調査地点数が、LAJ に比べるとやや少ないことがあって、その分、地域的まとまりがあるものでも、特徴的な例として取り上げることにつながったことなどが関係していると思われる。

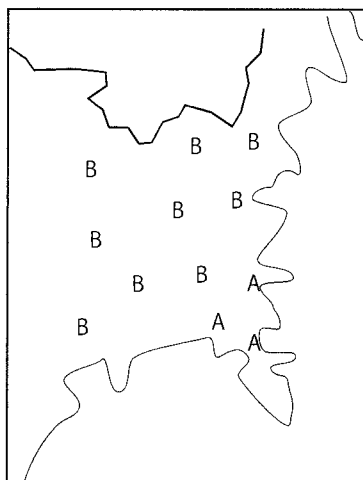


図2. 調査地点設定が密な場合

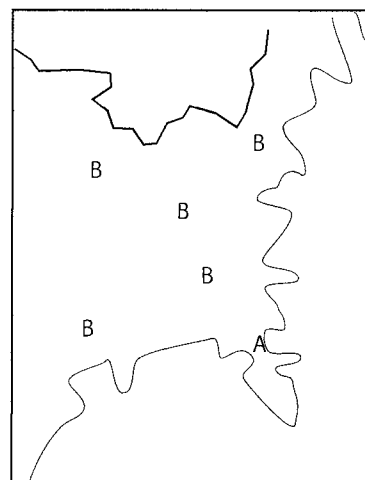


図3. 調査地点設定が疎な場合

例えば、ある調査項目の「A」という語形の分布について、それが特徴的かどうか判断する過程を、調査地点設定が密な場合と疎な場合で比べてみる。図2が密な場合、図3が疎な場合である。

図2の調査地点設定が密な場合では、「A」という語形は数地点で捉えられるので、数地点の分布のまとまりを持った語形として捉えられ、特徴的な例と認めるには至らない。だが、図3のように、調査地点設定が少なくなると、同じ「A」の語形の分布が孤例として浮き立つことになる。すると、周辺地域まで含めてまとまった分布を持っている可能性があるにも関わらず、特徴的な孤例としてカウントされることになるのである。このような調査地点設定の多寡が、調査地点の少ないGAJにおいて、特徴的な語形の総数を多くせしめた理由の一つとして考えられる。

次に県別、地点別などの集計結果の分析に移る。各県の対象語形の総数は、

青森県 11 語形 (3% : 特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合)

岩手県 141 語形 (40% : 特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合)

宮城県 171 語形 (48% : 特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合)

福島県 31 語形 (9% : 特徴的語形総数に占める各県の被災特徴的語形の割合)

となっており、岩手県、宮城県の順が逆転したものの、全体の比率はほぼLAJと同じと捉えてよいだろう。

また、地点別の集計結果を見ると、LAJの結果に比して、見るべき点がある。正確に言えば、GAJとLAJで調査地点が違うので、その点留意すべきかもしれないが、市町村などのおおまかな「地域」という基準で比べた場合、LAJの結果に比して、GAJの結果では上位にくる地域の順番などに違いがあることが分かる。

特徴的な語形が最も多くある地域は気仙沼(表4 : 64 語形)で、2位の2倍近くの値を示している。ただしこの、GAJの気仙沼の集計数の解釈には一考の余地がある。それは、気仙沼市の語形の値が、64 語形と、他地点に比べて際立って多い数値を示していることに起因する。全体の平均が22.1 語形であることを考えると、この数値は平均値の3倍以上ときわめて多いものであり、やや極端である。この数値は、それだけ気仙沼市のことばの文法面での特殊性を表しているという可能性も考えられる一方、調査対象に当たった話者が、たまたま特徴的な話し方を志向する話者だった、などという可能性も捨てきれない。その意味で、言語地図のみならず、他の資料での確認を要することだろう。

そういった点にも注意を払いながら、地点ごとの集計結果の順位に注目した時、宮古市が35 語形と上位にあることが注目される。というのも、宮古市は、LAJの集計結果を分析した表2でも上位に来ている地域であり、このGAJの集計結果と併せて考えると、LAJが調査対象とした語彙などの面でも、GAJが調査対象とした文法などの面でも、特徴的な語形が多く分布する地点として認められるからである。さらにその意味では、種市町も、LAJ(洋野町種市町)で15 語形(2位)、GAJで20 語形と、語彙面、文法面双方で、少なくない数の特徴的な語形が分布する地域と認めら

れる。つまり、方言学的な見地からは、このような地域（宮古市・種市町など）の記述がとりわけ強く求められるものと考えられる。

また、GAJ の結果と LAJ の結果を突き合わせることで、改めて確認されることもある。緊急に保全を要する地域を判断するに当たっては、単に語彙の面からだけでなく、その地域のことばの様々な側面（語彙・文法・音韻・アクセント...）を視野に入れて、特徴的な性格が多く存するかを把握したうえで、その地点の方言の、方言学的見地での記述の必要性を判断しなければならないということである。

たとえば、GAJ の本吉郡志津川町（現 本吉郡南三陸町志津川）と、LAJ の南三陸町歌津馬場は、現在では同じ南三陸町に属する近隣地域である。そのような関係にありながら、主に語彙を調査対象にした LAJ では、特徴的な語形の分布が 3 語形であるのに対し、文法を調査対象にした GAJ では 33 語形とかなりの開きを見せている。つまり語彙面からだけだと、特徴的な語形が多く分布する地域と認めたいが、文法面に目を向ければ、保全の必要性がある地域と判断されるということである。

このように、方言学的考察を視野に入れたときの、被災地域の特徴的な方言の記述・保全の必要性は、多様な側面からの検討を行った上で、それを判断する必要があるということである。

## 2.4 問題点ⅠとⅡのまとめ

以上の考察結果を踏まえ、被災地域のことばについて、方言学的見地から見た記述の意義や、特徴的な語形が分布する地域の在り方を振り返り、まとめとする。

2.2 で、LAJ と GAJ、それぞれの地図を対象にして行った、分布解釈の違いに関わる分布の仕方ごとに行った分類では、被災地域には、①A：被災地域内にのみ存在する語や、①B：被災地域内とその近辺に少数存在するが、被災で数が減少する語、②B：被災地域に特有で、離れた他地域（東北以外）に存在する語、に分類されるものが、特に多く存在することが分かった。総数では、①A、①B、②B の分類が同数程度の多さを示すが、特に重く見なければならないのは、被災地域にのみ存在する語形の分布を示す①A の分類が、ほぼ同数で 1 位だという事実である。これは、被災地域のことばが、日本全国の方言を見渡しても独特と言える特徴を多く持つということを示唆するものであり、被災地の方言の保全が緊急を要する所以と言える。

また、②B の数が多いことも、被災地域のことばの方言学的価値を測るうえで注目に値する。これは、方言学的な観点からの考察を行う上で重要な証拠となる、例えば、圏論的解釈の可能性を促すような語形の分布が、数多くその地に存するということも意味している。

そして、被災地域のことばの中で、特にどの地域に特徴的な語形が分布するかを洗い出すと（2.3）、県別にみると岩手県と宮城県に特徴的な語形が多いことがわかった。これらの地域の表現の喪失は、方言学に影響を与える可能性が高い。例えば、岩手県などは、海岸部周辺に特徴的な表現が点在する。この特徴は、地域の環境的特徴と突き合わせて、その背景を考えることができる。というのも、この三陸地方沿岸部地域と内陸部の間の一帯は、北上高地が存在し、内陸の主要街道との交通が阻

まれている。そのため、海岸部の主要都市それぞれは、南北の距離で近い位置にあるにも関わらず、遠野海道、釜石街道、宮古街道、野田街道などの、お互いにつながりを持たない東西の道で内陸部に移動し、内陸を南北につなぐ奥州街道を経由して、やっとそれぞれの都市への街道に至るという通行を余儀なくされていた。そういった、ことばを運ぶ人の流れを限定する不自由な交通という地域的事情が働いて、他地域に比較して、それぞれの海岸部の都市で独自の語彙体系を築いたということも読み取れる。例えば、このような交通事情と、方言分布形成の関係を探る考察の可能性を断たないためにも、なおさら強く保全が求められるべきだろう。

このように、分類別の集計の検討から被災地域のことばの方言学的価値が認められ、さらに、地点ごとの集計の検討から、特に重点的に記述を行うべき地域を見定め、今後早急に被災地域の方言の保全を図る必要があることが、今回の検討で確認された。

### 3 問題Ⅲについて

前節までの検討では、GAJ と LAJ それぞれを、被災地の範囲と照らし合わせ、その範囲に含まれる方言を危機にある方言と見なして集計し、その貴重さの種類による分類や、貴重な方言が多く分布する地域などを洗い出す試みを行ってきた。これらの検討は、言ってみれば、被災地の範囲に含まれる方言、すべてが等価の危機にあるものと見なしてきたわけである。

だが、現実には、今回の大震災で大きな被害を受けた地域もあれば、幸いにして、軽微な被害で済んだ地域もあり、また、半年ばかりで元の状態を回復した地域もあれば、今なお復興への道筋が見えず、大震災に起因する災害の渦中にある地域も存在する。それらを考慮に入れると、様々な状況に置かれている各地域の方言が、今回の大震災の影響によって、一括して同じような変化の局面にあるとは考え難い。

そこで、本節では、今後の各地の方言に予想される現象を見越し、必要に応じた対応を可能にするため、まず、今後起きうる変化の方向性を見極め、各地域の被害の大小や被害自体の継続性など、方言の変化に影響する言語外的な諸要因について、理論的に考察する (3.1)。

そして、それを踏まえ、大震災に関わる社会的影響の統計データの内、確定したいいくつかのデータを参照して、当該地域の方言が危機にある地域を導出する (3.2)。

#### 3.1 方言の変化に関わる言語外的な要因の理論的考察

本節では、まず被災地の方言が、震災による人の移動など、様々な社会的な動きの中でどのように変化すると考えられるか、予測される変化を考えるとともに、その変化に関わる諸要因を洗い出す考察を行う。

変化のあり方を考察する上では、まず、方言を話す話者が、どれほど、どんな状態にいるかが問題となってくる。先述のように、東日本大震災では、多くの犠牲者が出たばかりでなく、多くの被災者が他の地域へ一時的に避難したり、場合によっては生活拠点そのものを移す移住などの移動を始めている。そうして移動した先では、必ずしも自分の地域の方言が話されているとは限らず、そ



の点で、母方言を使う機会が減ることが容易に予想できる。例えば、関西方面などに避難したとすれば、関西弁が交わされる環境の中で、地元の方言を使うという機会は俄然減るだろう。しかし、避難した被災者は、避難先でこそ地元の方言を用いないかもしれないが、その後状況が良くなって地元に戻ってくることがあれば、再び方言を用いる状況を取り戻す可能性がある。そのため、話者が亡くなった場合と、避難・移住など移動している場合を大きく分けて考える必要がある。亡くなった場合は、その方言の話者の人数そのものが減ることにつながるので、その人数の多寡が方言の盛衰に影響を与える大きな要素の一つになる。

一方、移動を余儀なくされている場合でも、その在り方に着目する必要がある。なぜなら、移動中に話者が受ける影響は、移動先の環境によって、一様とは考えられないからである。そこで、移動先の環境を想定して考察すると、そこで起こる変化の可能性は二つ考えられる。一つは共通語化の促進、もう一つは似ている方言同士の交渉で起きる変化である。

共通語化の促進は、移動してきた側と移動者を受け入れる側の、使用する方言同士に大きな差異がある場合に起こると目される。というのも、お互いの使用する方言同士に大きな差異がある場合、コミュニケーションや、コミュニケーションを通じた人間関係の形成が、方言の使用によって阻害されてしまうことになる。そこで、それを避けるため、お互いに滞りなく意思疎通ができる共通語を使っていくことが予想される。そのようにして、移動してきた側は、自然共通語の使用へ傾いていくと予想される。

一方、似ている方言同士の交渉で起きる変化とは、移動してきた側と移動者を受け入れる側が似た方言の話者同士の場合である。この場合、特に意思疎通に不便がなく、お互いの方言を使っていくことが予想される。その際、共通語化の促進の場合と比べて、お互いの言葉が近しいがゆえ、語彙やアクセントなどが入り混じり、その側面が一方の特徴に統合したり、あるいは混合するなどといった変化が予測される。

つまり、移動してきた側と移動者を受け入れる側の意思疎通に用いられる言葉の似かよりに従って、移動者の方言が受ける影響というのが変わってくると考えられるのである。移動した先で日常用いられる言葉との差異が大きくなるほど、上述のような影響を与える可能性が高まるということである。

なお、いずれであれ、移動者の母方言の維持には影響を与える。共通語化では、少なくとも地元にいる時より母方言使用の機会が多くなることはないという意味で、衰退が促進されると見てよいだろう。似ている方言同士の交渉の場合も、母方言が、そのままの姿を維持して、地元にいる時より活発に用いられるということは考え難い。つまり、移動者の母方言は、いずれであれ移動の影響下にあり続ければ衰退の方向に向かい、大なり小なり衰退が促されるものと考えられる。

ただし、このような変化は、移動をすればすぐに起こるという訳ではない。どの程度の期間、そのような環境に置かれるかということも関わってくる。そこで、移動のあり方として、一時的な移動である避難か、長期間の移動である移住か、あるいは移動先への永住かなどの移動期間が、変化が起きる可能性を測る目安として考えられる。移動の期間が短ければ変化を促す要因の影響は弱く、

長ければ強くなるだろう。また、移動先の土地に永住する場合は、移住者の母方言が失われる可能性が極めて高いと考えなければならない。

なお、他の要因として、例えば、各地の建造物被害状況や原発事故による避難の状況のあり方など、列挙していけばいくつもの要因が考えられる。だが、ひたすら要因を列挙すればよいわけではない。なぜなら、方言に与える影響を測るための指標として考えると、建造物被害の深刻さなどは、それらが再建されるまでの期間として置き換えられ、結局は、話者が戻ってくるまでの期間に還元されるからである。つまり、突き詰めていくと、前述の、移動期間の長短という指標で、多くの他の要因を包括できるものとする。ここでは、大震災が方言に与える影響を正確に見極めるため、要因間の影響力が重複しないよう、このような要因間の関係にも配慮する必要がある。さらに、最終的に洗い出した要因をなるべくシンプルなものにするために、影響力が重複するような場合は、間接的な要因ではなく直接的なものを優先し、最小限の要因を拾い出す方針を取る。よって、ここでは先述の移動期間を主要因として採用する。

さて、ここまでは、個別の話者の視点から、起きうる変化の内実と、変化の起きる可能性を測る要因に考えを巡らせてきたが、移動者の方言自体の変化の大きさがどの程度のものかを推し量る指標として、これらの変化の過程を経る可能性がある個人がどれほどいるかということ、すなわち、それぞれの移動先への移動者の人数（転出数）というのが重要だと言える。

以上、考察によって導き出された要因を整理すると、以下のようになる。

## A. 被害状況及び移動状況

### A-1 話者の喪失状況

#### ①死者・行方不明者数

### A-2 話者の移動（転出）状況

#### ②移動数（転出数）

#### ③移動期間

#### ④移動先との距離（＝方言の似かよ度）

②について、移動数を転出数と置き換えているのは、実際には、転出などの公的な届け出を出さずに各地へ移動している人も少なからずいることが想像できるが、現実にご利用可能な各種統計調査結果を参照する限り、公的な機関が把握している移動者の数として、転出数が分析・考察に耐えうる信頼できるデータだと判断したためである。これらの要因を組み合わせ、それぞれについての状況を判断していくことで方言の危機の度合いを推し量ることができると思われる。さしあたり、これらの要因それぞれについて、便宜的に「多い／少ない」、「近い／遠い」などの単純化した2項対立で捉え、被災地の危機の度合いを導き出す図案を示すと、以下のようにつまえられる。

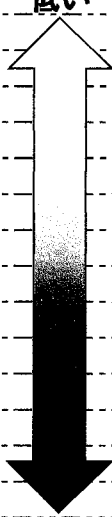
話者の喪失状況 (死者・行方不明者数)	話者の移動(転出)状況			危機の度合
	移動数(転出数)	移動先	移動期間	
少ない	少ない	近い	短期	低い 
			長期～永続的	
		遠い	短期	
			長期～永続的	
	多い	近い	短期	
			長期～永続的	
		遠い	短期	
			長期～永続的	
多い	少ない	近い	短期	高い
			長期～永続的	
		遠い	短期	
			長期～永続的	
	多い	近い	短期	
			長期～永続的	
		遠い	短期	
			長期～永続的	

図4. 被害状況及び移動状況から導かれる方言の危機の度合い

例えば、話者の喪失が多く、移動数も多く、移動先が遠く、移動期間が長期に渡ると見込まれるのは、これまでに明らかになった情勢・統計データなどを見ると、津波で甚大な被害を受けた宮城県の南三陸町などが考えられる（3.2.2.2 分析後述）。

このように洗い出した震災にまつわる状況的要因に加え、被災した個々人の話者の属性や、被災地自体の地域的特徴などが掛け合わされ、総合的に各地の方言の危機度が導出されるものと考えられる。被災した個々人の話者の属性や、被災地自体の地域的特徴などとしては、例えば、以下のようものが考えられる。

#### B. 被災者の特徴

- ①被災者の年齢
- ②被災者の職種

#### C. 被災地域の特徴

- ① 都市度
- ② 主要産業

## 3.2 話者移動データから見た危機方言—平成 23 年住民基本台帳人口移動報告の結果から—

### 3.2.1 全国の転出・転入の状況

本節では、前節で洗い出した諸要因のうち、平成 23 年の統計が確定した転出数に着目し、ケーススタディとして、そのデータを用いて各地の方言の危機の度合いを推測する。参照するデータは、平成 23 年住民基本台帳人口移動報告（以降、住基移動報告と略する）である。住基移動報告は、平成 24 年 1 月に公開され、その概要には、岩手県、宮城県及び福島県を中心とした東日本大震災の人口移動への影響が公表されている。

まず、全国の移動状況では、平成 23 年の都道府県間移動者数は 234 万人ほどに及び、平成 7 年以来 16 年ぶりに増加に転じているとある。さらに、都道府県別の転入・転出超過数を見ると、どの都道府県で、人の出入りが著しいかが分かる。

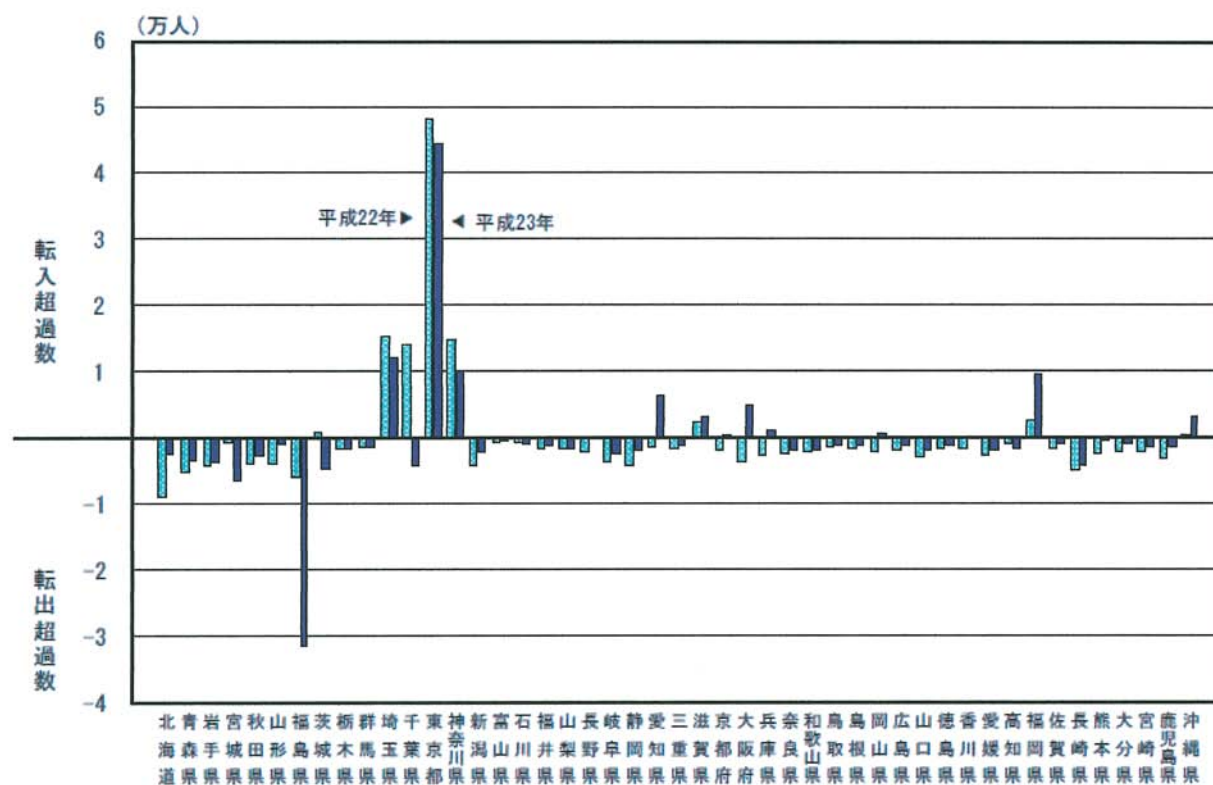


図5. 都道府県別転入・転出超過数（平成 22、平成 23 年）

（総務省統計局 2012「住民基本台帳人口移動報告平成 23 年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.5）

平成 23 年における都道府県別の転入・転出超過数（図 5）をみると、転入超過となったのは 11 都府県あり、5 府県が前年の転出超過から転じている。特に、大阪府及び京都府は平成 7 年以来 16 年ぶり、岡山県は平成 9 年以來 14 年ぶりに転入超過、さらに、福岡県の転入超過数は前年に比べて 7046 人の大幅な増加とあり、この 1 年の動きとして、関西方面の大都市圏への人の入りが際立っていることがわかる。

一方、東京都、埼玉県及び神奈川県は、いずれも減少し、茨城県及び千葉県は前年の転入超過から転出超過に転じている。千葉県の転出超過は、昭和 31 年以来、実に 55 年ぶりである。関東地方も、被災地である茨城県・千葉県を中心に、人口減少傾向へと転じたり、人口増加率が減じたりと、人が離れていく傾向を見せている。

東北地方の被災地、特に大震災による被害の大きかった岩手県・宮城県・福島県 3 県に注目すると、特に宮城県・福島県で、転出超過が著しい（福島県：3 万 1381 人、宮城県：6402 人）。なお、岩手県では、他都道府県への転出超過数が減っているが、だからといって被災地からの移動がないわけではない。この内実については、後の 3.2.2.1 節で詳しく述べる。

ここでは図表等は割愛するが、転出数にだけ注目しても、福島県の平成 23 年の転出数は、5 万 3122 人と前年に比べ 2 万 1759 人多く、対前年比増加率 69.4%、転出数増加率において、統計開始以来最高の値を示している。この 1 年の人口流出がいかに著しいものだったかが窺えよう。

次に、細やかな行政単位ではどのような動きが見られるのか、市町村単位の動きを参照する。

表5. 転入・転出超過数上位 20 市町村（平成 22 年、平成 23 年）

（総務省統計局 2012「住民基本台帳人口移動報告平成 23 年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.14）

表5a. 転入超過数上位 20 市町村

転入超過数の上位20市町村				
		平成22年	平成23年	対前年 増減数
1	( 13) 東京都目黒区目黒 (東京都)	35,435	35,905	2,337
2	( 41) 札幌市 (北海道)	11,129	5,559	5,740
3	( 31) 札幌市 (北海道)	10,251	5,258	4,960
4	( 21) 札幌市 (北海道)	8,777	5,820	2,567
5	( 28) 仙台市 (宮城県)	6,655	1,110	5,463
6	( 31) さいたま市 (埼玉県)	5,239	5,693	454
7	( 101) 盛岡市 (秋田県)	5,706	2,919	877
8	( 101) 仙台市 (宮城県)	2,771	2,155	616
9	( 01) 山形市 (山形県)	2,517	1,775	2,461
10	( 111) 山形市 (山形県)	2,211	2,197	252
11	( 211) 福島市 (福島県)	1,909	1,415	384
12	( 1321) 新潟市 (新潟県)	1,745	280	1,463
13	(1510) 新潟市 (新潟県)	1,659	295	1,525
14	( 141) 八王子市 (東京都)	1,569	2,305	745
15	( 201) 宇都宮市 (栃木県)	1,537	1,372	165
16	( 1181) 大田区 (東京都)	1,556	325	1,208
17	(1363) 盛岡市 (秋田県)	1,502	119	1,681
18	( 71) 横浜市 (神奈川県)	1,388	3,781	2,293
19	( 151) 山形市 (山形県)	1,358	2,201	840
20	(1725) 仙台市 (宮城県)	1,348	1,366	2,714

(注1) ( ) 内は平成22年の順位

(注2) 東京都目黒区目黒は1市町村で最も多い

(注3) 転入・転出超過数の多い市町村は転出超過を示す

表5b. 転出超過数上位 20 市町村

転出超過数上位20市町村				平成23年	平成22年	前年比 増減率
1	( 535)	松山市	(福島県)	7,232	61	7,178
2	( 3)	いわき市	(福島県)	6,194	1,159	5,034
3	( 71)	石巻市	(宮城県)	5,469	118	5,351
4	( 129)	福島市	(福島県)	4,410	325	4,085
5	( 349)	幸手市	(福島県)	3,823	181	3,642
6	( 1)	山市	(千葉県)	3,169	1,683	1,487
7	( 49)	気仙沼市	(宮城県)	2,376	492	1,884
8	(1512)	洲本市	(千葉県)	1,966	161	1,805
9	( 69)	幸手市	(宮城県)	1,628	66	1,562
10	( 611)	山形市	(宮城県)	1,481	98	1,383
11	( 141)	多賀城市	(宮城県)	1,465	396	1,069
12	(168)	毛市	(千葉県)	1,457	216	1,241
13	( 141)	大槻町	(岩手県)	1,290	113	1,177
14	( 322)	東金島市	(宮城県)	1,206	191	1,015
15	( 8)	紀伊市	(岩手県)	1,202	1,015	187
16	(1373)	水戸高崎市	(岩手県)	1,181	19	1,162
17	( 5)	高根町	(宮城県)	1,162	185	977
18	( 544)	浪江町	(福島県)	1,149	111	1,038
19	( 7)	飯沼	(福島県)	1,129	1,055	74
20	(149)	富坂町	(福島県)	1,086	28	1,058

平成23年12月31日現在の全国1718市町村についてみると、転入超過となっているのは505市町村で、全体の29.4%となっている。転入超過数は、東京都特別区部が3万5435人と最も多く、次いで福岡県福岡市、北海道札幌市などとなっている。

一方、転出超過となっているのは1213市町村で、全体の70.6%を占めている。転出超過数は福島県郡山市が7232人と最も多く、次いで福島県いわき市、宮城県石巻市などとなっており、転出超過数の多い上位20市町村のうち、岩手県、宮城県及び福島県の3県が14市町を占めている。ただし、岩手県の転出超過市町村数は、宮城県、福島県に比べれば少ない(2市町)。このようなデータから、被災地でも、人の移動のあり方が一様ではないことも窺える。そこで、次節以降では、東北地方の岩手県・宮城県・福島県3県に焦点を当て、それぞれ転出・転入の状況を詳しく見ていく。

### 3.2.2 東北地方の被災3県内（岩手県・宮城県・福島県）の転出・転入の状況

平成23年における岩手県、宮城県及び福島県の転出超過数の合計は、4万1226人となり、前年に比べて3万680人の増加となっている。転出超過数が4万人を上回るのは昭和45年以来41年ぶりとなっている。転出超過数を県別にみると、前年に比べて、宮城県及び福島県は大幅な増加となり、岩手県のみ減少となっている。

次節以降では、特に詳しいデータのある岩手県、宮城県、福島県3県それぞれの移動の状況についてその特徴を見ていく。



### 3.2.2.1 岩手県の転出・転入の状況

平成23年における岩手県の転入・転出超過数をみると3443人の転出超過となり、前年に比べて、転出超過数は795人の減少となっている。それならば岩手県では大震災の被害を受けても土地を離れる人が少ないのかと言うとそうではない。それは表6で、県内移動者数が前年に比べて増えていることを見れば明らかである。

表6. 岩手県の転入者数、転出者数、転入・転出超過数及び県内移動者数（平成22年、平成23年）  
（総務省統計局2012「住民基本台帳人口移動報告平成23年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.17）

(注)

性別	転入超過数 (－は転出超過)			他都道府県からの転入者数					他都道府県への転出者数					県内移動者数				
	平成22年	平成23年	前年同月比	平成22年	平成23年	外国人転入		平成22年	平成23年	外国人転出		平成22年	平成23年	前年同月比				
						数	率(%)			数	率(%)			数	率(%)			
総数	11,113	11,235	795	18,750	17,897	803	4.3	22,199	22,141	68	0.3	11,681	16,819	4,967	42.1			
男	5,150	5,089	61	10,511	10,185	353	3.3	11,917	11,888	29	0.2	10,625	15,607	3,721	34.1			
女	6,067	6,258	241	8,239	7,712	450	5.5	10,282	10,253	39	0.4	1,056	1,212	991	93.8			

さらに細かい単位での動きを見るために、岩手県の市町村別転入・転出超過率を通して、県内の市町村別移動の動向を見てみよう（次頁図6）。

平成23年12月31日現在の岩手県の33市町村についてみると、転入超過となっているのは9市町村で、盛岡市、一関市など6市町が前年の転出超過から転入超過に転じている。

転出超過となっているのは大槌町、陸前高田市、釜石市、山田町など24市町村で、なかでも、陸前高田市は前年の転入超過（19人）から転出超過（1184人）に転じ、大槌町は転出超過数が前年に比べて1156人の大幅な増加となっている。一方、奥州市など13市町村では、前年に比べて転出超過数が減少している。

転出超過率をみると、最も高いのは大槌町の8.54%となり、次いで陸前高田市（5.11%）、山田町（4.07%）などとなっている。

ここまでのデータを振り返ると、岩手県では、県外への転出は減っているが、海岸部の被災地では著しい転出の動きが見られ、内陸の都市で転入増加の動きが見られる。つまり、津波の被害の大きかった市町村では人離れが進み、内陸の主要都市などに移り住み始める傾向が見られるということである。

年齢別に見た場合でも市町村の転入・転出超過率を年齢3区分別にみると、0～14歳の転出超過率が最も高いのは大槌町の13.17%で、前年に比べて、12.14ポイントの上昇となっている。次いで陸前高田市（7.25%）、山田町（5.29%）などとなっている。15～64歳の転出超過率が最も高いのは大槌町の9.07%で、次いで陸前高田市（6.03%）、山田町（4.52%）などとなっている。65歳

以上の転出超過率が最も高いのは大槌町の 6.01%で、次いで陸前高田市 (2.99%)、山田町 (2.82%) などとなっている。いずれの年齢においても、この 3 市町村は、人口の流出が進んでおり、その意味で方言の危機の可能性を示している。

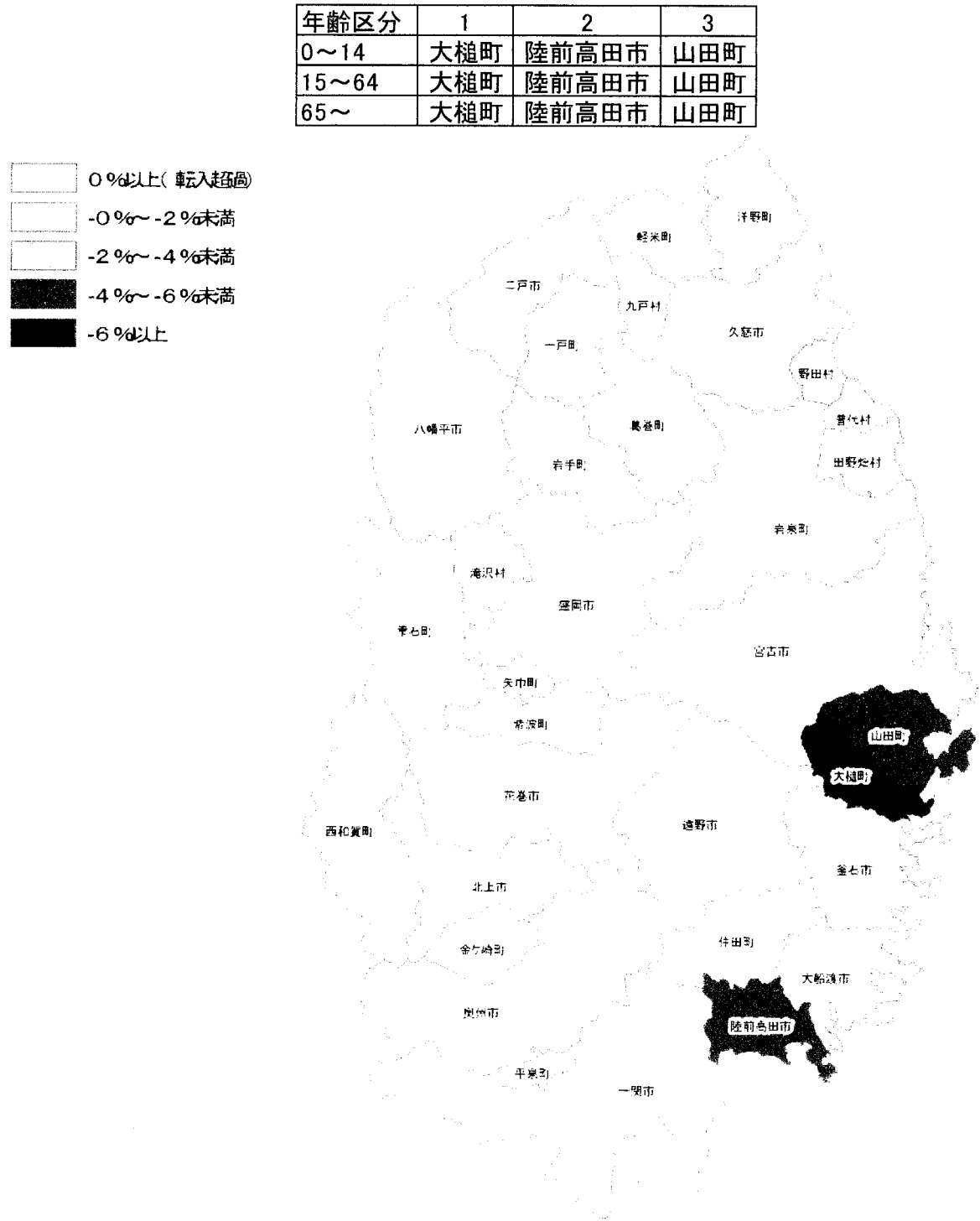


図 6. 岩手県の市町村別転入・転出超過率（平成 23 年）  
 （総務省統計局 2012「住民基本台帳人口移動報告平成 23 年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.20）

### 3.2.2.2 宮城県の転出・転入の状況

平成 23 年における転入・転出超過数をみると 6402 人の転出超過となり、前年に比べて、転出超過数は 5846 人の増加となっている。

年齢 5 歳階級別にみると、全ての区分が転出超過となり、なかでも、20～24 歳の転出超過数は、前年に比べて 1466 人の大幅な増加となっている。これは、方言を継承しうる当地の若者が離れ、各地の方言の継承が一層難しい状況が訪れることを予想させる。

次に転出先だが、平成 23 年における他の都道府県への転出者数をみると 5 万 4064 人となっている。前年に比べて 6150 人（12.8%）の増加となり、統計開始以来 3 番目の増加率となっている。県内移動者数、他都道府県への転出者数、ともに岩手県に比べて多いのが特徴と言える。

表 7. 宮城県の転入者数、転出者数、転入・転出超過数及び県内移動者数（平成 22 年、平成 23 年）  
（総務省統計局 2012 「住民基本台帳人口移動報告平成 23 年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.24）

区分	転入超過数 (一は転出超過)			他都道府県からの転入者数				他都道府県への転出者数				県内移動者数			
	平成 22 年	平成 23 年	平成 23 年 増減数	平成 22 年	平成 23 年	移動者数		平成 22 年	平成 23 年	増減数		平成 22 年	平成 23 年	移動者数	
						男性	女性			男性	女性			男性	女性
全県	46,102	47,778	+1,676	17,682	17,168	201	37	51,064	57,911	6,150	12.8	75,382	57,374	12,908	22.8
男	24,020	24,741	+721	9,410	9,047	115	17	29,710	37,132	2,551	8.5	41,021	28,150	12,871	21.9
女	22,082	23,037	+855	8,272	8,121	86	20	21,354	20,779	3,599	17.1	34,361	29,224	5,137	21.3

転出者数を転出先の都道府県別にみると、前年に比べて増加しているのは、岩手県（949 人）、北海道（732 人）、東京都（661 人）などとなっている。隣県である岩手県への転出が 1 位であるものの、北海道・東京と、遠隔地への移動者の数が合わせて少なくない点も、前節で見た岩手県の移動状況に比べ、特徴的な傾向と言える。これはすなわち、移動先で、日常母方言を使う機会が減り、共通語を用いる環境に置かれる話者が多い可能性を示している。

次に県内の市町村別移動状況を見ていく。次頁図 7 は、宮城県の市町村別転入・転出超過率である。平成 23 年 12 月 31 日現在の宮城県の 39 市区町村についてみると、転入超過となっているのは 15 市区町村で、登米市、大崎市など 8 市町が前年の転出超過から転入超過に転じている。前年に比べて、転入超過数が増加しているのは、仙台市青葉区（3405 人）、同太白区（2446 人）など 6 区町村となっている。



図7. 宮城県の市町村別転入・転出超過率（平成23年）

（総務省統計局 2012「住民基本台帳人口移動報告平成23年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.27）

転出超過となっているのは24市区町で、名取市、亶理町、仙台市若林区など5市区町が前年の転入超過から転出超過に転じている。なかでも名取市は前年1042人の転入超過から507人の転出超過となっている。前年に比べて転出超過数が増加しているのは12市区町となっており、石巻市（5041人）、気仙沼市（1973人）、南三陸町（1562人）など6市区町が1000人台の大幅な増加となっている。一方、栗原市、塩竈市など6市町では、前年に比べて転出超過数が減少している。転出超過率をみると、最も高いのは南三陸町の9.40%となり、次いで山元町（8.89%）、女川町（7.36%）などとなっている。これらのデータから、宮城県でも、被災した海岸部から内陸の都市などへ移動

している様子が窺える。ただし、岩手県は県内への移動が多かったのに対して、宮城県では、県内への移動ばかりでなく、県外への移動も少なくないことが特徴と言える。県内ばかりでなく、県外へ移動する人が多くいるという点では、岩手県よりも、日常母方言を使う機会が減り、共通語を用いる環境に置かれる話者が多くなる可能性がある。

市区町村の転入・転出超過率を年齢3区分別にみると、0～14歳の転出超過率が最も高いのは南三陸町の14.55%で、前年の転入超過から転出超過に転じている。次いで女川町(13.20%)、山元町(9.78%)などとなっている。一方、転入超過率が最も高いのは大衡村の6.16%で、次いで大和町(4.85%)、富谷町(3.91%)などとなっている。15～64歳の転出超過率が最も高いのは、南三陸町及び山元町の9.98%で、次いで女川町(7.50%)などとなっている。一方、転入超過率が最も高いのは、大和町の3.24%で、次いで大衡村(2.55%)、仙台市青葉区(1.81%)などとなっている。65歳以上の転出超過率が最も高いのは、山元町の6.61%で、次いで南三陸町(6.19%)、女川町(5.33%)などとなっている。一方、転入超過率が最も高いのは松島町の1.23%で、次いで利府町(1.18%)、富谷町(1.16%)などとなっている。山元町は、方言を用いると目される高年層の転出が著しく、方言自体の衰退が危ぶまれる。南三陸町や女川町は、中年層以下の転出が目立ち、継承の問題が予想される。

年齢区分	1	2	3
0～14	南三陸町	女川町	山元町
15～64	南三陸町・女川町		山元町
65～	山元町	南三陸町	女川町

3.2.2.3 福島県の転出・転入の状況

最後に、移動の著しい福島県の転出・転入状況の特徴を見る。平成23年における転入・転出超過数をみると3万1381人の転出超過となり、前年に比べて、転出超過数は2万5629人の増加となっている。福島県で転出超過数が3万人を上回るのは、昭和38年以来48年ぶりとなっている。

表8. 福島県の転入者数、転出者数、転入・転出超過数及び県内移動者数(平成22年、平成23年)  
(総務省統計局2012「住民基本台帳人口移動報告平成23年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.31)

区分	転入超過数 (一は転出超過)			他都道府県からの転入者数			他都道府県への転出者数			県内移動者数			
	平成22年	平成23年	増減	平成22年	平成23年	市内間移動		平成22年	平成23年	市内間移動		平成22年	平成23年
						県内	県外			県内	県外		
県民	41,381	47,532	+6,151	21,721	25,811	+4,090	+2,061	20,121	21,803	21,729	691	21,601	25,858
男	19,798	21,118	+1,320	12,779	14,656	+1,877	+1,878	20,557	19,997	10,870	872	15,993	18,155
女	17,583	20,400	+2,817	8,942	11,155	+2,214	+2,183	20,517	21,806	10,859	819	15,687	23,780

表8より、転出の傾向を見ると、平成23年における県内移動者数は2万7613人となり、前年に比べて345人(1.2%)の減少となっている。県内移動者数は前年に比べて減っているのに対し、一方で他都道府県への転出者数は、前年に比べて著しく増えている(69.4%増)。岩手県・宮城県の傾向に比べ、他都道府県への移動が際立っていると言ってよいだろう。

転出者数を転出先の都道府県別にみると、前年に比べて増加しているのは、東京都など3都県で2000人台、山形県など5道県で1000人台などとなっている。福島県の総人口を考えれば、先の宮城県と比べても、それぞれの地域への移動者の数は極めて顕著な傾向と言える。他の都道府県への転出者数を、転出先の市区町村別にみると(表9)、仙台市青葉区(宮城県)が最も多く、次いで同太白区(宮城県)、山形市(山形県)などとなっている。上位30市区町村のうち、東京都が9市区、宮城県が5区を占めている。

ここまでの結果をまとめると、福島県の移動者の移動先は、隣県だけでなく、東京などの遠隔地へ移動するケースも多いということである。しかも、その移動者の人数自体が、全体的に宮城県よりも大きい。岩手県・宮県県の他2県に比べても、似た方言との交渉を通した変化に晒される話者はもちろん、共通語を用いる環境に置かれる話者も、相当な数に及ぶと言える。したがって、それぞれの被災地の話者の母方言が衰退へ向かう可能性が極めて高いと言える。

表9. 福島県の転出先の市区町村別他の都道府県への転出者数(上位30市区町村)(平成22年、平成23年)

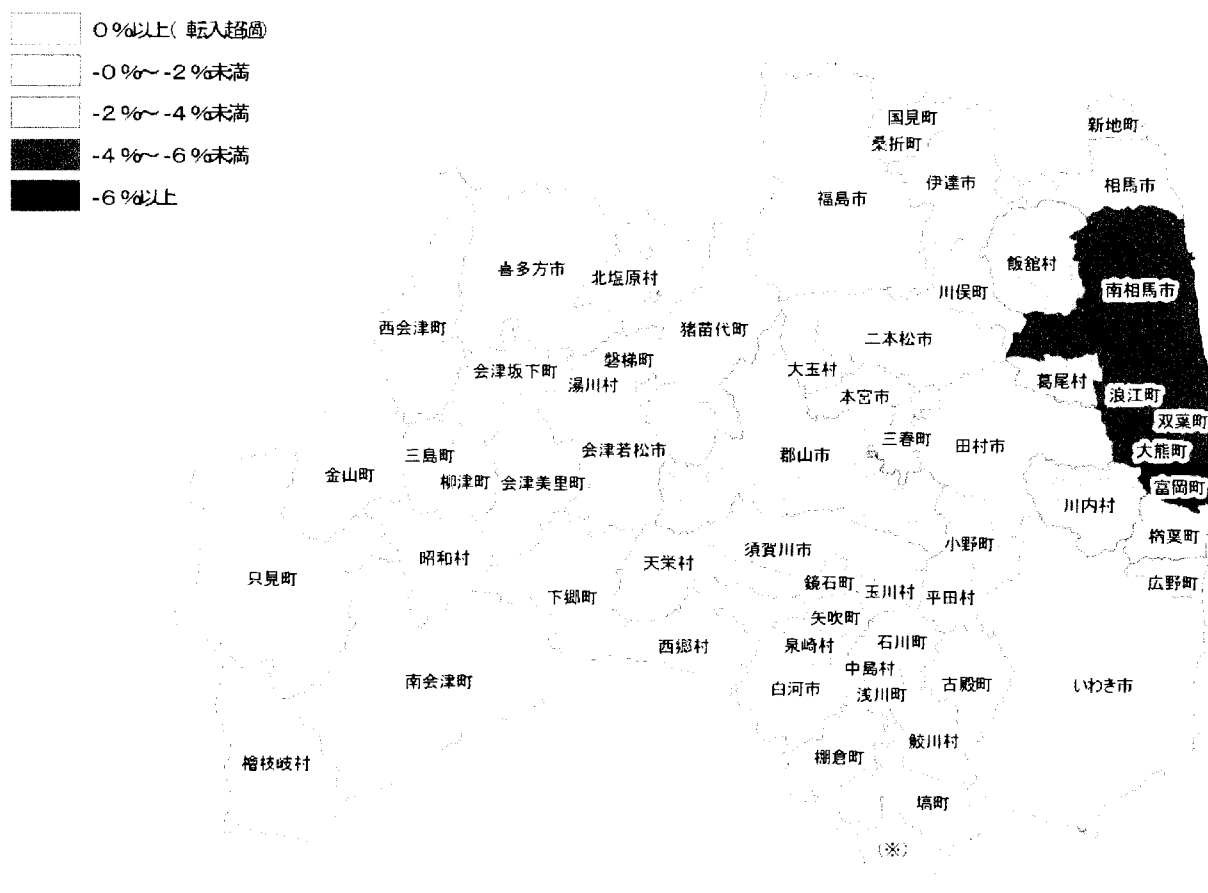
(総務省統計局2012「住民基本台帳人口移動報告平成23年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.32)

順位	転出先の市区町村	平成23年	平成22年	転出者増減数	順位	転出先の市区町村	平成23年	平成22年	転出者増減数
1	仙台市青葉区	1,754	967	841	16	水戸市	416	391	109
2	仙台市太白区	1,170	682	488	17	水戸市	402	392	10
3	仙台市	985	584	401	18	東京都中央区	381	375	47
4	仙台市宮城野区	984	510	474	19	東京都中央区	381	290	121
5	仙台市宮城野区	794	650	144	20	仙台市青葉区	370	246	100
6	仙台市青葉区	751	509	242	21	茨城県	369	69	300
7	仙台市青葉区	645	562	83	22	茨城県	367	246	127
8	山形市	537	163	374	23	福島県	362	252	109
9	東京都世田谷区	515	100	415	24	福島県	348	21	117
10	東京都世田谷区	499	112	387	25	千葉県	341	1	299
11	東京都板橋区	495	106	389	26	東京都中央区	332	147	178
12	東京都板橋区	475	74	401	27	東京都中央区	330	221	70
13	東京都板橋区	437	11	426	28	千葉県	297	211	62
14	仙台市	437	215	222	29	千葉県	296	276	47
15	仙台市	429	20	409	30	福島県	297	61	244

※：埼玉県県庁所在地(平成23年)の人口は埼玉県庁の発表による。また、平成23年1月1日現在の人口は、平成23年1月1日現在の人口移動報告(全国)の転出者数を含む。

また、順位1～10の平成23年の転出者数(千単位)と平成22年の転出者数(千単位)の差を算出した。





(※) 平成23年12月31日現在、住民基本台帳ネットワークシステムに接続していない市町村は除く。

図8. 福島県の市町村別転入・転出超過率（平成23年）

（総務省統計局 2012「住民基本台帳人口移動報告平成23年結果—全国結果と岩手県、宮城県及び福島県の人口移動の状況」、p.34）

では、次に市町村別の転入・転出超過状況を見ていこう（図8）。転出先の市町村別にみると、前年に比べて減少しているのは、南相馬市（268人）、富岡町（242人）、大熊町（238人）などとなっている。原発付近の市町村への移動が減っていることが分かる。平成23年12月31日現在の福島県の58市町村についてみると、県内で転入超過となっているのは大玉村、会津坂下町及び昭和村の3町村のみである。

一方、転出超過となっているのは郡山市、いわき市など55市町村で、10町村が前年の転入超過から転出超過に転じている。なかでも、富岡町は前年28人の転入超過から1086人の転出超過に、大熊町は186人の転入超過から532人の転出超過に転じている。前年に比べて、転出超過数が増加しているのは28市町村で、郡山市（7178人）、いわき市（5064人）、福島市（4085人）、南相馬市（3339人）、浪江町（1029人）の増加などとなっている。一方、会津若松市など17市町村では、前年に比べて転出超過数が減少している。

転出超過率をみると、最も高いのは富岡町の6.83%となり、次いで双葉町（5.56%）、浪江町

(5.51%)、南相馬市(4.99%)、大熊町(4.65%)などとなっている。

以上のデータから原発付近の市町村からは人が多数移動し、離れた内陸の市町村へ動いている様子が窺える。ただし、数値を見ると、岩手県・宮城県ほど県内への移動が多くないようである。それは、図8で転入超過に転じている市町村が少ないことから分かる。

市町村の転入・転出超過率を年齢3区分別にみると、0～14歳の転出超過率が最も高いのは南相馬市の10.13%で、前年に比べて10.10ポイントの上昇となっている。次いで富岡町(8.53%)、川内村(8.46%)及び浪江町(8.12%)の3町村が8%台となっている。15～64歳の転出超過率が最も高いのは富岡町の7.02%で、次いで浪江町(5.93%)、双葉町(5.92%)及び南相馬市(5.51%)の3市町が5%台となっている。65歳以上の転出超過率が最も高いのは、富岡町の5.42%で、次いで双葉町(4.21%)、浪江町(3.31%)などとなっている。

富岡町は、方言を用いると目される高年層の転出が著しい上、中・若年層～少年層の転出も多く、方言衰退の危機に直面していると見られる。少年層の転出が多い南相馬市でも、今後、継承の問題が浮上することが予想される。

年齢区分	1	2	3
0～14	南相馬市	富岡町	川内村
15～64	富岡町	浪江町	双葉町
65～	富岡町	双葉町	浪江町

最後に福島県の移動状況について付言するならば、福島県の被災地で、人の移動が著しい地域は、原発事故による被害の影響が大きく、それを移動状況の判断に加味して、当地の方言の危機の度合いを導き出す必要があることを述べておく。つまり、その地域に当地の人が戻るには、地震による被害からの復興に加え、原発事故による被害からの回復も要するものと考えられる。その意味で、これらの地域の話者は、長期の移動期間を強いられると考えられ、その分、移動先でのコミュニケーション環境から受ける影響も大きいと容易に推測できる。したがって、3.2節での分析に、この点を考え合わせると、移動状況の現状から判断すると、福島県の被災地の市町村が、方言衰退の危機の度合いが高いと言える。

### 3.3 問題点Ⅲのまとめ

本節では、今後、被災地各地の方言に起きうる変化の方向性を見極め、各地域の被害の大小や被害自体の継続性など、方言の変化に影響する言語外的な諸要因について、理論的に考察し、それを踏まえ、大震災に関わる社会的影響の統計データとして住基移動報告を参照して、当該地域の方言が危機にあると目される地域を考察する試みを行ってきた。

考察の結果、方言の変化に影響すると考えられる、大震災にまつわる直接的な要因としては、以下のようなものを導き出した。

## A. 被害状況及び移動状況

### A-1 話者の喪失状況

#### ①死者・行方不明者数

### A-2 話者の移動（転出）状況

#### ②移動数（転出数）

#### ③移動期間

#### ④移動先との距離（＝方言の似かよ度）

これに、「B. 被災者の特徴」「C. 被災地域の特徴」が掛け合わさることで当地の方言に及ぶ影響の詳細が推測できると考えた。さらに、移動者の母方言に起きうる変化の内実としては、共通語化や、方言間での統合・混合などが想定でき、いずれであれ、移動者の母方言は衰退の方向での変化をたどるものと推測される。

さらに、以上の理論的考察を踏まえ、影響を与える言語外的要因の一つの、話者の移動状況について、平成 23 年住基移動報告を参照し、特に岩手県・宮城県・福島県の 3 県について、人の動きの流れから、当地の方言が危機にあると思われる地域を導き出す考察を行った。

その結果、特に、他都道府県への転出が多く、この先の移動期間も長いと目される福島県や、県内外への人の動きの流れが大きい宮城県などで、被災地各地の方言が衰退へ向かう危機にあるという示唆を得た。

## 4. 問題点Ⅰ～Ⅲの総括、及び今後の課題

最後に、言語外的な要因として、話者の移動状況の現状のみからではあるが、その観点から見て方言衰退の危機にある地域（問題点Ⅲ）と、貴重な方言が多く分布するという意味での方言衰退の危機にある地域（問題点Ⅰ・Ⅱ）を突き合わせ、早急な対応を要する地域を検討し、提言する。

これは、すなわち、ことばの面から検討した方言の貴重さのあり方と、現実社会の状況から検討した方言の危機の逼迫度を突き合わせ、総合的に把握することで、各地の方言の将来を見越し、早急に対処を要する地域を洗い出す試み、と位置づけられる。

まず、問題点Ⅰ・Ⅱの検証での、方言学的な見地からは、宮古市・種市町などの地域に貴重な方言が存し、記述がとりわけ強く求められると導き出した。しかし、これらの地域は、問題点Ⅲの影響を与える要因の一つである、話者の移動状況の現状から見た場合、人口流出が著しく進み、差し迫った危機にあるとは判断できない。

むしろ、LAJ で 3 番目、GAJ で 6 番目に多く貴重な方言が分布し、全国市町村転出超過数でも 3 番目になる石巻市は、双方の面から危機にあると判断できる。LAJ で 4 番目、GAJ で 1 番目に多く、転出超過数でも全国 7 番目になる気仙沼市も同等の危機にあると判断してよいだろう。LAJ で 5 番目、転出超過数でも全国 5 番目に位置する南相馬市も、特に語彙面での保存の問題が急がれる。また、文法の面では GAJ で 3 番目に位置し（GAJ では本吉郡志津川町）、転出超過数で全国 9 番目

に位置する南三陸町も、津波による被害が大きく、話者の移動が長期化することが予想でき、その意味で、方言へ与える影響を過小評価することはできない。さらに、総人口に占める転出超過数の割合から判断すると、GAJ で 4 番目と、貴重な文法項目の多い山田町も危機的状況と言える。これは大槌町の語彙項目についても言える。さらに、LAJ で 7 番目、GAJ で 4 番目に貴重な方言の存する亘理町も転出超過数の割合の面から見て、危機的状況にあると言える。

逆に、先にも述べたが、問題点Ⅰ・Ⅱで、貴重な方言が多くあると判断した洋野町や宮古市、さらに、階上町などは、言語外的要因の現状の 1 側面である移動状況から見ると、宮城県や福島県の市町村に比べ、危機状況は逼迫しておらず、すぐさま対応を要すると考えなくてもよいと思われる。

それでは、問題点Ⅰ・ⅡとⅢの結果を突き合わせ、総合的に早急な対応の必要があると導出した石巻市や気仙沼市にさえ対応すればよいか、と言うとそうとも言い切れない。それは、問題点Ⅰ・Ⅱの結果が、あくまで言語地図の調査地点上を捉えたもので、言語地図の調査地点をとっていない地域でも、貴重な方言が存し、かつ言語外的要因の移動状況の現状で危機にある可能性があるからである。そういった意味では、言語外的要因の現状から判断して危機にある地域の方言は、とりもなおさず優先的に記述の有無を確認し、必要に応じて対応しなくてはならない。今回の移動状況の現状からは、とりわけ、福島県原発付近の各市町村（富岡町など）は、早急な対応が求められる。

最後に今後の課題を述べる。

今回の総括に当たって、問題点Ⅲについては、あくまで、平成 23 年住基移動報告という確定したデータで、話者の移動状況の一要因から分析・考察を行ったものである。今後、話者の喪失状況なども考え併せ、言語外的要因の現状から危機にある方言を精査したうえで、再度、真に衰退の危機にある方言の考察を行う必要がある。

また、言語外的要因の現状を、総合的に測る際には、諸要因相互の関係をもっと突き詰めて考えていかなければならない。死亡者数はダイレクトに影響を及ぼすという意味で影響が大きい、避難者数は、いずれ土地土地に帰ってくるという可能性を残すものであり、その意味で、影響力が同じとは考え難い。このように各要因は単純に並列するものとは言えず、相互に関わりあう、あるいはどれかがどれかを包含する、あるいは上位下位関係にあることも考えられる。今回の考察では、列挙するにとどまったが、今後考察を深め、考えられる要因の影響の精緻化を行う必要がある。

今回の試みを経て、考え直すべき課題も存する。移動の状況に関して、今回は、被災地の方言に影響を与えるものとして、当該方言話者の転出数を中心に焦点を当て、当該方言に及ぶ変化に重点を置いて考察したが、コミュニケーションが相互のものである以上、受け入れ先の方言の変化も考える必要がある。つまり、どこでどこからの話者をどれくらい受け入れたかという視点で、転入受け入れ先の变化にも目を向けるということである。被災地の話者を多く受け入れる、すなわち、他所の方言を話す人が大量に入ってくるとすることは、必然的に、受け入れた側もコミュニケーションの環境が変わる可能性が高まるということである。それに伴い、大量に受け入れた市町村側の方言も、多かれ少なかれ影響を受け、変化する可能性は否めない。今回はその点にまで分析・考察が及ばなかったが、今後はそういった点を視野に入れた考察が求められる。

さらに、住基移動報告を具体的に参照することで、「被災地」について再考する余地があることが明らかになった。例えば、全国市町村転出超過数第1位の郡山市は、津波の被害も受けておらず、原発の直接の警戒・避難区域に指定されているわけではないが、人口の流出が著しい。また液状化の影響で住民の転出が増えたと見られる千葉県などの市町村も、話者が他所へ離れ、その点で当地の方言が変化の危機に晒されている可能性を考えなくてはならない。

また、今後考察を要する移動状況の内の一要因として考えられる、移動期間の長短の判断には、移動している人の意識などのデータが必要となる。今回は詳しく触れるに至らなかったが、自然災害に伴う避難などで移動した人々の意識やネットワークの変化は、三宅島の災害復興にあたっての帰島民の意識・生活状況調査などを行った社会学の成果（田中ほか編 2009 など）が参考になる。今回の大震災に伴う言語への影響を同定するには様々な要因への目配り・調査による実態把握が必要であり、それは個々の分野の力だけでは賄いきれない。単分野の総力のみならない他分野との連携をも視野に入れた、協力体制での研究が必要だと思われる。

## 文 献

- 井上孝(2011)「原発近接地域の人口・世帯の分布と構造」『統計』62・9、日本統計協会
- 大友篤(2011)「東日本大震災地域の標高別人口分布と産業基盤—ジオデモグラフィックスによる分析」『統計』62・9、日本統計協会
- 大矢根淳・浦野正樹・田中淳・吉井博明編(2007)『災害社会学入門』弘文堂
- 国立国語研究所編(1966～1974)『日本言語地図』第1集～第6集、大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編(1989～2006)『方言文法全国地図』第1集～第6集、財務省印刷局
- 小林好日(1944)『東北の方言』三省堂
- 小林隆編(2003)『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤喜代治(1966)「岩手県三陸地方北部の言語調査報告」『日本文化研究所報告別巻』4号、東北大学日本文化研究所
- 佐藤喜代治・加藤正信(1972)「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所報告別巻』8・9号、東北大学日本文化研究所
- 小林隆・篠崎晃一(2003)『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』大阪学院大学情報学部
- 多賀城市史編纂委員会(1984)『多賀城市史 第3巻 民俗・文学』多賀城市
- 田中淳史・サーベイリサーチセンター編(2009)『社会調査で見る災害復興—帰島後4年間の調査が語る三宅帰島民の現実』弘文堂

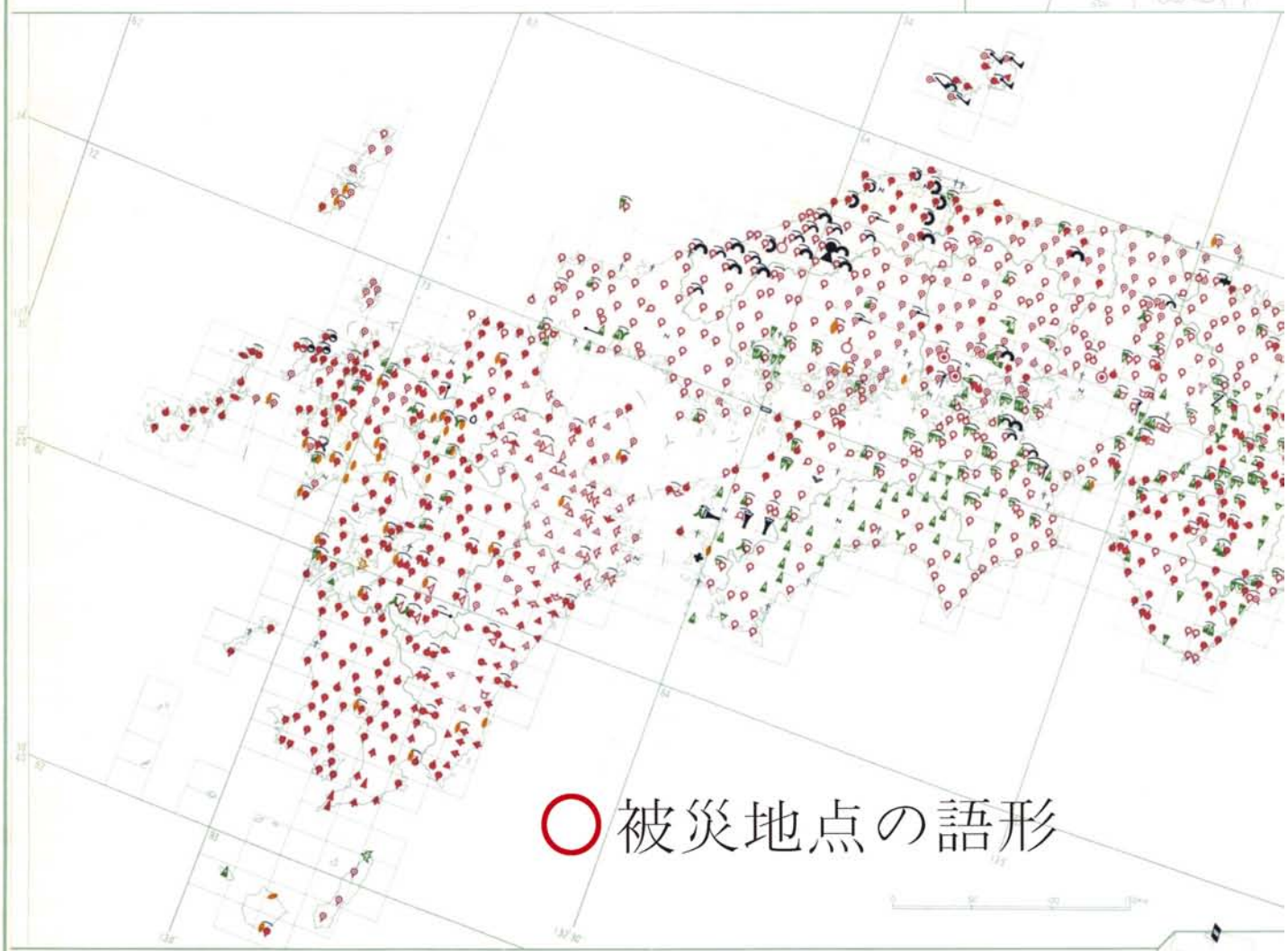
## 参 考 H P

- 「東北大学方言研究センター」<http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/>
- 「東日本大震災関連情報—総務省統計局・政策統括官（統計基準担当）の統計調査等関連の取り組み」<http://www.stat.go.jp/info/shinsai/index.htm#kekka>



# 207 おうし (牡牛) bull ①Aの例

OUSI	OTOKOUSIME	KOTTAI	TOKEE	KOCCUUUSI	GOCCYOUSIME	TANEOZI
OUUSI	OTOKOUUSI	KOTEE	TOKEEUSI	KOT	GOCCI	TANEBEKO
OUZI	OTOKOOSI	KOTEEUSI	KOTTORI	KUTHI	GOCU	TANEBO
OGYUU	OTOKOUZI	KOTEEBEEKO	KOTTORIUSI	HUTHI	BAK/KO	TANEBOO
OBEKO	OTOKOBEKO	KOTEEBOKKO	KOTOUSI	KUTI	BAKURA	TANAUSI
UUUSI	OTOKOBEKO	HOTEE	KOTTO	KUTHIUSI	CIUZI	USINOTANABO
UUHUSI	OTOKOBO	KOTE	KOTTOUSI	KUTTHI	CICIUSI	KINKIRI
UUUSAA	OTOKONBOO	KOTEUSI	KOTTOOUSI	KUTTI	CICIBEKO	KYOSSE
ON	OCUKOUSI	KOTEUHI	KOTUI	KUTTHIUSI	CICIBEKO	TAMATORI
ONUSI	OTOUSI	KOTEBEKO	KOCCUI	HUTTHIUSI	TETEBEKO	BO
USINOON		KOTEKO	KOCCUIUSI	HUUGUTI	DECCI	BOUSI
ON'UZI	IKIGAAUSI	KOTEBO	KOCCUIUSI	HUUGITI	DECCIUSI	BOGYUU
ONKO	INGAUSI	KOTTEE	KOTUI	UGUTUI	GURD	BOO
ONBOUSI	YENGAUSI	KOTTEEUSI	KOCHI	GOTTOI	HEETAME	BOOUSI
ONBOUSIME	BIKIUSI	KOTTEEUSI	KOCHIUSI	GOTTOIUSI	MEEEO	BOOKKOO
ONTA	BIGIUSI	KOTTEI	KOTII	GOTTEUSI	OMOZI	BOOGYUU
ONTAUSI	BIGIUCI	KOTTE	KOCI	GOTTEUSI	OTONABEKO	KATOUSI
ONTABEKO	BIGHUSI	KOTTEUSI	KOTI	GOTTEUSI	SIBO	ONAMI
ONTABOO	BIUSI	KOTTEUHI	KOTIUSI	GOTTEUSI	ZOKIKIU	ONNAME
OTAUSI	BIHUSI	KOTTEUZI	KOTINBO	GOTTEUSI	ZOKKUME	GANZYO
ONCYOOSI	YARO	KOTTEGORO	KOCCH	GOTTEUSI	KAKEUSI	GANZYOBEO
OCCYAA	YAROUSI	KOTTEBO	KOTTH	GOTTEUSI	KAKEBO	YUUGYUU
ONCU	BOYARO	DOKOTTE	KOCCI	GOTTEBO	KAKEBOKKOO	
OSU	YAROO	HOTTE	KOCCIGO	GOTTENBOOUSI	KAKEBOO	
OSUUSI	YAROOUSI	KOTENBO	KOTTI	DEKKO	KAKEOSU	
OSUNOUSIME	YAROOBEKO	KOTENBOO	KOTTIUSI	GOTTOUSI	KATEUSI	
OSUNOUSINENBO		KOTTEN	KOCU	GOTTO	TANEUSI	
OSUGYUU		KOTTENUSI	KOCUIUSI	GOTTOUSI	TANEOZI	
		KOTOI	KOTUIUSI	GOTTOO		
		KOTTOI	KOTUUSI	GOTTON		
		KOTTOIUSI	KOCCU	GOTCYO		
		KOTTOIUSI	KOCCUUSI	GOCCYOUSI		
		KOTTOE	KOCCUU			

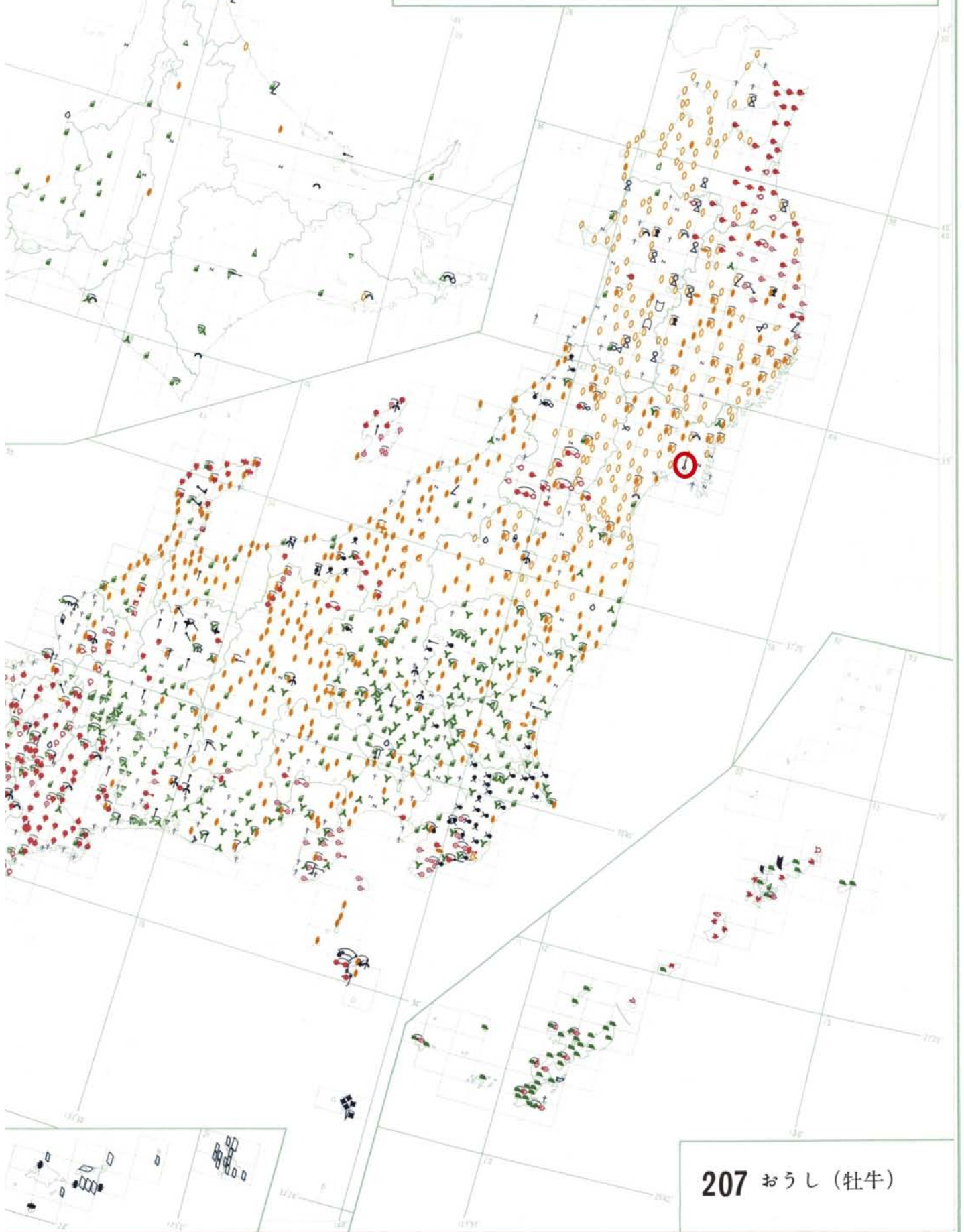


○被災地点の語形

質問文：おすの牛のことを何と言いますか。(219)



日本言語地図  
 国立国語研究所  
 LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN  
 THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



# 21

## あらい(粗い) rough, loose ①Bの例

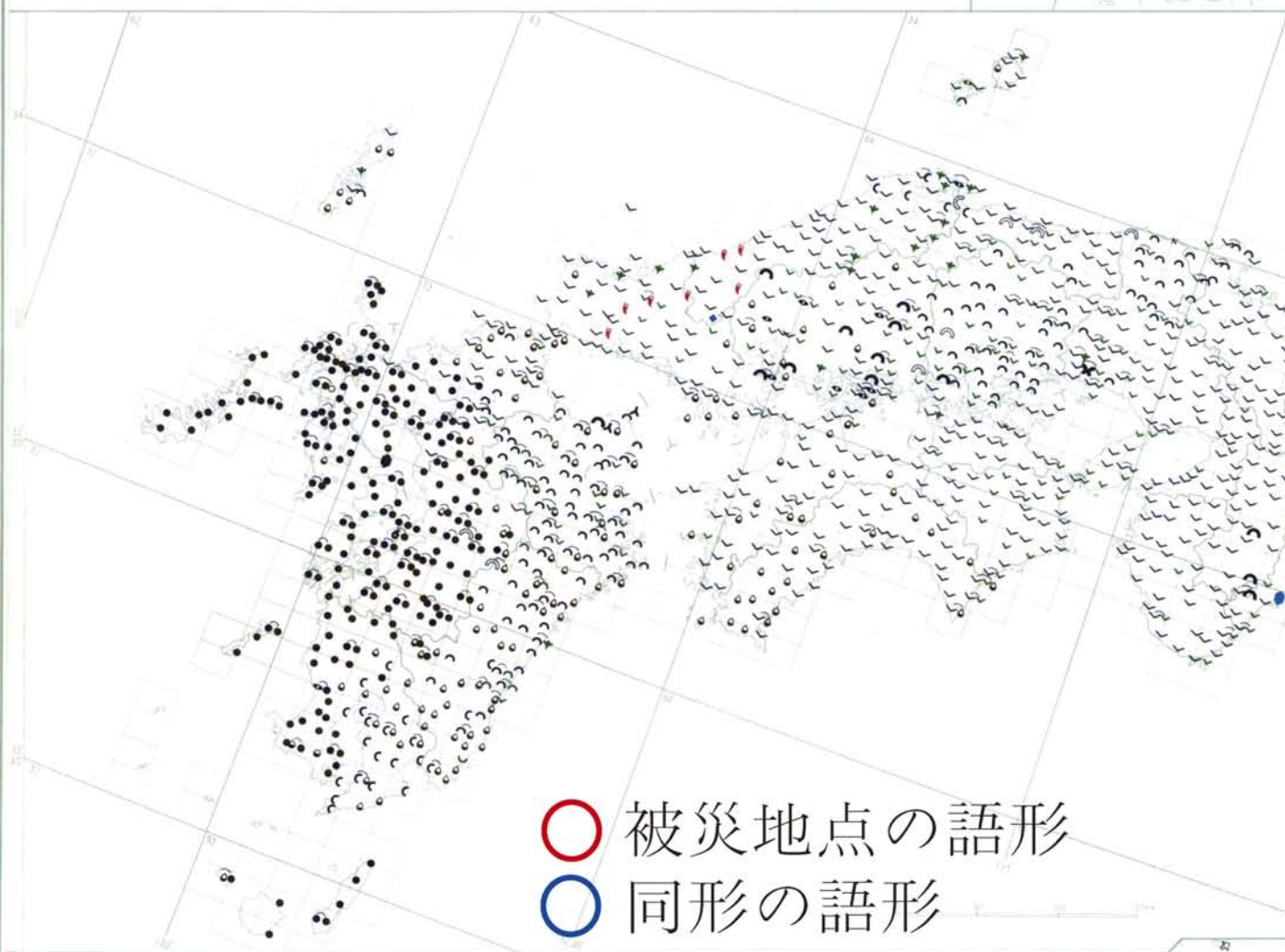
~ ARAI  
 ~ AREE  
 c ARE  
 ^ AAREE  
 < AARE  
 † ARREE  
 ^ ARAA  
 ^ ARYAA  
 c ARYA  
 ^ ARII  
 • ARAKYA  
 • ARAKA  
 6 ARAKU  
 o ARAGA  
 v ARA-  
 • ARAME

▲ ARAKOI  
 ● ARAKUTAI  
 ▲ ARAPOI  
 † ARAPEE  
 ■ ARAPPOI  
 † ARAPPEE  
 † ARAPPE  
 † ARAPPPI  
 ▲ ARAPOSHI

~ OOKII  
 † OOKINA  
 ^ OOKINAI  
 o OOKINAKA  
 ~ OKKEN  
 ^ OOKITAI  
 • BOOKYA  
 • OOME  
 \* BOOME  
 x OOMAKAI  
 x OOMAKA (DA)  
 † UPU-  
 ^ HUU-  
 † WUU-  
 o HUTOI  
 • HUTOKA  
 • HUTE-

■ DEKAI  
 ■ DEKOI  
 ■ IKAI  
 \* ZUNAI  
 † ZUNNAI  
 ■ MAI-  
 ■ **USUI**  
 ■ ACUI  
 \* KARAI  
 ^ ABARAI  
 ● ZAKKA  
 x GOCCUI

~ 無回答 no response



質問文：二つのふるいがあります。大きさは同じですが、ただ網の目が違います。両方を比べてとき(あらい方をさし)こちらの目は(細かい方をさし)こちらの目よりもどうだと言いますか。(162)



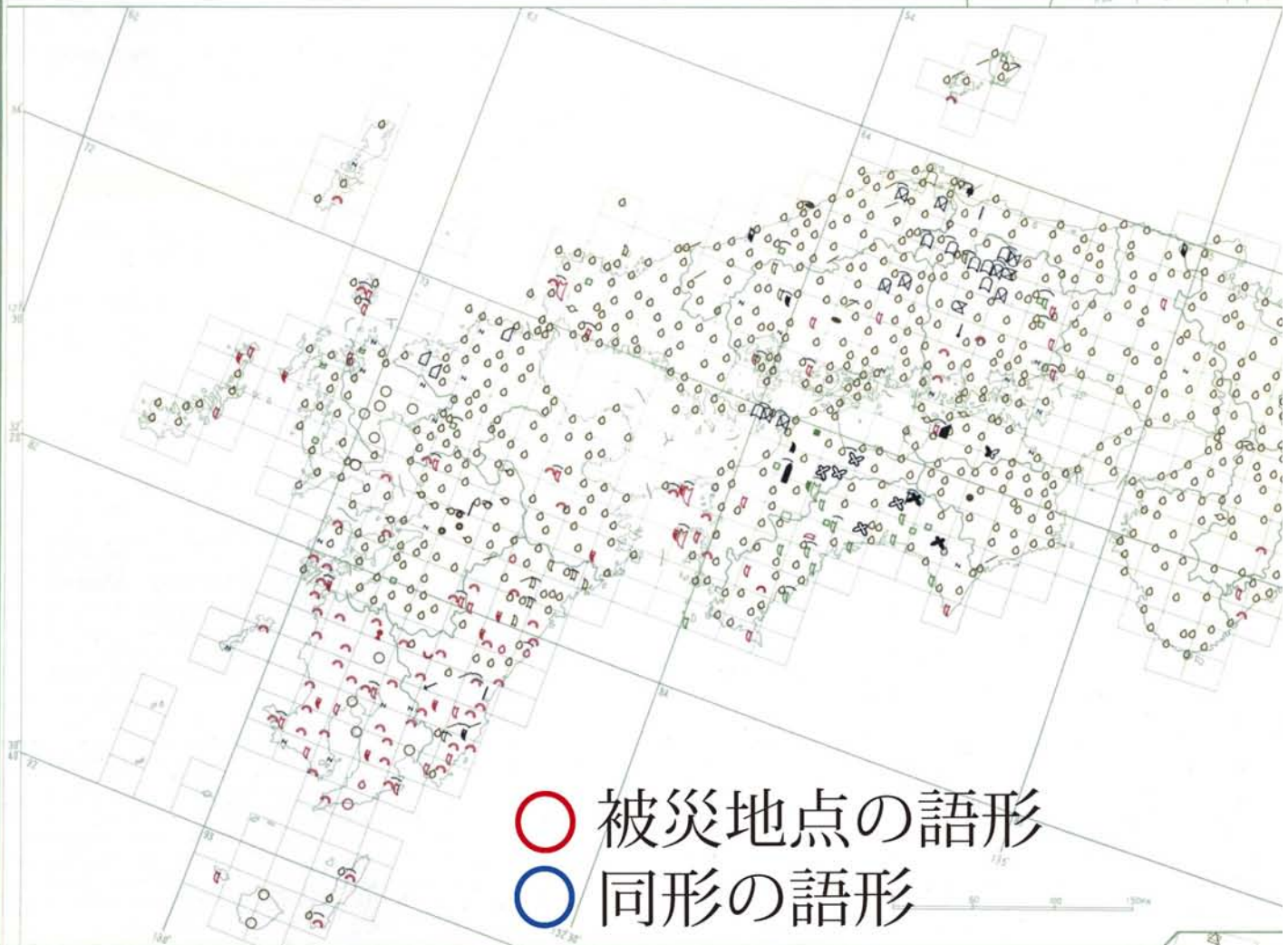
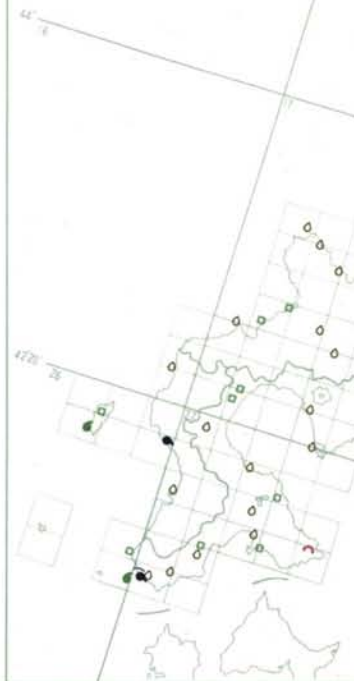


日本言語地図  
国立国語研究所  
LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN  
NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



# 198 もり (森) grove (around a shrine) ①Bの例

○ MORI	△ YAMA	■ OHAYASI	← KEIDAINOKI	▼ YASIRO
♀ MORI	● YAMAKKO	▼ OHAYASĪ	↓ SINBOKU	▲ KAMI(SAMA)(NO)(O)YASIRO
◇ MORE	△ OYAMA	▲ OHAYASU	↘ SYA(CI)BOKU	▼ KEIDAI
○ MORU	△ UYAMA	○ MORI(NO)HAYASI	/ SYOBOKU	▼ GENKEIDAI
○ MORO	△ YAMAAMA	♀ MORĪBAYASĪ	● KIWARA	▼ KAMISAMANOKEIDAI
○ MOT	△ YAA	○ MORINOHAYASU	▼ YASIKI	▼ SYACI
△ MURI	○ MORIYAMA	○ MOROBAYASI	▼ OMIYANOYASIKI	▼ UGAMI
◇ MULĪ	○ MOIYAMA	▼ MIYA(NO)HAYASI	▲ KAMI(SAMA)(NO)YASIKI	▲ UGAN(ZYU)
♀ MURU	▼ (O)MIYA(NO)YAMA	♀ (O)MIYA(NO)HAYASĪ	▼ ODOOYASIKI	▼ ON
○ MOI	△ MIYAMA	▼ OMIYANOHAYASU	▼ OMIYANOSANRIN	▲ ONNUKIURUSI
♀ MOĪ	▼ KAMI(SAMA)(NO)YAMA	▼ MIYABEESI	▼ ZINZYAZIN	▼ WAA
△ MUI	▲ UGAN(ZYU)YAMA	▼ ZINSYABAYASI	▼ SYARIN	▲ UTAKI
○ MORIKO	▲ ONKAN'YAMA	▼ ZINZYANOHAYASĪ	▼ OHAI	▼ TUN
♀ MORĪKO	▼ WAN'YAMA	▼ ODO(NO)HAYASĪ	▼ OHAE	● KAKOI
/ MORIKI	▲ UTAKINUYAMA	▼ KAMISAMANOHAYASĪ	▼ OHEI	▼ EGUNE
— KIMORI	▼ TERAYAMA	▼ KAMI(SAMA)(NO)HAYASU	▼ (O)MIYA(NO)HAE	▼ KAINYOO
— KIIMULĪ	▼ TACIGIYAMA	▼ TERABAYASI	▼ SHUKUBAI	▼ GUROGURO
● OMORI	▼ YASIKIYAMA	▼ TERABAYASĪ	▼ (O)HURO	
● KOMORI	▼ ACCIYAMA	▼ HAYASIWARA	▼ MIYA(NO)(O)HURO	
○ KONMORI			▼ KAMISANNOOHURO	
◇ MORISAN	□ HAYASI	KI	▼ SYAHURO	
▼ SYAMORI	♀ HAYASĪ	↑ (O)MIYA(NO)KI	▼ MIYABU	
(O)MIYANOMORI	▲ HAYASU	▼ KAMISAMANOKI	▼ YABU	
KAMI(SAN)(NO)MORI	□ HAYAI	✓ KANGI	▼ (O)MIYA(SAN)	
▼ MORIHURO	■ HYAASI	→ ODONOKI	▼ MIYAKAKUSI	
	■ HEESI	↘ SYACINOKI	▼ MIYANNIWA	



質問文：お宮の境内などに木が一所に集ってこんもりと生えている場所のことを何と言いますか。(138)



日本言語地図  
国立国語研究所  
LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN  
THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



# 245 きのこ (茸・蕈) mushroom ②Aの例

✓ KINOKO	■ HATTAKE	○ NABA	✕ KUSABURA
✓ KINOKOO	■ HACUDAKE	○ NABAA	✕ SABIRA
✓ KINNOKO	■ HANDAKE	○ NAABA	✕ KUSABIRO
✓ KINOHO	■ KATTAKE	○ NABAN	○ SIBAHARI
✓ KINUKU	■ MACUTAKE	○ NAWA	↑ SIMEZI
✓ CINOKO	■ MATTAKE	○ NAWAA	↓ SIMIZI
✓ KINOGO	■ MACUDAKE	○ NAWA	← HIMIZI
✓ KINNOGO	■ KOEMATTAKE	○ NAMA	▼ MODASI
✓ CINOGO	■ GOZYADAKE	○ ZINABA	▲ MODASE
✓ CUNOGO	■ ZOOTAKE	○ DOKUNABA	▲ ZAZANBO
✓ CUCIGINOKO	■ ZYOOTAKE	▲ KOKE	▲ KIINUBOOZĪ
✓ ZIGINOKO	■ ZACUTAKE	▲ KOKEE	▼ DOBOO
✓ YAMAGINOKO	■ ZATTAKE	▼ KOGE	▲ DOBU
✓ BUSUKINOKO	■ SHITAKE	▼ KOGERUI	↑ KIN
✓ DOKUKINOKO	■ AITAKE	▲ KOKERA	← KINRUI
■ TAKE	■ DOKUTAKE	○ MIMI	● KABI
■ TAGE	■ DOKUTTAKE	○ MIN	★ KAKKO
■ DAKE	■ DOKUDAKE	● KIHNUMIN	✕ DOKUSOO
■ DAGE	■ DOKUMATTAKE	● MINZYUU	■ MANKUSU
■ TAKERUI	■ KUSOTAKE	● MIMIGUI	
■ TAKEMONO	■ KUSODAKE	✕ KUSABIRA	
■ TAKEMON	■ KUSOMATTAKE	✕ KUSABIRAA	
■ HACUTAKE	■ MAGUSOMATTAKE		

以下の符号は、その地点に、

具体的には示さない語形が別  
に存在することを示す。

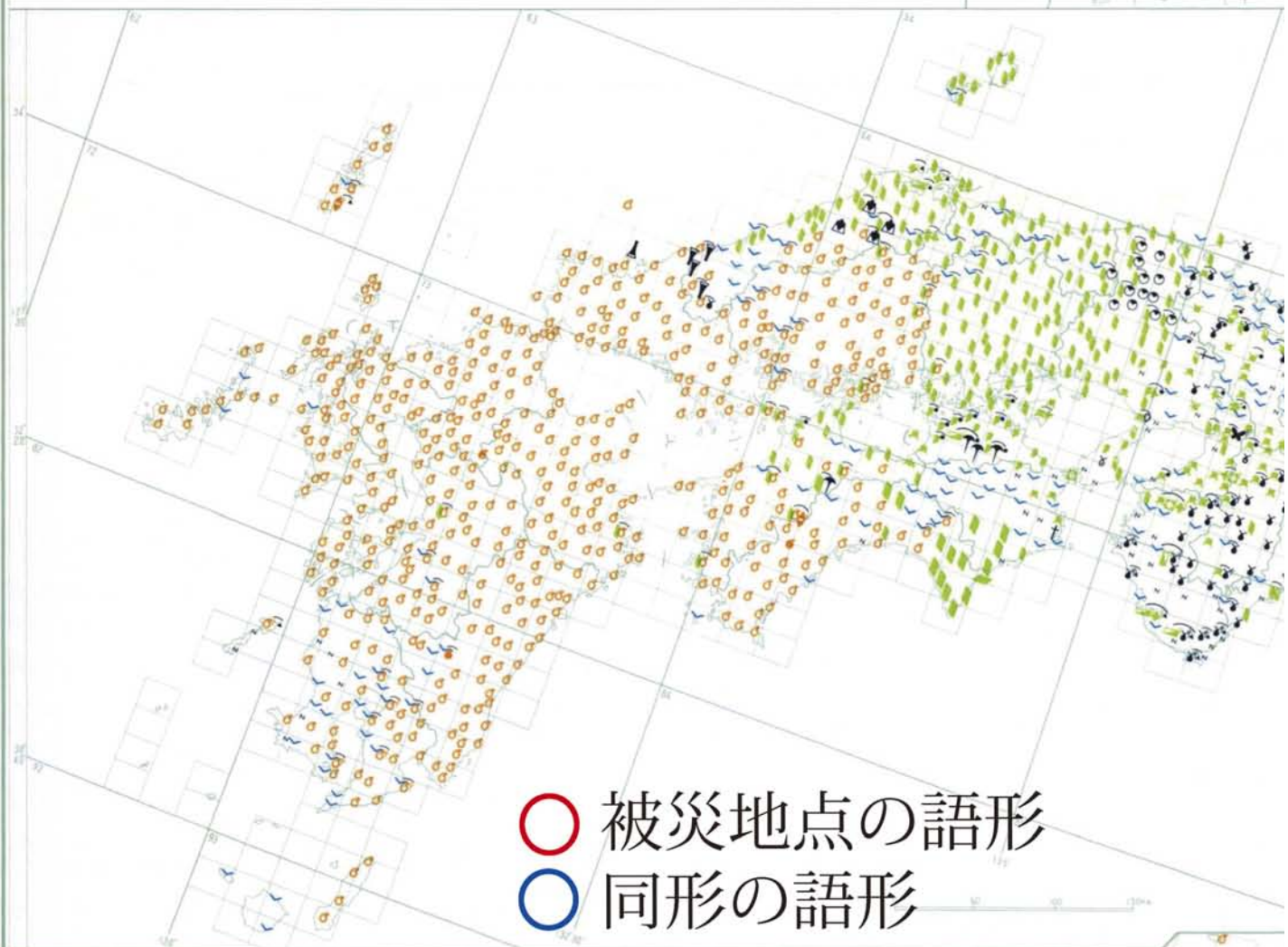
The following signs refer to linguistic forms  
not shown on the map. Their function is as  
follows:

- ある種の食用茸についての個別称。(それらは、  
地図上にある茸全体または食用茸の総称には含ま  
れない。)  
Some kinds of edible mushrooms have their distinct  
names, not shown on the map neither included in the  
general names. The mapped forms are the general names  
either for mushrooms or for toadstools (the latter marked  
with a † of the same color).

- すべての食用茸についての個別称。(この符号のある  
地点には、茸全体または食用茸の総称はない。)  
All edible mushrooms have their distinct names; no  
general appellations were found either for mushrooms  
or edible mushrooms.

“ 無回答 no response

- 毒茸の総称。(各語形の符号の右側に同色で示す。)  
(with the color of the mapped form) The mapped  
form is the general name for toadstools.



○ 被災地点の語形  
○ 同形の語形

質問文：まつたけやしいたけなど、そのほか毒のあるものもありますが、こういうものをひく  
るめて何と言いますか。(079)





日本言語地図  
国立国語研究所  
LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN  
THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



▲ SEKIO—	▲ SYEGGA—	▲ SĒĒ—	○ SUWAMUKIO—	□ TAGURIO—	▲ ISAKOO—
▲ SYEKIO—	▲ SEKINO—	▲ SYEE—	○ SIWABUKIGA—	○ KOTAGORIO	▲ ISAKU—
▲ SEGIO—	▲ SYEKINO—	▲ SYESIO—	○ SIWABUKI—	□ TAGURIGA	▲ ISAKI—
▲ SYEGIO—	▲ SEKIN—	▲ SEKUO—	○ SIWAMUKI—	○ TAGORIGA—	▲ ISUKU—
▲ SEKKIO—	▲ SEKII—	▲ SYEKO—	○ SIWAKI—	▲ SAKKWII—	▲ SISAKU—
▲ SIKIO—	▲ SYEKII—	▲ SEKU—	○ SYABUKIO—	▲ HAKKWII—	☆ GAIKIO—
▲ SEKYOO—	▲ SEGII—	▲ SYEKU—	○ SABUKIO—	▲ SAKUI—	● TANGA—
▲ SYEKYOO—	▲ SYEGII—	▲ SUTI—	○ SYABOKIO—	▲ SAHUI—	● TAN—
▲ SEKYO—	▲ SEKI—	▲ IKIO—	○ SABUKIGA—	▲ SAKKUI—	● その他 other forms
▲ SYEKYO—	▲ SYEKI—	▲ IKYOO—	○ SABUGIA—	▲ SAKKWI—	† 前部分がない without object
▲ SIKYO—	▲ SEGI—	▲ IKYO—	○ SIYABUKI—	▲ SAKKOI—	● 後部分がない without verbal part
▲ SEKYUU—	▲ SYEGI—	▲ IKYU—	○ SYABUKI—	▲ SAAKUI—	● 無回答 no response
▲ SYEKYUU—	▲ SEKKI—	▲ IKYU—	○ SYABUGI—	▲ SUKKWAI—	
▲ SEKYU—	▲ SEEKI—	▲ IKIGA—	○ SABUKI—	▲ SAKOO—	
▲ SYEKYU—	▲ SIGI—	▲ IGGA—	○ SABUGI—	▲ SAAGOO—	
▲ SEKIBA—	▲ HEKI—	▲ IKIN—	○ SAMUGI—	▲ ZAAGUBA—	
▲ SYEKIBA—	▲ HEGI—	▲ ICIN—	○ SYABIKI—	▲ SAGU—	
▲ SYEBBA—	▲ HYEKI—	▲ IKI—	○ SYABIGI—	▲ SAAKU—	
▲ SEKIA—	▲ HWEKI—	▲ IKI—	○ SABOGI—	▲ SAAHU—	
▲ SYEGIA—	▲ HIKI—	▲ IGI—	○ SYABURU—	▲ SAAGU—	
▲ SEKIGA—	▲ HIGI—	▲ IKU—		▲ SAKO—	
▲ SYEKIGA—	▲ SEHIO—	▲ IGU—	○ KOCUU—	○ ISAKUU—	
▲ SEGIGA—	▲ SEHĒ—	▲ IKIGIRI—	○ KOCURIGA—	○ ISAGUU—	
▲ SEGGA—	▲ SYEHĒ—		○ KOCUGA—		



質問文：かぜをひいたときなどに、のどを痛めて（ごはんごととまねをする）とすることがあります。こうすることをどう  
すると言いますか。(055)

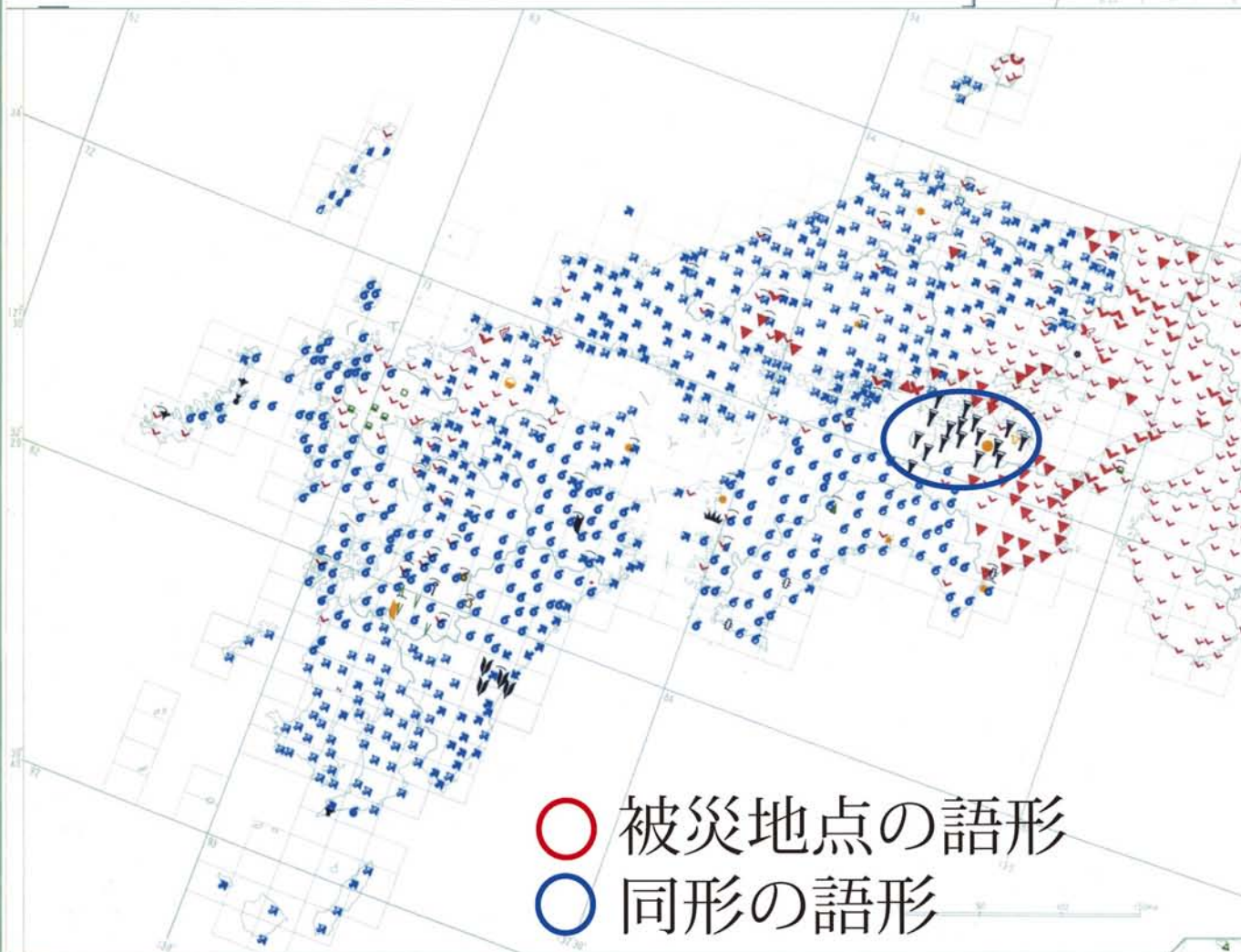


日本言語地図  
 国立国語研究所  
 LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN  
 THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



# 215 とさか (雞冠) comb (of the rooster) ②Cの例

▼ SAKA	○ TORIKASA	6 KAMUTO	▼ KAGAN	▼ BE(E)RA	▼ TONBO
▲ SYAKA	○ TOKKASA	6 KANTO	▼ KANGAN	▼ BERABERA	▼ TO(O)
✕ SYAKO	○ TOKKESA	7 TOKIN	▼ TUINUHAGAN	▼ BERO	▼ YAMA(KO)
✕ SYOGA	○ TOKKESI	7 TOKKIN	▼ KOOMIN	▼ BETTOO	▼ YAMAGATA
▲ TORISAKA	○ TOKKECI	7 KINTOKI	▼ KANAN	▼ BIDENKO	“ 無回答 no response
▲ TOCUSAKA	○ TOKKESA	7 TONKE	▼ KANIN	▼ BIKO	
▼ TOSSAKA	○ TOKESA	7 CUNKE	▼ KANNII	▼ BIRE(NKO)	
▼ TOCCA(K)A	○ CUKASA	7 TONKIN	▼ KANGI	▼ BIRI	
▼ TOCCYAKA	○ TOKUSA	7 TONZIN	▼ HANGI	▼ BIROO	
▼ TOSSAKO	○ TOKARI	7 SYOKKIN	▼ KANZI	▼ CIRIMEN	
▼ TOSSAKI	○ TOKAKE	7 KIN	▼ KANZYU	▼ GIBISI	
▼ TOC(C)AKE	○ TOKYAKA	7 KINKIRA	▼ HANZYU	▼ HANA(KO)	
▼ TOTOSAKA	○ KECCYAKA	7 KEN	▼ KANZU	▼ ITADAKI	
▼ TOSAKA	○ KECC(Y)AKA	7 KENKE(N)	▼ SAN	▼ KANOKO	
▼ TOZAKA	○ KECCYAKU	7 KENTO(O)	▼ KE(E)TO(O)	▼ KEKEKOO	
▼ TOCAK(K)A	○ KECCYAKI	7 KENKO	▼ KEECUU	▼ KEK(K)ERO(KO)	
▼ TOZUKA		7 KAN	▼ KETOKI-KE(E)TOGI	▼ KESIBA	
▼ TOSAKEE	▼ EBO(O)SI	7 KANTAA	▼ KETOKE-KE(E)TOGE	▼ KIMO	
▼ CUSAKA	▼ EBUSI	7 KAA	▼ KIDONI	▼ MO(O)CI	
▼ TOSA	▼ EBISU	7 TUNNUHAAN	6 KABUTONABA	▼ NACCAE	
▼ TOCU	▼ YONBOSI	7 KAGAMI	6 NABA	▼ NACCAKI	
▼ TOCYO	▼ YOBO(O)SI	7 HAGAMI	▼ KINOKO	▼ SAZU	
	▼ KA(N)MURI	7 KAGAMII	▼ TOSAKANOKINOKO	▼ SEKIREE	
○ KASA	▼ KA(N)MORI	7 KAGAAMII	★ KIKURAGE	▼ TABU	
○ KESA	▼ KABURI	7 KAGANI	★ KIKU	▼ TANZYEN	
○ KASE	▼ KAMURO	7 HAGANI	★ KOKERA	▼ TOGE	
○ KASI	▼ KABUTO				



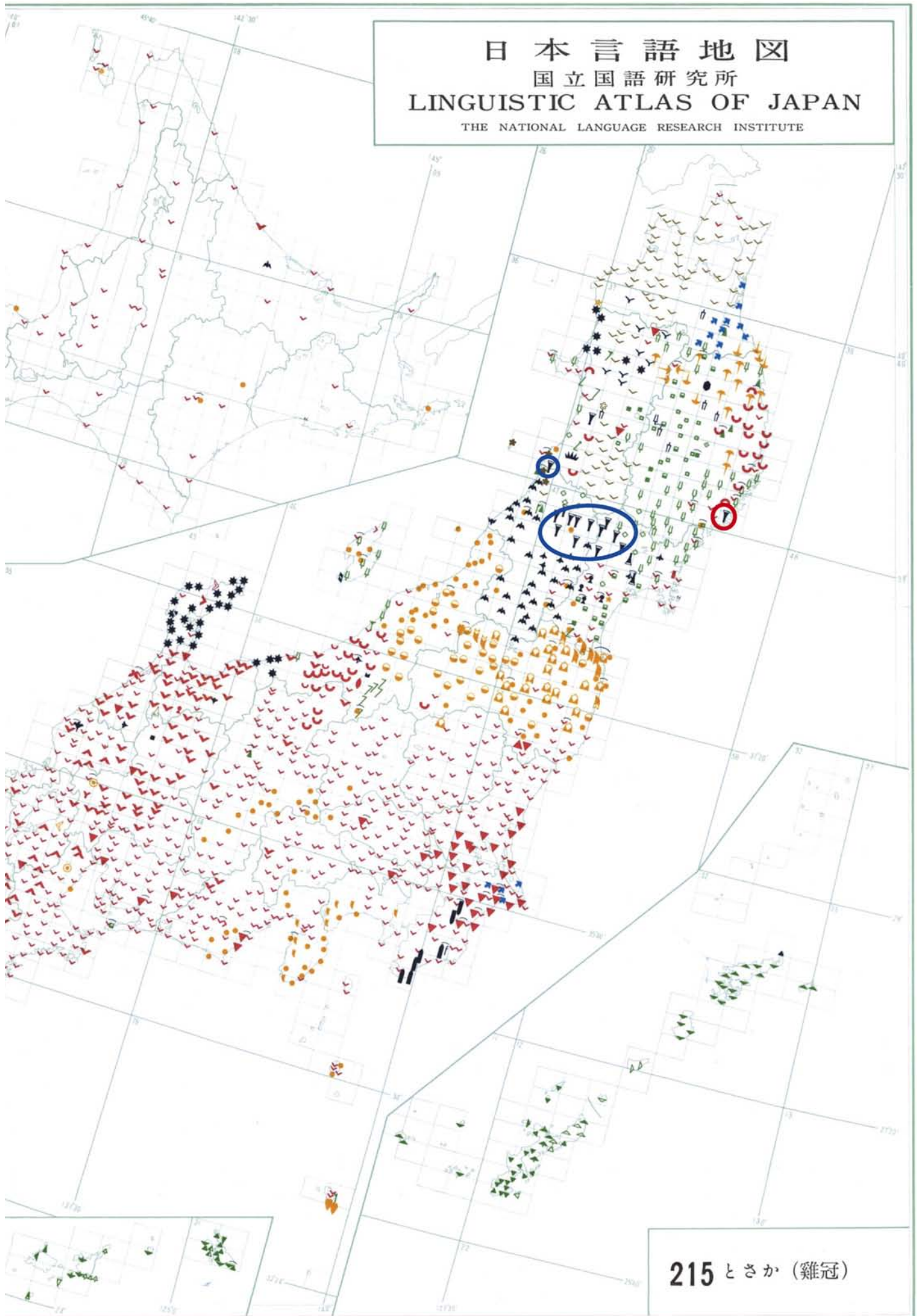
○ 被災地点の語形  
○ 同形の語形

質問文：にわたりの頭の上にある赤いもの、これを何と言いますか。おんどりののはめんどりのに比べて大きいようです。(230)





日本言語地図  
国立国語研究所  
LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN  
THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



215 とさか (雞冠)

別表A. 被災地域の分布における特徴的な語形（L A J）一覧

地図 数	地図 番号	見出し語形	語形	類型	地点数	都道府県	「市」以下の所在地
1	21	あらい(粗い)	USUI	①B	1	宮城県	気仙沼市内の脇町
2	24	ほそい(細い)	HOSokee	①B	2	宮城県	石巻市長面
			HOSoke	①B	3	宮城県	南三陸町歌津馬場
3	25	こまかい(細かい)	ACUI	①B	4	宮城県	気仙沼市内の脇町
4	30	まぶしい(眩しい) - 前部分	EZUI	①B	5	福島県	南相馬市原町区上太田
			CURACURACUU	①B	6	岩手県	陸前高田市高田町
5	34	きなくさい(きな臭い) - 前部分	KENBU-	②B	7	宮城県	南三陸町歌津馬場
6	35	きなくさい(きな臭い) - 後部分	GUSAI	②C	8	宮城県	亶理町荒浜
			GUSAI	②C	9	青森県	階上町道仏
			GUSAI	②C	10	岩手県	洋野町種市町
			GUSAI	②C	11	岩手県	洋野町横手
7	36	こげくさい(焦げ臭い)	KOBICUKEKUSAI	②C	12	宮城県	石巻市門脇町
8	38	<塩味が>うすい	MIZUKUSAI	②B	13	宮城県	南三陸町歌津馬場
9	48	きれいに<掃除する>	RIPPANI	②C	14	宮城県	気仙沼市内の脇町
			RIPPANI	②C	15	宮城県	石巻市長面
10	51	すわる(坐る)	OHIZA SURU	②B	16	福島県	いわき市小名浜下神白
11	57	たく(炊く)	NITAKISURU	①B	17	宮城県	気仙沼市内の脇町
12	67	かつぐ(天秤棒を担ぐ)	NINAI	②B	18	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
13	68	かつぐ(二人でかつぐ)	SASIKACUGI(SURU)	②B	19	宮城県	石巻市長面
			SASIMOCCHI	②B	20	宮城県	岩沼市押分
14	80	あざ(痣)になる	KUROZI NI SINDA	②B	21	岩手県	宮古市第17地割
			KUROZI NI SINDA	②B	22	岩手県	大槌町桜木町
15	82	くすぐる(撓る) - 後部分	KACCYAKU	①B	23	岩手県	石巻市長面
16	87	せき(咳)をする - 前部分	IKIGA	②B	24	岩手県	洋野町種市町
17	88	せき(咳)をする - 後部分	KIRERU	①A	25	岩手県	洋野町種市町
18	90	いびき(鼾)をかく - 後部分	NARASU	②B	26	岩手県	洋野町種市町
19	95	<雷が>落ちる	TOGERARERU	①B	27	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
20	102	つむじ	UZIMAKI	①B	28	岩手県	大槌町桜木町
21	105	ふけ	OROKO	②C	29	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
22	108	あご(尖った部分)	KAGAMETA	②A	30	青森県	階上町道仏
			KAMAGETA	②A	31	岩手県	洋野町種市町
23	109	あご(全体)	KANGAMETA	①A	32	岩手県	洋野町種市町
24	116	くちびる	KUCIPASI	②B	33	青森県	階上町道仏
25	121	おやゆび	OOEBI	①A	34	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
26	140	やしやご	HIKO	②A	35	岩手県	洋野町種市町
27	141	おじいさん	MAMA	①B	36	青森県	階上町道仏
			MAMA	①B	37	岩手県	洋野町種市町
28	142	ひいおじいさん	HAGU	①A	38	青森県	階上町道仏
			HAGU	①A	39	岩手県	洋野町種市町
29	143	たこ	TAKE	②A	40	福島県	双葉郡双葉町新山
30	144	たけうま	ASIKAKE	①B	41	岩手県	大槌町桜木町
			TAKAGETA	②B	42	宮城県	石巻市長面
31	145	おてだま	OANZUKI	①A	43	岩手県	大船渡市三陸町
			GAKE	①A	44	宮城県	亶理町荒浜
32	147	おにごっこ	ONIKAENA	①A	45	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
			ONIKOKKO	②C	46	福島県	楢葉町上繁岡
33	148	かくれんぼ	KAKURE	①B	47	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
34	149	かたぐるま	DENDENKAKKA	①B	48	岩手県	陸前高田市高田町
			CYOSA	②B	49	宮城県	女川町鷺の神浜
			TANTANDON	①A	50	福島県	いわき市小名浜下神白
35	152	おつり	OGEESi	①A	51	福島県	南相馬市原町区上太田
36	156	もめんいと	NUITO	②C	52	岩手県	陸前高田市高田町
			MENSITO	②A	53	宮城県	気仙沼市内の脇町
			MENSO	②A	54	福島県	いわき市小名浜下神白
37	157	はたいと	MOMEN'ITO	②A	55	岩手県	宮古市第17地割
38	161	せともの	SETOYAKI	①A	56	宮城県	亶理町荒浜
39	162	すりばち	KAARABACi	①B	57	福島県	いわき市小名浜下神白
40	163	すりこぎ	MiSOSiRiBOOZi	①A	58	青森県	階上町道仏
			SiRiKOG[ng]iBO	①A	59	岩手県	洋野町種市町
			MENSO	①B	60	岩手県	大船渡市三陸町
			SURiG[ng]i	①A	61	福島県	南相馬市原町区上太田
41	164	まないた	SAKANAKIRIBAN	①B	62	福島県	南相馬市原町区上太田
			USUPA(野菜用)	①A	63	福島県	いわき市小名浜下神白



地図 数	地図 番号	見出し語形	語形	類型	地点数	都道府県	「市」以下の所在地
42	165	こめびつ	RYOOMAIBICU	②B	64	岩手県	大船渡市三陸町
			KOMEIRE	②B	65	福島県	南相馬市原町区上太田
			KOMEIREBAKO	①A	66	福島県	いわき市小名浜下神白
43	166	こめびつ	KODASIBAKO	①A	67	宮城県	亶理町荒浜
44	175	じゃがいも	CURUGAIMO	①B	68	岩手県	大槌町桜木町
45	177	さといも	NURAIMO	①A	69	岩手県	大槌町桜木町
46	183	とうがらし	KOSYO	①B	70	福島県	南相馬市原町区上太田
47	187	あぜ	OONA	②B	71	岩手県	宮古市第17地割
			KOOCI	①B	72	宮城県	気仙沼市内の脇町
			KEEHAN	①B	73	宮城県	亶理町荒浜
48	189	とりおとし	KAWAKAG[ng]ASU	①A	74	岩手県	大槌町桜木町
49	198	もり	KAKOI	①B	75	福島県	南相馬市原町区上太田
			EGUNE	①B	76	福島県	浪江町屋曽根字屋曽根
50	201	うま(馬)	DODO	①A	77	岩手県	宮古市第17地割
			DAADAA	①A	78	岩手県	宮古市田老
53	203	めうま(牝馬)	MEBA	②A	79	岩手県	女川町鷺の神浜
51	207	おうし(牡牛)	DO	①A	80	宮城県	石巻市門脇町
52	208	めうし(牝牛)	HIMBA	①A	81	岩手県	宮古市第17地割
			SIN	①A	82	宮城県	石巻市門脇町
53	209	こうし(子牛)	KOTEE	②A	83	岩手県	宮古市第17地割
54	210	もうもう(牛の鳴き声)	NMAA NMA	②A	84	宮城県	亶理町荒浜
55	212	ふくろう(梟)	HUKUROODORI	①A	85	福島県	南相馬市原町区上太田
56	213	せきれい(鶺鴒)	MISO	②C	86	岩手県	大船渡市三陸町
57	214	すずめ(雀)	HEESUZUME	①A	87	岩手県	洋野町種市町
58	215	とさか(鶏冠)	YAMA(KO)	②C	88	岩手県	大船渡市三陸町
59	216	さかな(魚)	※	②C	89	岩手県	宮古市第17地割・大槌町桜木町
60	218	かえる(蛙)	BIKITA(N)	②A	90	岩手県	岩泉町茂師
			BIKITA(N)	②A	91	岩手県	宮古市第17地割
61	219	ひきがえる(蟱・蟾蜍)	HUKUDAGAERU	②B	92	宮城県	亶理町荒浜
62	226	へび(蛇)	KUCINAWA	②A	93	宮城県	気仙沼市内の脇町
63	232	はえ(蠅)	HEENOKO	①A	94	岩手県	宮古市第17地割
			HWEN[φ ε N]	①A	95	宮城県	七ヶ浜町松ヶ浜町
64	234	くものす(蜘蛛の巣)	AMI	②C	96	宮城県	石巻市門脇町
65	236	かたつむり(蝸牛)-その1	NAMEKUZINA	①A	97	岩手県	種市町八木一地割
			※2	②A	98	岩手県	宮古市第17地割・大槌町桜木町
66	237	かたつむり(蝸牛)-その2	CUBU	②A	99	岩手県	宮古市第17地割
			CUNAME	①A	100	岩手県	大船渡市三陸町
			MENMENTABAKURO	①A	101	宮城県	石巻市門脇町
67	239	なめくじ(蛞蝓)	DEERO	②A	102	福島県	双葉郡双葉町新山
68	240	すみれ(堇)	KANKOBANA	②B	103	岩手県	宮古市第17地割
69	243	すぎな(杉菜)	ZIGOKUGUSA	②A	104	岩手県	岩泉町茂師
70	244	つくし(土筆)	SINANOMOE	①A	105	青森県	階上町道仏
			SUNANOTANPO	①A	106	岩手県	洋野町種市町
71	245	きのこ(茸・蕈)	MODASI	②B	107	宮城県	岩沼市押分
72	247	まつかさ(松毬)	KAK(K)E(E)RO(O)	②A	108	岩手県	洋野町種市町
73	254	つゆ(梅雨)	ZIPPUGURE	①A	109	岩手県	陸前高田市高田町
74	259	にじ(虹)	NOGI	①A	110	宮城県	気仙沼市内の脇町
75	261	こおり(氷)	ZEE	②C	111	岩手県	宮古市第17地割
			ZEE	②C	112	宮城県	気仙沼市内の脇町
76	262	つらら(氷柱)	AWABO	①A	113	青森県	階上町道仏
77	271	ほこり(埃)	GOBEE	①A	114	福島県	双葉郡楢葉町
78	278	きのう(昨日)	KIN'YOO	①A	115	岩手県	宮古市第17地割
			K[kç]INYONA	①A	116	宮城県	岩沼市押分
79	280	きょう(今日)	KIYO	①A	117	岩手県	洋野町種市町
80	285	しあさって(明日後日)	SIASATTE	②C	118	岩手県	洋野町種市町
			SAAASATTE	②A	119	岩手県	宮古市田老
			SAANSATTE	①A	120	岩手県	宮古市第17地割
81	298	ほうほう(梟の鳴き声)	GIIGII	①A	121	岩手県	陸前高田市高田町
			NYA(A)NYA(A)	②A	122	宮城県	亶理町荒浜
82	300	ちゅんちゅん(雀の鳴き声)	KIKKARAKIKKADAKA	①A	123	岩手県	宮古市第17地割
			CUICUI	①A	124	宮城県	女川町鷺の神浜
			ZURUNZURUN	①A	125	宮城県	岩沼市押分
			CHYOCIIYO	①A	126	福島県	浪江町屋曽根字屋曽根

※：総称はSAKANAと言い、UOは標準語的な場合に使う

※2：237図のCU(N)MURIからCUNMOまで

別表 B. 被災地域の分布における特徴的な語形 (G A J) 一覧

地図 数	地図番号 見出し[調査票質問番号]	危機語形	類型	話No	都道府県	「市」以下
1	第4図 酒が(飲みたい)[116]	GA	②B	1	岩手県	田野畑
		GA	②B	2	岩手県	山田
		(SAKEE)	②B	3	岩手県	宮古
2	第5図 酒が(好きだ)[117]	A	②B	4	岩手県	階上
		A	②B	5	岩手県	山田
		(SAKEE)	②B	6	岩手県	宮古
		GA	②B	7	岩手県	田野畑
		(SAKEE)	②B	8	岩手県	宮古
3	第6図 酒を(飲む)[118]	(SAKEE)	②B	8	岩手県	宮古
4	第7図 おれを(連れて行ってくれ)[115]	NDOGOMO	①A	9	岩手県	釜石
5	第12図 酒は(飲む)[119]	DAKE	①A	10	岩手県	釜石
		(SAKJAA)	②B	11	岩手県	宮古
		(SAKJAA)	②B	12	岩手県	階上
6	第14図 先生の(手拭)[104]	(SENSEE)	②B	13	宮城県	亘理
7	第17図 行くの(ではないか)[143]	DOGODE	①B	14	岩手県	山田
8	第23図 大工に(なった)[112]	N	②B	15	宮城県	気仙沼
9	第26図 息子に(手伝いに来てもらった)[122]	N	②B	16	宮城県	志津川
11	第27図 犬に(追いかけられた)[124]	SA	①B	17	福島県	小高
12	第31図 それより(あの方が良い)[140]	IZJOO	①A	18	岩手県	釜石
13	第33図 (雨が)降っているから[095]	KEENI	②B	19	岩手県	宮古
		KEE	②B	20	岩手県	山田
14	第34図 だから(言ったじゃないか)[096]	SOREDAA-	②B	21	岩手県	宮古
		NDAQ-	②B	22	岩手県	山田
		SONDAQ-	②B	23	岩手県	山田
		SIKEENI	②B	24	岩手県	宮古
15	第35図 だから(言ったじゃないか)[096]	KEE	②B	25	岩手県	山田
		KEE	②B	25	岩手県	山田
16	第36図 子どもなので(わからなかった)[141]	NAMONDA	①A	26	福島県	小高
		TA	①B	27	岩手県	田野畑
17	第37図 子どもなので(わからなかった)[141]	MONO	①B	28	岩手県	階上
		MONO	①B	29	岩手県	釜石
		KEE	②B	30	岩手県	山田
		KEE	②B	31	岩手県	宮古
18	第40図 植えたのに(枯れてしまった)[097]	KEE	②B	31	岩手県	宮古
19	第42図 買物が(てら(見物する))[109]	(KAUNAGARA)	②B	32	宮城県	亘理
20	第46図 子どもでも(知っている)[142]	SEKAMO	①A	33	岩手県	釜石
21	第47図 皮だけ(食べた)[131]	BEE	②B	34	岩手県	山田
22	第48図 (食って)寝るだけなら[130]	BAGARI	②B	35	宮城県	気仙沼
		BEE	①B	36	岩手県	宮古
		BEE	①B	37	岩手県	山田
		BEE	①B	37	岩手県	山田
23	第50図 百円くらい(使った)[136]	BAKARI	②B	38	福島県	いわき市植田
		BAGARI	②B	39	宮城県	志津川
24	第51図 百円しか(ない)[137]	HATTE	①B	40	岩手県	田野畑
		KIRIHOKA	①A	41	岩手県	釜石
25	第54図 傘なんか(いらない)[139]	BA	①B	42	青森県	八戸
		(KASAADOA)	①B	43	岩手県	階上
26	第55図 安ければ安いほど(良い)[138]	GUREE	①B	44	宮城県	気仙沼
		KUREE	①B	45	宮城県	志津川
27	第56図 何が起るやら(わからない)[125]	DABEENA	①A	46	岩手県	宮古
28	第57図 誰やら(来た)[126]	DAREDANDAGA	①B	47	岩手県	階上
29	第58図 筆やら紙やら(たくさんもらった)[127]	TO(KAMI)	②B	48	福島県	小高
30	第59図 行くだの行かないだの(ぐずぐず言うな)[144]	TTARI-TTARI	②B	49	岩手県	田野畑
		(IKU)-TTE	②B	50	宮城県	気仙沼
		(IKU)-TTE	②B	51	宮城県	志津川
		NODAGA-NDAGA	②B	52	宮城県	女川
		NDAGA-NDAGA	②B	53	宮城県	亘理
		GA-GA	②B	54	宮城県	石巻
		A	①B	55	青森県	八戸
31	第60図 今日こそ(終わらせる)[146]	A	①B	55	青森県	八戸
32	第61図 起きる	OGERU	②B	56	岩手県	田野畑
33	第66図 寝る	UNERU	①A	57	宮城県	石巻
34	第82図 蹴らない	KETAGUNEE	①B	58	宮城県	女川
35	第89図 蹴れ	KETTAGURE	②B	59	岩手県	山田
		KETTAGURE	②B	60	宮城県	気仙沼
		KETTAGURE	②B	61	宮城県	志津川
		KETTAKURE	②B	62	宮城県	女川
		KETTAGURE	②B	63	宮城県	石巻
36	第104図 蹴った	KETAGUTTA	②B	64	宮城県	石巻
		KETAGUTTA	②B	65	宮城県	女川
		KETAKUTTA	②B	66	宮城県	女川
37	第106図 起きよう	OGELEE	①A	67	岩手県	田野畑
38	第108図 寝よう	NENAKKENEENAA	①A	68	岩手県	釜石
		NENAKUTEWAWAGANNE	①A	69	宮城県	気仙沼
39	第109図 書こう	KAGANEKKENEENAA	①A	70	岩手県	釜石
		KAGANAKUTEWAWAGANNE	①A	71	宮城県	気仙沼

地図 数	地図番号 見出し[調査票質問番号]	危機語形	類型	語No	都道府県	「市」以下
40	第110図 来よう	KONENEKKENEENAA KONAGUTEWAWAGANNE	①A ①A	72 73	岩手県 宮城県	釜石 気仙沼
41	第111図 しよう	SINEKKENEENAA SINAKUTEWAWAGANNE	①A ①A	74 75	岩手県 宮城県	釜石 気仙沼
42	第112図 書くだろう	KAKUNDABEE	①A	76	宮城県	亘理
43	第113図 来るだろう	KUPPEDARA KURUNDABENAA SURUNDABENAA	①A ②B ②B	77 78 79	岩手県 宮城県 宮城県	釜石 亘理 亘理
44	第116図 来られると	KERARETEMO KURARENNOGA	①A ①A	80 81	岩手県 宮城県	釜石 女川
45	第117図 される	SURARERU	①A	82	宮城県	女川
46	第120図 来させる	KURASERU	②C	83	宮城県	女川
47	第121図 させる	SURASERU	②B	84	宮城県	亘理
48	第124図 書かせよう	KAGASENEKKENEENAA KAGASENAKUTEWAWAGANNE	①A ①A	85 86	岩手県 宮城県	釜石 気仙沼
49	第127図 任せれば	MAGASEDARA MAGASEDARA	②B ②B	87 88	宮城県 宮城県	気仙沼 石巻
50	第128図 書けば	KAIDARA KAIDARA	②B ②B	89 90	宮城県 宮城県	気仙沼 石巻
51	第129図 死ねば	SINDARA SUNDARA SINDARA	②B ②B ②B	91 92 93	宮城県 宮城県 宮城県	気仙沼 志津川 石巻
52	第130図 来れば	SINDARA KIDARABA SINDARA	②B ①A ②B	94 95 96	宮城県 宮城県 宮城県	気仙沼 石巻 石巻
53	第131図 すれば	SITARA	②B	97	宮城県	石巻
54	第133図 書くなら	KAGUGONDA	①A	98	福島県	相馬
55	第142図 高いだろう	TAGEENDENEEGA TAGAKAPPEE TAGAKAPPEE TAGAKAPPEE	①B ①B ①B ①B	99 100 101 102	宮城県 福島県 福島県 福島県	気仙沼 楢葉 いわき市久之浜 いわき市植田
56	第143図 高ければ	TAGAGATTARA TAGEGATTARA	②B ②B	103 104	宮城県 宮城県	気仙沼 石巻
57	第144図 高いなら	TAGEGERJAA	②B	105	宮城県	亘理
58	第145図 静かだ	SEZUNEE URUSEE SUNTOSUTENE	①B ②B ①A	106 107 108	宮城県 青森県 青森県	女川 八戸 八戸
59	第149図 静かだろう	SUNZUKADENEEGA SIZUGADENEEGA URUSAGUNEGOTTA	②B ②B ②B	109 110 111	宮城県 宮城県 青森県	亘理 気仙沼 八戸
60	第150図 静かなら	SUZUKANANDAGOTTARA SUZUKADEEBA SIZUGANANDEA URUSAGUNENODARA	①A ①B ①A ①B	112 113 114 115	宮城県 岩手県 宮城県 青森県	亘理 田野畑 気仙沼 八戸
61	第151図 行かなかった	EGANEEDESIMATTA	②A	116	岩手県	釜石
62	第154図 行かないなら	EGANEKKA EGANEKKA EGANEKKA EGANEKKA	①B ①B ①B ①B	117 118 119 120	福島県 福島県 福島県 福島県	いわき市久之浜 楢葉 小高 いわき市植田
63	第155図 行かないで	EGANEDEGARANI	①A	121	岩手県	釜石
64	第156図 行かなくて	IGANEENDE	①B	122	宮城県	気仙沼
65	第159図 高くはなかった[202]	TAGEEMONDEA	①A	123	岩手県	田野畑
66	第161図 見はしない	MIIMOKKA	②B	124	岩手県	階上
67	第162図 来はしない	KURUGOTOANEE KUGGODOANEE	②B ②B	125 126	岩手県 岩手県	山田 山田
68	第163図 うん、無いよ[204]	INJA EJA NEGAJA	②B ②B ②B	127 128 129	岩手県 宮城県 岩手県	宮古 亘理 宮古
69	第165図 いや、有るよ[205]	N HONDAA	②B ①A	130 131	福島県 宮城県	小高 気仙沼
70	第166図 いや、有るよ[205]	ANGAJA ANSA ATTO	②B ①A ②C	132 133 134	岩手県 岩手県 宮城県	宮古 田野畑 石巻
71	第167図 降れば(船は出ないだろう)	HUTTADOGI	②B	135	宮城県	志津川
72	第168図 降ったら(おれは行かない)	HUTTADOGI	②B	136	宮城県	志津川
73	第169図 行くと(だめになりそうだ)	I(E)TTAKKE I(E)TTAKKE I(E)TTAKKE I(E)TTAKKE	①B ①B ①B ①B	137 138 139 140	宮城県 宮城県 宮城県 宮城県	志津川 気仙沼 女川 石巻
74	第172図 行ったってだめだ[181]	HJANEE SJOOGANEE	①B ①B	141 142	宮城県 岩手県	石巻 宮古
75	第173図 読むことができる[能力可能]	YOKUGODOGADENGA KIEERUJO	①B ②C	143 144	岩手県 岩手県	宮古 田野畑
76	第178図 来ることができる[状況可能]	KUGGODOGADENGA	①B	145	岩手県	宮古
77	第179図 することができる[能力可能]	SUGGODOGADENGA	①B	146	岩手県	宮古

地図 数	地図番号 見出し[調査票質問番号]	危機語形	類型	語No	都道府県	「市」以下
78	第185図 着ることができない[状況可能]	KIRUGODADENEE	①B	147	岩手県	宮古
		KIENEE	②B	148	岩手県	山田
		KIENEE	②B	149	岩手県	釜石
		KIINEE	②B	150	宮城県	気仙沼
79	第189図 行ったなあ[224]	GANAA	②B	151	岩手県	宮古
80	第191図 いたよ[225]	MONODA	②A	152	岩手県	山田
		ZOO	①B	153	岩手県	釜石
		MONNAA	②B	154	宮城県	気仙沼
		NDATTA	②A	155	宮城県	亶理
81	第193図 書いたよ[227]	ZOO	①B	156	岩手県	釜石
		DEBA	①B	157	宮城県	志津川
82	第194図 強かったよ[226]	TACCEE	①A	158	岩手県	田野畑
83	第195図 強かったよ[226]	ZOO	①B	159	岩手県	釜石
		DJOO	②B	160	岩手県	階上
		HUTOGAEDA	②B	161	岩手県	田野畑
		ZEE	②B	162	宮城県	気仙沼
		NDANAA	①B	163	宮城県	石巻
		NDANAA	①B	164	宮城県	亶理
84	第196図 いた	EDATTAGANAA	①A	165	岩手県	田野畑
85	第197図 いるか	ORJANSUDAGA	①A	166	岩手県	山田
		ORUKAAI	②B	167	岩手県	宮古
86	第202図 有りヨル[進行態]	SITERA	②B	168	岩手県	釜石
87	第204図 もう少しで落ちるところだった[235]	OZINBEESITA	①B	169	岩手県	階上
		OZUTTOSUTA	①B	170	宮城県	志津川
88	第205図 読んでしまった	JOMISUNDAA	②B	171	岩手県	田野畑
		JOMIAGETA	②A	172	宮城県	亶理
89	第207図 行かなければならない[154]	WAGANNEE	①B	173	宮城県	亶理
		WAGANNEE	①B	174	宮城県	気仙沼
90	第208図 行かなければならない—総合図—	-NAKUTEWAWAKARANEE	①B	175	宮城県	亶理
		-NAKUTEWAWAKARANEE	①B	176	宮城県	気仙沼
91	第209図 起きろ(やさしく)—その1—	OGISAEN	①B	177	宮城県	志津川
92	第210図 起きろ(やさしく)—その2—	OGIRAINJOO	①B	178	宮城県	気仙沼
		OKIRAIN	①B	179	宮城県	石巻
93	第211図 起きろ(やさしく)—総合図—	OGISAEN	①B	180	宮城県	志津川
		OGIRAINJOO	①B	181	宮城県	気仙沼
		OKIRAIN	①B	182	宮城県	石巻
		OKIRUNDA	①B	183	福島県	相馬
		OGEDEKOO	②C	184	岩手県	田野畑
94	第213図 起きろ(きびしく)—その2—	OGINEENOSUKA	①B	185	宮城県	気仙沼
		OGIRAIN	①B	186	宮城県	気仙沼
		OGIGARE	②B	187	宮城県	亶理
		OKINETODAMEDAZO	②B	188	福島県	楢葉
		OKIRAIN	①B	189	宮城県	気仙沼
95	第214図 起きろ(きびしく)—総合図—	OKIJAGARE	②B	190	宮城県	亶理
		OKITEKOI	②B	191	岩手県	田野畑
		OKINATODAME—	②B	192	福島県	楢葉
		AKETEKENEEKANA	②A	193	宮城県	気仙沼
96	第215図 開けろ(やさしく)—その1—	AGETEKESAN	①B	194	宮城県	志津川
		AKETEKRAIN	①B	195	宮城県	石巻
97	第218図 開けろ(きびしく)—その1—	AGESE	①A	196	宮城県	志津川
98	第220図 開けろ(きびしく)—その3—	AKENENOSSA	①A	197	宮城県	気仙沼
		AKENENOSUKA	①A	198	宮城県	気仙沼
		AKERAIN	①B	199	宮城県	気仙沼
		AGENENOKA	②C	200	宮城県	女川
99	第222図 行くなよ(やさしく)[151]	NA	②C	201	福島県	相馬
100	第223図 行くなよ(きびしく)[152]	ETTEWAWAGARIGANNEE	①B	202	宮城県	亶理
101	第234図 行くまい	EGUMONKA	②C	203	岩手県	階上
		EGUMONGA	②C	204	岩手県	山田
		EGANGABEEDOMMODERU	①A	205	岩手県	山田
102	第223図 行くなよ(きびしく)[152]	IGANEBE—	①A	206	宮城県	石巻
103	第237図 行くだろう	EGUNDABEENAA	②C	207	岩手県	山田
		EGUNDABEE	②C	208	宮城県	亶理
104	第241図 降りそうだ	HURUJOODA	①B	209	宮城県	亶理
105	第243図 雨だそうだ—その1—	AMEDAJOODANAA	②C	210	岩手県	宮古
106	第244図 雨だそうだ—その2—	AMEDACCAA	②C	211	宮城県	気仙沼
107	第246図 雨だそうだ—総合図—	AMEDAJOODA	②C	212	岩手県	宮古
		AMENAJOODA	②C	213	宮城県	亶理
		AMEDACA	②C	214	宮城県	気仙沼
108	第247図 高いそうだ—その1—	TAKEEJOODA	②B	215	宮城県	亶理
109	第248図 高いそうだ—その2—	TAGECCAA	②B	216	宮城県	気仙沼
110	第249図 高いそうだ—その3—	TAGEEDJOO	①B	217	岩手県	階上
111	第251図 いたそうだ—その2—	ITAZIIGA	①B	218	岩手県	宮古
		EDACCANDACCA	②B	219	宮城県	気仙沼
		EDANDACCA	①B	220	宮城県	気仙沼

地図 数	地図番号 見出し[調査票質問番号]	危機語形	類型	語No	都道府県	「市」以下
112	第252図 いたそうだ—その3—	ETATTAZO	①B	221	岩手県	釜石
		EDATTEZJUTERU	①A	222	宮城県	亘理
113	第254図 どこかに(あるだろう)	DOGODAAGANI	①A	223	岩手県	宮古
114	第256図 (それは)何か	NANISSA	①B	224	宮城県	志津川
115	第257図 誰が行くか(分らない)[187]	DAI	②B	225	宮城県	石巻
116	第259図 誰がやるものか[193]	DAGA	②B	226	岩手県	田野畑
117	第260図 誰がやるものか—その1—[193]	JARUNDA	②B	227	宮城県	亘理
		JARUNDABEE	①B	228	宮城県	亘理
118	第261図 誰がやるものか—その2—[193]	JANHANDIE	①A	229	岩手県	田野畑
		SURUDEE	①B	230	岩手県	階上
		JANBESSA	①B	231	宮城県	気仙沼
		JANNO	①A	232	福島県	相馬
119	第263図 やった	KETEJATTA	②C	233	岩手県	山田
120	第265図 やったか[209]	DOO	①B	234	青森県	八戸
121	第270図 ありがとう—総合図—	MOOSIWAKNAI	②B	235	岩手県	釜石
		SJOOSISAMADESU	①B	236	宮城県	石巻
122	第271図 書きますか(B場面)[252-B]	KAGASARIMASU	①B	237	岩手県	階上
123	第272図 書きますか(B場面)[252-B]	KASU	①B	238	福島県	小高
124	第274図 書きますか(A場面)[252-A]	KASU	①B	239	福島県	小高
		NOGAJA	①B,①A	240	宮城県	女川
125	第275図 どこへ行きますか(B場面) —一般動詞—[246-B]	EGASARIMASU	①B	241	岩手県	階上
		EGUDOGODEGOZANSUGA	①A	242	岩手県	田野畑
		EGASSJARUNDESU	②B	243	福島県	いわき市植田
		IGIENDESUKA	①A	244	宮城県	気仙沼
		IGIENNOSUKA	①A	245	宮城県	気仙沼
		IGIENONEESU	①A	246	宮城県	気仙沼
126	第276図 どこへ行きますか(B場面) —敬語動詞—[246-B]	ONNASARISUKA	①A	247	宮城県	志津川
		ODENSUBEEGA	①A	248	岩手県	山田
127	第278図 ここに来ますか(B場面) —一般動詞—[250-B]	KJANSUKA	②B	249	岩手県	釜石
		KURUNODEGOZARJASUKA	①A	250	宮城県	気仙沼
		KIJANNODEGOZARJASUKA	①A	251	宮城県	気仙沼
		KUNNOSUKA, KAJA	①B	252	宮城県	亘理
		KUNNOSUKA, KAJA	①B	253	宮城県	石巻
128	第279図 ここに来ますか(B場面) —敬語動詞—[250-B]	MEERJAROKA	②B	254	岩手県	山田
		ONNASARISUKA	①B	255	宮城県	志津川
129	第280図 ここに来ますか(B場面)[250-B]	KOGOE	②B	256	青森県	八戸
130	第281図 いますか(B場面)—一般動詞—	ORIMASUNDONSIGAA	①A	257	岩手県	田野畑
		ORJANSUBEEGA	①A	258	岩手県	山田
		ORJANSITEGOZARJASUKA	①A	259	宮城県	気仙沼
		INNOSUKA	①B	260	宮城県	女川
		ENDESUKAJA	①B	261	宮城県	女川
131	第282図 いますか(B場面)—敬語動詞—	ONNASARISUKA	①A	262	宮城県	志津川
132	第283図 いますか(A場面)—一般動詞—	ENDESUKAJA	①A	263	宮城県	女川
		IJANBEKA	①A	264	宮城県	気仙沼
		ORJANSUKA	②B	265	岩手県	山田
		ORENSIKA	①A	266	岩手県	宮古
		ORIMASUNDONSIGAA	①A	267	岩手県	田野畑
133	第284図 いますか(A場面)—敬語動詞—	ORJANSUKA	②B	268	岩手県	山田
		IRUNSIKA	①B	269	岩手県	宮古
		INNOSUKA	①B	270	宮城県	気仙沼
		ESUKA	①B	271	宮城県	志津川
		IPPEKA	①B	272	宮城県	石巻
134	第287図 知っていますか(B場面) —一般動詞—[251-B]	TEORARJANSUKA	②B	273	岩手県	山田
		DEORENSIPPEGANENSI	①A	274	岩手県	宮古
		TEORJASITEGOZARJASUKA	①A	275	宮城県	気仙沼
		TEORJANBEKA	①A	276	宮城県	気仙沼
		TENDESUKA	②B	277	宮城県	女川
		TENNOSUKA	①B	278	宮城県	女川
		TEDAGAINANSU	①B	279	宮城県	亘理
		TEKASU	①A	280	福島県	小高
135	第291図 食べますか(B場面)—一般動詞—	OTABENINARJARJANSUKA	①A	281	岩手県	山田
		TABENSU	①B	282	岩手県	釜石
		TABENSUTESUKA	①A	283	宮城県	志津川
136	第292図 食べますか(B場面)—敬語動詞—	AGARASARIMASUKA	①B	284	岩手県	階上
		OAGETTEODESIKKA	①A	285	岩手県	宮古
		AGARJASITEGOZARJASUKA	①A	286	宮城県	気仙沼
		AGARJANBEKA	①A	287	宮城県	気仙沼
137	第293図 言いましたか(B場面)—一般動詞—	IJATTANDEGOZARJASUKA	①A	288	宮城県	気仙沼
		ETTANDEGOZARISUKA	①A	289	宮城県	志津川
		IWASITADESUKA	①A	290	宮城県	志津川
		NANCUTTAGASUPEJA	①A	291	宮城県	石巻



地図 数	地図番号 見出し[調査票質問番号]	危機語形	類型	語No	都道府県	「市」以下
138	第297図 行きなさい(B場面)——一般動詞——	ITTOODENSE IKAHARJASE EGASSEE NKISEE EKASSEE	①A ①A ①B ①A ①B	292 293 294 295 296	岩手県 宮城県 宮城県 福島県 福島県	田野畑 気仙沼 亘理 小高 楢葉
139	第298図 行きなさい(B場面)——敬語動詞——	OEDENAEN	①B	297	宮城県	志津川
140	第299図 行きなさい(B場面) ——297, 298に続く形——	TANSEE	②A	298	岩手県	釜石
141	第300図 来なさい(B場面)——一般動詞——	DAAHARJASE KISEE	①A ①A	299 300	宮城県 福島県	気仙沼 小高
142	第301図 来なさい(B場面)——敬語動詞——	OIDENSEJA OEDENNASUT	①A ①A	301 302	岩手県 宮城県	釜石 志津川
143	第302図 来なさい(B場面) ——300, 301に続く形——	TEKUNAEN TEKUNAEN	①B ①B	303 304	岩手県 宮城県	釜石 志津川
144	第303図 いなさい(B場面)——一般動詞——	ORAHARJASE ESEE ESSAE	①A ①B ①B	305 306 307	宮城県 福島県 福島県	気仙沼 小高 楢葉
145	第307図 はい、行きます(B場面)[247-B]	N N	①B ①B	308 309	宮城県 福島県	女川 小高
146	第308図 はい、行きます(A場面)[247-A]	MAIRITAEDOOMOTTEMASU	②B	310	岩手県	田野畑
147	第309図 はい、行きます(A場面)[247-A]	SOODANENSI NDA	①A ①B	311 312	岩手県 宮城県	宮古 石巻
148	第310図 はい、行きます(O場面)[247-O]	EGUBEEDOMOTTEDAGA IGUBEQA IKUBEE IKUBE IKUBE	①B ①B ①B ①B ①B	313 314 315 316 317	岩手県 岩手県 宮城県 福島県 福島県	田野畑 宮古 亘理 相馬 楢葉
149	第312図 来ます(B場面)	KENSI	①A	318	岩手県	宮古
150	第313図 来ます(A場面)	KENSI	①A	319	岩手県	宮古
151	第314図 います(B場面)	IJASITEGOZARJASU	①A	320	宮城県	気仙沼
152	第315図 (自分の父が)来ますから(B場面) ——一般動詞——[264①-B]	KISUTESA KISSU	①A ①B	321 322	宮城県 宮城県	志津川 女川
153	第316図 (自分の父が)来ますから(B場面) ——敬語動詞——[264①-B]	MEERJANSU	②C	323	岩手県	山田
154	第319図 あげましょう(B場面)	JARASITEGOZARJASUPE AGESITEGOZARJASUPE OAGESANSU KEBEENSIKA AGESUTESUKARA JARISUPAWA	①A ①A ①B ①A ①B ①A	324 325 326 327 328 329	宮城県 宮城県 岩手県 岩手県 宮城県 宮城県	気仙沼 気仙沼 山田 田野畑 志津川 亘理
155	第320図 持ちましょう(B場面)	MOTTEAGEMOOSANSUKARA MOZUASITEGOZARJASU	①A ①A	330 331	岩手県 宮城県	山田 気仙沼
156	第321図 寒いですね(B場面)[244-B]	SAMUKUGOZARASU OSAMUUGOZARISU SIBARERU	①B ①B ②B	332 333 334	宮城県 宮城県 岩手県	気仙沼 志津川 階上
157	第322図 寒いですね(B場面)[244-B]	GANENSI	①A	335	岩手県	宮古
158	第323図 寒いですね(A場面)[244-A]	SIBARERU	②B	336	岩手県	階上
159	第325図 寒いですね(O場面)[244-O]	SIBARERU	②C	337	岩手県	階上
160	第326図 寒いですね(O場面)[244-O]	GANANSI GODDA	①A ①B	338 339	岩手県 宮城県	田野畑 志津川
161	第330図 本ですね(A場面)[261-A]	GOTA	①B	340	宮城県	志津川
162	第331図 いいえ、役場ではありません (B場面)[248-B]	DEGOZARJASENDEGOZARJASEN	①A	341	宮城県	気仙沼
163	第332図 いいえ、役場ではありません (B場面)[248-B]	IECIGAIMASUJO NDENEE EEE JAA JA NN	②B ①B ①B ②B ②B ②B	342 343 344 345 346 347	岩手県 宮城県 岩手県 宮城県 宮城県 福島県	田野畑 石巻 階上 気仙沼 志津川 小高
164	第334図 あなたの傘(B場面)[242-B]	GA	①A	348	岩手県	大船渡
165	第335図 あなたの傘(A場面)[242-A]	SOCIRASAN	②B	349	岩手県	宮古
166	第336図 あなたの傘(O場面)[242-O]	EGA GA UGA	①B ①B ①B	350 351 352	青森県 青森県 岩手県	八戸 八戸 階上
167	第337図 あなたの傘(O場面)[242-O]	GAN	②B	353	岩手県	宮古
168	第341図 私のです(O場面)[243-O]	E	②B	354	青森県	八戸
169	第347図 役場になあ、行ったらなあ (A場面)[245②-A]	KEE	①A	355	宮城県	志津川
170	第348図 役場になあ、行ったらなあ (O場面)[245②-O]	SA	②B	356	岩手県	階上
171	第349図 おはようございます	ARIGADOGASU	①B	357	青森県	八戸
172	第350図 こんにちは	EMASUKA	①A	358	岩手県	釜石



# 被災者を支える方言

魏 ふく子

(担当者：魏・趙倩婧・浦藤駿気・菊地恵太・黄川川)

## 1 はじめに

### 1.1 目的

本稿は、この度の震災に伴い、被災の場で方言がいかなる機能を果たしているか（意識的に使われているか）という、方言機能論の立場から震災時における方言を捉えることを試みたものである。

本報告では、以下のように考察課題・調査方法を定め、まず課題 1 として、被災地の方言が被災地あるいはそれ以外の地域においてどのような意図で用いられているかを、新聞記事等における方言の利用例から見ていく（2 節）。次に課題 2 として、今回の被災地やその周辺地域の方言が、その地域の住民や他地域の人々からどのように捉えられてきたかという方言意識に関する背景を、先行研究における調査の結果から概観する。そして、2 節で取り上げる復興スローガンにおける方言の利用例に対する被災者・支援者の意識調査を行う（3 節）。

- 課題 1** 被災地あるいはそれ以外の地域で被災地の方言がどのような意図で用いられているか。  
…震災以降の 新聞記事、スローガン、看板など
- 課題 2** 課題 1 のような方言の使用に対して被災者・支援者がどのような感情を抱いているか。  
…気仙沼で調査を行う

### 1.2 先行研究

小林（2007）によれば方言機能論とは、方言が社会の中でいかなる役割を果たすかを追求する研究分野で、属性論的な研究が多くなされる社会方言学の中、言語の運用面に目を向けた分野である。

かつて方言は、生活の中で用いられる言語として唯一の存在であった。20 世紀に入って、共通語を操るようになった人々は、共通語・方言を状況に応じて選んで使用するようになった。共通語が普及している中、あえて方言が使用される背景として、現代人が方言に対してこれまでとは違う役割を期待している可能性が考えられる。すなわち、方言の機能が、これまで担ってきた思考内容の伝達から、コミュニケーションを円滑で暖かみのあるものにするために用いるといった、以下のような心理的なメッセージの提示へと重心を移してきていることが指摘されている。

- ① 相手の確認：同一地域社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認  
→ 一体化を図る効果（一種の「集団語」としての性格）
- ② 発話態度の表明：その場の会話を気取らないくだけたものにしたいという意思表示  
→ 会話の雰囲気作り（打ち解けた会話場面の形成）

## 2 被災地あるいはそれ以外の地域で被災地の方言がどのような意図で用いられているか

### 2.1 準備調査

東日本大震災後において、方言はどのような効果を発揮することを意図して使用されてきたのか。私たちは新聞というメディアからその事例を収集した。方言使用の目的の違いから、以下に4つの記事を紹介する。

#### 2.1.1 記事①

##### がんばっぺ！お国なまりで自衛隊員、被災地応援（『読売新聞』平成23年3月29日）

東日本巨大地震の救援活動に取り組む自衛隊員らが、被災地の方言などを使った応援メッセージをステッカーにし、隊員のヘルメットやヘリコプターの胴体に貼っている。被災者の間では「親近感が湧いて勇気がもらえる」と好評だ。

陸海空3自衛隊の支援部隊を指揮する統合任務部隊司令部（仙台市）によると、地震発生直後、宮城県に災害派遣された陸上自衛隊第10師団（名古屋市）が、「がんばろう！みやぎ」と書いたステッカーを独自に作ったのが始まり。隊員の士気高揚や活動のPRにと、司令部が他の部隊にも導入を呼びかけ、各活動場所の方言が盛り込まれるようになった。自衛隊が災害派遣活動でこうしたステッカーを作るのは初めてという。



応援ステッカーを貼って活動する自衛隊員たち

#### ●ポイント

- ・救援活動に取り組む自衛隊員らが、被災地方言を使った応援メッセージをステッカーにし、ヘルメットやヘリコプターに貼った。
- ・被災者の間では「親近感が湧いて勇気がもらえる」と好評である。
- ・最初は自衛隊員の士気向上や活動PRのために「がんばろう」と書いていたが、徐々に方言が盛り込まれるようになった。

#### ●考察

被災地の方々にとってより強いメッセージにするために方言を使い始めたのだと推測される。また、ここでの方言の使用は被災者を励ますだけではなく、救援活動を行っている自衛隊員の士気を高揚させる機能も持っている。これは方言を通じて両者の間に一体感を生み出した事例と言える。

→方言使用目的：親近感・一体感の創出、アピール効果

## 2.1.2 記事②

### 東日本大震災：岩手に自転車 50 台 岐阜市が高校生支援

（『毎日新聞』平成 23 年 5 月 13 日朝刊）

東日本大震災で津波被害を受けた岩手県沿岸部の高校生の通学を支援しようと、岐阜市緊急支援本部は 12 日、自転車 50 台をトラック 2 台に積み込み現地へ出発した。同市が自転車を被災地へ贈るのは初めて。

市職員の家族が寄付した 35 台、市都市建設部所有の 13 台、市民寄贈の 2 台を贈った。すべて防犯登録を抹消した中古品。東北の方言で「がんばっぺし岩手」と書かれたステッカーを貼り、県立釜石商工高校へ直接送り届ける。パンク修理キット 50 セットも提供する。

武政功副市長が 4 月 19 日、中核市長会の見舞金 2700 万円を盛岡市へ持参した際、自転車への要望が強かったという。

#### ●ポイント

- ・岩手県で津波被害を受けた高校生の通学を支援するため、岐阜県が自転車を 50 台贈った。
- ・その 50 台の自転車に、東北の方言で「がんばっぺし岩手」と書かれたステッカーが貼られた。

#### ●考察

自転車を贈ること以外にも、自分たちの応援の気持ちを強く伝えたいと考え、方言を使ってメッセージを書いたのだと思われる。これは、被災者に親近感を持っていただきたいと支援者が考えたからだろう。→方言使用目的：親近感・一体感の創出

## 2.1.3 記事③

### 東日本大震災：被災地の特産物即売で支援 川崎の商店街「物産市けえ」

（『毎日新聞』平成 23 年 5 月 23 日朝刊）

川崎市中原区の「モトスミ・ブレーメン通り商店街」で 22 日、東日本大震災の被災地支援「物産市けえ」があった。「けえ」は東北方言の「食べて」。東北や茨城県の野菜や特産物の即売に多くの人でにぎわった。

同商店街は 4 年前から JA 全農福島と交流し、度々物産展を開催。原発事故による風評被害に遭う福島県などの農業を支援しようと、同商店街振興組合青年部を中心に企画した。テーマは「被災地の農業を動かす」。組合の役員報酬四半期分（30 万円）などを元手に野菜や特産品を仕入れ、売り上げを寄付。被災地に現金が 2 度落ち、農産物も流通する仕組みになっている。

当初は役員報酬の寄付のみを考えていたが、組合内から「金だけではだめ」との声が上がり、カネとモノが動く仕組みを検討。同組合の伊藤博理事長（68）は「商人として考え抜いた策です」と胸を張った。会場を訪れた同県の松本友作副知事は「福島の農産物は安全。買って食べてもらうのが一番の支援」と感謝した。

買い物を楽しみながら寄付ができ、横浜市港北区の主婦、真壁百合子さん（32）は「アスパラガスが甘くてみずみずしくておいしかった。買い物で被災地に貢献できてうれしい」と話していた。

同商店街は6、11月にも物産市を予定。息の長い支援を目指す。

#### ●ポイント

- ・神奈川県における商店街では、22日に東日本大震災の被災地支援のため、東北や茨城の農産物を売る即売会が開かれた。
- ・即売会を「物産市けえ」と名づけ、「けえ」は東北方言の「食べて」という意味。

#### ●考察

こちらの方言使用については、今までの親近感・一体感の創出に加え、別の方言使用目的がある。他の記事においては、方言は被災者へ支援者の思いを届けるために書かれたものと思われる。しかし、この記事において方言は、他の地域の人々が標語や名前を見て、東日本大震災を想起する事を狙ってのものだと考えられる。このような使い方は被災者への直接的な効果を期待したものではないが、被災地支援のイベントをアピールするという意味で、間接的な支援の機能を持っていると言える。→方言使用目的：アピール効果

#### 2.1.4 記事④

「いま伝えたい」→次頁参照（下線部が方言と思われる）

（『朝日新聞』 東京版 朝刊 36面

上：平成23年5月9日 右下：平成23年5月11日 左下：平成23年5月12日）

#### ●ポイント

- ・全国に避難している方も含めた、被災者の方々の声を掲載している朝日新聞のページ。
- ・「おら」、「ちゃっこい」、「～っちゃ」といった方言が見られる。

#### ●考察

これらの記事からは、読者が親近感を持つ事ができるというだけでなく、被災者の声をよりダイレクトに届けたいという編集側の思惑が見て取れるのではないだろうか。被災者の方言に対する他地域の人々の意識が最も表れているものだと考えられる。→方言使用目的：親近感の創出、臨場感やメッセージ性の付与



この体育館で2ヵ月。早いねえ

大正十三年

**THE KENNEDY**



後編 二葉集 七人

南三陸町食糧・後援二葉園  
さん(四) 一般般生活に在る  
ようになったが、水道がまだ  
出ない。食料などの物資もし  
じに入ったらもらえなくなる  
というけど、野菜にしても  
何にしても売っているものが  
ないんだから困る。20年くら

金瓶梅

南相馬市小高区、日和田  
中2年河野美香さん(14)  
「小高中から転入」しまし  
た。今の通学路にはほとんど  
学生がいないから、転入先  
の日和田中では一人だっ  
た。みんなが遊びながらぐ  
れと友達もでき、学校生  
活にも慣れました。でも  
「おた牛」の方がいいな  
あ、って思っ。ひょんな  
ばりからって言われた、  
おならないけど。登道はず  
と入部に入りたい。毎日  
練習があって大変。天候続  
断りって一球一球大母に練  
習して試合に出られるよ  
うにしたい。」

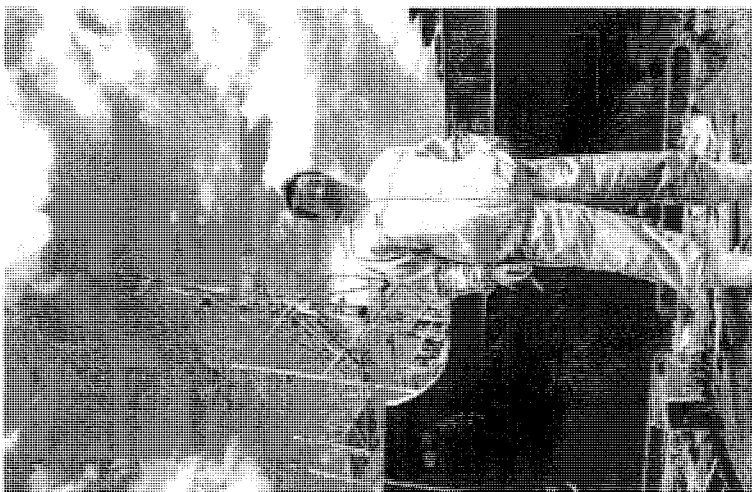
石巻市、仙台、永野と一  
人、(9)「日本青年の健康」  
です。地域は400人の  
健康のため、自分たちが  
下町に死す。6月の  
日に全町供養をした  
い。みんな集まる場所  
を築いてます。東葉が  
たは田んぼを、といた  
れど健康なみんな死な  
れど。健康な田んぼを  
つくるのさあ、(10)「  
かえさす健康」になる  
え」

南三陸町を瀬川、大工棟  
原盛岡さん(一)「自宅は  
会樂し、志津川病院に入  
院したとおくつは行方  
不明。警察からはまだ通  
信もない。今は弟の家に  
いて、警察生活の相談の仕  
事だ、今の健康を聞いて  
いる。体調を崩した時、監  
獄裏から来た生主は直  
話になった。悪くないな  
んたよ。全腫のなをん  
もあつたつと云へん  
。生雄こそ、生雄  
だつて、おれははぢを  
嫌う。おれは(小  
い)おれは、おれは

大船yard市末崎町、船長山中東一郎さん(54)  
「昨年未かゝる悪田かけて修理し、8月10日  
に海におるしたばかりの船が津波で高仙居船  
港から流された。おらの船だけ買つかんにか  
つたら重痛かつたけい、4日後に青森市

[illegible]

# THE REFORMATION

[illegible]

### 2.1.5 そのほか震災における方言の意図的使用例（→次項にイメージ画像）

#### ①NHK ラジオ番組「やるっちゃ！宮城」

宮城県在住、または宮城県にゆかりのあるミュージシャンやタレントをパーソナリティーに、今回の震災で被災されたみなさんへ生放送でエールを送る宮城県向けラジオ番組である。

被災地からいただいたリクエストやメッセージのほか、パーソナリティーそれぞれの震災体験談、また生演奏などを交えながら、宮城のみなさんといっしょに作る番組である。

<http://www.nhk.or.jp/sendai/top/yaruccha/>

#### ②がんばっぺいわき

今回の東日本大震災の中で被災した街の一つ、福島県いわき市を支援するため、「がんばっぺいわき」というロゴを作成、販売する個人的活動である。

販売された商品は〈プリントシール〉、〈プリントシール（small）〉、〈カッティングシートステッカー〉三種類。いずれも 300 円+α お気持ちで販売されている。+α 分の全額と収益の一部をいわき市内の復興支援団体「がんばっぺいわき！ネットワーク（代表：Erico(蛭田江里子)）」さんへ寄付することになっている。

<http://www.mizdesk.com/gbpi/>

#### ③【楽天市場】カテゴリ：けっぱれ！東北/チャリティグッズ

がんばっぺ宮城！復興支援応援ストラップ&キーホルダー：  
ビート魂ショップ→T シャツ型のキーホルダー・ストラップを 400 円で販売。

三月末までに、けっぱれ！ストラップ&キーホルダー売上の収益分 16800 円を日本赤十字社を通じて義援金として送金。

<http://item.rakuten.co.jp/yakyu-da/10000790>

#### ④東日本大震災被災地復興支援 がんばっぺしプロジェクト

被災者・支援者が交流できるサイト。

創作書家・高野こうじ氏の書き下ろしステッカーの販売（プロジェクト第一弾）→東日本大震災  
がんばっぺし 被災地復興支援（店舗）

3 種各 500 円で、収益金は「がんばれ漁業」義援金として JF グループ東北地方太平洋沖地震漁業・漁村災害復興対策本部を通じて被災地へ届けますとのこと。

<http://ganbappeshi0311.com/>

### 2.1.6 新聞記事等から読み取れる方言の機能

今回収集した新聞記事からは、ポジティブな効果を期待した方言の使用例を多く見ることができた。新聞記事の内容だけでは、そうした方言使用が実際にはどのように人々に受け取られているかを広く知ることはできなかったが、新聞における方言使用を概観することで、被災地方言に対する人々の意識（ここでは新聞社の思惑など）を知る糸口を発見することができた。新聞社への調査（電話による質問など）を通じて、さらなる意識調査が望められると思われる。



①

NHKラジオ第1

毎週日曜日 午後8:05～9:55

震災に負けない!

やるっちゃ!

宮城

「やるっちゃ! 宮城」

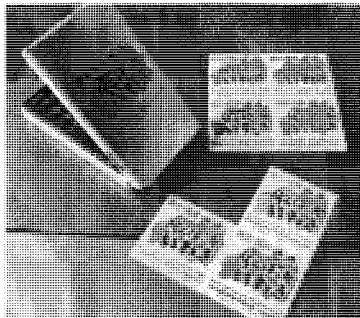
宮城県在住、または宮城県にゆかりのあるミュージシャンやタレントをパーソナリティに、今回の震災で被災されたみなさんへ生放送でエールを送る宮城県向けラジオ番組です。被災地からいただいたリクエストやメッセージのほか、パーソナリティそれぞれの震災体験談、また生演奏などを交えながら、宮城のみなさんといっしょに作る番組です。

ケータイサイトは  
こちらから



②

＜がんばっぺいわきプリントシール(Small)＞



①NHK ラジオ番組「やるっちゃ! 宮城」

②がんばっぺいわき

③【楽天市場】カテゴリ:

けっぱれ! 東北/チャリティグッズ

④東日本大震災被災地復興支援

がんばっぺプロジェクト

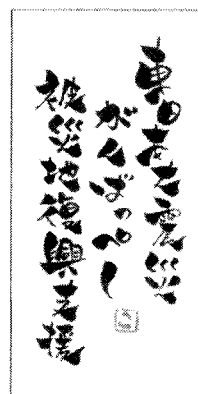
③



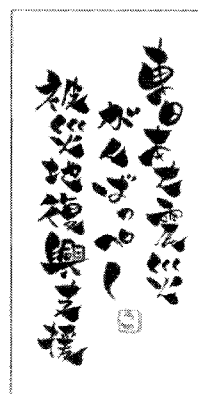
④ 東日本大震災被災地復興支援チャリティステッカー



店舗様向け  
ミラーコート紙シール  
(マット PP 加工)



ミラーコート紙シール  
(マット PP 加工)



和紙シール

各 500 円

東日本大震災被災地復興支援  
がんばっぺ

## 2.2 新聞記事について

### 2.2.1 新聞記事等から読み取れる方言の機能

準備調査の結果から、新聞記事における方言使用は使用意図によりタイプが分かれるのではないと思われる。そこで、範囲を広げて全国紙と地域紙を対象に方言の使用例を収集し、傾向を探ることにした。調査は3月11日～6月30日の期間の記事について行った。調査対象にしたのは地域紙として河北新報、全国紙として朝日・毎日・読売新聞である。（産経・日経新聞についても調査したが、方言が記載された例は見られなかった。）

収集した記事を方言使用の目的の違いという観点から整理すると（別資料A）、①スローガンに方言を用いる例、②被災者の声を方言で記載する例の2つが見て取れた。こうした方言使用はどのような意図によるものなのか、明らかにするとともに考察を行いたい。

### 2.2.2 新聞社の方言記載意図

2.2.1の新聞記事における方言使用の調査では、大きく分けて二通りのタイプの方言使用が傾向として見られた。では、新聞社がどのような意図で被災者の声を方言で記載しているのか。それを明らかにすべく、実際にこうした用例が見られる河北新報社にインタビュー調査を行った（7月24日）。回答を頂いた方は、以下の方々である。

- ・河北新報社勤務：編集局次長 兼 紙面審査部長
  - ・河北新報社勤務：編集局生活文化部長 兼 編集委員
- 質問項目とその回答内容は以下のとおりである。

#### ●どのような意図で方言を用いているのか

今回の震災においては、紙面に「実際に被災地の方が話している」ような臨場感やリアリティを持たせるために、会話部分を方言で掲載している。読者からはおおむね好評（とくに40～60代の方から）。一方で、「ウチの地域ではこのような方言を話さない」という意見もいただく。

#### ●方言を記載するにあたり、どのような取材をされているのか。

取材は基本的にメモで行う。相手が方言を発話しても、記者の内省によって取材の段階で標準語に直されてしまうことが多い（内容が最も大切なため）。そのため方言を紙面に載せる際、記者は、同じ話者に何度か取材を行う、録音をするなど方言を正確に拾い上げる工夫をする。

なお、「底の浅さ」を露呈する恐れがあるため、基本的に記者が方言で取材をすることはない。紙面は期限と字数がシビアに決められている。正確な取材が求められ、かつ字数が増えることが予想されるため、方言が紙面に残ることは少ない。

以上の回答から、新聞社が方言を意図的に用いていること、およびそのために様々な工夫をしていることを窺い知ることができた。

## 2.3 看板などに見られたスローガンについて

看板などに見られた方言・共通語を用いた復興スローガンの写真を、アップローダーによる講義参加者の協力を得て、5月7日から7月17日（現在）にかけ、88例収集した。うち、共通語形69例（別資料B①、B②）、方言・方言と共通語の併用19例（別資料B③、B④）である。集めた用例を、スローガンが向けられた地域によって分類したのが次の表1である。類別は日本・東日本・東北・県（福島、岩手、宮城など）・詳しい地名（仙台、気仙沼、女川など）・そのほか（地名を含めていないもの）の6つに分類している。

分類の基準は以下のとおりである。

- (i) 同じ看板、ポスターが複数ある場合は1件として集計。
- (ii) 同じ写真や看板でも、異なる内容・表現・地域があれば、それぞれを1件とする。



(i) の例



(ii) の例

表 1

	日本	東日本	東北	県	詳しい地名	ほか	合計
共通語	8	2	26	14	15	3	68
	100.00%	100.00%	93.10%	66.67%	62.50%	75.00%	78.40%
方言	0	0	1	7	8	1	17
	0.00%	0.00%	6.90%	33.33%	37.50%	25.00%	21.60%
合計	8	2	29	21	24	4	88

表 2

	岩手	宮城	福島	栃木	東京	合計
共通語	1	58	2	1	7	69
	100.00%	75.32%	100.00%	100.00%	62.50%	78.40%
方言	0	19	0	0	0	19
	0.00%	24.68%	0.00%	0.00%	0.00%	21.60%
合計	1	77	2	1	7	88

私たちは分類をするにあたり、日本～東日本といった広い地域に対して共通語、東北～詳しい地名といった限定された地域に対して方言が用いられる傾向があるのでは、という予想を立てた。

結果として、方言の使用例は予想通り、地域が限定されるほど用例が増え、地域が広域であるほど共通語形の割合が増える結果となった。表 1 からは、特定の地域に対しては当該地域の方言でメッセージを発信し、対象地域が不特定であればあるほど共通語を用いるという傾向が伺える。日本におけるいわば公用語として、共通語であれば広い地域を指向して用いられることができ、一方、方言は特定の地域に向けた一種の心理的要素として使用されることを示しているのではないかと（後述参照）。

また、スローガンの撮影地別に共通語・方言の使用の割合をみたものが表 2 であるが、方言の使用が見られたのは宮城県で撮影されたもののみで、岩手県・福島県で撮影されたものにおいては使用が見られなかった。これについては、宮城県以外のデータをさらに集めてから考える必要がある。

## 2.4 考察

小林（2004）は、同地域に属する者同士が直接会話する場合に、という前提はあるが、方言の現代的効用として、①相手の確認（同一地域社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認）②発話態度の表明（その場の会話を気取らないくだけたものにしたいという意思表示）の 2 つがあり、現代方言の機能は心理的なメッセージの提示に重心を移してきていることを指摘している。

この指摘に即して考えると、新聞記事における方言の使用（2.2）は、②発話態度の表明という効用により重心を置くものと思われる。つまり、被災者の声を届けるにあたり、その日常性やリアリティを新聞記者が示すことで、被災者と読み手の間の心的距離を縮める役割を果たしている。また、スローガンにおける方言の使用（2.3）は、①相手の確認という効用を意図したものである。つまり、被災地の方言を用いることで、「一緒に」「みんなで」といった仲間意識を喚起させるねらいがあるのではないだろうか。

上記いずれの例に共通して言えるのは、心理的なメッセージの提示が主たる目的であるということである。今回の震災においても、そうした目的で方言が積極的に用いられているようである。

## 3 方言の使用に対して被災者・支援者がどのような感情を抱いているか

### 3.1 準備調査—方言意識に関して—

#### 3.1.1 被災地（を含む地域）における方言意識

##### 3.1.1.1 調査①（本多 2004）

福島県・栃木県・茨城県にわたり、70～80 歳を対象に分布調査・意識調査を行ったものである。調査項目は 7 項目で、各地域の方言に対する意識（方言を後世に残しておきたいか、この地域の方言は味があることばだと思うか、など）、どのような場面で方言を使用するか（知らない人と町内で話すとき、など）、また、方言・地域の属性（関東・東北の二択）を尋ねる項目が設定されている。

#### ●ポイント

- ・東北本線側を「北上する」、または「沿線を離れる」につれ、方言形使用数値が高くなり凹凸が見



られる。

- ・常磐線側の浜通りは、方言形使用数値が80%代と比較的高い上、それが、南から北まで多地点にわたり存在している。
- ・茨城県は福島県より方言の使用度が低いとみられる。
- ・常磐線沿線では方言が「好き」か、「どちらでもない」と答えた人が多い。但し都市部では、家族と話すとき「方言を使いたくない」という傾向がみられる。

#### ●考察

ここでは、世代差はほとんど無く、中若年層も老年層と同様の意識であると報告されている。一方で、プラス意識・マイナス意識の地域差、すなわち、都市化地域におけるマイナス意識と共通語選択（共通語化）の関係が指摘されている。これは、その地域の都市化の度合いや段階によって、方言に対する意識が変わってくる可能性を示唆している。

#### 3.1.1.2 調査②（半沢 1998）

福島県全域と山形県置賜地方の高校生を対象に、方言意識について聞いた調査。3種類の非標準語形を示し、自身の使用状況について、「1. よく言う 2. たまに言う 3. 聞くけど言わない 4. 聞いたことがない」のように「よく言う」ほど点数が高くなるように点数化している。

また、福島・山形の方言が好きか、東京で方言を使うのは恥ずかしいことと思うか、といった質問を設定し、これについても「1. 大変好き 2. どちらかと言えば好き 3. どちらでもない 4. どちらかと言えば嫌い 5. 大変嫌い」のように点数化、グラフ化している。

#### ●ポイント

- ・「方言が好き」と答えた人ほど方言を使う傾向（福島・置賜）。
- ・福島では「方言が恥ずかしくない」と答えた人は、「恥ずかしい」と答えた人に比べて方言を使う傾向。置賜では使用頻度により大きな差が見られない。
- ・「方言が好き」であるほど「方言が恥ずかしい」と答えた人は少なくなる（福島・置賜）。

#### ●考察

方言を普段あまり使わず、また方言が嫌いで恥ずかしいと思っている人もいる。激励のスローガン等に方言を用いても、それに対して特別な感情を持たない人も多いのではないかな？

#### 3.1.1.3 調査③（早野 2007）

常磐大学（水戸市）に在学する茨城生え抜き話者（18～22歳）を対象に、「東京語話者」と「茨城語話者」それぞれの話者特性のイメージを調査したもの。パーソナリティ（のんき、冷静、など）、対人対応（ぞんざい、親切、など）、知的・教養（知的、文化的、など）、外見（容姿端麗、地味、など）、経済的要素（貧富）のそれぞれについて、話者イメージをグラフ化し、「東京語話者」と「茨城語話者」双方の特徴的なイメージを浮かび上がらせている。

## ●ポイント

- ・方言話者にもステレオタイプのイメージが付随しており、不適切な評価を受けている。
- ・茨城話者に対するイメージは、「知的でない」「非文化的」「容姿端麗でない」「貧乏」など、中には言語とは関係のないような項目にもネガティブなイメージが付随している。

## ●考察

地元の方言を使うことに対して自虐的。前述の福島・置賜の調査結果のように、方言使用を嫌がったり、恥ずかしいと思っている人がいるということの表れではないか？

### 3.1.2 他地域の人々から見た被災地の方言に対するイメージ

- ・東北地方・東北近隣地域のことばに対する差別的意識、及びそこから生まれたトラブルの例（小松代 1982）
  - ①東北出身の青年が宮田アナとのやりとりで、方言を店で使うたびに、札を胸にぶら下げさせられるという話をしていた。（岩手日報、投書 昭 38・9・12）
  - ②東北弁笑われて殺人……秋田から集団就職の少年工員（毎日新聞、昭 39・5・14）
  - ③兄の婚約者を殺す。栃木ナマリをからかわれた少年（毎日新聞夕刊、昭 40・8・27）

### 3.1.3 先行研究の限界

ここまで方言意識に関して述べた先行研究を見てきたが、これらは方言使用がネガティブに受け取られている可能性を示唆するものである。

しかし、これらの先行研究だけではまだ不十分である。その理由は 2 つあり、第 1 に、市町村単位の先行研究はほとんど見当たらず、今回の被災地に限定することは難しいため。第 2 に、今回のような、大震災の復興支援のスローガンなど（における方言使用）という、特殊な状況下であっても従来の方言意識が当てはまるのかという疑問が残るためである。

## 3.2 方言を用いた復興スローガンに対する意識

### 3.2.1 調査の目的

今回の震災以降、スローガンなどにおいて被災者を激励する目的で方言を使用する例が多く見られるが、こうした方言使用を見て被災者がどのような印象を持つのか、また実際に被災者の役に立つものであるか、被災者の意見を直接聞く必要がある。

また、支援者がどのような意図からこうしたスローガンを考案したり、使用したりするのか、その意識を問うことも重要である。被災者と支援者の間で、このような方言使用に対する意識の差があるかもしれないからである。

本調査の目的は、以上のような観点から、インタビュー調査を行うことで、実際に被災者や支援者がどのような感情を抱いているのかを明らかにするものである。



### 3.2.2 調査の概要

【実施日】（第一回）2011 年 7 月 24 日 （第二回）2011 年 9 月 16 日

【調査地】気仙沼市

【調査対象者】被災者（震災時市内に居住、現在も市内で生活する人）

支援者<sup>1</sup>（県内外から来て、市内で支援活動を行う人）

※対象者の年齢、性別は問わない。

調査方法としては、各質問項目について、対象者に 1 人ずつ口頭で質問し、得られた回答を調査票に記入。また、それぞれの質疑応答を SD レコーダー（EDIROL）で録音した。

実際に、以下のような人々から回答を得ることができた。

（第一回）

- ・気仙沼市社会福祉事務所（8 名）

兵庫県丹波市、長野県東御市、東京都江戸川区からの派遣職員

- ・気仙沼市災害ボランティアセンター（9 名）

県内外からボランティア活動に参加する支援者

- ・気仙沼・本吉広域防災センター（1 名）

防災センターで避難生活を送っている被災者

- ・市内その他（3 名）

市内で小売店、飲食店などを営む被災者

（第二回）

- ・気仙沼市仮設住宅（13 名）

仮設住宅で避難生活を送っている被災者

当初、避難所となっている気仙沼総合体育館でも支援者・被災者に話を伺う予定だったが、現在避難者の数も増え、支援スタッフの人手が足りない状態であるとのことで、ここでの調査は断念した。また、被災者の心情や避難所における環境に配慮して、調査の場も限られたため、第一回目の調査は、結果として被災者に対しては僅かしか聞き取りができず、支援者側の回答を多く得ることとなった。本調査の主なねらいが被災者側の意識の聞き取りであるため、第二回目の調査を行うことで補った。

質問内容は、被災者向けと支援者向けで設問を変え、調査票を別に分けた。それぞれの質問項目は以下の通りである。

●【被災者向け質問項目】（調査票：別資料 C① 提示シート：別資料 C③、C⑤、C⑥）

1. あなたは、地元の方言が好きですか。<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> 第一回目の調査のみ。

<sup>2</sup> 被災地の方言意識について知る狙い

2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。<sup>3</sup>
3. 方言を用いた復興スローガンに、親近感を感じますか。<sup>4</sup>
4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。<sup>5</sup>
5. ①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについて、どう思いますか。
5. ②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについて、どう思いますか。<sup>6</sup>

●[支援者向け質問項目] (調査票：C② 提示シート：別資料 C④、C⑤、C⑥)

1. あなたは、被災地の方言が好きですか。<sup>2</sup>
2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。<sup>3</sup>
3. 方言を用いた復興スローガンは、被災者に親近感を覚えてもらえると思いますか。<sup>4</sup>
4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。<sup>5</sup>
5. ①被災地以外の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。
5. ②被災地の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。<sup>6</sup>
6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。

調査結果は別資料 D①、D②を参照されたい。

### 3.2.3 考察

- ・被災地の方言が好きかという問いに関しては、支援者・被災者ともに、否定的な回答はなく、概ね方言に対して好意的であるといえる。
- ・支援者は被災者とのコミュニケーションに方言を使うことはほとんどない。ただ、今回インタビューを行った支援者は、気仙沼に来てまだ日が浅い人が多かった。「長く滞在すれば訛りや方言が移ってしまうかもしれない」という意見も数名から得た。方言は意図的に真似するものではない、という意識が見られる。
- ・「共通語「がんばろう」で十分、方言はやりすぎでは」「スローガンに親近感を持たせること自体難しい」という意見はあるものの、方言を用いたスローガンに対して支援者・被災者とも概ね肯定的である。方言が持つ親近感や一体感の創出という機能を認識している人が多いと言える。
- ・方言を使用したスローガンが共通語と比べて目立つかという問いに対しては、「目立つ」と答えた対象者の方が多いものの、「目立たない」とした回答も支援者に見られた。「目立たない」理由としては、「標準語の方が使い慣れているのですぐ目に付く」といった意見が見られた。ただし、「方

<sup>3</sup> 現地の実態から方言の機能を知る狙い

<sup>4</sup> 方言が持つと思われる「親近感・一体感の創出」という機能が、実際に働いているかを知る狙い

<sup>5</sup> 方言が持つと思われる「アピール効果」という機能が、実際に働いているかを知る狙い

<sup>6</sup> 誰が方言を利用するかということが、方言機能を弱める可能性を知る狙い

- 言の方が見慣れないので目を引く」という意見もあり、これは個人差によるのではないか。被災者の回答には、「どちらでもない」が40～60代に見られた。これは共通語が普及する過程で、いわば方言と共通語のバイリンガルとなり、どちらも同等に扱える世代の感じ方なのかも知れない。
- ・県外から来た支援者は、「被災地以外の人が被災地の方言を使用してスローガンを作ること」に消極的である。「方言のニュアンスがわからない」という意見のほか、「方言は中途半端に真似するべきではない」という意見があった。しかし一方で被災者はこれを好意的に捉えており、被災地以外の人が思っているよりも特にこだわりはないようである。県内や東北出身の支援者の中にも、好意的な意見がみられた。また、被災者の回答には、地域の方言スローガン作成を通じた、地元の住民と支援者との協力体勢を指摘・期待すると見られる声もあった。
  - ・「どの言葉を使ってスローガンを作りたいか」という問いに関しては、前述のように「ニュアンスが分からない」などの意識から、無難に「共通語」や「自分の地域の方言」を選択する支援者が多くなったと思われる。5.①で肯定的な回答をした支援者は、概ね「被災地の方言」を選択していることが分かる。

当初、地元の方言が好きでないという被災者もいるのではないかと、もしその場合は方言を使用したスローガンも激励の効果が無いのではないかと予想していたが、今回方言を「嫌い」と答えた対象者がいなかった。そのため、方言の好き嫌いと言語を使用したスローガンに対する意識との関連は分からなかった。しかし、今回の調査結果を見る限り、方言スローガンに対する印象は概ね好意的であると見て良いだろう。一方、方言使用による「アピール効果」については意見が割れており、一概に結論を出すことはできない。

誰がどの方言を使うべきかという面では、予想に反して支援者と被災者の間に意識の差が見られる。他地域からの支援者としては、安易に被災地の方言を使用すべきではないという傾向が強い（項目5①、5②、6）一方で、被災者や被災地域出身の支援者は、他地域の出身者による方言使用に概ね肯定的である（項目5①）。ただし、そうした方言使用に際しては、地域の方の協力を仰ぐなどして、方言の正しい使い方を理解しておくことが重要であると言える。

なお、被災者が被災地の方言を使ってスローガンを作ることには、概ねの対象者が賛同している。

#### 4 おわりに

震災に直面し、復興に向かう人々の中で方言がどのような機能を果たしているか、方言意識、新聞記事、スローガン、被災者対支援者といった角度から見てきた。

今回の調査により、新聞社（特に地域紙）は紙面への方言の使用には慎重な姿勢であること、そして、方言を記事に採用する際には「臨場感やリアリティを持たせる」というように、意図性があることが分かった。

復興スローガンの分析からは、スローガンに読み込まれる地域が狭ければ狭いほど（対象地域がはっきりしていればしているほど）、方言形が使われやすく、対象地域が広範囲に設定されているほ

ど共通語形が使われやすい傾向が見られた。これは、方言スローガンに対する意識調査で「方言は中途半端に真似するべきではない」「その地域の方言をよく分かっている人が作るべき」という意見があったことや、新聞社に届く「ウチの地域ではこのような方言を話さない」という指摘と合わせて考えると、地域が細かく指定されていた方が方言を適切に取り入れることが出来るからという面があるのではないだろうか。また、被災者への調査で「自分の地域の名前が挙げられていると嬉しい」という意見があったが、宮城県ではなく、もっと細かい自分の市区町村の名前が挙げられ、さらに自分の土地の言葉がスローガンに掲げられ、日本中から注目を浴び、応援されることの心強さ、そういった被災者側の反応も、詳細な地名と方言形スローガンの結びつきに反映されているのではないか。

関東圏（東京都・栃木県）に方言スローガンが見られなかったのは、支援者側から出た「（被災地以外の人では）方言のニュアンスが分からない」ということも関わっているのではないか。

話者の一つ一つの発言に注目してみれば見るほど、方言の機能には様々な要素が複雑に絡んでいるように感じられてくる。多様な可能性を提示するにとどまった感が否めないが、震災直後という場で、方言が果たしうる役割の一端は記すことが出来たかと思われる。被災地での避難生活は今も続いている。直接的な支援にはならないが、このうねりの中で変化して行くであろう被災地の言葉や、土地の言葉に対する地域住民の思いを捉えていくことができればと思う。

## 文 献

### 論文など

小林隆（2004）「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7（1）

小林隆（2007）「方言機能論への誘い―「シリーズ方言学」の世界」『シリーズ方言学3 方言の機能』岩波書店

本多真史（2004）「関東・東北接触地帯における話者の言語意識と方言使用の関わり」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』第2号

小松代融一（1982）「東北方言と国語」『講座方言学』4

半沢康（1998）「方言使用と方言評価意識に関する因果分析の試み―東北地方南部高校生アンケートの結果から―」『国語学研究』37

早野慎吾（2007）「国語科教育における地域言語学教育（2）：方言の役割について」『宮崎大学教育文化学部紀要』17

### 新聞記事

『読売新聞』平成23年3月29日「がんばっぺ！お国なまりで自衛隊員、被災地応援」

『朝日新聞』東京版 朝刊36面「いま伝えたい」平成23年5月9日、平成23年5月11日、平成23年5月12日

『毎日新聞』平成23年5月13日朝刊「岩手に自転車50台 岐阜市が高校生支援／岐阜」



『毎日新聞』平成 23 年 5 月 23 日朝刊「被災地の特産物即売で支援 川崎の商店街「物産市けえ」  
／神奈川」

#### **サイト**

NHK ラジオ番組「やるっちゃ！宮城」<http://www.nhk.or.jp/sendai/top/yaruccha/>

がんばっぺいわき <http://www.mizdesk.com/gbpi/>

【楽天市場】カテゴリ：けっぱれ！東北/チャリティグッズ

<http://item.rakuten.co.jp/yakyu-da/10000790>

東日本大震災被災地復興支援 がんばっぺしプロジェクト <http://ganbappeshi0311.com/>

アップローダー<http://ux.getuploader.com/>

## 新聞記事に見られた方言

1. 方言を使ったスローガン			
1.1. 定型化していないもの			
1.1.1. 被災者によるもの			
1.1.2. 支援者によるもの	名前には「イーガー、おめだろ」の決め台詞からとった。 飯館など東北の村には「くまでい」という言葉がある。	『ご当地ヒーロー イーガー復活』 『「までい」世界に発信を』	5月5日(朝刊)河北 6月14日(朝刊)河北
1.2. 定型化しているもの			
1.2.1. 被災者によるもの	地元には「く津波でんでんこ」という言葉がある。「津波の時は家族も構わず逃げろ」という意味だ。 く福島人なら頑張っぺ く日本は負けっぺ く祭りやっぺ くみんなががんばっぺ」と呼びかける西田さん 有志が「くがんばっぺ東北」と銘打ったチャリティイベントを開いた 「くがんばっぺ」	『被災地はいま——大船渡の避難所』 『福島人なら頑張っぺ』 『皆で前を向こう』3/28 『夏祭り 今年もやっぺ』6/9 『安全な福島農産物PR 県内スーパー11店フェア』 『こげしの里から元気を贈りたい 白石で地場産品市』 『宮城・南三陸 名足小卒業生 自主的に泥清掃』	3月26日(朝刊)毎日 3月22日(朝刊)朝日 3月28日(朝刊)朝日 6月9日(朝刊)朝日 4月2日(朝刊)河北 6月4日(朝刊)河北 5月2日(朝刊)河北
1.2.2. 支援者によるもの	2人は白いボードに「く頑張っぺ! 気仙沼!」とメッセージを書いた。 東北の方言で「くがんばっぺ! 岩手」と書かれたステッカーを貼り(略)直接送り届ける。	『「頑張っぺ!」気仙沼を応援 渡辺謙・南果歩さん夫婦』 『東北大震災:岩手に自転車50台 岐阜市が高校生支援』	4月17日(朝刊)河北 5月13日(朝刊)毎日
2. 被災者の発言(方言がみられたもの)			
「30は、おばさんです。がんばってけるよ!」 「3年から5年ぐらいは収穫できねえんでねが」 「誰がやるんだががんばらねえけど、片づけるだけで1年はいけるだろう」 「今年は、何も作らなくても、転作したことにすることでかして」 「死んじまうっぺ(死んでしまおう)!」 「すいとんは、ねえか? いつまで続くんだべ?」 「まあ何とかかなるべな」 「ガソリンと灯油が全然ねえんだ。一番うめえんだけど放射線の影響でもう食わねえ。」 「やっがら(あげる)と魚をくれる漁師」 「ここであらうみみさんの世話になっぺ。」 「ホウレンソウもにんにくもみんなないだっぺ。容易でねえんだ。」 「寂しいっちゃ。もし仮設住宅に入れたら」 「仕事がない暮らししていけない、うちも。全然、あたらねえべ。」 「何よりね、町を歩いてると、あたらはいちやね」 「頭まで水かぶって、2回ぐりやあ飲んだ。その後、力いっぱいおちにつかまえて助かった。」 「すっげえな トンボはもつと腰落としてかけねえべ」 「泣いたりてねーの。元気を分け合って生きていくのす。」 「生きてら」 「高いとこさ逃げろ。」 「体育館さ行った」 「水さそこまで来たった」 「客が待つてる。やめられねえっちゃ。」	『防災無線で呼びかけ続けた町職員 遠藤さん 作文見つかる』 『農業再建 厳しい前途』 『どこかで無事に』 『3年前に内陸地震』 『いま伝えたい』 『いま伝えたい』 『店はなくても青空市』 『いま伝えたい』 『いま伝えたい』 『いま伝えたい』 『仕事がない暮らししていけない』 『南三陸日記 無事で申し訳ありません』 『いま伝えたい』 『OBの熱意 胸に響いた』 『地区孤立で自活避難 陸前高田』 『記者の目 東日本大震災 故郷・釜石から』 『検証 大震災』 『各地の被災者たちは今』 『沿岸南行記 岩沼・30日』	3月13日(朝刊)朝日 3月18日(夕刊)朝日 3月20日(朝刊)朝日 3月22日(朝刊)朝日 3月28日(朝刊)朝日 4月1日(朝刊)朝日 4月3日(朝刊)朝日 5月9日(朝刊)朝日 6月11日(朝刊)朝日 6月14日(朝刊)朝日 6月16日(朝刊)朝日 6月17日(朝刊)朝日 3月19日(朝刊)毎日 3月22日(朝刊)毎日 4月10日(朝刊)毎日 5月1日(朝刊)毎日	

別資料 B①・共通語のスローガン (2.3)

	撮影地	日付	内容
共通語			
がんばろう系			
1	定義山ある店の隣	2011.06.25	「がんばろう日本」
2	青葉区上愛子ガソリンスタンド	2011.06.25	「がんばろう日本」
3	仙台駅西口停車中	2011.07.02	「がんばろう日本」
4	仙台街中のアーケード内・パチンコ店	2011.06.25	「がんばれ、日本。がんばれ、東北。」
5	気仙沼	2011.06.18	「頑張れ日本がんばろう！気仙沼」
6	浜谷公園通り	2011.05.07	「がんばれ東日本」
7	佐野サービスエリア	2011.06.15	「がんばろう東日本」
8	仙台駅	2011.05.09	「がんばろう東北!!」
9	仙台駅	2011.05.09	「がんばろう！東北」
10	仙台駅弁（野辺地のとりめし）	2011.05.09	「がんばろう東北」
11	仙台駅前ホテル	2011.05.09	「がんばろう東北」
12	仙台駅前ロフト	2011.05.09	「がんばろう東北!!」
13	東北大学入り口付近	2011.05.24	「がんばれ！東北！」
14	仙台S-PAL	2011.05.26	「がんばろう！東北」
15	東京タワー近く	2011.06.15	「がんばろう東北!!」
16	JRあおば通駅内びゅうプラザ	2011.06.21	「頑張ろう東北」
17	仙台市青葉区大町のREAL Style SENDAI（家具）	2011.06.25	「がんばろう！！東北」
18	仙台市青葉区中央のコンビニ（サンクス）	2011.06.25	「がんばろう東北」
19	仙台街中のアーケード・パチンコ店	2011.06.25	「がんばろう東北！」
20	東京タワー下	2011.06.15	「がんばろう東北！がんばろう大船渡！」
21	東京タワー下	2011.06.15	「がんばろう東北！がんばろう大船渡！」
22	気仙沼	2011.06.18	「頑張ろう東北／一緒にがんばろう！東北／ がんばろう！東北」
23	仙台キャン・ドウ	2011.05.15	「がんばろう宮城！がんばろう東北！」
24	仙台駅前ロフト	2011.05.09	「がんばろう！東北・仙台」
25	LABI（仙台）	2011.05.22	「がんばろう！宮城」
26	仙台市青葉区中央のケンタッキー	2011.06.25	「がんばろう！宮城」
27	気仙沼	2011.06.18	「がんばろう！いわて・みやぎ」
28	（気仙沼）	2011.06.18	「ガンバろう岩手」
29	仙台街中のアーケード内・笹かまぼこ店	2011.06.25	「頑張ろう東北宮城！」
30	虎屋横丁	2011.06.28	「がんばろう東北がんばろう宮城」
31	気仙沼	2011.06.18	「がんばろう！気仙沼」
32	仙台ダイエー	2011.05.10	「がんばろう仙台」
33	仙台市青葉区中央の鯛さち（たいやき屋）	2011.06.25	「がんばろう仙台！」
34	仙台街中のアーケード内・パチンコ店	2011.06.25	「がんばろう！仙台！！」
35	新宿西口チャリティー物産展	2011.06.29	「がんばろう!!福島!!」
36	安達太良サービスエリア	2011.06.15	「がんばります!!福島」
37	安達太良サービスエリア	2011.06.15	「がんばります福島」
38	仙台街中のアーケード内・パチンコ店	2011.06.25	「東北、頑張るぞ！！」
39	気仙沼	2011.06.18	「がんばれ！気仙沼」
がんばろう+α			
40	仙台駅弁（みやぎ蔵王弁当）	2011.05.09	「復興へがんばろう！みやぎ」
41	研究室行事で利用したバス	2011.06.25	「復興へ頑張ろう!みやぎ」
42	仙台港フェリーターミナルビル2階の売店	2011.06.09	「復興へ頑張ろう!みやぎ」 （フェリーは白衛隊なども利用している様子でした）
43	仙台市役所	2011.05.10	「がんばろう仙台 私たちの街だから」
44	ニッカサスキー工場の駐車場に停車中のバス	2011.06.25	「バスを通して地域に奉仕！がんばろう宮城！」
45	仙台のダイエー（アーケード側入口）	2011.06.25	「がんばろう仙台 未来への絆」
ほか			
46	気仙沼	2011.06.18	「元気になる東北！！元気になる気仙沼！！」
47	クリスロード商店街（仙台）	2011.05.10	「私たちは負けない！」
48	仙台区役所	2011.05.10	「ともに、前へ 仙台」
49	仙台市青葉区大町の蕎麦屋前	2011.06.25	「たちあがれ！！仙台」
50	仙台市青葉区中央の坐・和民の看板	2011.06.25	「立ち上がろう！SENDAI」
51	気仙沼	2011.06.18	「負けないで下さい。ずっと応援させていただきます」







別資料 B③・方言、方言と共通語併用のスローガン (2.3)

	撮影地	日付	内容
方言			
1	仙台駅・新幹線改札内の女性トイレ入口	2011.05.30	「がんばっぺ！仙台！」千羽鶴
2	S-PAL仙台みやげ館一笹蒲鉾高政	2011.06.14	「がんばっぺ女川」
3	気仙沼	2011.06.18	「インフルエンザ流行しはじめた様です。うがい・手洗い・マスク予防すっぺし」
4	気仙沼	2011.06.18	「がんばっぺ！気仙沼」
5	気仙沼	2011.06.18	「がんばっぺし！気仙沼」
6	気仙沼	2011.06.18	「がんばっぺ気仙沼！！」
7	気仙沼	2011.06.18	「頑張っぺ！気仙沼」
8	気仙沼郵便局	2011.06.18	「がんばっぺし気仙沼」
9	GAME TAITO STATION（仙台街中のアーケー	2011.06.25	「がんばっぺ宮城」
10	GAME TAITO STATION（仙台街中のアーケー	2011.06.28	「がんばっぺ宮城」
11	GAME TAITO STATION（仙台）ビリヤード階	2011.06.28	「がんばっぺ宮城」
12	GAME TAITO STATION（仙台）店内太鼓の達	2011.06.28	「がんばっぺ宮城」
方言・共通語併用			
1	仙台駅・新幹線改札内の女性トイレ入口	2011.05.30	「ガンバレ日本／がんばろう！！東北／がんばっぺ仙台／心をつに／つながろう日本」千羽鶴
2	フェリー・きたかみ（仙台-苦小牧）の売店	2011.06.09	「がんばっぺ東北!!／がんばろう日本!」
3	仙台SLOP店前（パチンコ店）	2011.06.09	「頑張ろう東北！がんばっぺ宮城」
4	仙台駅西口パチンコ屋宣伝カー	2011.07.02	「がんばろう東北がんばっぺ宮城」
5	仙台駅西口工事看板	2011.07.02	「がんばろう東北がんばっぺ宮城」





方言 (保用)



## ●（被災者の方）

お名前：\_\_\_\_\_ ご出身地：\_\_\_\_\_ 都・道・府・県 性別：男・女

年齢：□10代 □20代 □30代 □40代 □50代 □60代 □70代以上

1. あなたは、地元の方が好きですか。（地元の方言意識について知る狙い）

□好き □どちらかというと好き □どちらでもない □どちらかというと嫌い □嫌い

2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。（現地の実態から方言の機能を知る狙い）

□ある □ない

（ ）→どう思ったか：

&lt;資料のように、復興のスローガンに方言が用いられている例があります。&gt;

## 3. ①方言を用いた復興スローガンに、（共通語のスローガンと比べて）親近感を感じますか。

（方言が持つと思われる「親近感・一体感の創出」という機能が、実際にはたらいっているかを知る狙い）

□感じる □どちらかというと感じる □どちらでもない □どちらかというと感じない □感じない

②(3. ①でどちらかというと感じない／感じないと答えた方)なぜ、そう思われましたか？

--

## 4. ①方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）目立つと思いますか。

（方言が持つと思われる「アピール効果」という機能が、実際にはたらいっているかを知る狙い）

□目立つ □どちらかというと目立つ □どちらでもない □どちらかというと目立たない □目立たない

②(4. ①でどちらかというと感じない／感じないと答えた方)なぜ、そう思われましたか？

--

5. ①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。

(「誰が方言を利用するか」ということが、方言機能を弱める可能性を知る狙い)

☐ 良い ☐ どちらかというが良い ☐ どちらでもない ☐ どちらかというと嫌だ ☐ 嫌だ

- ②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。

☐ 良い ☐ どちらかというが良い ☐ どちらでもない ☐ どちらかというと嫌だ ☐ 嫌だ

- ③(5. ①・②の回答が異なる場合)なぜ、○の方が良いと思われましたか？

--

☆（支援者の方）

お名前：\_\_\_\_\_ ご出身地：\_\_\_\_\_ 都・道・府・県 性別：男・女

年齢：□10代 □20代 □30代 □40代 □50代 □60代 □70代以上

1. あなたは、被災地の方言が好きですか。（被災地の方言意識について知る狙い）

□好き □どちらかという好き □どちらでもない □どちらかという嫌い □嫌い

2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。（現地の実態から方言の機能を知る狙い）

□ある □ない

（ ）→なぜ使ったか：

&lt;資料のように、復興のスローガンに方言が用いられている例があります。&gt;

3. ①方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。

（方言が持つと思われる「親近感・一体感の創出」という機能が、実際にはたらいっているかを知る狙い）

□思う □どちらかと思う □どちらでもない □どちらかと思わない □思わない

②(3. ①でどちらかというと思わない／思わないと答えた方)なぜ、そう思われましたか？

--

4. ①方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）目立つと思いますか。

（方言が持つと思われる「アピール効果」という機能が、実際にはたらいっているかを知る狙い）

□目立つ □どちらかという目立つ □どちらでもない □どちらかという目立たない □目立たない

②(4. ①でどちらかというが目立たない／目立たないと答えた方)なぜ、そう思われましたか？

--



5. ①被災地以外の方が方言を使用してスローガンを作ったとき、被災者の方は好感を持つと思いますか。

(「誰が方言を利用するか」ということが、方言機能を弱める可能性を知る狙い)

☐ 好感を持つと思う ☐ どちらかという好感を持つと思う ☐ どちらでもない ☐ どちらかという嫌悪感を持つと思う ☐ 嫌悪感を持つと思う

- ②被災地の人が方言を使用してスローガンを作ったとき、被災者の方は好感を持つと思いますか。

☐ 好感を持つと思う ☐ どちらかという好感を持つと思う ☐ どちらでもない ☐ どちらかという嫌悪感を持つと思う ☐ 嫌悪感を持つと思う

- ③(5. ①・②の回答が異なる場合)なぜ、○の方が好感を持たれると思われましたか？

--

6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。

☐ 被災地の方言(例：がんばっぺ、がんばっぺし等)

( )

☐ 共通語

( )

☐ あなたの出身地の方言

( )

☐ その他

( )

●

お名前：\_\_\_\_\_ ご出身地：\_\_\_\_\_ 都・道・府・県 性別：男・女

年齢：□10代 □20代 □30代 □40代 □50代 □60代 □70代以上

1. あなたは、地元の方言が好きですか。

☐好き ☐どちらかという好き ☐どちらでもない ☐どちらかという嫌い ☐嫌い

2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。

☐ある ☐ない

<資料のように、復興のスローガンに方言が用いられている例があります。>

3. ①方言を用いた復興スローガンに、（共通語のスローガンと比べて）親近感を感じますか。

☐感じる ☐どちらかという感じる ☐どちらでもない ☐どちらかという感じない ☐感じない

4. ①方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）目立つと思いますか。

☐目立つ ☐どちらかという目立つ ☐どちらでもない ☐どちらかという目立たない ☐目立たない

5. ①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。

☐良い ☐どちらかという良い ☐どちらでもない ☐どちらかという嫌だ ☐嫌だ

②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。

☐良い ☐どちらかという良い ☐どちらでもない ☐どちらかという嫌だ ☐嫌だ

☆

お名前：\_\_\_\_\_ ご出身地：\_\_\_\_\_ 都・道・府・県 性別：男・女

年齢：□10代 □20代 □30代 □40代 □50代 □60代 □70代以上

1. あなたは、被災地の方言が好きですか。

□好き □どちらかというと好き □どちらでもない □どちらかというと嫌い □嫌い

2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。

□ある □ない

&lt;資料のように、復興のスローガンに方言が用いられている例があります。&gt;

3. ①方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。

□思う □どちらかと思う □どちらでもない □どちらかと思うわない □思わない

4. ①方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）目立つと思いますか。

□目立つ □どちらかという目立つ □どちらでもない □どちらかという目立たない □目立たない

5. ①被災地以外の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。

□好感を持つと思う □どちらかという好感を持つと思う □どちらでもない □どちらかという嫌悪感を持つと思う □嫌悪感を持つと思う

②被災地の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。

□好感を持つと思う □どちらかという好感を持つと思う □どちらでもない □どちらかという嫌悪感を持つと思う □嫌悪感を持つと思う

6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。

□被災地の方言（例：がんばっぺ、がんばっぺし等）

□共通語

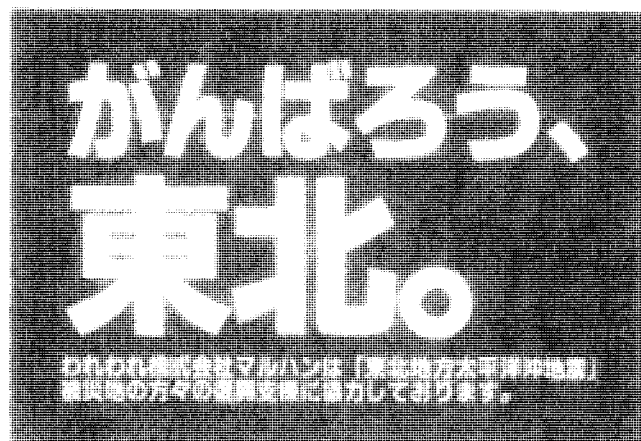
□あなたの出身地の方言

□その他



産直市場

がんばろう東北

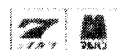


私達マルハンは  
東北地方太平洋沖地震により被災された皆様に対し  
お見舞いを申し上げますと共に  
1日も早い復興を遂げた支援に協力しております。

尚、イベントCM、折込チラシ、包装カード等にあきまじくは  
当館の間、自粛と致します。

また、店舗内外の一部壁面におきましては  
資源削減のため、消灯させていただきます。

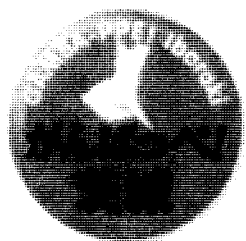
ご理解と御協力をお願い致します。



みんなと共に  
がんばろう!  
東北

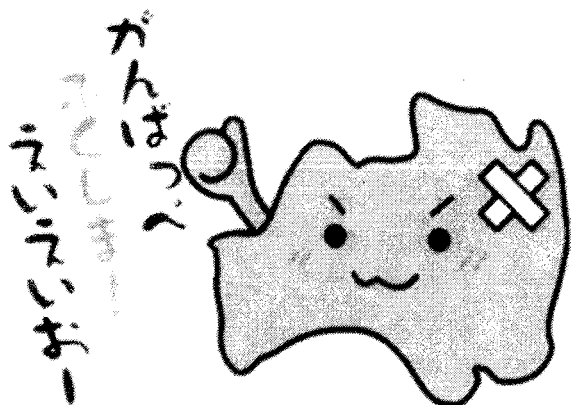






# がんばっぺ! 茨城

GAMBA-PPE! Ibaraki



おらだ ● 東北  
がんばっぺ

やるぞ日本。負けるな東北。



おらほ  宮城  
がんばっぺ!

やるべ東北。負けんな宮城。

調査場所		店舗			防災センター
出身地・在外歴	出身地:宮城県気仙沼市 在外歴:宮城県仙台市	出身地:宮城県気仙沼市 在外歴:宮城県仙台市	出身地:宮城県気仙沼市 在外歴:宮城県仙台市	出身地:愛媛県西条市 在外歴:東京都、宮城県仙台市、気仙沼市	出身地:宮城県気仙沼市
性別	男	男	男	男	男
世代	40代	40代	40代	50代	60代
質問項目	1. あなたは、地元の方が好きですか。	どちらかというと好き (好き～どちらかというと好き)	どちらかというと好き 元は嫌い(学生時)。懐かしい。外国語みたい。方言使う人が減った(祖父母がいなくなり、聞かなくなった)。	好き 来て3～4年は違和感。子供が方言しゃべるようになり、一緒に使うようになってから好きになった。	好き
	2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。	ない	ない ※(今回のことで)外の人(他地域から来た人)と接触無し。	ない 支援者などから彼らの地元の言葉で話しかけられて違和感を持ったことはある。／土地の言葉じゃないと違和感がある	ない 標準語で話す
	3. 方言を用いた復興スローガンに、(共通語のスローガンと比べて)親近感を感じますか。	感じる (スローガンの中に)「気仙沼」(の地名)が入ると嬉しい	感じる	感じる	感じる
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	目立つ 地元で普段話している(言葉が)活字化されている点で目を引く	どちらでもない ※「変わらない」イラストなど、色・デザインでは目がいくが…	どちらでもない 目立つか目立たないかで言うと。方言の方が励みになると言う意味では、方言の形にして欲しい。／目立つ目立たないのは必要ない。方言の方がやる気になる。	目立つ
	5.①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	どちらかというと良い (良い～どちらかというと良い)ありがたい。親しみ込めてやってもらってる。	どちらかというと良い 合わせてくれる。ドラマで(自分の地域で使わない)違うこと・訛り言われると違和感だが。←田舎扱い。	どちらでもない	嫌だ 真似るのがマイナス/四国弁で言うべき/四国なのにがんばっぺしはへんだ。
	5.②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	どちらでもない ③→(①と②で)そんな違いはない。具志堅の「チョツチュネー(そうですね)」などあるが、(今回のことに関しては)おちゃらけでやってる訳じゃないことが分かるので。	良い ③→被災した本人達がやる気になってやらないとダメ。(「がんばろう」だと?)ただ被災者側にだけ言われてるよう。	どちらでもない 目的が問題。そして震災のレベルによる。誰が作ったかは関係ない。役立つものだったら、誰にでも作って欲しい。合っていれば良い(方言の使い方?)	良い

調査場所		仮設住宅			
出身地・在外歴	出身地	出身地:宮城県気仙沼市	出身地:宮城県気仙沼市	出身地:宮城県気仙沼市	出身地:宮城県気仙沼市
	在外歴	在外歴:宮城県仙台市、岩沼市			
性別	性別	女	男	女	男
	世代	30代	60代	30代	60代
質問項目	1. あなたは、地元の方が好きですか。	好き	どちらでもない  (どちらとも言えない)	どちらでもない	好き
	2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。	ない	ない	ない	ない  標準語で話す
	3. 方言を用いた復興スローガンに、(共通語のスローガンと比べて)親近感を感じますか。	感じる	  分かりやすい。「がんばっぺ」が方言として一番分かりやすい。「がんばっぺ」は、相手があって、相手に話す。(「がんばろう」は自分自身で)	感じる	感じる
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	目立つ  自分で減多に使わない、分からない。でも通じるから。	目立つ  小さい頃から聞き慣れたことばだから。馴染みの方言だけど、だからといって、励まされるわけでない。	目立つ  親しみがあって、自然に入ってきやすい。	目立つ  方言の方が、言ったり聞いたりするのに良い。
	5.①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	良い	良い	どちらでもない  ③→(土地の方言を)使い慣れていない感じがすると、聞いていてぎこちない感じも。	どちらかというと嫌だ  ③→親近感が無く、変。特別に使っている感じ。(その場合、共通語の方が気分は良い)
	5.②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	良い  ③→(①と②で)違いはない	良い  ③→区別なし。応援、支援、声掛けしてもらえる。内容じゃない。方言の意味を追求するわけでない。(①も②も表現が)やわらかくて良い。	良い	良い

調査場所	仮設住宅		
出身地・在外歴	出身地:宮城県気仙沼市 在外歴:宮城県仙台市	出身地:宮城県気仙沼市 在外歴:白石市、石巻市、仙台市、登米市、栗原市	出身地:岩手県一関市 在外歴:神奈川、東京、気仙沼
性別	女	男	女
世代	60代	60代	50代
質問項目	1. あなたは、地元の方言が好きですか。	好き	好き
	2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。	好き	どちらでもない
	3. 方言を用いた復興スローガンに、(共通語のスローガンと比べて)親近感を感じますか。	ない 「ばくだん」というのぼりを掲げ、支援物資として米菓が出ていた。担当者に「私はパットライスと言いますよ」と言うと、すぐに「パットライスありますよー」と言い直していた。(言い換えに対して)→良かった。親しみを感じた。色々な言い方があり、向こうではそう言うんだなと思った。	ない  (大阪・神戸の人は自分の地元のことばを使う)
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	感じる	感じる
	5.①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	目立つ  共通語の印刷物は見慣れている。(それに対し)方言のものは、見慣れていなくて、「あれっ?」(と思う。)やる気が感じられる。	目立つ  「がんばろう」より「がんばっぺし」とあつた方が、余所のの方が(分かりやすいのでは)。地元の人には見慣れている。商工会や若い人が頑張っているのだから。
	5.②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	どちらでもない 私たちは見慣れている。(外から来た人には目立つかも?)地元の言葉であると分かりやすい。／昭和一桁生まれのお年寄りの人は、(地元を)出たことがない。方言でないと分からない場合も。昭和二桁生まれは、方言・共通語の両方が分かる。平成生まれは方言だと分からない	良い 地元以外の方が作っても、気仙沼にその人達が溶け込むためには(良いのでは)。余所から来た人には気仙沼の方言は難しいのでは。)作るとなれば、研究して、地元の人にも聞いて、これだ、というのを作ると思うので良いのでは。
	5.③地元の人が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	良い  ③一作り手は関係なく、良い。②は、こっちの(気仙沼の)人が作ったなあ、と思う。東京の人は方言では作らない。	良い  観光客だと違う。学生とか、(その土地に)住んでいるなら同じ県民という意識。  昔と違い、恥ずかしくない。今はお笑いなど(でも使われている)。そういうの(恥ずかしさ)は無いので、それはそれで良い。



調査場所		仮設住宅			
出身地・ 在外歴		出身地: 宮城県気仙沼市	出身地: 宮城県気仙沼市 在外歴: 東京都	出身地: 神奈川県川崎市 在外歴: 気仙沼	出身地: 岩手県 在外歴: 宮城県気仙沼市、仙台市、東京都
		女 70代以上	女 60代	女 70代以上	女 20代
質問項目	1. あなたは、地元の方言が好きですか。	好き  嫌いな所もあるけれど。	好き	好き	どちらでもない
	2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。	ない	ない	ない  方言でもなく、標準語。	ない
	3. 方言を用いた復興スローガンに、(共通語のスローガンと比べて)親近感を感じますか。	感じる  「がんばっぺ」の方が。 (他に)「がんばらいや」 「おらほでがんばっぺ」 「みんなでがんばらいや」 ／「がんばっぺ」	感じる  「がんばっぺ」の方が好き。	どちらかというと感じない  標準語に近いことばの方が多くなってきたため。	どちらかというと感じる  (方言と共通語)どちらも「がんばろう」は作り手受け手で温度差があつて嫌で、こう言うのは求めている、と思う。(特に)共通語は押しつけがましく感じる。
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	目立つ	目立つ  昔の人だから。方言の方が好きだから。	目立つ  使い慣れているし。「がんばっぺ」は男。「がんばっぺす」は女。	
	5.①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	良い  「気仙沼では、がんばりましょう、ってことなんだよ」とコミュニケーション(のきっかけになるのでは)?	どちらでもない	どちらでもない	作る時、地元の人には聞いているのだから、何とも言えない。良い悪いではなく、何とも言えないが、同じ言葉でも方言と共通語で含んでる意味が違うのでは。それを作り手の人が分かり切っていないで使っているのでは。
	5.②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	良い	良い  ③→地元の人の方が伝わる。何でも昔の言葉で話せる。	良い  ③→特にギャップも感じなく、(①も②も?)話しやすい。答えやすい。	地元の方がするのは良いが、方言抜きで。

	調査場所	仮設住宅	
	出身地・在外歴	出身地：宮城県気仙沼市	出身地：宮城県気仙沼市 在外歴：東京都
	性別	女	女
	世代	60代	60代
質問項目	1. あなたは、地元の方言が好きですか。	好き	どちらでもない  好き・嫌いというものではない。
	2. 支援者から方言で話しかけられたことはありますか。	ある たぶん、自然に覚えて上手に話している。 地域訪問の時は、ここの（気仙沼の）ことばで話しかけられる。（それに対して→）ことばが通じて良い。	ない  標準語。
	3. 方言を用いた復興スローガンに、（共通語のスローガンと比べて）親近感を感じますか。	感じる  方言の方が良い。	感じる  問いかけだけだと、どちらも同じくらいだが、優しさも含んでいる。お互い相手に同情する意味が含まれている。
	4. 方言を用いた復興スローガンは、（共通語のスローガンと比べて）目立つと思いますか。	どちらでもない  同じに見える。	目立つ  全国（規模）で何かあったら標準語。岩手・宮城・福島だったので、目立つかどうかではなく、「ここが（私らが）被災した被災地（被災者）なんだな」と思う。
	5.①地元以外の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	どちらでもない  別に、出身がどこでも同じ感じ。（地元の人と）一緒に作っているのでは。	良い
	5.②地元の方が方言を使用してスローガンを作ることについてどう思いますか。	どちらでもない	良い  ③→両者に違いなし。却って、優しさが含まれていて、思いやってくれたな、と思う。

## 別資料 D②・支援者の意識 (3.2.2)

調査場所	福祉センター			
出身地・在外歴	出身地: 岩手県盛岡市 在外歴: 宮城県仙台市、東京都	出身地: 長野県東御市 在外歴: 東京都新宿区、千葉県	出身地: 長野県東御市	出身地: 東京都
性別	女	男	女	男
世代	30代		50代	50代
滞在期間	13日目/? ※4月末～5月にも1週間。	10日目/14日間	5日目/16日間	
質問項目	1. あなたは、被災地の方言が好きですか。	好き	どちらかというと好き	好き
	2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。	ある	ない	ない
	3. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。	思う	どちらかと思う	思う
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	目立つ	目立つ	目立つ
	5.①被災地以外の人が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。	どちらかというと嫌悪感を持つと思う	好感を持つと思う	どちらかというと嫌悪感を持つと思う
	5.②被災地の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。	好感を持つと思う	好感を持つと思う	好感を持つと思う
	6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。	共通語	被災地の方言	共通語
		この人間ではないので。(「あなたの出身地の方言は?」の問いに対して)盛岡には今住んでいないので。	ただし、(被災地の方言を)理解している人が作る、(というのが必須条件)／自分で、長野から(長野にいる時に?)作るなら、「出身地の方言」で作る可能性も。	※励ましたい場合＝自分中心に考えて、相手に「頑張って!」と言う場合。「がんばりやしょ」／「被災地の方言」の場合は、相手のために作る＝相手の気持ちに添う

調査場所	福祉センター			
出身地・在外歴	出身地：兵庫県	出身地：兵庫県	出身地：兵庫県	出身地：福島県
性別	女	女	女	男
世代	50代	50代	50代	20代
滞在期間	2日目／14日間	2日目／14日間	2日目／14日間	4日目／？
質問項目	1. あなたは、被災地の方言が好きですか。	好き	好き	どちらでもない
	2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。	ない	使ってみたいと思う	ない
	3. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。	思う	思う	思わない
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	目立たない	目立つ	目立たない
	5.①被災地以外の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。	嫌悪感を持つと思う	嫌悪感を持つと思う	嫌悪感を持つと思う
	5.②被災地の人が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。	方言のニュアンスが分からないので、被災地の地元の方が方言を使った方が良い。それ以外の方が使うのはおこがましい	被災地の人の方が、方言のニュアンスが分かると思う。	被災地の人が被災者に向かって「がんばっぺ」(一緒に頑張ろう)と呼びかけるのは分かるが、被災地以外の方がこのような言葉を使って話すのはおこがましいと思う
質問項目	6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。	共通語	あなたの出身地の方言	共通語
			(どの相手に対するスローガンかによるが)標準語でもきちんとと言えるかどうか不安なので、使い慣れた自分の地元の言葉を使いたい	自分がよく使っている言葉で激励することができればいいと思う。



調査場所	ボランティアセンター			
出身地・在外歴	出身地：東京都文京区	出身地：長崎県佐世保市 在外歴：福岡県、海外	出身地：宮城県仙台市	
性別	女	女	男	
世代	40代	30代	20代	
滞在期間	2日目／2日間	14日目／21日間	2日目／2日間 ※以前は関上、また名取に40日。(以下、名取での話を調査)	
質問項目	1. あなたは、被災地の方言が好きですか。	どちらでもない	好き	どちらかというと好き
	2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。	ない	ある  「がんばっぺ」「いっくぺ」(かけ声)…(なぜ使ったか：現地のスタッフと話す時。相手に親しみを込めて)	なぜ→自分の言葉として
	3. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。	どちらかというと思う  暖かい感じ	思う  東北以外の場所で東北方言の「がんばっぺ」(が使われているの)も良いが、土地柄で暖かみを感じる。	どちらかというと思わない  部落差別みたいな。東北＝がんばっぺ、みたいな。普段から自分が使ってるから分からない。
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	どちらかという目立つ  ※「目立つ」～「どちらかという目立つ」の回答。／二度見する感じ。何だろう？と気になる。	どちらかという目立たない  どちらもがんばろうという気持ちは伝わる。意味の伝達は同じなので「変わらない」	目立つ  どこの地方の言葉が興味
	5.①被災地以外の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。	どちらかという好感を持つと思う  ※「好感を持つと思う」～「どちらかという好感を持つと思う」の回答。／歩み寄りと捉えられるか、馴れ馴れしいと捉えられるか、どっちだろう？	どちらかという好感を持つと思う	嫌悪感を持つと思う
	5.②被災地の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持つと思いますか。	好感を持つと思う  ③→②の方がインパクトが大きい。自然な流れ。大阪の人が違うと(他地域の人の話す「大阪弁」が自分の話す本当の大阪弁と違うと)イラッとするらしいが、同じかどうか？	好感を持つと思う  方言に対しての使い方。バカにするのではなく、そのままの方言を出すなら良い。笑いにするのがなければ。メディアで見る「笑いを取るための方言」のイメージによる	好感を持つと思う  本人も普段から使っている言葉だから。①は意味分かってるのか？わざと茶化してる？(と、受けをとる人もいるのでは？)
	6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。	共通語  被災者にも分かってもらいたいし、それ以外の地域の人にも幅広く分かってもらいたいから。／(被災者へのメッセージ、と特化すると)「被災地の方言」と回答。	「被災地の方言」(ここに来て、ここで作る場合)／「共通語」(地元に戻って作るなら)	自分のことば→どこの人からの激励が分かるから。／(他の地域が被災した場合は？)その場合でも自分の出身地の方言。

調査場所	ボランティアセンター		
出身地・在外歴	出身地: 三重県	出身地: 東京都	出身地: 宮城県仙台
性別	男	男	男
世代	30代	30代	10代
滞在期間		2日目／2日間	2ヶ月／？
質問項目	1. あなたは、被災地の方言が好きですか。	どちらでもない	好き
	2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。	東北らしい	好き
		ない	ない
		2日しか滞在しなかったが、さらに滞在するしたら自然と方言が移ってしまうかもしれない	
	3. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。	思う	好き
		どちらでもない	思う
		スローガンで「親近感」を表すこと自体は難しいのでは。	自分も東北の人間なので、温かみを感じる。元気になると思う。
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	どちらかというと目立つ	目立つ
		目立たない	目立つ
		共通語の方が馴れている言葉だから。	
	5.①被災地以外の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持っていますか。	どちらかというと嫌悪感を持つと思う	嫌悪感を持つと思う
		嫌悪感を持つと思う	好感を持つと思う
		被災地以外の方が被災地の方言を使うと、「一緒にがんばろう」という意味でなく、他人ごとのように感じる。被災地の中と外を分けてしまい、壁を作ってしまうのではないか。	別の地方の人が被災地の方言を使おうと努力することは、親近感を持てると思う
	5.②被災地の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持っていますか。	好感を持つと思う	好感を持つと思う
	6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。	あなたの出身地の方言	被災地の方言
		共通語が二番目	

調査場所	ボランティアセンター		
出身地・在外歴	出身地:愛媛県 在外歴:北海道、大阪府、兵庫県	出身地:岡山県 在外歴:大阪府、兵庫	出身地:宮城県仙台市
性別	男	男	男
世代	70代	70代	60代
滞在期間	2日目/?	2日目/?	2日目/2日間
質問項目	1. あなたは、被災地の方言が好きですか。	好き	好き
	2. あなたは、被災地の方とのコミュニケーションに被災地の方言を使うことがありますか。	ない	ある  気仙沼も仙台も変わりはない
	3. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)被災者に親近感を感じてもらえると思いますか。	思わない	思う  地元の言葉だから普通の言葉(共通語)よりも励まされる
	4. 方言を用いた復興スローガンは、(共通語のスローガンと比べて)目立つと思いますか。	目立つ	目立つ
	5.①被災地以外の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持っていますか。	嫌悪感を持つと思う  自分たちも関東の人に中途半端に関西弁を使われると嫌な感じがする。それと同じではないか。方言は真似するべきものではない	嫌悪感を持つと思う
	5.②被災地の方が方言を使ってスローガンを作った時、被災者の方は好感を持っていますか。	好感を持つと思う	どちらかというと好感を持つと思う  方言は文化。地域の人には愛着を持っている。その地域の方が自分の地域の方言を使うのは当然。
	6. あなたが、被災者を激励するスローガンを作るとしたら、どのことばを使って作りますか。	共通語  被災地の方言を詳しく知らないので、適切な方言を選べない	被災地の方言  普段「がんばっぺ」と使う言葉なので

# 支援者の方言理解のために

坂 喜 美 佳

(担当者：坂喜・小原雄次郎・工藤千桜秀・青木佳世・小林隆)

## 1 はじめに

東日本大震災により、被災者が被災地域から避難し、支援者が被災地域へと駆けつける中で、方言に起因する摩擦やトラブルが発生する可能性がある。私たちは震災に伴って被災地域で生じる方言に関わる問題とそれを回避・解消するための方策を検討した。

## 2 方言の社会的問題

東日本大震災に伴い、支援者の被災地への流入と被災者の被災地からの流出という大きな二つの流れが起こっている。その流れに伴い、方言に関わる社会的問題が生じる可能性がある。以下では「①被災地において見られる方言の問題」と「②住民の避難に伴う方言の社会問題」に分けて、方言の社会的問題について考察する。

まず「①被災地において見られる方言の社会問題」について考える。大震災後、被災地には県内外から自衛隊や様々な救護隊、医療関係者、ボランティアが支援者として流入し、がれき撤去や医療活動に従事している。被災地の外から来た支援者が、被災地で活動に当たる中で、地域住民の使用する方言を理解できない、または誤解することによる問題が生じる可能性がある。ここで生じる問題は、活動内容の違い（医療・行政・がれき撤去等）や活動期間の違い（長期・短期）によっても質を異にすると考えられる。

次に「②住民の避難に伴う方言の社会問題」について考える。震災により家屋を失った・居住が不可能になった被災者が、被災地を離れて県内外へと、集団または個人で避難している。次ページ図1は総務省統計局による岩手県、宮城県及び福島県の3～5月期の転入・転出状況を示した図だが（住民基本台帳人口移動報告 東日本大震災の人口移動への影響 <http://www.stat.go.jp/info/shinsai/pdf/gaiyou.pdf>）、これを見ても被害の大きかった3県から3～5月期だけで3万人を超える人が他県へと移動していることがわかる。このような移動が起こると、被災者の用いる方言と、避難先で用いられる方言との違いから、コミュニケーション上の摩擦や偏見によるトラブルが起こる可能性がある。ここで生じる問題は、集団避難であるか個人避難であるか、避難先が隣接地域であるか遠方であるかによっても質を異にすると考えられる。

## 3 方言の社会的問題を回避・解消するための方策

前節で考察したように、災害時に起こる方言の社会的問題は、状況により多様に変化する。私たちは、これらの問題全てに対処しうる汎用的な方策を思案しつつも、「①被災地において見られる方



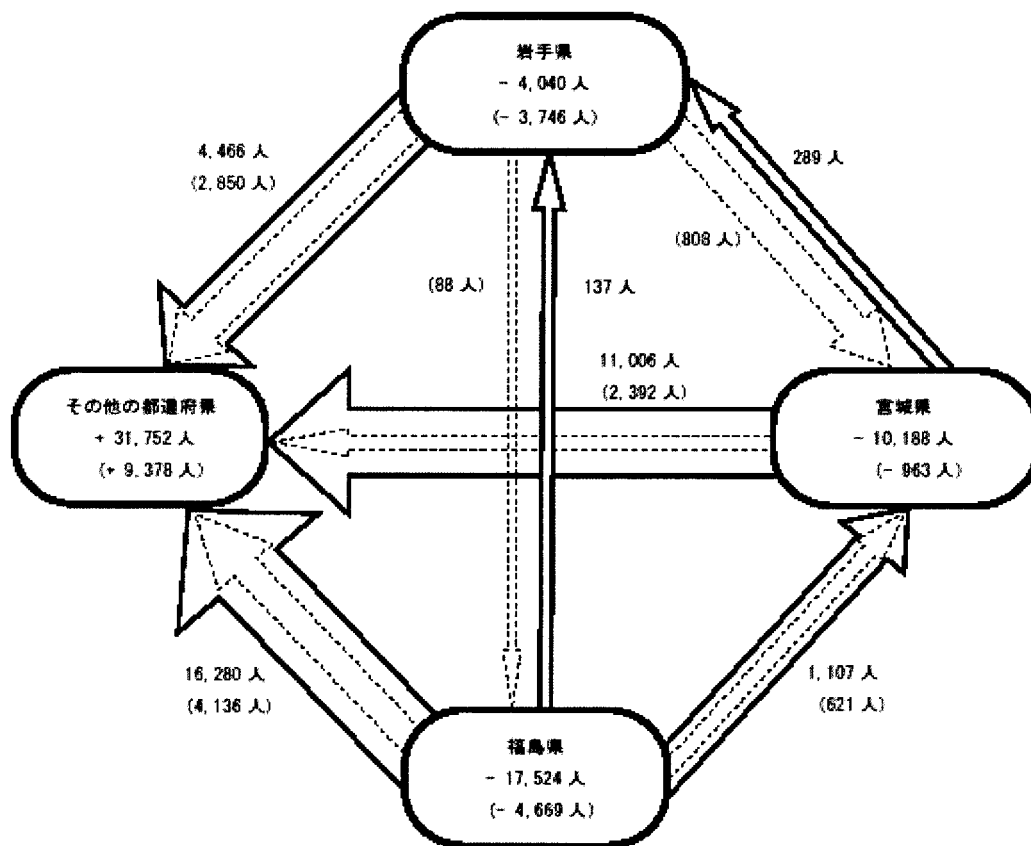


図1：岩手県、宮城県及び福島県の転入・転出状況  
 (平成22年3~5月期、平成23年3~5月期)

言の問題」を中心として考えることにした。その理由としては、「②住民の避難に伴う方言の社会問題」について考える際には、避難の形態、その人数、避難場所など避難先の全体的な状況を把握することが必要であり、それは現時点では困難であることが挙げられる。そのため、今回は「②住民の避難に伴う方言の社会問題」については断念することにした。この問題については、中長期的に取り組んでいかなければならない問題であろうと考える。

また、「①被災地において見られる方言の問題」を考える際にも、被災地においても過度なストレスを負っている被災者に対して調査を行うことは、さらに精神的な負担をかけることになるため、今後その方法を慎重に検討することにして、今回は行わなかった。このため、今回は被災地での支援者に関わる社会的問題について考えることとし、被災地で起こっている方言の社会的問題に対する、現時点で実現可能な具体的な策を提出することにした。

## 4 先行研究

被災地での支援者に関わる方言の社会的問題について、具体的な対応策を考えるため、関連する先行研究に当たった。しかし、災害等に伴う方言の問題や、ボランティアと方言についての先行研究は、管見の限り見つからなかったため、現段階で比較的研究が進められている、医療と方言に関連する先行研究を参照した。医療に関わる支援者も多く滞在していると考えられ、また、ノンネイティブとネイティブの関係についても取り扱っているテーマであり、現在の被災地の状況との類似点が多くあると考えられるからである。

### (1)日高(2007)「福祉社会と方言」

日高氏は、医療等の現場において、「方言」は自分にとって思いをいちばん詳細かつ的確に表現できるものであり、特に高齢者ほど、またせつば詰まったときほどそうなりやすい、と述べている。そのような認識に立てば医療等の従事者が「この地域でしばしば聞かれる代表的な方言については、ひととおりその意味やニュアンスが理解できるようになろう」という心構えを持つことが大切であると、日高氏は述べている。

その際の注意点として、「地元出身でない場合は方言を無理に使わないこと」「方言には地域差と年代差があることを常に意識すること」とも述べている。

また、患者・家族たちの発言に方言が出やすいのは、①感覚・感情表現に関する語、②身体部位を表す語、③怪我や病気を表す語、④症状・動作などを表す語、であり、「各語彙にはその語と組み合わせがよく使われる言い回しや言い方を添えて、できるだけ具体的な用法がわかるようにする」ということが必要であるとも述べられている。

### (2)今村他(2010)「医療・看護・福祉現場における方言教育」

今村他(2010)の研究では「ノンネイティブの医療・福祉従事者が患者・施設利用者の話す方言が理解できないために、訴えを理解できずに事実そのものを取り違えたり、意思疎通・コミュニケーションが円滑に進まない事例がある。」と述べられているように、被災地へ入った医療関係者やボランティアと被災者がトラブルに陥ることは十分にありうることだと思われる。

この問題は、互いに共通語を話せば解決するというわけではない。たとえ共通語を話しているつもりでも、「気づかれにくい方言」を用いている場合があるという。津軽弁には「コマル（前屈みになる）」という方言があるが、治療や洗髪の際など医療・福祉従事者に「コマってください」と言われても、津軽弁以外の話者である患者は意味が分からず文字通りに困ってしまうという。

### (3)今村(2011)「医療と方言」

今村氏は医療現場で方言が果たす役割としては、①医療者側が患者の症状や状態について認識する「いつから・どこが・どのように」というような「事実認識」に関わる場合や、②医療者から患者への「情報伝達」に関わる場合という、意味の伝達のレベルと、③医療者が患者との関係性を構築するための「コミュニケーション手段」として用いる場合、という配慮のレベルがあると述べている。

③コミュニケーションとしての方言の役割について注目すると、コミュニケーションのスタイル

そのものの地域差について考慮することが必要であると述べている。例えば、敬語の運用や、「痛くないですか？」のような否定疑問文での問いかけに対して、痛くても痛くなくても「はい」にあたる肯定的な表現形式を用いる地域と「いいえ」にあたる否定的な表現形式を用いる地域が存在することを指摘している。そうした地域差があることに医療関係者が気付いていないのが現状である。

#### (4)山浦(2011)「医療の現場とことば」

著者は医者であると同時に『ケセン語大辞典』(岩手県気仙地方の方言辞典)の編者であり、地方医療に従事した経験から、方言の有用性や、方言によってもたらされる誤解について、ケセン語の具体例をもとに述べている。

方言が診断の役に立つと例として、方言の表現の豊かさを挙げている。ケセン語などの方言には身体部位表現や病名・症状名、擬態語が豊富であり、身体部位表現によっては患者が標準語名を知らないこともある。また、多彩な擬態語によって診断のあらましが分かると述べている。

方言が誤解を招く例として、ケセン語では「昨日の夜」が昨夜ではなく一昨夜を示すことや、否定疑問「頭が痛くないか」に対する返答が、英語と同様に、「はい(痛い)」・「いいえ(痛くない)」となることがあり、標準語の形式と混在している点を挙げている。

また、方言を使うことで対等の人間同士の交わりがしやすくなると述べる一方、方言には敬語の体系が複雑に発達しているものがあり、しっかり覚えないと品位を欠くこともであると述べている。

以上の文献から、方言には「詳細な意味の伝達」と「コミュニケーション手段」という重要な役割があることが確認された。しかし、医療従事者の方言の使用に際しては、日高(2007)は「地元出身でない場合は方言を無理に使わないこと」を注意点として挙げているが、山浦(2011)は「方言を使うことで対等の人間同士の交わりがしやすくなる」と述べている。その点は慎重な判断が必要である。

これらの医療と方言に関わる先行研究から、やはり支援者が被災地に流入する時には、何らかの方言に関する問題が起こることが予想される。そのような問題に対する解決策として、方言を理解してもらうために何かをしようと考えた。震災という緊急時であり支援者向けの方言解説冊子を作るなど時間の要すものは作成できない。方言講座を開こうにも支援者が各地に散らばっていることから困難である。そこで、支援者と被災者のコミュニケーション手段になるような、簡単な方言を記載したパンフレットを作成することにした。

具体的な被災地としては、過去に当国語学研究室の方言調査でご協力をいただいた気仙沼市を例に挙げる。パンフレットの作成手順としては、事前に気仙沼方言の特徴を捉え、次に現地でインタビュー調査を行い、それを元にパンフレットの形にしていく、というものである。

## 5 事前調査：気仙沼方言の特徴

気仙沼での調査を行うにあたり、方言の特徴に起因する社会的問題をある程度予測するため、方言区画上での宮城県の位置および宮城県方言の特徴について加藤(1992)等で確認した。以下の a~d は、それを簡単にまとめたものである。

### a. 気仙沼方言の宮城県内における位置

宮城県は、全県下ほぼ等質の方言が用いられているが、アクセントが無形か有形かによって大きく南北に二分するのが妥当と考えられる。さらに、それらの中の小区画は、語彙や文法の一部の境界として、県北半を海岸の①と内陸の②に、県南半を仙台付近の③と南方の④とに分けられる。しかし、語彙分布に関しては仙台圏や県中央では消えてしまったものが、①や②の西北端の山間部と④の南端の山地に共通のものが残存分布している場合もあり、やはり県内方言の南北分割は難しく、歴史的・地理的一体性を認めざるを得ない。宮城県の方言には、県方言の特質性を指摘できる。

{	県北半方言	{	①三陸沿岸、北上川以東
			②県北の内陸および石巻市付近
{	県南半方言	{	③仙台市付近、松島町、黒川郡から名取郡・岩沼市・川崎町まで
			④阿武隈川河口以南、白石市付近

### b. 音韻

- ・イ段音はウ段音に、ウ段音はエ段音に近く聞こえる。いわゆる「ズーズー弁」である。  
音が近いが一応区別があるもの：キとク、ニとヌ、ヒとフ、ミとム、リとル  
区別がなく後者に統合されるもの：シとス、ジとズ、チとツ、シュとス、ジュとズ、チュとツ
- ・母音単独のイとエは区別がなく、エに統合されている。
- ・連母音のアイ・アエに当たるものは融合して[e:]となるが、エイは[e:]で区別される。
- ・拗音キャは[kija]のように割って発音される。
- ・ユに関する拗音がイ段の直音に発音される傾向がある。  
例) キュ→キ、ニユ→ニ
- ・カ行・タ行は有声音母に挟まれると有声化し、ガ行・ダ行のように聞こえる。  
例) 「開ける」→「アゲル」、「的」→「マド」
- ・キの音の口蓋化が極端で、チに近く聞こえることがある。
- ・セの音がシェよりもヒエに近く聞こえる。
- ・拍(モーラ)方言である。
- ・無型アクセント地域である。

### c. 文法

- ・意志・推量の助動詞「ベー／ッペー」  
例) 読ムベー、降ッペー、見ッペー、来ッペー
- ・丁寧の助動詞「ス」  
例) 行きス
- ・断定の助動詞「ダ」の丁寧形は「デガス」

- ・過去・完了の助動詞「タ」は共通語よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認にも使われる  
例) 居タ (今ここにちゃんと居る)、来タ (今来つつある)
- ・回想・大過去の「タッタ」:  
例) 居タッタなあ (過去の思い出)、その前からちゃんと居タッタ (大過去)
- ・格助詞「サ」はへ格の全部と、ニ格の一部に対応する。  
例) 机の上サ置く、\*机の上サある、遊びサ行く、\*夜中サ目が覚めた
- ・間投助詞「シャ」の多用  
例) そしてシャ、行ったらシャ
- ・終助詞「チャ・ベッチャ」強調・当然・働きかけ  
例) 行ったッチャ、だめだベッチャ

#### d. 語彙など

「オチル」(降りる) 「ナゲル」(捨てる)、「セツナイ」(うるさい)  
「キマリ」(終わり) 「コワイ」(疲れた)、「ワカンナイ」(だめだ)

## 6 気仙沼市インタビュー調査

次に、気仙沼市に來られている支援者の方々へのインタビュー調査を行った。調査概要は以下の通りである。21名の支援者から回答をいただくことができた。

調 査 日 : 2011 年 6 月 18 日

調 査 場 所 : 気仙沼市役所・気仙沼ボランティアセンター・気仙沼市総合体育館  
気仙沼高校体育館・面瀬中学校体育館

回 答 者 数 : 21 名 (男性 10 名・女性 11 名)

支 援 内 容 : 市役所職員 7 名、介護師 5 名、保健師 4 名、ボランティア 5 名

出 身 : 栃木県、群馬県、東京都、神奈川県、新潟県、奈良県、兵庫県、広島県

調 査 方 法 : あらかじめ作成した調査票(資料 1)を元に、質問事項を確認するインタビュー調査を行った。インタビュー結果の詳細については資料 2 参照。

調査の結果、資料 2 からわかるように、発音の聞き取りにくさや、意味の分からない動詞があること、端的な言語行動など、会話が難しいという訳ではないが、困ってしまうと言うことは多々あるようだということが分かった。これらの意見を取り入れつつ、聞き取りにくさや、分からない動詞の解説などをパンフレットに盛り込むことにした。





気仙沼市役所



ボランティアセンター

## 7 方言パンフレット作成上の注意点

次に、気仙沼で行ったインタビュー調査の結果をもとに、パンフレットの作成に取り掛かった。パンフレットの対象である“支援者”には、看護師・保健師からボランティアまで幅広く射程にいられた。そのためパンフレットの内容は、気仙沼方言に関する基本的な解説を中心にして、各職業上の専門的な内容も加えることにした。また、地元の人とのコミュニケーションに役立ててもらえるような挨拶表現も追加した。記述に当たっては、一般の人にも理解できるように専門用語は使わず、平易な言葉で説明するように心がけた。また、見やすさや親しみやすさを考慮して、可能な限りイラストも入れた。以下ではパンフレットについて具体的に述べる。

まず、気仙沼方言の特徴として「発音」、「文法」、「間違いやすい単語」の三項目で説明した。「発音」の項目では、いわゆるズーズー弁の特徴、有声化、鼻音化、口蓋化について解説した。これらの項目を挙げたのは、インタビュー調査でも多くの支援者から、聞き取りにくいとの回答を得ていたためであり、また、ある支援者からは、音声上の特徴を事前に知っていれば良かったとの声も聞かれた。「文法」については、格助詞の「サ」、意志推量の「ベ／ッペ」、指小辞の「ッコ」を扱い、できるだけ文章による解説を避け、例文で示すようにした。「間違いやすい単語」の項目では、共通語と語形が似ていて、使用頻度も高い「ナゲル」、「ダカラ」、「コワイ」、「ワガンネ」を挙げた。この項目を設けたのは、これらの方言が共通語と類似した形をしているために、却って誤解を招きやすいと考えたからである。

さらに、支援者が積極的に使うことのできる方言として、挨拶表現を挙げた。支援者が方言の積極的に用いるべきかどうかについては、先行研究においても意見の分かれていたところである。今回は、利用しやすく、間違った使い方をしにくいであろうと考えられる、挨拶表現に限定して掲載することにした。

また、看護師や保健師向けには、菅原(2006)に基づき、人体呼称図と病気や気分を表す語を提示した。ボランティア向けには、活動で用いる道具の方言名称を載せた。

作成したパンフレットの草案は気仙沼市の関係各所に送付し、チェックしていただき、コメント

をいただいた。指摘された内容を反映させ改訂し、最終版(資料 3)を 5000 部印刷した。印刷完了後、気仙沼市役所、ボランティアセンター、三陸新報社、観光案内所、避難所となっている総合体育館、気仙沼高校体育館、気仙沼中学校体育館、市民会館、支援者の方が泊っているホテル等に配布した。

## 8 今後の課題

パンフレット配布時には支援者や地元の方から「こういうものがあると助かる」という声が聞かれた。方言の正確な理解とまではいかななくても、支援者と被災者のコミュニケーションの手がかりとなり、少しでも方言による社会的問題を取り除くことができれば幸いである。今回作成したパンフレットの中には、パンフレットに対する意見・感想を集めるためのアンケートを挟んだ。このパンフレットの有用性はそのアンケート結果によって明らかになるであろう。現時点でも各所から連絡があり、「今度被災地へ行くのでパンフレットが欲しい」「もっと多くの方言を取り上げてほしい」、他の地方から「参考にしたい」等の声も聞かれた。これらの反応から、方言の正確な理解に役立つとまではいかなくとも、被災地でこのようなパンフレットを作成することは有用であり、実際に方言研究が被災地で役に立つことを示すことができたと言えるであろう。

今回の試みでは、支援者のニーズをもとに原案を作成し、地元関係者の意見や感想を取り入れて改訂を行った。つまり、被災地での実用性を重視しつつ、地域住民の感情や方言意識に十分配慮して作成を進めたのである。人々の交流にパンフレットを役立ててもらうためには、支援者と地域住民の二方向からのフィードバックが必要である。今後は更に内容で改善すべき点を検討していくとともに、この試みが一つの見本となり、気仙沼だけではなく他の地域でも実現可能であるかを考えていくことが今後の課題として挙げられる。

## 文 献

今村かほる・岩城裕之・工藤千賀子・友定賢治・日高貢一郎(2010)「医療・看護・福祉現場における方言教育」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』

今村かほる(2011)「医療と方言」『日本語学』30・2

加藤正信(1992)「宮城県方言」平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』明治書院

菅原孝雄(2006)『けせんぬま方言アラカルト 増補改訂版』三陸新報社

日高貢一郎(2007)「福祉社会と方言の役割」小林隆編『シリーズ方言学 3 方言の機能』岩波書店

山浦玄嗣(2011)「医療の現場とことば」『日本語学』30・2

医療・介護と方言 研究プロジェクト(<http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/hoken/index.html>) (2011/09/25 アクセス)

総務省統計局・政策統括官(統計基準担当)・統計研修所「東日本大震災関連情報－総務省統計局・政策統括官(統計基準担当)の統計調査等関連の取り組み(<http://www.stat.go.jp/info/shinsai/index.htm>) (2011/09/25 アクセス)

## 震災時の方言アンケート

No.	お名前	ご出身地	性別	年齢
			男 ・ 女	
援助の内容				
援助の期間(いつから・何回目)		東北に来たことは	初めて ・ ある	

## A.具体的なエピソード

地元の人と会話する機会はあるか  
 どんな人と話をしたか(お年寄り、若者etc)

--

## B.具体的なことばについて

東北に来て知った・おもしろい・わからなくて困ったことば  
 最初はわからなかったが、わかるようになったことば  
 実際に使ってみたか、使った時の地元の人の反応は

--

## C.言語行動全般について

この土地の人の特徴はあるか  
 自分の地元の人とこの土地の人で違いを感じるか

--

調査者:

調査場所:

## 資料2 インタビュー調査結果

場所:気仙沼市役所	回答内容:
出身地:東京都江戸川区	・話すスピードがかなり速い。
性別・人数:男性2名	・気仙沼職員として名乗るので、気仙沼の人と思われて向こうのペースで話される。しかし意思疎通ができない程度ではない。
期間・日:6/6～6/20	・サ行の名称が聞き取りにくい。
仕事内容:地元の人と電話で対応(高齢者が中心)	・「しびたち(鮎立)」を「すびたち」という。
	・地名の読み方が難しい上に聞き取れない。
	・地名の一覧表はあるがすぐに探し出せない。
場所:気仙沼市役所	回答内容:
出身地:長野県東御市	・「しびたち」を「すびたち」という。
性別・人数:男性1名	・接続詞をあまり使わない。名詞と動詞しか使わない。
期間・日程:6/7～6/21	・端的で単刀直入。
仕事内容:民間の仮設住宅に関する電話対応(若い人が中心)	・聞き取りにくいわけではない。
	・あれはこうだ、ああだと言った話し方をする。
場所:気仙沼市役所	回答内容:
出身地:東京都江戸川区	・何を言っているかわからないが文脈から推測すれば大丈夫。
性別・人数:男性4名	・「○○さんもあそこにはまっていますよね」と言われ、「はまる」が分からなかったが、「配置する」の意味か？
期間・日程:不明	・発音とイントネーションが違うが意味が伝わらないと言うまでではない。「ありがとう」のイントネーションが違う。被災者の心情を考えると相手のイントネーションに合わせたほうがいいと考える。「コ↑ンニチワ・シ↑ヤクショデスー」とイントネーションをまねたことはあるが、方言をまねたことはない。
仕事内容:保健課の窓口、高齢者対応	・語尾に「さ」をつける。(格助詞の「さ」・終助詞の「さ」)
	・「ぼうっこ」「ひもっこ」と言われた時、相手が紐を持っていたのでわかった。
	・ぼん！と飾り気のないことばを言うのでこちらで補足することがある。「AはBだ」のように、窓口で用件をぼんと投げかけられる。
	・こちらに来て「がんばろう」を「がんばっぺし」というと知った。
	・関西弁よりも入りやすい。
場所:ボランティアセンター	回答内容:
出身地:広島県	・早口でぼそぼそしゃべるが失礼になるので聞き返さない。
性別・人数:男性1名	・炊き出しなどで一緒に活動していると二週間ほどすると慣れてくる。
期間・日程:2週間	・地元の人が少ないフレーズでゆっくり話してくれるようになる。
仕事内容:資材班ボランティア	・「なげる」が「捨てる」だと最初は分からなかった。
	・年配の方には聞き返すことが申し訳ない。
	・年配の方はズーザー弁の語尾。
	・話し方がフレーズに区切れるというよりは流れるように話す。「～～だしー」
	・フレーズなので単語を聞き取れない。
	・語尾に至るまでが分かりにくい。
	・特に男性の声が低くて聞き取りにくい。
	・くぐもっている。口の開き方が小さい。
	・地元の人同士の会話は早くて分からない。
	・地元の人でも男女差や地域差があるようだ。山の方はおだやかで優しいが、漁業関係者は声が大きくあらくて通る。
	・どうぞどうぞといった家族的な優しさではなく、気持ちのサービス。懐に入ると気を使わなくていい。

## 資料2 インタビュー調査結果

場所:ボランティアセンター	回答内容:
出身地: 栃木県	・地元の人はマスクをしているので声がぼそぼそしていて聞き取りにくい。
性別・人数: 男性1名	・年配の人の方言はさっぱりわからない。
期間・日程: 不明	・機材の名前が異なるが覚えれば大丈夫。
仕事内容: 資材班ボランティア	・一輪車を「ネコ」という。 ・パールを「バリ」という。「バリ追加で」と言われると分からない。 ・レーキを「クマデ」という。手かぎのことを「ノンコ」という。 ・普段使わない道具ほど呼び名が違う。
場所: 総合体育館	回答内容:
出身地: 神奈川県横浜市	・今は落ち着いているので教えてくれるけど、(住民同士が)もめているときは聞き取れない。
性別・人数: 女性1名	・方言で話されて理解できず、足の先が曲がっていることをわざわざ足を出して見せてくれた。
期間・日程: 4日目	・つられてこちらも同じアクセントを用いることもある。
仕事内容: 介護師	・「おはようございます」と言うと、「おはよう」と返してくれない。「違うところに来たんだな」と思う。 ・朝に職員が「おはよう」と言うと、地元の方は「今日ははやいねー、今来たのー」といきなり本題に入る。 ・方言が分かりにくいということはない。
場所: 総合体育館	回答内容:
出身地: 奈良県	・言葉尻がわかりにくい。
性別・人数: 女性1名	・声がこもる。なんとなく推測して聞く。
期間・日程: 5日目	・体の部位は手で示せるので問題はない。
仕事内容: 介護師	・歯が抜けている方のしゃべり方。ngaのような。 ・100のうちおっしゃっていることの60～80いかないくらいは分かる。聞き返さなくても話分かる。 ・話すテンポが速い。 ・ズーズー弁が聞き取りにくい。 ・ヒガシになる(前もって知っていれば良かった)。
場所: 総合体育館	回答内容:
出身地: 兵庫県神戸市	・口の動きの様子、口の動きを観察した。
性別・人数: 女性1名	・「がんばっぺ」を使ってみた。
期間・日程: 10日目	・単刀直入で飾り気がない。
仕事内容: 介護師	・分かりやすい。回りくどい言い方をしない。自分の思いを述べる。 ・「～サ」の意味が分からない。語尾に「～サ」がつく「イクデバサ」をよく聞く。 ・ぱっぱと単刀直入に言う。「どんなん？」と聞くと一言で答えてくれる。 ・会話が分かりにくい。
場所: 総合体育館	回答内容:
出身地: 広島県	・「ツグ」の意味が分からない。前後から推測してなんとか分かった。
性別・人数: 女性1名	・「かまってくれるな」という人もいれば、よくしゃべる人もいる。「おかわりないですか」と聞くと地元の人は「いやない」と答えて会話が簡単に終わる。
期間・日程: 4日目	
仕事内容: 介護師	
場所: 総合体育館	回答内容:
出身地: 奈良県	・六割くらいしか理解できないが、聞き返せない。
性別・人数: 女性1名	・親しくなると方言が早い。早口になってなおさら分からなくなる。
期間・日程: 4日目	・「しんどい」「～はりましたか」などと関西の言葉を口に出してしまっ、慌てて言い換えることがある。
仕事内容: 介護師	・相手にも気を遣わせていそう。 ・思わず「イガッタ」と叫んだ(その土地のことばがうつった)ことがある。



## 資料2 インタビュー調査結果

場所:面瀬中学校体育館	回答内容:
出身地:奈良県	・聞き取りにくい。文脈でだいたいわかる。分からなかったら聞き返すことがある。
性別・人数:女性2名	
期間・日程:4日目、5日目	・若い人には方言が全然見られない。
仕事内容:保健師	・救急車が「チューチューシャ」になる。 ・「あかさたな」発音の行が違ふ。 ・子どもたちを「ワラシコ」と言う。 ・発音が分かりにくい。 ・聞き取りにくいのは、高齢ないし疾患のせいなのかもしれない。 ・特に医療で分からない言葉はない。 ・「ナゲル」はまだ聞いたことがない。むしろ自分たちは「ホカス」と言う。
場所:ボランティアセンター	回答内容:
出身地:奈良県	・「お世話さまです」がいい言葉だと思う。
性別・人数:男性1名	・意外に共通語を使う。
期間・日程:3日	・おっとりしていて、関西のノリについていけるので違和感はない。
仕事内容:ボランティア(泥上げ)	
場所:ボランティアセンター	回答内容:
出身地:神奈川県	・「なげる」は、最初は分からなかった。
性別・人数:女性1名	・考えると分かることが多い。そこまでひどくなかった。
期間・日程:5日(2回目)	・丁寧だ。
仕事内容:ボランティア(廃材の移動・材木を切る)	
場所:ボランティアセンター	回答内容:
出身地:群馬県	・ほとんど聞き取れないが、なんとなく分かる。
性別・人数:女性1名	・早く感じる。
期間・日程:10日目(3回目)	・ズーズー弁は特にこもっているように感じる。
仕事内容:ボランティア(壁をはがす・洗いもの)	・「なげる」や「おだづなよ」(お母さんが子どもを叱る言葉?)を聞いた。
場所:気仙沼高校体育館	回答内容:
出身地:新潟県柏崎市	・言葉の語尾がもごもごしていて、早口。
性別・人数:女性1名	・聞き取りにくいけど、なんとなく意味は通じている。(確認しながら話している。)正確に聞き取れているかは怪しい。
期間・日程:2日目	
仕事内容:保健師(お年寄りのかた10人前後と面会)	・あまり口を開けない印象。50歳くらいの方までは(聞き取りは)大丈夫。 ・他県の人間と分かってお話して下さる。 ・他県の人間同士だとなまっているかもしれない。女性の方が分かりやす ・ドアを開けていきなり「血圧ー」と言いながら入ってくる男の人。いきなり本題に入るような喋り方をされる。「役割分かってるでしょ」といった感じで。
場所:気仙沼高校体育館	回答内容:
出身地:新潟県佐渡市	・なんでも「どーも」ですませる。あいさつとしては日中すれ違ふと「どーも」と返してくれる。
性別・人数:女性1名	
期間・日程:2日目	・あいさつは「おはよう」と言えば「おはよう」と返してくれる。
仕事内容:保健師(お年寄りのかた11人前後と面会)	



### このパンフレットをご覧ください方へ

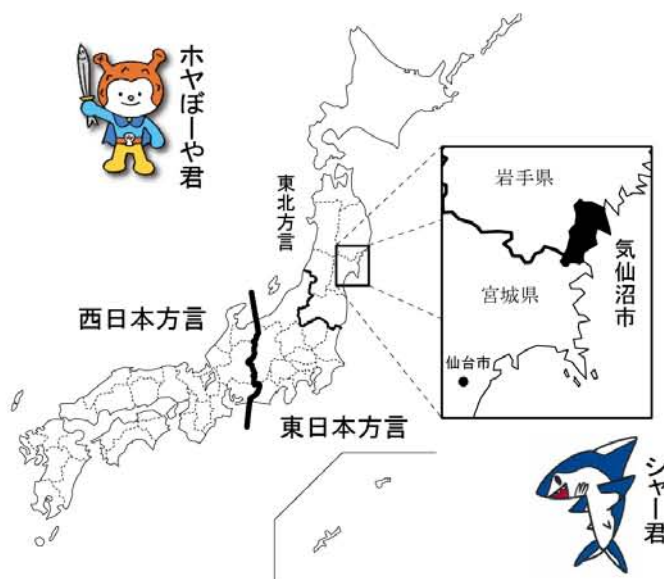
このパンフレットは、主に気仙沼地方の外から来られたボランティアや医療・行政関係者といった支援者の方々を対象に作成されています。現地の方との交流の中で、初めて聞く方言に戸惑ったこともあるのではないのでしょうか。気仙沼の方言をより理解するために、このパンフレットを役立てていただけたらと思います。

なお、このパンフレットは現地で行った支援者の方々へのインタビュー調査の結果をもとに、気仙沼の方言について簡単に紹介しています。

### 気仙沼方言の位置

気仙沼で話される方言は、全国から見ると東北地方の方言の特徴を持っています。

右の図のように、気仙沼は宮城県の北東部に位置する市で、岩手県南部の沿岸地域と地理的に連続しています。そのため、方言の特徴としては宮城県の言葉の他に、岩手県南部の沿岸地域の言葉とも共通した面があります。



# 気仙沼方言って、どんな方言??

気仙沼の方言にはどんな特徴があるのでしょうか。  
分かりにくい点、注目すべき点についてご紹介します。

## 1. 発音

### ( 1 ) シガスに聞こえる

シはスに、チはツに、ジはズに聞こえます。いわゆる「ズーザー弁」です。

「獅子(しし)」 }  
「煤(すす)」 } 「スス」  
「寿司(すし)」 }

「知事(ちじ)」 }  
「地図(ちず)」 } 「ツズ」  
「辻(つじ)」 }

気仙沼の地名だと、  
「鹿折(ししおり)」が「ススオリ」  
「鮎立(しびたち)」が「スビダツ」  
に聞こえることがあるかも。



他にも、シュはス、ジュはズ、チュはツに聞こえます。  
「手術(しゅじゅつ)」→「スズツ」

### ( 2 ) カ行・タ行がガ行・ダ行に聞こえる

たとえば「開ける」は「アゲル」、「的」は「マド」のように聞こえることがあります。ちなみに、共通語の「上げる」や「窓」など、もともとの濁音は鼻にかかって聞こえます。

「開ける」→「アゲル」  
「的(まと)」→「マド」

「上げる」→「アッゲル」  
「窓(まど)」→「マッド」

支援者の方へのインタビューで得られた、音がこもって聞こえるという感想は、この鼻濁音によるものだと思います。シャー。



### ( 3 ) キガチに聞こえる

キガチに聞こえることがあります。

「柿(かき)」→「カチ」  
「来た(きた)」→「チタ」

支援者の方から聞いた話だと、「救急車が「チューチューシャ」に聞こえた。」という体験談があったよ。



## 2. 文法

( 1 ) 「～サ」( 共通語 「～に・～へ」 )

- 学校サ行く。 ( 学校へ行く。 )
- 仕事サ行く。 ( 仕事に行く。 )
- × 本サ買う。 ( 本を買う。 )

「～に」や「～へ」を、気仙沼では「～さ」と言うよ。「～を」の場合は使えないので注意、シャー。



( 2 ) 「～ベ・～ッペ」( 共通語 「～だろう[推量]」「～しよう[意志]」 )

- ・明日、雨だべ。 ( 明日雨だろう。 )
- ・みんなでがんばッペ  
( みんなでがんばろう。 )

「～だろう」と推量したり、「～しよう」と意志を表したりするとき、気仙沼では「ベ・ッペ」を使うよ。



( 3 ) 「～ッコ」( 身近にある小さい物を親しみを込めて呼ぶときに使う )

- ・そのひもッコ、取ってけろ。  
( そのひもを取ってくれ。 )

あめッコ ( あめ玉 )、花ッコ ( 花 )、お茶ッコ ( お茶 )、ぼッコ ( 棒 ) も使う、シャー。



## 3. 間違いやすい単語

( 1 ) 「ナゲル」( 共通語 「捨てる」 )

- ・あどナゲねばわがんねぞ。 ( もう捨てないとだめだ。 )
- ・ナゲでおいでけろ。 ( 捨てておいてくれ。 )

( 2 ) 「ダカラ・ホンダカラ」( 共通語 「( 本当に ) そうだね」 )

- ー今日、暑いごとね。 ( 今日暑いね。 )
- ーホンダカラ！ ( 本当にそうだね。 )

相手の話に強い同意を示すとき、「ダカラ」を使うよ。共通語の「～なので」と間違えやすいから注意してね！



( 3 ) 「コワイ」「コエー」( 共通語 「疲れた」 )

- ・コエーなあ。 ( 疲れたなあ。 )

( 4 ) 「ワガンネ」( 共通語 「だめだ」 )

- ・そんなごとやってワガンネヨ。 ( そんなことやってはだめだ。 )
- ・寒ぐでワガンネ。 ( 寒くてだめだ・仕方ない。 )



## 使ってみよう！おススメの気仙沼方言！

### 〇夕方から晩のあいさつ

「オバンデス」（こんばんは）

「[目上の人へ] オバンデゴザリス」（こんばんは）

### 〇別れのあいさつ

「サイナー」（さようなら）

「マタダイン」（また来てください）

「オスズガニ」（お静かに、おやすみなさい）

### 〇そうです：「ホデガス」



### 病気や気分を表す語

看護師や保健師の方へ

「アンベア（按配）」：健康状態。

「サブキ」：咳。

「ハラピリ」：急な下痢。

「フケサメ」：病状がよく変わること。

「コザス」：病気をこじらせる。

「スッコグル」：皮膚をすりむく。

「イズイ」：違和感がある様子。

「ハカハカ」：息切れする様子。

「アフラアフラ」：ふらふらして元気がない様子。

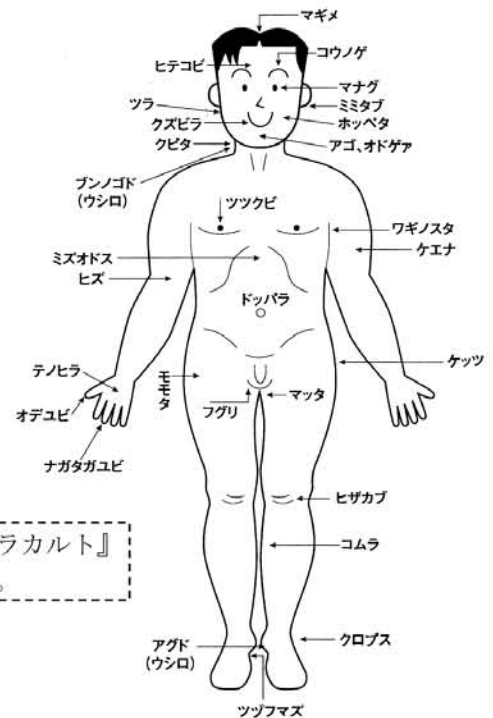
「ネダソラネエ」：寝た気持ちになれない様子。

「セラセラスル」：のどがいらいらする様子。

（セセラポイ）

菅原孝雄著『けせんぬま方言アラカルト』  
三陸新報社をもとにしています。

気仙沼地方の人体呼称図



### 道具の名称

ボランティアの方へ

「クマデ」：鉄の歯がくし状に並ぶ道具。泥かきなどに用いる。一般的には大きいものをレーキ、小さいものをクマデと呼ぶ。気仙沼ではどちらもクマデ。

「ネコ」：一輪車（資材を運ぶ手押し車）

「バリ」：バール（釘抜きのような形の道具）

気仙沼市役所・教育委員会・地元関係者の皆様、そして気仙沼に来られた支援者の皆様からご協力を得て作成しました。

このパンフレットについてのご意見・ご感想をお聞かせ下さい！



### 支援者のための気仙沼方言入門

2011年8月27日 発行

作成：東北大学文学部国語学研究室

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

TEL・FAX：022-795-5987

E-mail: kobataka@sal.tohoku.ac.jp



# 方言保存のさまざまな方法

津 田 智 史

(担当者：津田・金美英・佐々木遥子・佐藤加奈)

## 1 はじめに

私たちは、以下の3点の問題意識をもとに、被災地の方言をどのように保存していくべきかについて、被災地の現状や危機言語への取り組み、他分野の取り組みをもとに考えていく。

I どのように方言を記録するか

II 方言の継承の必要性

III どのように保存されるべきか

現段階では、方言をいかに保存していくか、明確な方法を提示することは難しいが、被災地の状況をみながらどのような手段での保存が考えられるのかの提案は可能である。また、多くの方言(言語)の保存に対する立場はあれ、大事になってくるのは、研究者が文化の資料的価値のみを訴える立場だけで方言母語話者に無理に伝統的な方言(言語)を残すよう促すのではなく、ことばは変遷するものであるから、方言母語話者は普段から自然な方言を使用し、研究者は時代時代にそれをありのままに記録していくことだと、私たちは考える。東日本大震災に際しても、震災以前のことばを現在使われているように記録することは必要であるが、それを方言母語話者に無理に維持させようとしてはいけない。研究者は、震災以前の方言の状態を把握し、可能な限り網羅的・体系的に記録し、そして今後起こるであろう人の移動などによることばの変化・変遷をしっかりと見届けなければならない。

## 2 どのように方言を記録するか

ここでは、どのように被災地の方言を記録していくべきかについて考える。

まず、被災地方言ではないが、全世界的にみて危機的状況にある言語を記録しようというプロジェクトの例を挙げる(2.1)。次に、他分野である、民俗学界の取り組みを6月に東北大学で行われたシンポジウムから確認する(2.2)。また、今回の東日本大震災を受けて、中央審議会より方言をどのように記録していくかについての提案がなされているので、それも確認したうえで、被災地の方言を記録していくうえでの研究者側の姿勢について述べる(2.3)。

### 2.1 どのように危機的方言を記録するか

方言を記録する際には、どのように記録していくか、いくつかの種類が考えられる。代表的なものに「記述的調査」と「方言地理学的調査」がある。記述的に方言を記録する際には、必要な項目をできるだけ漏れなく調査し、体系的な記述を行う必要がある。そのため、方言母語話者に直接質

問する面接調査が適している。他方、方言を地理学的に分布の中で記録し解釈するには、ある程度の地理的広がりや地点数を確保する必要がある。ここでも、面接調査が理想的だが、通信調査でもよい。ただし、音韻に関する調査は面接調査が基本である。このように、大きくはこの2つのアプローチが考えられる。また、調査の方法としては、上記の面接調査や通信調査のほかに、アンケート調査、方言母語話者が自身のことばについて考察する内省調査、方言母語話者同士の自然な会話を記録する自然観察調査などもある。

では、実際に危機的な状況にあることばはどのように記録が行われているのであろうか。ここでは、全世界的に危機言語の記録を行ったプロジェクトを例に挙げる。

『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』（文部省科学研究費補助金「特定領域研究(A)」代表：宮岡伯人）では、日本のみならず、環太平洋諸語について広範囲に及ぶ記録が行われている。危機的言語の記録のためには、言語それ自体を体系的に記録する「記述的調査」と、周辺言語・方言との関係性をみる「方言地理学的調査」のどちらも必要である。この『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』では、日本班としていくつかチームが生まれ、方言地理学的にまとめたものもある。『消滅の危機に瀕する全国方言資料』（小林隆・篠崎晃一編 2003）では、通信調査法による全国分布調査で約300項目の語彙を収集している。郵送方式で行い、約1400地点（全国約2000地点に配布）から回収している。また、記述的調査には文法や音声班が生まれ、実際に危機的状況にある各地方言の記述も行われている（真田信治編 2002『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(1)』など）。このような、環太平洋規模で行われたもの以外にも、さらに記述的に日本語方言の危機言語を記録しようという試みは木部ほか（2011）や呉人編（2011）でも行われており、危機的言語を記録・保存するための3点セット（文法書・テキスト・辞書）の必要性なども述べられている。

これらは、実際に母語話者の減少などにより、消滅の危機に瀕しているとされる言語の記録である。しかし、自然災害などにより、緊急的に記録をしなければならない場合も起りうる。今回の東日本大震災における被災地域の方言も、それである。どこを被災地とするか、そこにどのような方言があり、どのような方言が危機的状況にあるかは、本報告書の「被災地の方言の特徴」「消えゆく被災地の貴重な方言」の報告で明らかにされた通りである。それらを踏まえ、被災地の方言を記録する手段を考えなければならない。

## 2.2 他分野の取り組み—東北民俗の会「民俗学者のみた東日本大震災」（H23.6.25 於東北大学）

ここでは、一度方言を離れ、他分野では、今回の東日本大震災をどのように捉え、またそれにどのように向き合っているのかについてみていくことにする。ここで挙げるのは、本年度6月に東北大学で開催された東北民俗の会公開講演会「民俗学者のみた東日本大震災」の発表による。

講演では、被災地で研究を行う地域の研究者がそれぞれのテーマに沿って、今なにができるのかについてそれぞれの考えを述べた。民俗学の立場からみると、震災で失われるものを保存していく必要があることが述べられた。そこには、形のあるもの、無いものがある。まず行われるべきは、

記念碑や文化・伝統の記録の語り継ぎであるとし、意識的に行っていく必要性が述べられた。また、過去に津波被害を受けた記録や記念碑により、今回被害を免れたケースもあり、震災自体を写真などで記録する必要性があるとしている。

文化的なものを、いかに保存していくかについては、有形文化財の保存として、被災神社の社屋、絵馬の救済が挙げられ、民具・倉庫等、生活に密着した用具などの保存も急務とされる。無形文化財としては、祭りなどの継続も挙げられる。しかし、震災により人が居を移すことにより、地域の祭りなどは行われなくなる可能性がある。どのように、これを守り、持続していくかについては今後考えなければならない問題である。しかし、祭りなどの行事を持続することが出来れば、一度離れた人もかつての居へと戻ってくることが考えられる。そのために、これまでどのようにその祭りが行われてきたかなど、文化をしっかりと継承していく必要がある。

会が行われた当時は、これまである文化的なものの保存と伝承を主に行っていく段階であるとし、文化の記述的な調査についてはタイミングを見計らう必要があり、まずは震災時の状況や被害についての調査から行い、記録を行うことを確認していた。その後も、震災の状況と今後の取り組みについての話題はいろいろなところで取り上げられている。

### 2.3 被災地方言を記録するための姿勢について

他分野・民俗学界の取り組みについては、上で見たとおりだが、では、被災地の方言記録はどのように行われていくべきか。方言を記録する姿勢について、東日本大震災を受けて行われた中央教育審議会（H23.6.3）の記録をみる。

- ・「ことば」（言語）は地域の伝統、文化、風習、季節行事の基盤にある。
- ・災害の事実を、語り（話し言葉）と文章（書き言葉）などで「記録」「保存」し後世に伝えていく際、震災前後を結びつけるものは、東北の人びとの「ことば」（方言と訛り）＝「言霊」（言語に内在する力）である。
- ・東北の人びとのアイデンティティとも言える「ことば」による震災記録の保存と復興の拠点づくりを、図書館、博物館、公民館、文書館、郷土資料館、等の新たなデジタル・ネットワーク・アーカイブ（DNA）によって構築する。

（糸賀雅児2011より要約）

このように、被災地のことば（方言）を残していかなければならない、また、そのために地域施設が協力し、方言を博物館に展示するように、デジタルデータとしても積極的に残していこうとする試みが求められている。

また、被災地の方言を記録するに当たり、方言を記録する側の姿勢にも言及しないわけにはいかない。東日本大震災の被災地は広範囲に渡り、そもそも研究者人口には限りがあり、被災地すべての地域を調査し、ぬかりなく網羅できるとは考えづらい。また、調査には話者に時間的・精神的負

担を与えることになる。その際、多くの分野の研究者が調査に赴くと、話者や地域の負担が限りなく増えることとなる。そのため、研究者同士の意思疎通が重要となる。この点からも、先ほど述べたように、ある程度分野を超えた協力体制を持ち、分野間での情報・資料共有が必要となってくる。

### 3 方言の継承の必要性

次に、ここでは方言の継承が果たして本当に必要なのか、また、なぜ必要なのかについて考えていく。

まず、これまで方言がどのように各地で捉えられてきたのか確認し(3.1)、その上で方言の継承というのは本当に必要であるか考えてみる(3.2)。また、方言の保存や町おこしとして、実際に方言を利用した各地の活動についても言及する(3.3)。

#### 3.1 方言母語話者の意識

方言は今でこそ、各地域のことばとして認められているが、冷遇されている時代もあった。そのため、世代により、方言の意識が異なる場合がある。標準語政策を受けた世代は、方言は恥ずかしいものとして意識していることがある。それが方言コンプレックスとなり、方言は馬鹿にされるもの、恥ずべきものとして捉えられがちである。一方、若い世代は、テレビやマスコミで聞く関西弁を代表するように、方言を前面に出して活躍するタレントの影響や、方言自体の見直しにより自分の方言をコンプレックスに思う者は少ないように思われる。そこから、自分の方言を過度に使用し、まるでアクセサリのように方言が扱われている。さらに、現在では自分の出身地以外の方言までも面白おかしく使用するような、方言のおもちゃ化といった現象もみられる。

また、方言を後世に残したいと考える人たちの割合などをみると、西日本のほうが東日本の地域に比べ高く、方言を残したいと考えているようである。これは単純に東西差というわけではなく、もちろん都市間でみれば割合の高い地域、低い地域はある。しかし、概ね西日本のほうが方言を普段から使用し(方言主流社会)、残したいと考えている割合が高くなっている。

#### 3.2 方言の継承は必要か

次に、方言の継承は本当に必要なのか考えてみる。もちろん、文化・民俗の一部であることを考えれば、保存されるべきものである。しかし、実際に使用している方言母語話者にとっての方言の必要性とは一体何なのであろう。3.1 でみたように、かつては方言をコンプレックスとして捉えられた時代もあり、一転しておもちゃのように扱われている現状もある。母語話者としては、方言であれ共通語であれ、コミュニケーションの道具として機能すれば、それで問題ないものであろう。この場合、方言は、地域の特徴として扱われるが、それは古くから伝わることばをそのまま使用するのではなく、あくまで特徴的な表現などを前面に押し出しているに過ぎない。使用されなくなり、静かに消えていく方言は多くあるのである。

このような現状から、近年失われつつある方言を積極的に残そうと唱える立場もある。そのために、まずは方言母語話者自身の方言に対する考えや想いを研究者主導ではなく、方言母語話者主導によって行うべきであるとする。以下は、琉球方言について語られたものだが、方言が文化、アイデンティティであるとする点や、その継承や復興には方言母語話者の力が必要であるという点は、どの方言にも共通のことであろう。

「（ことばは）自分たちの代で失ってはいけない。次の世代に伝えていくべき大切な文化である。そして自分のアイデンティティである。（中略）継承活動はお仕着せではなく、各自が当事者意識と熱意を持たなければ成功しません。」

—菊秀史

「若い世代への継承が非常に重要で、若い人が方言を学習できる場所を作らないと、そのことばがそのまま消えていくことになってしまいます。（中略）方言の保存または復興の活動は地元から発信しなければなりません。地方のことばは、それを話している人と習いたい人の努力がなければ消滅してしまいます。」

—Thomas Pellard (トマ・ペラール)

(国立国語研究所 2011 より)

方言研究者は、各地で積極的に活動を行っているが、それをもっと調査を協力してくださった方々や地域の方々に還元し、いかに方言が地域特有の文化を反映し、それが地域のアイデンティティになるかということを伝える啓蒙的な活動が必要である。しかし、それが押し付けにならないように、研究者は伝え方を工夫する必要がある。多かれ少なかれ、人は自分やほかの言語に興味を持っている。ただし、人は衣・食・住など十分に生活が満たされて初めて、言語の維持や再生に目を向けることが多い。しかし、無くなってからでは遅い。少なくとも、人々が興味を抱いたときに、方言が共通語やその他のことばか選択できるだけの準備、また環境の整備を研究者が主体となり行っておくことは重要である。その上で、自身の方言に興味を持ち、積極的に残したい、大事にしたいという方言母語話者の意識の後押しをしっかりと行うことが重要である。

### 3.3 方言をめぐる各地の活動

それでは、実際に方言を利用した各地の活動にはどんなものがあるのか。以下に例を挙げみていくことにする（小林ほか編 1996、木部ほか 2011、国立国語研究所 2011 を参照）。

①全国方言大会（山形県三川町）、シマユムタ伝える会（鹿児島県奄美大島）など

②津軽方言詩の人々（青森県弘前市）、竈ヶアし座（岩手県気仙地方）など

③方言の日の制定

①は、方言弁論大会である。全国から母語方言での参加者を募るか、島内の方言で行うかの違いはあれ、参加者が自身の方言で表現豊かに話を競うものである。そこでは、方言における共通語に



はない表現など、共通語ではピタリと言い表せないことを方言で伝えることができるという表現を使うことにより、話の情景をより豊かに鮮明に伝えていく。②は、文学や劇の中で積極的に方言を使用することにより、内容をより身近なものとして伝えることができる。また、それに伴い方言の有用性を感じることができる。③は方言の日を制定することにより、母語話者に方言をより意識させ、また自分たちのことばについて考える機会を与えるものである。

また、震災ボランティアの現場でも方言が活用されている。自衛隊の応援スローガンに方言が使用されたり、方言で被災地へとメッセージを送るものもある（→本報告書「被災者を支える方言」参照）。さらに、ボランティアの活動の円滑化を図るための方言パンフレットの作成（→本報告書「支援者の方言理解のために」参照）や竹田（2011）による擬音語・擬態語用例集など、現場で活用されるものも出てきている。医療と方言に関してはすでにその必要性を説くものもある。

このような活動は、母語話者の方言に対する興味を深め、方言を残すことにも繋がっていくものである。

## 4 どのように保存されるべきか

最後に、方言はいかに保存されるべきかについて考えていく。これまでの話でもでてきたように、研究者による学術的な立場と、方言母語話者による社会的な立場での保存について考えなければならない。そこで、ここでは現在どのような保存の方法がとられ、またどのような利点があるのかを確認し、それぞれどのような保存が考えられるか示したい。

### 4.1 学術的保存

まず、研究者による学術的立場からの保存についてみていく。学術的な保存として最も大きな意義を持つのは、今みられる方言をしっかりと網羅的に記録することである。これは、将来の研究のためでもあり、あるものをあるように記録することにより現段階の方言の状況を示す資料として意味を持つ。

また、方言が現段階でどのような状態にあるかを示す資料として将来役立てるためには分布論的な方言の記録と体系的記述による記録が必要である。分布論的な方言の記録は、被災地と被災地以外など、各地方言の比較のために有用である。また、ことばの拡がりをも面的に把握することは、各地の方言の成立過程を推定したり、方言間の影響関係を考えたりする上で重要になる。そして、これは自身の方言の特徴を視覚的に捉えられる点で母語話者の興味を引くものともなる。もう一方の体系的記述による記録は、その方言の全体像を示すものであり、学術的にその土地の方言を記録する上で重要なものである。それによりまとめられる記述文法書も方言を研究する者にとって必要となるであろう。

これらの学術的立場の記録から、実際の方言の保存へと一歩進むために、木部ほか（2011）などで述べられる3点セットが必要となる。まず、方言に興味がある、学んでみたいという人のために体系的に記述したものを、わかりやすくまとめる必要がある。各地方言の学習書のようなものを作

成することで、方言を残したいという話者の後押しとなる（文法書）。また、ありのままの方言の記録、方言母語話者への後押しという両面で、方言談話の採集・記録も重要である。これは、実際の使用例をより自然な形でみることができ、その場面をありのままに残すことができる（テキスト）。さらに、語彙を集めて、共通語などと対訳できる媒体もコミュニケーション上必要となる（辞書）。

このように、文書化は、言語維持にとって非常に重要である。もちろんそれが全てではないが、それが残されることで、何がどこまで記録されているか、それがどういった状態にあるか知ることができる。すでに行ったことを繰り返す労力、資金、さらには研究者の人数も十分ではない現状では、資料の把握は非常に大きな意味を持つ（→被災地の資料の現状については、本報告書「未来に残す被災地の方言」を参照）。

## 4.2 社会的保存

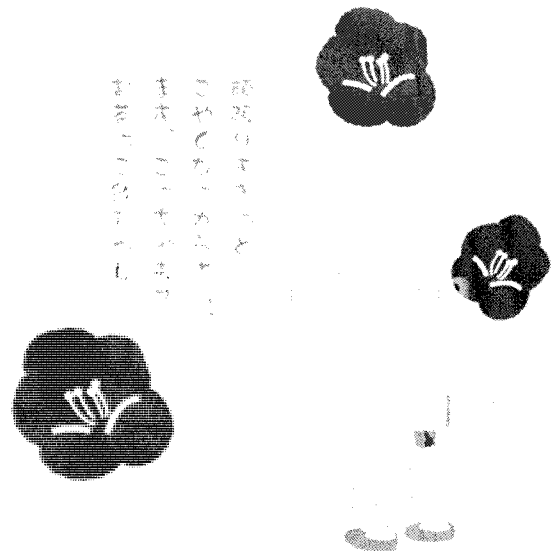
次に、実際に現在も各地で行われている、方言を前面に押し出すものについてみていく。これらは、必ずしも方言全体を保存するために行われているものではなかろうが、各地の特徴・アイデンティティとしての方言を利用して、町おこしや観光に一役買っている。

近年目に付くのは、方言を大々的に載せた方言みやげであろう。観光客などは、自身にない言い回しや表現に目を引かれ、方言の書かれたグッズを購入し、お土産として地元を持ち帰る。それにより、当地方言の特異性をアピールすることになる。また、歌謡曲にも方言が使用されることがある。その曲とともに方言も地位を確立していく。東日本大震災後には、支援者への当地のアピールと、被災者に応援を身近に感じてもらえるように

被災地である南三陸のケセン語をモチーフとしたグッズが作られている（上図）。震災に限らず、このようなグッズは、当地の方言を使用することにより、独自のアイデンティティを示すこととなる（→被災地における方言の機能とその例については、本報告書「被災者を支える方言」を参照）。

また、注意書きや観光地などでみかける方言が使われている看板も当地の方言で書かれることで、目を引き、対内的には内容をより身近に感じさせ、対外的には当地の独自性を意識させることへと繋がる。方言を使用した店名などは、娯楽化したものであるが、どんな意味だろう、親近感が沸く、など興味を引き、足を向かわせるといった、良い影響を与えるものである。方言は、社会的にこのような役に立っているものである。

さらに、ご当地ヒーローなるものが賑わいをみせている。その魁となったのが、超神ネイガーという、秋田県のご当地ヒーローである。元々は秋田県内の方を対象にしたミニドラマである。登場



napocon.petit.cc より転載

人物はみな方言をしゃべり、怪人や必殺技に方言や名産品を絡ませるなど、所々に方言がちりばめられている。製作側は以下のように超神ネイガーについて述べる。

#### (1) ネイガーの製作目的

今では秋田を外部にアピールするような存在になったネイガーですが、もともとは秋田を盛り上げるため、という目的のもと作られたヒーローです。秋田県の良いところを、もっと県民の皆様に知っていただきたいという思いが一番でしたので、そう考えるとやはり県民向けですね。「地産地消型のヒーロー」というキャッチコピーは、そこからきたものです。

#### (2) 子ども達に方言を継承してほしいという思いはあるか？

継承してほしいかしてほしくないかといえば、やはり方言は次の世代に受け継いでいってほしいと思いますね。最近ではやはり若い人は方言をあまり使わないのではないかと思います。もともと全県民向けに作られたネイガーですので、彼らは方言ばりばりでしゃべっております。(笑)それには秋田弁も、秋田県をもっと皆様に知って重要な要素だと考えた、という理由もあります。ネイガーたちはそれはもうひどくなまっていますし、敵の名前も今では親にも言われなような悪口が使われているものが多いです。しかし、それをきっかけに次代を担う若い人たちが方言に興味をもってくれたら、それは嬉しいことですね。

(下線は発表者。)

これをみると、県内での地元を再認識するという目的があったようで、子どもたちの方言意識にどれほどの影響があるかは未だ計り知れないが、現在ではご当地ヒーローとして全国的に知れ渡ったことで、方言という地域アイデンティティを示すものも多くの人に意識されるようにはなっている。また、これに続けとばかりに各地域で方言や地元名産品を題材にしたご当地ヒーローは賑わいを見せている。

加えて、2.3 で述べた中央教育審議会、糸賀氏の主張も社会的保存の一環であるといえよう。方言をデジタルデータ化し公共の図書館や博物館などで保存することは、恐竜の化石や発掘された土器などが博物館に陳列されるのと同じである。保存されるべき文化としてのことばを、広く一般に身近にするものとして、社会的な保存の一つであるといえる。実際の活動として、田中(2011)では、このようなものを電子化し記録し、用途も併記してまとめ、ヴァーチャル方言博物館として完成させる計画を示している。これには、資料記録としての意義も見込めるとする。

## 5. 被災地方言の記録のために

ここまで、どのように方言を記録するか、方言継承の必要性、どのように保存されるべきかの3点についてみてきた。ここでは、それらをもとに被災地の方言記録のために、何ができるかということについて考えていく。被災地の方言の記録のために、今すぐにできることと、これから先できること、この2点から考えてみたい。

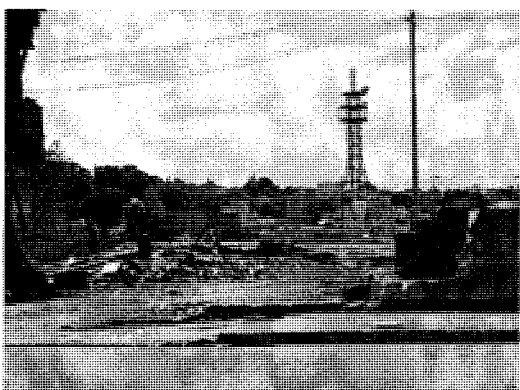
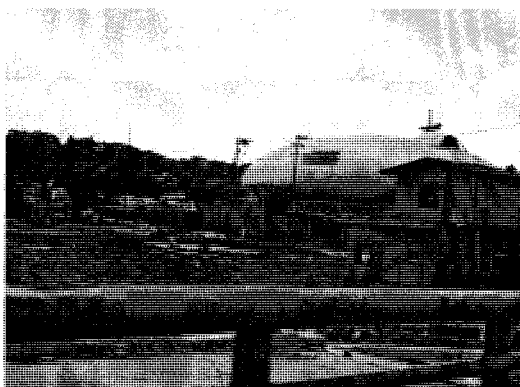
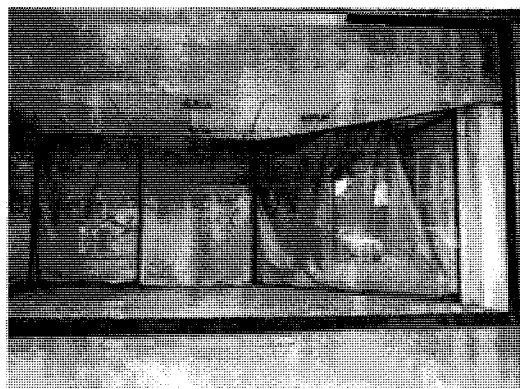
震災によって、直接的にある土地の方言母語話者が減ってしまうということがある。その場合、緊急的にその方言を記録し、残していくべきであろう。では、どのような調査なら今すぐ行うことが可能であろうか。まず考えられるのは、**被災地出身の研究者が内省により可能な限り己の方言について記録すること**である。この場合、出来る限り満遍なくいろいろな視点からの記録が必要であろう。また、自然観察調査として、**被災地方言の話者数人に集まって話をしてもらいその談話を資料として残す**という方法もある。この場合、研究者の研究テーマに沿った言語現象が現れるとは限らないが、自然な方言を記録できる点で有用である。被災者は、現段階では精神的・時間的余裕も限られていることが予想されるため、談話を採集する際には、方言研究という枠組みだけでみるのではなく、例えば談話テーマを文化・伝統芸能、震災の実体験・現状などについて設定し、ことばのみならず、文化的な情報も得ることができるようにして、分野間でデータの共有を行うのが望ましいと思われる。

また、震災によってその土地に住んでいた人は移動を余儀なくされるケースがある。その際に、人の移動に伴い文化やことばが移動をし、方言も移動をする。そして、移動先の方言との衝突、混淆、融合によって、移動前の方言から変化することがある。しかし、これらはすぐに見える変化ではなく、世代が下るにつれ徐々に姿を変えてゆくものである。つまり、これらの変化が起こるであろう 10 年後、20 年後を見据えた調査も必要となる。被災し居を移した方々を対象に追跡・経年調査を行っていくことが重要になるのである。震災前の状態をできることから記録し、残していく。また、人の移動により、これまで示されてきた方言の分布にも影響が出ると思われる。そこで、広範囲を対象とした分布調査も求められる。そのためには、いつ調査を実施できるか、そのタイミングは、状況をみながら判断をしっかりと行う必要がある。それがいつであるかの判断は研究者にゆだねられるが、基本的にはできること（今すぐにできること）を重ねていくことで、長期的なものに移行しやすくなると思われる。

実際に被災地の一つである石巻市の様子（2011 年 7 月時点）を載せる（次頁）。震災後数か月経っての状況ではあるが、街中は震災の爪あとを残している。この状況を見ると、がれきの撤去等行われていなかったり、多くの地域の商店などは震災以前の状況に戻れていなかったり、まずは復興、立て直しが先決であった。しかし、震災後ほぼ 1 年が経ち、ようやく記録調査に向けての活動が可能になってきたと考える。

ただし、前述したように、調査に実際に入るとして、具体的にどのような調査が必要となるかは、これまでの研究の把握を行った上で判断される。さらに、避難とそれに伴う人の移動によって、特徴的な伝統方言の行方も心配される。この点については、今後方言の変遷を観察していくことが重要となる（→本報告書「被災地の方言の特徴」「消えゆく被災地の貴重な方言」「未来に残す被災地の方言」参照）。





(石巻市の様子；2011/07/10 佐々木遥子さん家族撮影)

## 6. おわりに

以上、被災地に関わらず、方言保存に関わるいろいろな活動、取り組みをみてきた。

I 方言をどのように記録していくかについては、方言地理学的にことばの広がりを記録したり、記述的に方言の体系を記録したりする方法が考えられる。また、その記録に臨むうえでの姿勢として、方言博物館的な保存の仕方を考慮に入れたり、分野の垣根を越えた協力体制を敷いたり、方言をことばとしてだけでなく他分野とのかかわりの中で保存していくことが求められている。



Ⅱ 方言継承の必要性については、方言を使用する母語話者がどれほど方言の継承に必要性を感じているのか知る必要がある。実際に方言を用いた取り組み（方言弁論大会、方言の日制定など）は各地で行われているが、それがどれほど方言の継承の意識向上に役立っているのかについても調べる必要があり、また研究者側としては方言を継承すべきという啓蒙活動を行う必要もある。ただし、そのためには単なる押しつけではなく、方言調査結果などを積極的に還元し興味を抱かせ、方言母語話者の意識を後押ししていくことが重要になる。

Ⅲ どのように保存されるべきかについては、学術的な保存（研究者側）と社会的な保存（方言母語話者側）が考えられる。学術的には、将来の研究のため網羅的、また広く分布的な方言の記録が求められる。また、方言を学ぶ人のための体系的な記録を伝える文法書作成なども必要となる。一方、社会的には、方言は観光や経済の一環として利用される場面も多い。これらは、直接的に方言の保存にはならないかもしれないが、ある種の地域アイデンティティの証となる。研究者は、社会に求められたことは、たとえそれが直接、言語学・方言学的に重要ではない活動（使用されるのは一部の方言に限られるもの、また語彙的に残るようなものに限られるもの）でも、積極的に協力する必要がある。

最後に、いかに方言が保存されるべきかについて私たちの考えを述べたい。ことばは変遷していくものであり、方言母語話者はそれを共時的に使用するものである。研究者はそれを記録に留め、共時的・通時的にみて考察を加えていくものである。そうであるならば、必ずしも保存の方法は同じでなくてもよい。方言はことばであり変遷していくものであるから、方言母語話者は無理に伝統的な方言を使用し残していくのではなく、普段使用するように方言を保持していくことが重要であり、研究者は方言母語話者の使用するありのままの方言を時代時代に網羅的・体系的に記録することが重要となる。東日本大震災と方言というテーマに沿って言えば、被災地の方言母語話者は環境の変化により失っていく方言もあるかもしれないが、震災以前の方言状況をしっかりと記録し保存するのは研究者の役目である。被災地の方言は、新しい土地への人の移動、新たな生活環境の中で、文化・習慣とともに変遷していくであろう。今、研究者が行うべき保存とは、変遷する以前の被災地の方言をしっかりと記録することである（今すぐにできること：談話収録、および被災地出身研究者の内省調査、これから長期的にすべきこと：体系的な記述調査、および広範囲の分布調査）。そのためにも、被災地の方言においてどのような記述が足りていないか、またどのような観点での記録が進んでいないかを把握し、震災以前の方言状況を記録していく必要がある。

## 文 献

糸賀雅児（2011）「デジタル・ネット・アーカイブ（DNA）による東北の言語文化復興（ことばルネサンス）構想」文部科学省中央教育審議会『委員配布資料』＜[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/\\_icsFiles/afieldfile/2011/06/22/1306932\\_07.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/_icsFiles/afieldfile/2011/06/22/1306932_07.pdf)>（2011/08/08アクセス）

- 井上史雄(2007)『変わる方言 動く標準語』ちくま新書
- 木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛(2011)文化庁委託事業『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』国立国語研究所
- 呉人恵編(2011)『日本の危機言語—言語・方言の多様性と独自性—』北海道大学出版会
- 国立国語研究所(2011)国立国語研究所第3回国際学術フォーラム『方言の多様性を守るために』
- 小林隆・篠崎晃一(2003)『消滅の危機に瀕する全国方言資料』文科省成果報告書
- 小林隆・篠崎晃一編(2007)『ガイドブック方言調査』ひつじ書房
- 小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編(1996)『方言の現在』明治書院
- 佐藤和之・米田正人(1999)『どうなる日本のことば』大修館書店
- 真田信治編(2002)『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(1)』文科省成果報告書
- 竹田晃子(2011)『東北方言オノマトペ(擬音語・擬態語)用例集—青森県・岩手県・宮城県・福島県—』(試作版2)私家版
- 田中宣廣(2011)「地域後の底力—方言エールと言語経済学の方法—」『第93回日本方言研究会発表原稿集(於高知大学)』
- 超神ネイガーオフィシャルサイト<<http://homepage1.nifty.com/nexus/neiger/>>(2011/07/11 アクセス)
- デイヴィッド・クリスタル著／斎藤兆史・三谷裕美訳(2004)『消滅する言語 人類の知的遺産をいかに守るか』中公新書
- 東北民俗の会(2011)「東北民俗の会 公開講演会「民俗学者のみた東日本大震災」資料」  
napocon.petit.cc<<http://napocon.petit.cc/banana/20110610192527.html>>(2011/08/08 アクセス)

# 未来に残す被災地の方言

川 越 めぐみ

担当者：〔青森・岩手〕 田附敏尚・貝野瀬美那・尾形千里・佐倉友季絵  
〔宮城〕 椎名渉子・内間早俊・佐藤重実・大場雄司・奥山浩佳  
〔福島・茨城・千葉〕 川越・劉玉濛・飯塚敦史・猪狩慶紀・  
エディリマンナ ジャヌーカ

## 1 概要

### 1.1 目的と課題の進め方

本課題は方言のこれからの記録に向けて、被災地の方言がどのように研究されてきたのかを把握するために、まずは研究文献や資料の目録を作ることを目的としてきた。そして、そこから不足している部分、今後取り組むべき課題は何かを見出すことを目的として文献・資料を収集、内容に目を通し、どのような分野、地域の研究がなされているのかを確認し、研究の不足している箇所について検討を行ってきた。

### 1.2 文献・資料の収集方法

文献・資料を収集したのは青森県、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県の津波による被害を受けた太平洋岸及び東京電力福島第一原子力発電所事故による避難指示区域並びに計画的避難地域、特定避難勧奨地点を含む市町村のものである。以下に文献・資料の収集方法の概要を記す。

#### 1.2.1 探し方

- ①『20世紀方言研究の軌跡—文献総目録—』（日本方言研究会編、2005年、国書刊行会）

だいたい明治期から2001年までの方言書目、方言論文（資料）がそれぞれ総記と地方（各県ごと）に分けて記載されている。2001年までの書籍、論文はこれをベースとした。

- ②『国語年鑑』1954～2009年版（国立国語研究所編、大日本図書）

国語年鑑にはその年の刊行図書一覧、雑誌論文一覧があり、どちらともその中に「方言、民俗」という項目があるので、そこを見ると当該地域の書籍、文献があるかどうか分かる。

①で探しきれない2002～2008年の書籍・論文はここで補った。

- ③ インターネット

日本語情報資料館（<http://www6.ninjal.ac.jp/>）や CiNii（<http://ci.nii.ac.jp/>）などの学術文献データベースを用いて、「方言」「仙台」「宮城」などのキーワードで検索。

上述の手順で取りこぼしがあった場合これで補完した。

### 1.2.2 集め方

#### ① 東北大学大学院文学研究科国語学研究室及び東北大学附属図書館

まずは東北大学大学院文学研究科国語学研究室や東北大学附属図書館にある書籍、論文、市町村史等の資料を確認して手元に保存し、閲覧できる状態にした。

#### ② インターネット

各大学や研究機関の機関リポジトリなどを活用し、インターネット上に公開されている論文はそこから入手した。

#### ③ 国立国語研究所図書館

2011年7月25日及び2012年2月20日、21日に国立国語研究所図書館に赴き、上記の①②で未入手の資料を確認した。

#### ④ 国立国会図書館

2011年2月21日に国立国会図書館に赴き、上記①～③で入手できなかった資料を入手した。

※ 探しきれてないものと、集めきれてないもの

なお、上述の探し方では、見るができなかったものや探しきれなかったものも数件存在する。特に、私家版や市町村史等の公開場所が限られているものや、卒業論文等の公開されていないものなどにも、被災地方言について記述されているものがあると考えられる。これらは今後さらに調査を進めていきたいと考えている。

## 2 被災地における方言研究の状況と課題

以下、各県で被災地に該当する市町村を挙げながら、上記の方法で収集した文献・資料の分野別件数を示して、当該地域における方言研究の現状を把握する。また、そこから見出される今後の方言記録に向けた課題を述べていくこととする。

形式としては、文献・資料の分野別件数を県ごとの《分野別研究件数》に表として掲げる。《分野別研究件数》は方言区分や市町村などの地域区分ごとに「音声」「文法」「語彙」「方言集」「言語行動」「その他」の6つの分野に大まかに分け、論文延べ数を表にまとめた。詳細な分野については、本節末の研究書籍・論文・談話資料等リストを参照願いたい。

《分野別研究件数》の後に各県ごとの研究課題として、研究の現状と今後の課題の考察をのせてあるが、紙幅の都合で岩手県と宮城県は表と逆の掲載となる。なお、複数県にまたがっている大規模な資料については、2.1～2.6に示す各県の後の2.7にまとめて掲載してある。

ただし、今回の分析は、上述のとおり「宮城県」や「仙台市」「南三陸町」などの各被災地の市町名を『20世紀方言研究の軌跡—文献総目録—』（日本方言研究会編、2005年、国書刊行会）、『日本語情報資料館』（<http://www6.ninjal.ac.jp/>）、CiNii等で索引・検索した上で入手できた文献を対象としており、東北全般を対象とした研究など、まだ目を通せていない文献もあるため、今後さらに収集・分類をしていきたい。

## 2.1 青森県

被災地（市町村）：〔下北〕A 東通村

〔上北〕B 六ヶ所村 C 三沢市 D おいらせ町

〔三八〕E 八戸市 F 階上

### 《青森県分野別研究件数》

	音声	文法	語彙	方言集	言語行動	その他	未確認	計
全域	6	4	5	4	0	5	0	24(10)
被災地全域	0	0	3	0	0	1	0	4(4)
下北地方	1	0	0	0	0	1	3	5(5)
上北地方	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
南部地方	1	3	1	0	0	1	7	13(11)
A東通村	2	3	2	1	0	2	0	10(9)
AB東通村、 六ヶ所村	4	1	4	0	0	3	0	12(6)
B六ヶ所村	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
BC六ヶ所村、三沢市	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
C三沢市	0	1	0	0	0	0	0	1(1)
CD三沢市、おいらせ町	1	1	1	0	0	0	0	3(2)
Dおいらせ町	0	0	0	0	0	0	0	0(0)
DEおいらせ町、 八戸市	0	0	0	1	0	0	0	1(1)
E八戸市	4	6	6	2	0	7	0	25(18)
ABCE東通村、 六ヶ所村、三沢市、八戸市	0	0	3	0	0	0	0	3(3)
BCE六ヶ所村、三沢市、八戸市	0	1	0	0	0	0	0	1(1)
CE三沢市、八戸市	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
下北地方、E八戸市	0	1	0	0	0	0	0	1(1)
F階上町	0	0	0	0	0	0	0	0(0)
未調査(被災地該当か不明)	0	0	0	0	0	0	20	20(20)
合計	19	21	28	8	0	20	31	127(97)

※表の見方 … 一論文に複数の研究分野がある場合、それぞれを1と数える。最右列の「計」欄中の括弧内は実際の論文数。

### ☆青森県の研究課題

- ① 南部地域の中心地である八戸と、九学会連合が60年代後半に調査を行っている下北地方の東通村のことばに関する研究はある程度あるが、それ以外はかなり手薄な状態である。
- ② 資料収集の仕方に問題がある可能性もあるが、最近の論文が特に少ない。60年代後半の下北（東通村）、80年代の南部（八戸市）において各分野の基礎的な項目はある程度記述されているが、その後の詳細な記述はほとんどなされないままである（2000年代の論文は3本のみ）。
- ③ 以上から、体系的な記述調査が行われていない地域ではまず基礎的な項目からその調査を行う必要がある。また、記述がある程度ある地域でも、近年の言語実態を確認する必要はありそうである。



## 2.2 岩手県

被災地：A 洋野町 B 久慈市 C 野田村 D 普代村 E 田野畑村 F 岩泉町  
G 宮古市 H 山田町 I 大槌町 J 釜石市 K 大船渡市 L 陸前高田市

### ☆岩手県の研究課題

#### ① B 久慈市・G 宮古市・H 山田町・気仙郡(K 大船渡市・L 陸前高田市含む)

この地域は研究が多くなされている。各市町村ごとの研究の件数から見ても、B 久慈市が 54 件、G 宮古市が 76 件、H 山田町が 40 件、気仙郡が 57 件と多い。また内容としても、この 4 地域に関してはその市町村・郡を対象とした記述的研究が複数あり、1990 年代・2000 年代の文献も多い。特に気仙郡は気仙方言について書かれた詳しい書籍が何冊か存在する。

#### ② D 普代村・E 田野畑村・F 岩泉町・I 大槌町

この地域は研究がほとんどなされていない。各市町村の研究件数を見ても、D 普代村が 24 件、E 田野畑村が 24 件、F 岩泉町が 35 件、I 大槌町が 20 件と少ない。特に普代村に関しては、普代村に焦点を当てた研究は管見の限りなかった。田野畑村・岩泉町・大槌町に関しては、それぞれに焦点を当てた文献はわずかにあるものの、いずれも 1990 年以前のものしかない。

#### ③ A 洋野町・C 野田村・J 釜石市

この地域は各市町村の研究件数では、A 洋野町 42 件、C 野田村 36 件、J 釜石市 56 件と少なくはない。しかし、洋野町・野田村・釜石市それぞれ単独に焦点を当てた文献は少ない。特に野田村の方言に関する記述的な研究は管見の限りなかった。

#### ④ 以上から、洋野町・野田村・普代村・田野畑村・岩泉町・大槌町・釜石市の調査を行う必要がある。野田村・大槌町は特に被害の大きかった地域であり、普代村に関しては人口の少ない地域でもあるため、この 2 地点の調査が急がれる。

《岩手県分野別研究件数》

	音声	文法	語彙	方言集	待遇表現	その他	未確認	計
全域	9	21	3	2	5	2	0	42(8)
三陸地方	0	0	0	0	0	0	4	4(4)
九戸郡	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
下閉伊郡	1	1	0	0	0	0	0	2(1)
上閉伊郡	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
気仙郡	8	14	4	0	2	0	8	36(14)
九戸郡、気仙郡	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
全域、九戸郡、下閉伊郡、上閉伊郡	1	0	1	0	0	0	0	2(1)
A洋野町	3	4	0	0	0	0	1	8(3)
B久慈市	4	2	0	1	0	0	0	7(5)
AB洋野町	0	0	0	1	0	0	0	1(1)
E田野畑村	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
F岩泉町	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
G宮古市	10	5	0	1	2	2	3	23(11)
H山田町	1	0	0	1	1	0	3	6(6)
FH岩泉町、山田町	1	0	0	1	0	0	0	2(1)
AF洋野町(旧種市町)、岩泉町	3	0	0	0	0	0	0	3(1)
I大槌町	0	0	0	0	0	0	2	2(2)
J釜石市	1	6	0	1	1	0	1	10(2)
IJ大槌町、釜石市	0	0	1	0	0		0	1(1)
K大船渡市	10	1	1	0	0	4	0	16(7)
JK釜石市、大船渡市	1	1	2	0	0	0	0	4(1)
HIJK山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市	2	4	1	0	1	0	0	8(1)
ABCDEFGHJK洋野町、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市	0	3	1	0	0	0	0	4(2)
ABCDEFG洋野町、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市	12	4	1	0	0	0	0	17(3)
ABCDEGHI洋野町、久慈市、野田村、普代村、宮古市、山田町、大槌町	2	0	0	0	0	0	0	2(2)
ABCDGHKL洋野町、久慈市、野田村、普代村、宮古市、山田町、大船渡市、陸前高田市	0	0	0	0	1	0	0	1(1)
ABCHKL洋野町、久慈市、野田村、山田町、大船渡市、陸前高田市	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
ABGJKL洋野町、久慈市、宮古市、釜石市、大船渡市、陸前高田市	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
AFGJ洋野町、岩泉町、宮古市、釜石市	0	4	0	0	0	0	0	4(1)
BFGJK久慈市、岩泉町、宮古市、釜石市、大船渡市	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
BKL久慈市、大船渡市、陸前高田市	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
九戸郡、気仙郡、BGJK久慈市、宮古市、釜石市、大船渡市	0	4	0	0	0	2	0	6(1)
全域、BCFGJHIK久慈市、野田村、岩泉町、釜石市、宮古市、山田町、大槌町、大船渡市含む	0	1	1	0	0	1	0	3(1)
全域、BCKL久慈市、野田村、大船渡市、陸前高田市	2	4	1	1	0	0	0	8(1)
全域、九戸郡、気仙郡、GHJ宮古市、山田町、釜石市	2	6	2	1	1	2	0	14(1)
不明(南部とのみ記述あり)	0	0	1	0	0	1	0	2(1)
合計	75	85	24	10	14	14	25	247(93)

※表の見方 … 一論文に複数の研究分野がある場合、それぞれを1と数える。最右列の「計」欄中の括弧内は実際の論文数。

## 2.3 宮城県

被災地（市町村）：A 気仙沼市 B 南三陸町 C 石巻市 D 東松島町 E 松島町

F 塩釜市 G 七ヶ浜町 H 利府町 I 多賀城市

J 仙台市 K 名取市 L 岩沼町 M 亘理町 N 山元町

### 《宮城県分野別研究件数》

	音声	文法	語彙	方言集	言語行動	その他	未確認	計
宮城県全般	4	9	3	3	0	1	0	20(12)
宮城県北部	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
宮城県南部	4	3	1	0	1	0	0	9(2)
A 気仙沼市	0	0	0	2	0	0	0	2(2)
B 南三陸町	2	0	0	0	0	0	0	2(2)
C 女川町	0	0	3	0	0	0	0	3(3)
D 石巻市	6	14	5	3	2	2	0	32(10)
E 東松島町	0	0	0	0	0	0	0	0
BE 南三陸町、東松島町	1	2	1	0	1	0	0	5(5)
F 松島町	0	0	0	0	0	0	0	0
G 塩釜市	0	0	0	0	0	0	0	0
H 七ヶ浜町	0	0	0	0	0	0	0	0
I 利府町	0	0	0	0	0	0	0	0
J 多賀城市	2	3	3	0	1	0	0	9(1)
K 仙台市	25	18	14	22	11	9	0	99(68)
仙台市北部(1)	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
仙台市南部(1)	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
DK 石巻市、仙台市	0	0	0	0	0	0	0	0
CEK 女川町、東松島町、仙台市	4	0	0	0	0	0	0	4(4)
L 名取市	1	0	1	0	0	0	0	2(1)
M 岩沼町	0	0	0	1	0	0	0	1(1)
N 亘理町	0	0	0	1	0	0	0	1(1)
O 山元町(3)	14	0	0	0	2	0	0	16(3)
NO 亘理町、山元町	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
ABDEFK 気仙沼市、南三陸町、石巻市、東松島町、松島町、仙台市	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
ADFK 気仙沼市、石巻市、松島町、仙台市	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
ABDFHJL 気仙沼市、南三陸町、石巻市、松島町、七ヶ浜町、多賀城市、名取市	4	3	0	0	0	0	0	7(7)
東北全域	1	0	0	0	0	0	0	3(2)
未調査(被災地該当か不明)	0	0	0	0	0	0	54	54(54)
合計	82	52	64	32	18	12	54	282(183)

※表の見方 … 一論文に複数の研究分野がある場合、それぞれを1と数える。最右列の「計」欄中の括弧内は実際の論文数。

### ☆宮城県の研究課題

- ① 宮城県の方言研究の文献は、地域的には仙台市・旧仙台市に偏っていると言える。しかし、仙台市においても、音声・文法・語彙以外の項目は少ない傾向が見られる。また、旧仙台市領の資料も語彙に偏っている。仙台市以外の地域の文献は、石巻市の音声・文法・語彙の文献が若干ある程度で、決して十分とは言えない。また、どの地域においても方言意識・言語行動・待遇意識・談話資料の文献の少なさが目立つ。

- ② 音声・語彙の記述的研究は相当充実しているが、その他の研究、特に共通語化に観点を置いた研究は少ないということが分かる。方言意識・言語行動・待遇表現・談話資料に関しては、記述的研究も不足している。
- ③ 今後の課題としては、現在ある記述的研究を踏まえ、被災地全域を地理的分布や世代差、共通語化の観点から実際に調査していくことが必要になるであろう。また、被災地と方言区画とを照らし合わせてみると、県北の内陸および石巻市付近（E 東松島町、F 松島町、I 利府町）、阿武隈川河口以南、白石市付近（N 亘理町、O 山元町）の文法・語彙に関しては、全体的に文献数が不足していると言える。被災地の中でも、特に県北の内陸および石巻市付近、阿武隈川河口以南、白石市付近の地域は、記述的な調査も必要であると考えられる。

## 2.4 福島県

被災地（市町村）：A 相馬市 B 南相馬市 C 田村市 D いわき市 O 伊達市

〔相馬郡〕 E 新地町 F 飯舘村 P 川俣町

〔双葉郡〕 G 広野町 H 楡葉町 I 川内村 J 富岡町 K 大熊町

L 双葉町 M 浪江町 N 葛尾村

《福島県分野別研究件数》

	音声	文法	語彙	方言集	言語行動	その他	未確認	計
福島県全域	12	16	4	3	4	3	1	42(9)
浜通全域	1	1	4	0	0	1	0	7(6)
AB相馬市、南相馬市(相馬地方)	3	0	1	1	1	4	0	10(8)
A相馬市	2	4	0	1	0	0	0	7(2)
B南相馬市	4	7	2	1	0	3	0	17(4)
BFLN南相馬市、飯舘村、双葉町、葛尾村	0	0	0	0	1	0	0	1(1)
ABDEGHKLM相馬市、南相馬市、いわき市、新地町広野町、大熊町、双葉町、浪江町、富岡町、楡葉町	1	0	0	0	0	1	0	2(1)
ABDM相馬市、南相馬市、浪江町、いわき市	0	0	0	0	1	0	0	1(1)
ADM相馬市、いわき市、浪江町	0	1	0	0	0	0	0	1(1)
BDE南相馬市、いわき市、新地町	0	0	0	0	0	1	0	1(1)
C田村市	0	0	1	0	0	0	0	1(1)
浜通南部	0	0	1	0	0	1	0	2(2)
磐城地方、相馬地方	0	0	0	1	0	0	0	1(1)
磐城地方	0	0	1	4	0	0	0	5(5)
Dいわき市	2	5	2	1	4	1	0	15(7)
未調査(被災地該当か不明)	0	0	0	0	0	0	15	15(15)
合計	25	34	16	12	11	15	16	139(66)

※表の見方 ……論文に複数の研究分野がある場合、それぞれを1と数える。最右列の「計」欄中の括弧内は実際の論文数。

## ☆福島県の研究課題

- ① 被災地となる浜通地域では方言集が多く作られているものの、説明がない、または少ないものが結構ある。記述的研究の文法がほかの分野に比べて若干少ない。また、音声の研究も相馬市周辺に限られている。特に、いわきは方言集が多く、他の分野の研究が少ない。
- ② 先行研究は主に相馬市・南相馬市周辺といわき市に固まっており、原発事故により福島第一原発から 30km 圏内の双葉郡及び飯館村の研究は、他地域との地域差のみの研究に限定され、かなり少数となっている。特に双葉郡の記述的研究は見あたらなかった。
- ③ 相馬地方（相馬市、南相馬市）と磐城地方に関する文献は数があるが、その間の地域についてのもがない（あっても複数ある調査地点のひとつになっているだけ）。原発の避難区域として指定されている地域なので今後は調査が難しいと思われるが、記録の必要性は高い。
- ④ 記述的な研究をしている文献が比較的年代の古いものが多い。年代の新しいものは共通語化を扱ったものが多いが、網羅的な記述ではないので、近年の方言実態があまり把握されていない。被災地の中でも避難対象地域となっている土地であるので、調査研究が急がれる。

## 2.5 茨城県

被災地（市町村）：A 北茨城市 B 高萩市 C 日立市 D 東海村 E ひたちなか市  
F 水戸市 G 大洗町 H 鉾田市 I 鹿嶋市 J 神栖市 K 潮来市

### 《茨城県分野別研究件数》

	音声	文法	語彙	方言集	言語行動	その他	未確認	計
茨城県全域	1	1	1	4	1	1	0	9(5)
利根川流域	0	0	0	1	0	0	0	1(1)
A北茨城市	0	1	0	1	0	0	0	2(2)
F水戸市	1	0	0	0	0	1	0	3(3)
G大洗町	1	0	0	0	0	0	0	1(1)
未調査(被災地該当か不明)	0	0	0	0	0	0	2	2(2)
合計	2	1	0	6	0	1	2	18(14)

※表の見方 … 一論文に複数の研究分野がある場合、それぞれを1と数える。最右列の「計」欄中の括弧内は実際の論文数。

## ☆茨城県の研究課題

- ① 茨城県の被災地は宮城県等と同様、広範囲にわたり、内陸でも大きく建物が損傷したなどの話があるが、市町村ごとの被害の程度が不明のため、とりあえず津波による被害を受けたと思われる沿岸部に限って研究内容をまとめることとした。
- ② 津波による被災地である沿岸部に限定した場合、内陸のつくば市などが除かれるため、かなり少ない数となっている。ただし、比較的 2000 年前後の比較的近年の研究がされている。
- ③ 沿岸部でもっとも福島県に近く、福島第一原発から 50 キロ圏内の北茨城市では近年に方言集と世代差の研究がある。方言集は未入手のため内容がわからない。



- ④ 県庁所在地である水戸市での被災地域は、水戸市全体から見ると沿岸の一部地区に限られる。その地区においては居住を制限するなどの措置がとられており、とりわけ浜言葉の消失が懸念されるが、水戸市だけの研究は意外と少ない。茨城県方言とした方言集などは、水戸市の方言を対象としている可能性が高いが、調査地域が詳しく記載されておらず、不明である。
- ⑤ 大洗町は町域の約半分が浸水し、大洗港も船が陸に乗り上げるなどの被害が出ている。しかし、方言についての文献は音声の1件のみに限られ、語彙などについては記載が見あたらなかった。
- ⑥ 千葉県との県境となる利根川流域でも液状化現象などによる大きな被害が出ている。この地域については茨城県の文献として挙げたが、やはり数が少ない。

## 2.6 千葉県

被災地（市町村）： A 銚子市 B 旭市 C 匝瑳市 D 横芝光町 E 山武市 F 九十九里町

G 白子市 H 長生村 I 一宮町 J いすみ市 K 富津市 L 千葉市

（千葉県ホームページ内「東日本大震災による県内の被害状況図（千葉県防災危機管理監防災危機管理課調べ）」より津波被害地域を取り上げた）

《千葉県分野別研究件数》

	音声	文法	語彙	方言集	言語行動	その他	未確認	計
千葉県全域	4	9	13	17	0	2	0	45(28)
A銚子市	5	2	4	3	1	0	0	15(8)
B旭市	4	0	0	2	0	0	0	5(5)
C匝瑳市	1	0	1	0	1	0	0	3(1)
D横芝光町	0	0	0	0	0	0	0	0(0)
E山武市	4	2	1	0	1	0	0	9(6)
F九十九里町	2	1	6	1	1	0	0	11(8)
G白子市	2	2	3	1	2	2	0	12(5)
H長生村	4	0	0	9	0	0	1	13(13)
I一宮町	1	0	1	2	1	0	0	5(2)
Jいすみ市	2	0	4	0	1	0	0	7(4)
K富津市	0	0	2	2	1	0	0	5(6)
L千葉市	0	0	0	0	0	0	0	0
未調査(被災地該当か不明)	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	28	16	35	37	9	4	1	130(86)

### ☆千葉県の研究課題

- ① 千葉県は、液状化現象の被害のあった浦安市を含め、主に安房郡を除く東海岸部も地震の被害を多く受けているが、今回は津波の被害を受けた沿岸部のみを対象にした。千葉県ホームページ内の「東日本大震災による県内の被害状況図（千葉県防災危機管理監防災危機管理課調べ）」を手がかりにして、津波による被害のあった地域を対象として取り上げた。これらの地域に関する方言研究の概観としては、一般向けを対象とした方言集や方言語彙を取り扱った言語地図など、語彙に関する研究が多い。

[千葉県ホームページ「東日本大震災による県内の被害状況図」]

<http://www.pref.chiba.lg.jp/cache.yimg.jp/kouhou/h23touhoku/index.html>

- ② 共通語化が大幅に進んでいるとの見方から、近年の研究は非常に少ない。伝統的方言に関する研究はとくにその傾向が顕著である。1980年代あたりまでは千葉県全域または今回被災地対象地域として取り上げた銚子市・富津市などの沿岸部においても言語地図や語彙の意味・用法分析、さらに一般向けの方言集なども多く見られたが、90年代以降は徐々に少なくなっている。こうした千葉県北東部の地域は、共通語化などの影響も相まって方言の危機的状況にあるともいえる。とくに独特の浜言葉といった漁業関連語彙も徐々に失われていく可能性もあるため、語彙調査もさらに必要であろう。
- ③ 今回は被災地対象地域を津波の被害のみに絞ったため、液状化といった地震による被害は含めていない。浦安市や木更津市などの東海岸部も液状化の大きな被害を受けている。また、震災から数カ月が経過した時点で、利根川流域を中心に避難を始めた人たちがいるようである。今後、避難の状況を見つつ、必要に応じて調査を行う必要がある。

## 2.7 複数県にわたる文献・資料

次に、複数県にまたがっており、それぞれの県の一覧には含まれていない調査研究を以下に示す。談話資料が多いため、「談話資料」と「その他の資料」（多くは音声に関する資料）に分けて記す。

ただし、これらは全体的に調査がまだ行き渡っていない。今後、網羅的に調査を行い、順次今回のリストを補っていきたい。また、考察も行き届いていないため、今後の課題としたい。

### ◇談話資料

- ① 日本放送協会編（1981）『全国方言資料』NHK出版（CD-ROM版 1999年発行）

【被災地該当調査地点】 ※（ ）内は現在の市町村名

岩手県：九戸郡種市町中野（洋野町）、岩手県宮古市高浜

福島県：相馬郡石神村（南相馬市）

- ② 国立国語研究所（2002, 2006）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』国書刊行会（文化庁の「各地方言収集緊急調査」の一部）

【被災地該当調査地点】 ※（ ）内は現在の市町村名

宮城県：仙台市

茨城県：水戸市

千葉県：長生郡長生村（長生市）

※ その他、文化庁（1977～1985）「各地方言収集緊急調査」の調査として以下の地点の調査が行われている。

【被災地該当調査地点】 ※（ ）内は現在の市町村名

青森県：下北郡川内町（むつ市）、北上郡野辺地町、三戸郡五戸町

岩手県：久慈市、宮古市、大船渡市

宮城県：本吉郡歌津町（南三陸町）、亶理郡亶理町（亶理町）

福島県：いわき市

茨城県：高萩市、鹿嶋郡大野村（鹿嶋市）

千葉県：海上郡飯岡町（旭市）

③ 国立国語研究所（1975～1981）『国立国語研究所資料集 方言談話資料』秀英出版

【被災地該当調査地点】 ※（ ）内は現在の市町村名

宮城県：亶理郡亶理町荒浜（亶理町）

千葉県：館山市相浜

◇ その他の資料

① 大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』おうふう p.461 より（調査内容：母音・子音・拍）

【被災地該当調査地点】 ※（ ）内は現在の市町村名

青森県：八戸市

岩手県：九戸郡種市町（洋野町）、九戸郡大野村（洋野町）、久慈市、九戸郡野田村、宮古市、

下閉伊郡岩泉町、下閉伊郡普代村、下閉伊郡田野畑村、下閉伊郡田老町（宮古市）、

下閉伊郡川井村（宮古市）、上閉伊郡大槌町

宮城県：仙台市、亶理郡山元町（山元町）、本吉郡本吉町（気仙沼市）

福島県：いわき市、双葉郡檜葉町

② 大橋勝男（2008）『太平洋沿岸方言音声の研究』おうふう

【被災地該当調査地点】 ※（ ）内は現在の市町村名

岩手県：下閉伊郡川井村河内（宮古市）

千葉県：市原市東国吉

### 3 被災地における研究書籍・論文等リスト

#### 3.1 概要

前節に挙げた談話・音声資料以外の研究書籍及び論文等について、2012年2月末現在において収集できている分を、県ごとに書籍と論文のリストとして、下の文献リスト一覧のとおり掲載する。

リストに記載しているのは、編著者、発表年、論題または書名（論文の場合は掲載雑誌等）、発行所・出版社、書籍の総ページ数または論文等では記述のあるページ箇所、対象地域（地域、郡、市町村または大字・字）、内容（分野）、そのほか「注」として、資料の性質について考慮すべき点について一部記してある。

#### 【文献リスト一覧】

- ① 青森県文献リスト（書籍）    ② 青森県文献リスト（論文）    ③ 青森県文献リスト（市町村史）
- ④ 岩手県文献リスト（書籍）    ⑤ 岩手県文献リスト（論文）    ⑥ 岩手県文献リスト（市町村史）
- ⑦ 宮城県文献リスト（書籍）    ⑧ 宮城県文献リスト（論文）    ⑨ 宮城県文献リスト（市町村史）
- ⑩ 福島県文献リスト（書籍）    ⑪ 福島県文献リスト（論文）    ⑫ 茨城県文献リスト（市町村史）
- ⑬ 茨城県文献リスト（論文）    ⑭ 千葉県文献リスト（論文）    ⑮ 千葉県文献リスト（市町村史）

#### 3.2 「内容」について

一覧表の「内容」の欄には、その研究が対象としている分野や内容を示した。次の一覧のように、まず大分類に従って分け、下位区分として、大分類それぞれ中小分類を設けてある。欄内への記入については、「《大分類》中分類または小分類」という形で記載してある。

#### 【「内容」分類一覧】

① **大分類**：《記述的研究》《地理的分布》《世代差》《グロットグラム》《共通語化》

② **中小分類**：（中分類；小分類）

音声； 音声、音韻、アクセント、イントネーション、その他

語彙； 方言集、意味・用法、その他

文法； 文法概説、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、

文末形式・文末表現、その他

方言意識

言語行動； 談話分析、表現、その他

待遇表現； 敬語、その他

談話資料

その他

なお「内容」の欄が空欄のものは、入手が困難などの理由によって内容確認ができていないものである。今後、入手次第確認を行っていききたい。

① 青森県文献リスト（書籍）

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	築瀬 栄	1906	教育適用南部方言集	八戸印刷	53	南部地方	《記述的研究》方言集	
2	青森県師範学校	1907	方言調査報告	小藤印刷所	16	-		
3	青 森 県	1908	青森県方言詠話	青森県庁	110	全域	《記述的研究》方言集	「総説」として津軽方言についての音声・音韻、また文法概説がある。南部方言については方言集あり。『青森県方言資料集 1』所収
4	東奥日報社	1932	青森県方言集(最新東奥日用語辞典所収)	東奥日報社	214(48)	全域	《記述的研究》方言集	
5	小井川潤次郎	1932	青森県八戸市近傍植物方言	[私製]	46	八戸市	《記述的研究》方言集	植物名。『青森県方言資料集 2』所収
6	青森県師範学校菅沼貴一	1935	青森県方言集	青森県師範学校	180	全域	《記述的研究》音韻、方言集、助詞・助動詞、活用	
7	菅沼貴一	1936	青森県方言集(改訂本)	今泉書店	190	全域	《記述的研究》音韻、方言集、助詞・助動詞、活用	
8	江波益太郎	1949	正しく美しいことばの生活を求めて 私の方言研究ノート	三戸郡地引小学校	54	八戸市	《記述的研究》音韻、アクセント、《その他》方言矯正	南部方言についての言及
9	四戸 松三郎	1950	上北地名原義稿	四戸松三郎	66	上北郡		
10	青森県国語教育研究会	1955	ことばのほん	刀江書院	32	-		
11	青森県国語教育研究会	1955	ことばのほん解説篇	刀江書院	77	-		
12	日野 資純	1958	青森方言から共通語へ～音韻アクセントを中心として～		22	全域	《記述的研究》音声・音韻	青森県全般について。『青森県方言資料集 1』所収
13	津島金次郎	1958	文法を通してことばへの関心を高める一考察(ト)	津島金次郎	32	-		
14	寺井 義弘	1962	青森県南部方言考	八戸市教育委員会	112	南部地方	《記述的研究》音声・音韻、方言集、文法概説、活用	表紙には「昭和37年10月」とあるが、内書きに1962.9.25の日付あり。『青森県方言資料集 3』所収
15	読売新聞社青森支局	1965	青森のことば	読売新聞社青森支局	31	全域	《記述的研究》その他	新聞の連載記事。雑多な内容
16	此島 正年	1966	青森県の方言	青森県文化財保護協会	220	全域	《記述的研究》音韻、アクセント、イントネーション、方言集、意味・用法、助詞、活用、条件表現、《共通語化》音韻、意味・用法、助詞、敬語	共通語学習法の記述も
17	九学会連合下北調査委員会	1967	下北・自然・文化・社会	平凡社	563(50)	東通村、六ヶ所村	《記述的研究》アクセント、助詞、活用、ボイス、敬語、《地理的分布》アクセント、方言集、《クロックグラム》方言集	
18	菅沼貴一編	1975	青森県方言集(再刊)(原本は1936年刊)	国書刊行会	190	全域	《記述的研究》音韻、方言集、助詞、活用	
19	工藤祐	1979	津軽と南部の方言	北方新社	250	南部地方	《記述的研究》方言集	青森県の文化シリーズ15。津軽・南部の方言についての語彙集。自然の部(天象、地勢)、生物の部(鳥獣、魚介、昆虫、植物)
20	平山輝男編	1982	北奥方言基礎語彙の総合的研究	桜楓社	642	八戸市	《記述的研究》音韻、アクセント、方言集、意味・用法、助詞、活用、ボイス、文末形式・文末表現、敬語	
21	佐藤 政五郎	1982	南部のことば	伊吉書院	373	八戸市	《記述的研究》方言集	約17000語
22	館 光子 (本名 松館光城)	1983	ことばのごもず 方言が語る私の八戸	八戸地域社会研究会	164	八戸市	《記述的研究》音韻、方言集、意味・用法、その他、談話、方言意識	八戸町大字塩町。八戸で話されている方言全般について広く記述されている。但し、文法事項などは少ない。主に語彙、談話的資料、昔話など。
23	高松敬吉編	1984	下北半島昔話集	岩崎美術社	257	下北郡	《記述的研究》談話資料	全文方言口調(関敬吾『日本昔話集成』よりの収録数が多い。すべて地元の話者から採録)共通語対訳はなし(接続助詞等一部括弧書きで記載する程度)
24	高橋圭三	1984	教育適用南部方言集：共通語索引並びに解説	[私製]	31	南部地方	《その他》築瀬栄(1906)の共通語索引	
25	大嶋 孜	1986	下北半島東通村の昔話 わたしの民話ノート	青森県国民教育研究所	212	東通村	《記述的研究》文法概説、その他(昔話)	一村内のものとしては詳しい。「大利部落の方言」とセットの内容
26	大嶋 孜	1986	下北半島大利部落の方言	青森県国民教育研究所(青森教文社)	172	東通村	《記述的研究》方言集	「東通村の昔話」とセットの内容
27	寺井 義弘	1986	青森県南・岩手県北・八戸地方方言辞典 古語出典付	寺井義弘	452	八戸市	《記述的研究》方言集、文法概説	
28	佐藤 政五郎	1987	南部のことば 第二版増補新版	伊吉書院	196	八戸市	《記述的研究》方言集	『南部のことば』より4466語増補



No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
29	佐藤 政五郎	1990	『第二版 南部のことば』補遺集	佐藤 政五郎	47	八戸市	《記述的研究》方言集	『南部のことば』第二版の後に収集した2069語をまとめたもの
30	佐藤 政五郎	1992	南部のことば 第3版 増補改訂	伊吉書院	206	八戸市	《記述的研究》方言集	『第二版 南部のことば補遺集』までの23400余語をまとめたもの
31	井上史雄・篠崎晃一・小林 隆・大西拓一郎	1994	東北方言考1 東北一般・青森県<日本列島方言叢書2>	ゆまに書房	594	-		
32	岡田一二三	1996	みらのく 南部の方言	伊吉書院		南部地方		
33	鶴田要一郎	1999	ふるさと歳時記2	青沼社	170			
34	北海道教育委員会・青森県教育委員会・岩手県教育委員会編・天野武監修	2000	北海道・東北地方の民俗地図1 北海道・青森・岩手	東洋書林	324(62)	東通村、六ヶ所村、三沢市、百石町(おいらせ町)、八戸市、階上町	《地理的分布》意味・用法	
35	青森県	2003	青森県史 自然編 生物 別冊 青森県の生物呼称	青森県	238	全域	《地理的分布》意味・用法	
36	津南弁策	2003	新漫才集2 津軽弁vs南部弁	北の街社	220	津軽地方、南部地方	《その他》	津軽弁と南部弁によるコントシナリオのようだが、どこが南部弁なのかわからない。1巻に解説があるらしい。」
37	平山輝男ほか編著 佐藤和之・大島一郎・大野真男・久野真・久野マリ子・平沢洋一・櫛引洋子執筆	2003	青森県のことば<日本のことばシリーズ2>	明治書院	286	全域		
38	津南弁策	2004	新漫才集3 津軽弁vs南部弁	北の街社	222	津軽地方、南部地方	《その他》	津軽弁と南部弁によるコントシナリオのようだが、どこが南部弁なのかわからない。1巻に解説があるらしい。」
39	佐藤政五郎著 佐藤謙・佐藤いつ編著	2006	へんだら、まんつ 南部のことば抄	木村書店	278	南部地方	《記述的研究》方言集	方言語彙の中でも古語の残存と思われる語について掲載し解説している。
40	不明	19--	八戸附近方言及訛語	[私製]	4	八戸市	《記述的研究》方言集	『青森県方言資料集 1』所収
41	八戸郷土研究会	19--	方言採集録	[私製]	127	八戸市	《記述的研究》方言集	名詞は「天文」「地理」など語彙ごとにあり、ほかに「代名詞」「動詞」など品詞ごとにまとめられている

② 青森県文献リスト (論文)

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
1	菅沼 貴一	1933	「青森県方言集」より	国語教育18-3		-		
2	菅沼 貴一	1933	青森県の方言	郷土号1(青森県師範学校校友会)	99-132	全域	《記述的研究》音韻、方言集、助詞・助動詞、活用	
3	八角 三郎	1933	陸奥下北半島地名考	旅と伝説6-6		下北郡		
4	内田 武志	1934	青森県方言調査報告	土の香12-3	46-71	八戸市、百石町	《記述的研究》方言集	
5	永田 吉太郎	1936	青森県八戸市方言稿	方言6-2	153-155	八戸市	《記述的研究》方言集、意味・用法、助詞、活用	
6	佐藤 政五郎	1936	南部方言訛語序説	郷土号4(青森県師範学校校友会)	(6)	南部地方		
7	宮良 当杜	1940	青森県秋田両県に於けるP音	〔安藤教授還暦祝賀論文集〕	1017-1040	全域	《記述的研究》音声、音韻	
8	北山 長雄	1951	青森県方言音韻語法の特徴形の実態(M)	国研報告書	(6)	-		
9	北山 長雄	1951	青森県方言の概観(M)	国研報告書	1-113	全域	《記述的研究》音声・音韻、文法概説、方言集、《地理的分布》語彙	地理的分布は「メダカ」と「神官」
10	大西 久枝	1952	青森県下北地方に於ける音韻について	文学論叢2	18-29	下北郡	《記述的研究》音韻	
11	此島 正年	1952	青森(ことば風土記)	言語生活12	38-39	津軽・南部	《記述的研究》文法概説	
12	豊巻 英吉	1953	南部(八戸)方言に於ける助動詞について―特にサル・エルについ	国語学12	96-97	八戸市	《記述的研究》活用、助動詞	
13	三上 猛美	1954	青森県小学校児童の国語学力検査	青森県教育研究所研究紀要2	39-130	?	《記述的研究》音韻	「すずめ」「えんびつ」「あたらしい」「いぬ」の表記の誤りが「日常の発音のあやまりが誤答の原因」と考察しているのみ。(p.73-74)
14	此島 正年	1954	青森県小学校国語能力調査	青森県教育研究所研究紀要3	(6)	-		
15	此島 正年	1954	青森方言の敬語法	弘前大学人文社会	39-45	津軽・南部	《記述的研究》敬語	
16	小島 俊之亮	1956	下北地方の田名郡井(ことば風土記)	言語生活52	75-76	下北地方	《記述的研究》音声、文末形式・文末表現	
17	此島 正年	1956	青森	〔NHK国語講座4方言の旅〕	(6)	八戸市	《記述的研究》アクセント、助詞	
18	小島 俊之亮	1956	下北方言の表情(ことば風土記)	言語生活63	74-75	下北郡	《記述的研究》音声、方言意識	
19	此島 正年	1960	方言と共通語の交渉―青森県言語の語法を例として―	弘前大学人文社会22	105-116	全域	《記述的研究》文法概説、助詞、形容詞・助動詞など	主に津軽地方
20	此島 正年	1961	方言の実態と共通語化の問題点 青森	〔方言学講座〕2	127-149	津軽・南部	《記述的研究》音韻、アクセント、文法概説、助詞、《共通語化》音声、音韻、アクセント、助詞、敬語	
21	寺井 義弘	1963	青森県南部方言考(抄)	国語研究16(日本書院)	(8)	八戸市	《記述的研究》音韻、文法概説	
22	川本 栄一郎	1963	青森県下北地方におけるウ段音	国語学研究3	74-85	東通村	《記述的研究》音声、音韻、《地理的分布》音声、音韻	
23	柴田 武	1964	下北方言の分布	人類科学17	72-87	東通村	《地理的分布》アクセント、方言集	
24	此島 正年	1965	下北方言語法考	弘前大学人文社会35-5	53-64	東通村	《記述的研究》文法概説、助詞、活用、敬語、《地理的分布》文法概説	
25	柴田 武	1965	下北の方言	都立大学方言学会会報6	(6)	東通村	《記述的研究》アクセント	
26	川本 栄一郎	1965	青森県下北方言の「イ」と「ウ」	国語学61	16-28	東通村、六ヶ所村	《記述的研究》音韻、《地理的分布》音韻	
27	日野 資純	1966	下北地方における共通語教育―従来の成果と今後の問題点―	人類科学18	146-171	東通村	《記述的研究》音声、《共通語化》音声、アクセント、文法概説、助詞、文末形式・文末表現	
28	川本 栄一郎	1966	青森県下北地方のウ段拗長音	国語学研究6	1-14	東通村、六ヶ所村	《記述的研究》音声、音韻、《地理的分布》音声、音韻、《世代差》音声	
29	川本 栄一郎	1966	青森県下北地方における「あやめ」の方言分布とその解釈	国語学67	47-59	東通村、六ヶ所村	《記述的研究》音声、意味・用法、《地理的分布》音声	
30	佐藤喜代治・加藤正信	1974	青森県東南部・岩手県西北部地方の言語調査報告―音韻、アクセント―	日本文化研究所研究報告別巻11	1-17	三沢市、百石町	《記述的研究》音声、音韻、アクセント、《地理的分布》アクセント、意味・用法	
31	佐藤喜代治・加藤正信	1975	青森県東南部・岩手県西北部地方の言語調査報告―文法、語彙の部―	日本文化研究所研究報告別巻12	1-20	三沢市、百石町	《記述的研究》助詞、条件表現、助動詞・動詞など、《地理的分布》意味・用法	
32	井上 史雄	1976	東落内の言語差―下北半島上田屋―	北海道大学人文科学論集12	65-101	東通村	《地理的分布》意味・用法、《世代差》意味・用法、《共通語化》意味・用法	
33	加藤正信	1978	八戸方言の系統	伝統と未来 八戸市民大学講座講演集1977	102-113	八戸市	《記述的研究》音声、アクセント、助詞、方言区画、《共通語化》その他	
34	川本 栄一郎	1982	青森県における「鱈」の成長段階名	文経論叢17-3人文2	101-118	全域	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	
35	佐々木 隆次	1982	あいさつお国めぐり(12) 青森の巻―直截にして簡明	言語生活365	94-95	津軽・南部・下北	《記述的研究》意味・用法	
36	此島 正年	1982	青森県の方言	〔講座方言学4 北海道・東北地方の方言〕	215-236	全域	《記述的研究》音声、音韻、アクセント、文法概説、助詞、研究史・区画	
37	高橋宏一・ニッ矢昌夫・竹浪 二三正	1982	青森県言語調査の統計的解析(1)	Science Reports of the Hirosaki Univ. 29-2	93-111	東通村、六ヶ所村	《記述的研究》統計	
38	此島 正年	1983	青森県方言語法にまつわる諸問題 共通語との関連を主として	〔現代方言学の課題1〕	121-137	主に西部(三沢市あり)	《記述的研究》文法概説、助詞、活用、《共通語化》助詞、活用、動詞など	
39	ニッ矢昌夫・高橋宏一	1983	青森県言語調査の統計的解析(2)	Science Reports of the Hirosaki Univ. 30-1	11-19	東通村、六ヶ所村	《記述的研究》統計	
40	川本 栄一郎	1984	青森県方言におけるビックキとモッケとゲアロの言語地理学的考察	文経論叢19-3人文4	85-111	全市町村	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	
41	大阪 真理	1984	青森県における親族語彙(1)	方言誌あおりけん2	10-20	東通村、六ヶ所村、三沢市、八戸市	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	広く青森全域に渡った調査、「祖父」を意味する方言の分布
42	佐々木 隆次	1984	語源めぐり歩き	方言誌あおりけん2	21-29	六ヶ所村、三沢市	《記述的研究》意味・用法	「おばあさん」に関する語彙の記載あり

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
43	八条 志馬	1985	富山地方と徳島、大阪、青森、北海道の方言研究	北海道方言研究会会報10	(4)	?	《記述的研究》意味・用法	
44	大阪 真理	1985	青森県における親族語彙(2)	方言誌あおりけん3	4-26	東通村、六ヶ所村、三沢市、八戸市	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	広く青森全域に渡った調査、「祖母」「父」「母」を意味する方言の分布
45	渡辺修平	1985	青森アクセントについて その1	方言誌あおりけん3	1-3	全域	《記述的研究》アクセント	
46	井上 史雄	1986	《新方言》と共通語の20年後 下北半島上田屋	東京外国語大学論集36	62-80	東通村	《共通語化》語形	
47	八条 志馬	1986	方言の研究 青森、秋田、北海道	北海道方言研究会会報13	(3)	-		
48	館 光子	1986	謡曲と八戸	方言誌あおりけん4	1-3	八戸市	《記述的研究》八戸の言葉に関する雑感・随想	八戸の言葉に関する雑感・随想
49	大阪 真理	1986	青森県における親族語彙(3)	方言誌あおりけん4	3-26	東通村、六ヶ所村、三沢市、八戸市	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	広く青森全域に渡った調査、「兄」「姉」「まっ子」を意味する方言の分布
50	佐々木 隆次	1986	「クンスガサエビ」の「クンス」を求めて	方言誌あおりけん4	27-38	三沢市、八戸市	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	「クンス」に関する調査(語彙)、ただし被災地域に関するものは少ない
51	村上 謙	1986	「クラバネア」	方言誌あおりけん4	50-51	三戸郡	《記述的研究》意味・用法、活用	
52	此島 正年	1987	青森方言雑考	方言誌あおりけん5	1-4	八戸市	《記述的研究》意味・用法、条件表現、文末形式・文末表現	「ウザネハク」、「マイネ」、「行クンダ」「起キンダ」などの命令法
53	高山 治	1987	県内高校生の方言意識調査(1)	方言誌あおりけん5	22-33	八戸市	《記述的研究》方言意識、《地理的分布》方言意識	青森、弘前、八戸の高校生を対象としており、各市間での比較、男女差にも触れている
54	館 光子	1987	訛りは国の手形	方言誌あおりけん5	38-39	八戸市	《記述的研究》方言に対する雑感	方言に対する雑感、「なしらがえし」を八戸の商家で隠語として使っているという記述あり
55	川本 栄一郎	1988	青森県における「旧暦六月一日」を表わす名称の言語地理学的考察	〔国語語彙語法論叢 此島正年博士喜寿記念〕	634-654	東通村、六ヶ所村、三沢市、百石町、八戸市、階上町	《地理的分布》方言集、意味・用法	
56	川本 栄一郎	1988	青森県における「つらら」と「氷」の方言分布	方言誌あおりけん6	11-15	東通村、六ヶ所村、三沢市、百石町、八戸市、階上町	《地理的分布》意味・用法	
57	高山 治	1988	県内高校生の方言意識調査(2)	方言誌あおりけん6	49-82	八戸市	《記述的研究》文末形式・文末表現、方言意識	青森、弘前、八戸の高校生を対象としており、各市間での比較、男女差にも触れている
58	戸部 精一	1989	「方言ノート」から	方言誌あおりけん6	32-43	?	《記述的研究》意味・用法	
59	森下 喜一	1991	地域別・年齢別にみた青森方言 7の変化とその過程について1・2 音節名詞を中心に	〔日本語論考〕	128-144	八戸・十和田・野辺地・むつ・弘前・青森・五所川原・今別	《記述的研究》アクセント、《地理的分布》アクセント、《世代差》アクセント	
60	森下 喜一	1991	青森方言アクセントの型とその変化について三・四音節語を中心に	作新学院大学紀要1	113-132	八戸市	《記述的研究》アクセント	
61	大西 拓一郎	1992	青森県八戸市新井田方言における身体感覚を表すオノマトペ	方言資料叢刊2	13-16	八戸市	《記述的研究》方言集、意味・用法	
62	葛西 孜	1991	女子短大生の方言・共通語意識	方言誌あおりけん9	1-11	全域	《記述的研究》方言意識	女子短大生の方言意識に関する調査
63	館 光子	1992	方言随想「メドツ」ど「カダル」	方言誌あおりけん10	53-55	八戸市	《記述的研究》意味・用法	「メドツ」(かつぼ)と「カダル」(参加する)に関する八戸方言による、八戸の昔話の記述
64	館花久二男	1992	ケガツの話(1)	方言誌あおりけん10	50-52	八戸市	《記述的研究》談話資料	女子短大生の方言使用に関する調査
65	葛西 孜	1992	女子短大生の方言使用状況	方言誌あおりけん10	1-13	全域	《記述的研究》意味・用法、方言意識	女子短大生の方言使用に関する調査
66	岡田 一二三	1993	下北のサイとサマエ	方言誌あおりけん11	32-33	下北地方、八戸市	《記述的研究》意味・用法	下北の待遇表現、雑感に近い
67	館花久二男	1993	ケガツの話(2) その2 ハチネンケガツ 八年続いた飢饉	方言誌あおりけん11	34-35	八戸市	《記述的研究》談話資料	八戸方言による、八戸の昔話の記述
68	葛西 孜	1993	「女性語」使用の実態と意識—女子短大生の場合—	方言誌あおりけん11	1-31	全域	《記述的研究》意味・用法、条件表現、文末形式・文末表現、方言意識	文末表現を中心に、女子短大生の女性語使用に関する調査
69	川本 栄一郎	1994	津軽と南部のことば	〔国語論叢4 現代語・方言の研究〕	156-181	全域	《地理的分布》意味・用法、文法概説	
70	川本 栄一郎	1994	青森県と富山県における「かぼちゃ」の方言分布とその変遷	国語国文学16(弘前大学)	(21)	東通村、六ヶ所村、三沢市、百石町、八戸市、階上町	《記述的研究》意味・用法、《地理的分布》意味・用法	
71	小泉 智子	2003	六ヶ所村における方言語彙	弘学大語文 29	8-15	六ヶ所村	《記述的研究》意味・用法、《共通語化》意味・用法	
72	佐藤 亮一	2006	青森県における「あさっての翌々日」を意味するキササツテの由来について 大正大学学生・大坪俊介君の意見をヒトとして	国文学踏査 18 (大正大学国文学会)	304-312	LAJに準拠	《記述的研究》意味・用法、語源、《地理的分布》意味・用法	
73	吉田 雅昭	2008	東北方言における基本的時間表現形式について 形式の変化と文法体系との相関	日本語の研究4-2 (日本語学会)	45-60	青森市・八戸市ほか県外	《記述的研究》テンス・アスペクト	
74	津田 智史	2011	東北諸方言アスペクトの捉え方	東北文化研究室紀要52	180-186	六ヶ所村、三沢市、八戸市	《記述的研究》テンス・アスペクト、《地理的分布》テンス・アスペクト	

※ 頁数で括弧書きになっているものは総ページ数。

③ 青森県文献リスト（市町村史）

No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	正部家 奨	1977	階上町誌	階上町	799-830	階上町	《記述的研究》方言集	第五章 方言・訛語
2	東通村史編集委員会	1997	東通村史 民俗・民俗芸能編	東通村	376-433	東通村	《記述的研究》語彙、音韻、助詞、その他	岡田一二三著 第九節「言語」、エッセイ的な概説あり
3	八戸市史編集委員会	2005	新編 八戸市史 別編 自然編	八戸市史編集委員会	485-501	八戸市	《記述的研究》語彙その他	第2部 第6章 方言呼称に関する一考察
4	八戸市史編集委員会	2010	新編 八戸市史 民俗編	八戸市史編集委員会	519-539	八戸市	《記述的研究》方言集その他	第七章 第二節 ことば・方言

## ④ 岩手県文献リスト（書籍）

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	八重樫真	1922	釜石町方言誌	日本民俗研究会	116	釜石市	《記述的研究》音韻、文法概説、方言集	
2	田鎖直三	1928	気仙郡方言	[私製]	42	気仙郡	《記述的研究》方言集	岩手県方言資料集 2
3	上閉伊郡釜石尋常高等小学校郷土教育研究部	1931	釜石地方方言集	上閉伊郡釜石尋常高等小学校郷土教育研究部	23	釜石市	《記述的研究》方言集	『岩手県方言資料集 1』所収。天体ノ部、地文ノ部などに分けられた語彙集
4	下閉伊郡船越尋常高等小学校	1931	船越村ヲ中心トセル発音ノ誤リト方言訛語	下閉伊郡船越尋常高等小学校	16	山田町	《その他》方言矯正、共通語教育	『岩手県方言資料集 1』所収。発音の矯正や共通語教育を目的としたものの
5	八重樫 真	1932	岩手県釜石町方言誌 (h)	日本民俗研究会	116	釜石市	《記述的研究》音韻、方言集、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	語数多い。
6	佐藤 文治	1954	気仙地方のこば 社協シリーズ第2集	大船渡市教育委員会	12	気仙郡(大船渡市)	《記述的研究》語彙、意味・用法	気仙郡に見られる方言語彙について意味や語源などについてエッセイ的に解説。
7	遠野高校社会科学研究会	1955	上閉伊方言集		68	上閉伊郡		
8	小松代融一	1959	岩手方言の語彙(岩手方言研究第三集)	岩手方言研究会	406	全域	《記述的研究》方言集	南部・伊達のどの市町村のものかは不明
9	小松代融一	1961	岩手方言研究史考(岩手方言研究第二集)	岩手方言研究会	1085	全域、九戸郡、気仙郡、宮古市、山田町、釜石市	《記述的研究》音韻、アクセント、方言集、意味・用法、語源、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、敬語、先行研究一瞥・先行研究	古い分量多い。過去の研究・資料がわかる。
10	金野 静一・菊池 武人	1964	気仙方言誌	金野静一・菊池武人	170	気仙郡	《記述的研究》文法概説、方言集	
11	佐藤 文治	1965	気仙こば	気仙こば刊行会	147	気仙郡	《記述的研究》方言集	
12	日本放送協会	1966	全国方言資料第1巻 東北・北海道編	日本放送出版協会	369(28)	宮古市	《記述的研究》談話資料	自由会話×2、あいさつ
13	西井信男	1972	岩泉地方の方言訛語	岩泉町教育委員会	142	岩泉町	《記述的研究》方言集	巻末に「わらべ謡、はやしこば、譬集」あり。
14	松村佐紀子	1975	岩手県上閉伊郡大槌方言資料2	松村佐紀子	68	大槌町	《記述的研究》談話資料	
15	金野 静一	1976	気仙地方の俚諺第2版	大船渡市教育委員会教育課	16	気仙郡		
16	佐藤 文治	1976	気仙地方のこば第2版	大船渡市教育委員会教育課	12	気仙郡		
17	本堂寛	1976	岩手県閉伊川流域言語地図集	岩手大学教育学部国語学研究室	116	宮古市	《地理的分布》語彙	『日本語地図』にある75項目を閉伊川流域で調査し、地図化したもの
18	金野菊三郎	1978	気仙方言辞典 付・音韻と語法	大船渡芸術文化協会	172	気仙郡	《記述的研究》音声・音韻、活用、助詞・助動詞、方言集、その他(諺)	
19	佐藤文治	1980	気仙こば(第2版)	大船渡市立博物館	234	気仙郡	《記述的研究》方言集	佐藤文治(1965)の再版。内容はほとんど同じで、こちらは校正後書きが付けられている。
20	本堂寛	1980	岩手県山田町 山田こば辞典	岩手大学教育学部国語学研究室	185	山田町	《記述的研究》方言集、助詞・助動詞	
21	国立国語研究所	1981	方言談話資料(5) 岩手・宮城・千葉・静岡	秀英出版				
22	飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一	1982	講座方言学4—北海道・東北地方の方言—	国書刊行会	442(33)	全域	《地理的分布》アクセント、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	概説書
23	伊藤麟市	1982	宮古の方言と敬語	田中タイプ印刷	189	宮古市	《記述的研究》方言集、敬語	「第一部 宮古の方言」として語彙集になっている。カタカナ表記。「第二部 敬語編」として具体的使用例を挙げながら語句レベルで解説を加えている。「第三部 宮古地方の諺 警えこば考」の補遺として俚諺も多少出る。巻末の近隣地域16地点の語彙対照表もあり。
24	大槌町民話研究会	1982	ふるさと大槌 吉里吉里方言辞典	三協企画出版部	63	大槌町	《記述的研究》方言集、表現	吉里吉里弁会話編として「店頭において」「トイレを尋ねるとき」などあり。
25	佐藤政五郎	1982	南部のこば	伊吉書院	373	洋野町、久慈市	《記述的研究》方言集	辞典。主は青森方言のため岩手の記述は少ない
26	菅野 嘉七	1989	気仙郡における方言の調査	共和印刷企画センター	255	気仙郡	《記述的研究》方言集	
27	堀米 繁男	1989	種市のこば 沿岸北部編	種市町歴史民俗の会	224	洋野町	《記述的研究》助詞・助動詞、方言集	
28	山浦 玄詞	1989	ケセン語入門 改訂補足版	共和印刷企画センター	464	気仙郡	《記述的研究》音声・音韻、アクセント、イントネーション、意味・用法、文法概説、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	教科書風
29	田老町教育委員会	1989	郷土民俗文化遺産ガイド ふるさと資料集	田老町教育委員会	161(99-107)	田老町	《記述的研究》方言集	他に「民話伝説、口碑伝説、なぞなぞ遊び、俗信・迷信」などあり。
30	九里 拓洋	1990	田野畑の諺(たとえひ)	九里 拓洋	118	田野畑村	《記述的研究》方言集、その他(諺)	
31	山田町教育委員会	1990	山田の方言1	山田町教育委員会	2	山田町		



No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
32	山田町教育委員会	1994	山田の方言2	山田町教育委員会	31	山田町	《記述的研究》方言集、談話資料	『山田の方言1』に追加する語または新たに漁業関係用語集も附。三編の談話資料にも共通語対照で挙げられている。
33	山浦 玄嗣	1992	みんなのケセン語1,2	山浦 玄嗣	2	気仙郡		
34	小山 正平	1997	わたくしの音語論 三陸地方の古代史を読み解く私家版	耕風社	301	三陸地方		
35	坂口忠	1999	宮古のことば	坂口忠	300	宮古市	《記述的研究》意味・用法	
36	北海道教育委員会・青森県教育委員会・岩手県教育委員会編 天野武監修	2000	北海道・東北地方の民俗地図! 北海道・青森・岩手	東洋書林	324(142)	洋野町、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市	《地理的分布》方言集	民俗地図。方言に関するものは半分程度。
37	山浦 玄嗣	2000	ケセン語大辞典 上 1. 文法編 2. 語彙編(A～M)	無明舎出版	1445	気仙郡	《記述的研究》音韻、アクセント、イントネーション、意味・用法、文法概説、助詞、活用、ボイス、テンズ・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	分量多く、記述詳細。
38	山浦 玄嗣	2000	ケセン語大辞典 下 2. 語彙編(N～Z・記号)付録・和々索引	無明舎出版	1366	気仙郡	《記述的研究》意味・用法	分量多く、記述詳細。
39	平山輝男ほか	2001	〈日本のことばシリーズ3〉岩手県のことば	明治書院	212	全域、久慈市、野田村、大船渡市、陸	《記述的研究》音韻、アクセント、方言集、意味・用法、助詞、活用、ボイス、テンズ・アスペクト	概説書
40	坂口忠	2001	宮古のことば2	坂口忠	351	宮古市	《記述的研究》意味・用法、表現、談話資料	道での挨拶(朝、昼、夕、夜)やさまざまな言語行動が載っている。
41	田中宣廣	2005	付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造	おうふう	548	宮古市	《記述的研究》アクセント	
42	関谷徳夫	2007	いとしく おかしく 懐かしく—私の吉里吉里語辞典	関谷徳夫	527	大槌町	《記述的研究》方言集	
43	堀米 繁男	2008	種市のことば 解説編	種市町歴史民俗の会	227	洋野町	《記述的研究》方言集、意味・用法	各語の用法が割合詳細に記されている。
44	田鎖直三	19—	南部地方方言説語調草稿	[私製]	36	南部地方	《記述的研究》方言集	「築瀬栄氏ノ昭和38年11月起草、昭和39年1月発行(八戸印刷所)セル南部方言集ハ略之二同ジ」とある。

⑤ 岩手県文献リスト（論文）

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
1	橋正一	1931	岩手県のジャンケンの掛け声	方言と土俗2-3	24-31	洋野町、久慈市、野田村、山田町、大船渡市、陸前高田市	《地理的分布》方言集	語数多い。説明あり。
2	橋正一	1931	岩手県海岸の風の名	方言と土俗2-6	11-13	洋野町、久慈市、宮古市、釜石市、大船渡市、陸前高田市	《地理的分布》方言集	説明なし
3	宮良当社	1941	宮城・岩手両県方言調査小報	方言研究3	61-67	大槌町、釜石市	《記述的研究》《地理的分布》音韻	記述少ない
4	東条操	1947	方言境界線の問題―岩手方言に例をとる―	日本の言葉1-3	83(19)-84(20)	全域、九戸郡、下閉伊郡、上閉伊郡	《地理的分布》アクセント、方言集	説明少ない
5	柴田武	1955	日本語のアクセント体系	国語学(21)	44-69	宮古市	《地理的分布》アクセント	体系を表にまとめる。東京語との比較も少々。
6	小松代融一	1957	方言の旅 三陸沿岸のことば(岩手)	NHK国語講座3-4		三陸地方		
7	柴田武	1957	方言の手帳3 ズーズー弁	放送文化12-11	54-55	宮古市	《地理的分布》音韻	ズーズー弁を中心に東北地方から北陸、出雲地方の差を見たもの。
8	見坊 豪紀	1960	小松代融一著「岩手方言の語彙」	言語生活102	75-76	全域	《記述的研究》方言集	書評、小松代融一「岩手方言の語彙」について
9	小松代融一	1961	岩手のことば	言語生活117	77-79	岩泉町、山田	《記述的研究》音韻、方言集	コラム的
10	小松代融一	1961	方言の実態と共通語化の問題点 岩手	方言学講座2	177-203	全域	《記述的研究》音韻、アクセント、助詞、活用、ボイス、テンソ・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	概説
11	柴田武	1961	ズーズー弁でない東北方言	国語学研究1	1-16	洋野町(旧種市町)、岩泉町	《記述的研究》音声、音韻、アクセント	岩泉や種市に見られる非ズーズー弁について、被災地は旧種市町のみ対象
12	柴田武	1962	岩手県岩泉付近の非ズーズー弁	国語学研究2	49-59	洋野町(旧種市町)、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市(旧田老町、旧川井村含む)	《記述的研究》音声、音韻、《地理的分布》音声、音韻、《世代差》音声、音韻	岩泉中心に周辺沿岸地域の調査、二拍・三拍名詞が主、ズーズー弁や全国の諸方言との歴史的関係の考察あり
13	小松代融一	1964	岩手県の方言区画	日本の方言区画	159-174	全域	《記述的研究》先行研究の区画紹介、《地理的分布》助詞、ボイス、敬語	区画に関する問題点にも触れる
14	本堂寛	1964	岩手県方言における敬語秩序についての考察	国語学研究(4)	24-37	洋野町、久慈市、野田村、普代村、宮古市、山田町、大船渡市、陸前高田市	《地理的分布》敬語	調査結果・考察詳細
15	高橋圭三	1965	東北方言の味―南部地方のことば―	言語生活168	80-81	不明(南部とのみ記述あり)	《記述的研究》意味・用法、その他	コラム、対象や調査方法の記述無し
16	佐藤喜代治	1966	岩手県三陸地方北部の言語調査報告	日本文化研究所研究報告別4	11-56	洋野町 久慈市 野田村 普代村 田野畑村 岩泉町 宮古市	《記述的研究》音韻、アクセント、助詞、活用、条件表現、《地理的分布》音韻、アクセント、意味・用法、助詞	分量多く詳細
17	坂口 忠	1966	岩手県宮古市方言語彙	研究紀要(宮古市教研)3	1-113	宮古市	《記述的研究》方言集	
18	川本栄一郎	1967	三陸地方北部におけるサ行音とザ行音	日本方言研究会第4回発表原稿集		三陸地方		
19	坂口 忠	1967	岩手県宮古市方言文法教育序説	研究紀要(宮古市教研)4	1-58	宮古市	《記述的研究》助詞、活用、その他(指示表現、質問・疑問)、表現、敬語、《その他》方言教育、方言資料	
20	本堂寛	1967	岩手県方言の系統と区画について	一関工高専研究紀要1	431-459	洋野町、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市	《地理的分布》活用、条件表現、文末形式・文末表現	分布図多数
21	本堂寛	1968	岩手県方言における文末助詞「ナハン」について	国語学研究(8)	11-20	洋野町 岩泉町 宮古市 釜石市	《地理的分布》助詞、文末形式・文末表現、《世代差》助詞、文末形式・文末表現	男女差に関する記述含む

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
22	川本栄一郎	1969	三陸地方北部における「ソ・ザ・ジョ・ジャ」の分布と解釈	国語学研究9	1-12	洋野町 久慈市 野田村 普代村 田野畑村 岩泉町 宮古市	《記述的研究》音韻、《地理的分布》音韻	広く沿岸北部全域に渡って音韻を記述
23	本堂寛	1970	文頭表現・文末表現に示される女性語意識—主として北奥方言について—	国語学研究(10)	36-58	九戸郡、気仙郡、久慈市、宮古市、釜石市、大船渡市	《記述的研究》文末形式・文末表現、方言意識、その他、《地理的分布》文末形式・文末表現、方言意識、その他	文末表現のほか文頭の簡単表現など、東北全般を対象、女性意識に関する考察等あり
24	佐藤喜代治・加藤正信	1972	三陸地方南部の言語調査報告	日本文化研究所研究報告 別巻8・9	1-51	山田町 大槌町 釜石市 大船渡市 陸前高田市	《地理的分布》音韻、アクセント、方言集、助詞、ボイス、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	分量多く詳細
25	加藤昭	1973	岩手県宮古市白浜の自然会話	フィールドの歩み4	117-134	宮古市	《記述的研究》談話資料	被調査者の自宅で録音した会話の書き落とし、音素表記、アクセントやイントネーションの記述あり
26	青柳精三	1973	東北の東海岸における方位潮流語彙の概観	フィールドの歩み4	49-69	久慈市、野田村、普代村、田老町、大槌町、三陸町	《地理的分布》語彙	岩手県久慈市久喜より茨城県日立市川尻に至る22の漁港で、漁歴の長い人から聞き取り調査をしたもの。
27	本堂寛	1977	地域社会の共通語化 岩手県下閉伊郡川井村の言語変容	文芸研究84	50-59	宮古市(旧川井村)	《共通語化》音韻、アクセント、助詞、活用、ボイス、条件表現、文末形式・文末表現、敬語	旧川井村は内陸側。沿岸部からは遠い。
28	本堂寛	1977	地域社会の共通語化	文芸研究84	50-59	宮古市	《共通語化》音韻、アクセント、助動詞、語彙	
29	田中信	1981	九戸郡地方方言集	岩手方言10	3-5	久慈市	《記述的研究》方言集	説明なし
30	小松代融一	1982	うざね舎雑筆11	岩手方言12	1-12	全域	《地理的分布》方言集	分量少なめ
31	本堂寛	1982	岩手県の方言	講座方言学4 北海道東北地方の方言	238-269	全域	《記述的研究》音声、音韻、アクセント、助詞、活用、条件表現、文末形式・文末表現、敬語、その他《地理的分布》音声、音韻、アクセント、活用、条件表現、文末形式・文末表現、敬語、その他	見出しには「語彙」とあるものの今後の研究への提言にとどまる、岩手全般としながらも盛岡市・一関市が中心のため被災地との関わりは薄い
32	森下喜一	1982	岩手アクセントの特徴と分布について 名詞を中心に	国語研究(国学院大学)45	14-39	久慈市、岩泉町、宮古市、釜石市、大船渡市	《地理的分布》アクセント	一拍・二拍・三拍名詞のアクセントの地理的分布、広く県全域を調査している
33	斎藤 孝滋	1987	「語中における子音の有声化現象」の音韻論的解釈 岩手方言を中心にして	語文論叢15	86-64	大船渡市(旧三陸町舞川)	《記述的研究》音声、音韻	盛岡、久慈、安代地域と関連して
34	斎藤 孝滋	1987	岩手方言における拍の統合現象共通語の「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍について	日本語研究9	526-518	久慈市	《地理的分布》音韻	久慈の記述は少なめ
35	岩手県聯合教育会	1988	言語の訛謬1	岩手方言24	4-5	九戸郡	《共通語化》方言集	方言矯正
36	岩手県聯合教育会	1989	言語の訛謬2	岩手方言25	5-7	下閉伊郡	《共通語化》音韻、助詞	方言矯正
37	大西拓一郎	1989	岩手県山田町方言のアクセント	国語学研究29	84(1)-75(10)	山田町	《記述的研究》アクセント	アクセントの規則を示す
38	山浦 玄嗣	1989	はい？いいえ？ケセン語・ウンツエハアの謎	言語18-1	86-89	気仙郡(主に大船渡市)	《記述的研究》意味・用法	応答詞について。分量少ない。
39	斎藤 孝滋	1990	岩手方言における語中子音有声化現象 音環境・語彙的事情・世代の観点から	国語学研究(東北大学)30	120(57)-107(70)	大船渡市	《記述的研究》音韻	記述の主は一関市
40	大西拓一郎	1991	岩手県下閉伊郡山田町における祝言のあいさつ	方言資料叢刊: Report of Dialectology 2	40-46	山田町	《記述的研究》表現	用例多いが説明なし
41	大橋勝男	1991	日本諸方言についての記述的研究(19)岩手県下閉伊郡川井村川内方言について	新潟大学教育学部紀要人文・社会科学編32-2	215-238	宮古市(旧川井村)	《世代差》音韻、アクセント、イントネーション	詳細
42	加藤正信・村上雅孝・神戸和昭・斎藤孝滋・武田拓・半沢康	1991	南部・伊達藩堺地帯における方言分布調査の報告と考察	東北大学日本文化研究所研究報告別巻28	55-85	釜石市、大船渡市	《記述的研究》音韻、意味・用法、条件表現、《地理的分布》意味・用法	浜荻など古方言集とぼうげん分布との関係にも触れている
43	斎藤 孝滋	1991	岩手方言における語中子音鼻音化現象 音環境・語彙的事情・世代の観点から	語文論叢(千葉大学)19	90-78	大船渡市(旧三陸町)	《記述的研究》音韻、助詞、その他	語彙や世代差と関連して音声について述べている。調査は三段階に分けて実施
44	小松代融一	1992	岩手師範学校方言集(上)	岩手方言32	5-11	九戸郡、気仙郡	《地理的分布》方言集	説明なし

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
45	大西拓一郎	1992	三陸沿岸地域方言のアクセント語彙(1) 金田一語彙 名詞	[東日本の音声論文編(2)]	19-39	洋野町 久慈市 野田村 普代村 田野畑村 宮古市 山田町	《地理的分布》アクセント	調査語数多い
46	大西拓一郎	1992	岩手県宮古市愛宕方言における身体感覚を表すオノマトペ	方言資料叢刊: Report of Dialectology 2	17-20	宮古市	《記述的研究》方言集	説明少々あり
47	大西拓一郎	1992	岩手県下閉伊郡山田町方言における身体感覚を表すオノマトペ	方言資料叢刊: Report of Dialectology 2	21-25	山田町	《記述的研究》方言集	説明少々あり
48	齋藤 孝滋	1992	岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象 言語内的・外的要因の観点から	国語学168	124-111	大船渡市(旧三陸町)	《地理的分布》音声、方言意識、《世代差》音声、方言意識	世代別の有声化・鼻音化の傾向、有声化・鼻音化に対する意識の調査
49	齋藤 孝滋	1992	母音無声化の「広さ」と「強さ」岩手方言を中心にして	国語学研究(東北大学)31	64(39)-50(53)	久慈市、大船渡市、陸前高田市	《地理的分布》音声	母音無声化の度合いを段階づけ
50	大西拓一郎	1993	三陸沿岸地域方言のアクセント語彙(2) 金田一語彙 動詞・形容詞	[東日本の音声論文編3 主要都市多人数調査(札幌・市名古屋市)報告](科研報告書)	1-18	洋野町 久慈市 野田村 普代村 田野畑村 宮古市 山田町	《地理的分布》アクセント	調査語数多い
51	齋藤 孝滋	1993	岩手県三陸町綾里方言の音韻	東北大学文学部日本語学科論集3	37-48	大船渡市	《記述的研究》音韻	分量多い。共通語との対応も
52	大西拓一郎	1994	岩手県九戸郡種市町平内方言のアクセント	方言資料叢刊: Report of Dialectology 2	15-18	洋野町(旧・九戸郡種市町平内)	《記述的研究》音声、音韻、テンス・アスペクト	調査結果の記述、音韻表記、アスペクトについて言及あり
53	齋藤 孝滋	1994	「岩手方言における/o/・e/・o/・i/融合現象の動態とその要因」	[ことばの世界 北海道方言研究会20周年記念論文集]	176-183	大船渡市	《グロットグラム》音韻	計量的
54	山浦 玄嗣	1994	「麗しきケセン語」	日本語論2-1	62-64	気仙郡	《その他》『ケセン語入門』執筆にあたって	
55	大西拓一郎	1995	岩手県種市町平内方言の用言の活用	[研究報告集16<国立国語研究所報告110>]	57-98	洋野町(旧・九戸郡種市町平内)	《記述的研究》音韻、助詞、活用、テンス・アスペクト	青森・八戸など隣接方言との関係、通時的観点からの考察あり
56	山浦 玄嗣	1996	ケセン語複合動詞の音調規則	言語学林 1995-1996	235-253	気仙郡	《記述的研究》アクセント	用例豊富
57	齋藤 孝滋	1997	岩手方言における語中/w/・o/の動態要因とパリエーションの計量的推定	国語学研究(東北大学)36	(1)94-(12)83	大船渡市	《共通語化》音声、音韻、方言意識、年代差	計量的。今後の予測も
58	齋藤 孝滋	2001	岩手県久慈市方言における形容詞活用体	都大論究38	53-62	久慈市	《記述的研究》音声、活用	
59	澤村 真貴子	2001	岩手県方言区画試論	弘学大語文27	1-11	全域	《記述的研究》文法・アクセント・語彙による区画	先行研究の区画図を統合
60	齋藤 孝滋	2002	岩手県久慈市方言の音韻対応—共通語との対応を中心として	玉藻38	1-17	久慈市	《記述的研究》音韻	
61	田中 宣廣	2003	陸中宮古方言アクセントの実相	国語学 54(4)	44-59	宮古市	《記述的研究》音声、音韻、アクセント	ピッチグラムを用いている、重起伏アクセント等含む
62	齋藤 孝滋	2006	岩手方言における形容詞の特徴：活用体系と音声文法の視点から	フェリス学院大学文学部紀要	61-68	久慈市	《記述的研究》音声、活用	形容詞の活用・語幹と音声との関係について、地理的なことには多く触れていない
63	作田将三郎	2006	東北地方における「雷」の地方語史	文化69-3・4(東北大学文学会)	58-324	宮古市、大槌町、陸前高田市	《記述的研究》その他、《地理的分布》語彙	
64	山浦 玄嗣	2008	20年目のウンツェハ—岩手県気仙地方における対否定疑問文応答形式の経時的変化	日本方言研究会研究発表会発表原稿集	69-76	気仙郡	《世代差》文法(応答詞)	
65	田中 宣廣	2009	地域言語の理解法—岩手県域諸方言の例から	岩手県立大学宮古短期大学部研究紀要 20	1-10	宮古市	《記述的研究》音韻、買い物時のやりとり	主旨は方言の正しい理解のための方法。宮古方言は例であり記述少ない
66	小島聡子	2010	研究ノート 岩手県で用いられる特徴的な言葉について	岩手大学人文社会学部	69-86	全域、久慈市、野田村、岩泉町、釜石市、宮古市、山田町、大槌町、大船渡市	《記述的研究》記号の読み方、「特にも」の用法	「はこいち」と読むか、「しかくいち」と読むか、「特にも」用法・用例

⑥ 岩手県文献リスト（市町村史）

No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	関口喜多路	1980	岩泉地方史 下巻	関口喜多路	603-749	岩泉町	《記述的研究》方言集	第十七章 岩泉地方の方言訛語
2	三陸町史編集委員会	1988	三陸町史 第五巻 民俗一般編	三陸町	569-616	三陸町	《記述的研究》方言集	『郷土教育資料(紀元二千六百年記念事業、綾里小学校編)』を中心に、『気仙方言誌(金野静一・菊池武人著)』『岩手気仙の方言(菊池武人著)』『気仙ことば(佐藤文治著)』『気仙方言辞典(金野菊三郎著)』を参照したもの。菊池武人執筆。
3	三陸町史編集委員会	1990	三陸町史 第一巻 自然・考古編	三陸町史刊行委員会	49-53	三陸町	《記述的研究》その他	魚の名前
4	田野畑村芸術文化協会	1994	新たなはた風土記	田野畑村芸術文化協会	256-262	田野畑村	《記述的研究》意味・用法、その他	田野畑方言と京言葉・エゾ語との関わりについて、地名由来
5	陸前高田市史編集委員会	1994	陸前高田市史 第一巻 自然編	陸前高田市	375-388	陸前高田市	《記述的研究》方言集	『新岩手風土記(瀬川経郎著)』を参考にし、地域の古老からも採取したもの。
6	陸前高田市史編集委員会	1996	陸前高田市史 第六巻 民俗編下	陸前高田市		陸前高田市		
7	普代村郷土史編集委員会	2003	普代村郷土史	岩手県普代村	1072-1116	普代村	《記述的研究》意味・用法	
8	北上町史編さん委員会	2004	北上町史 自然生活編	北上町	572-633	北上町	《記述的研究》音韻、文法概説、方言集	第2節 方言 (第1節伝説・昔話・民謡 p.517-571)



⑦ 宮城県文献リスト（書籍）

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	猪苗代兼郁	1720	仙台言葉以呂波寄	猪苗代兼郁				
2	小倉博	1827	標準語励行と方言掃	読売宮城				
3	贅庵	1827	方言達用抄	贅庵				
4	大里源右衛門 (桜田周輔?)	江戸 末期	仙台方言					『近世古方言書索引』 村上雅孝ほか編、村上 雅孝、1983に収められて いる。本書は国研にあり
5		江戸 末期	浜荻					
6	伊勢斎助	1916	増訂仙臺史傳・仙臺方 言考	養華房		仙台	《記述的研究》意味・用法	
7	土井八枝	1919	仙台方言集	土井八枝		仙台	《記述的研究》方言集、文法概説	
8	仙台税務監督 局	1920	東北方言集	東北印刷株式会社 出版部		宮城(東北)	《記述的研究》方言集	
9	仙台叢書刊行 会	1925	仙台叢書第八巻(「仙 台言葉以呂波寄」「方 言達用抄」「仙台方言」 所収)	仙台叢書刊行会	462	仙台	《記述的研究》方言集	
10	弁天丸孝	1932	石の巻弁 別冊	郷土社書房		石巻市	《記述的研究》方言集	
11	弁天丸孝	1932	石巻弁 語彙篇	郷土社書房		石巻市	《記述的研究》方言集	
12	小倉進平	1932	仙台方言音韻考(言語 誌叢刊)	刀江書院	454	仙台	《記述的研究》音韻	
13	真山彬	1936	仙台方言考(言語誌叢 刊)	刀江書院				
14	土井八枝	1938	仙台の方言	春陽堂	341	仙台	《記述的研究》方言集	
15	国学院大学民 俗学研究会	1940	民俗探訪 三重・宮城					
16	佐藤喜代治	1950	宮城県方言の概観(M)	国研報告書	150	本吉郡小泉村 (気仙沼市)、 本吉郡志津川 町(南三陸 町)、桃生郡 雄勝村(石巻 市)、名取郡 千貫村(名取 市)、亶理郡 新浜町(亶理 町)、亶理郡 坂元村(山元 町)29地点	《地理的分布》音声、音韻、意味・用法、 助詞、活用、文末形式・文末表現	筆者自筆の原稿。
17	佐藤喜代治	1951	宮城県方言音韻の特 徴形の実態(M)	国研報告書	64	宮城県利府村 (利府町)、加 美郡宮崎村、 柴田郡村田村	《記述的研究》音声、音韻	筆者自筆の原稿。
18	河北新報社	1951	宮城県百科辞典	河北新報社	4(p.1182 -1185)	宮城(東北)	《記述的研究》意味・用法	
19	郡教育会	1951	栗原方言及手鞠唄	郡教育会				×
20	佐藤喜代治	1951	仙台北草(M)	国研報告書	96	仙台	《記述的研究》方言集	『仙台北草』の中から、 「仙台方言の記載されて いるもののみをぬきだし」 たもの。
21	田村寂秋	1951	仙台方言集	通信文化の会		仙台市	《記述的研究》音韻、方言集	
22	佐藤喜代治	1956	宮城	NHK国語講座方言 の旅				×
23	藤原勉	1960	方言	宮城県史刊行会		東北・宮城(一 部各地域につ いて記述)	《記述的研究》アクセント、イントネーショ ン	
24	石川鈴子	1966	自伝的仙台弁	審美社		仙台・福島	《記述的研究》方言集	
25	高橋富雄	1969	方言(宮城県の歴史付 録)	山川出版社		仙台	《記述的研究》意味・用法	
26	浮田章一	1974	宮城県牡鹿半島にお ける言語調査	浮田章一		牡鹿町(鮎川 浜、十八成	《記述的研究》意味・用法	
27	浮田章一	1975	宮城県牡鹿半島にお ける言語調査	浮田章一	7	牡鹿町(鮎川 浜、十八成	《記述的研究》意味・用法	
28	浮田章一	1975	宮城県牡鹿半島にお ける言語調査 鮎川・ 網地島・金華山	浮田ゼミ	8	牡鹿半島(牡 鹿町)	《記述的研究》意味・用法	
29	土井八枝	1975	仙台の方言(再刊)(原 本は1938年刊)	国書刊行会	341	仙台市全域		
30	仙台郵政監察 局	1975	東北方言集(再刊)(原 本は1920年8月刊)	国書刊行会		気仙沼地方	《記述的研究》方言集	
31	北条忠雄	1975	東北南部と関東の方 言	方言と標準語-日本 語方言学概説50-1		南奥方言(岩 手南部・宮城・ 福島)	《世代差》音韻、アクセント、イントネーショ ン、意味・用法、助詞、活用、敬語	
32	浮田章一ほか	1976	宮城県牡鹿町と女川 町における言語調査 鮎川浜・江島	女子聖学院短大浮 田ゼミ	32	女川町	《記述的研究》意味・用法	
33	女子聖学院短 大浮田ゼミ	1977	宮城県女川町出島に おける言語調査1 出	女子聖学院短大浮 田ゼミ	12	女川町	《記述的研究》意味・用法	
34	女子聖学院短 大浮田ゼミ	1978	宮城県牡鹿郡女川町 における二度目の言 語調査 出島・寺間	女子聖学院短大浮 田ゼミ	6	女川町	《記述的研究》意味・用法	
35	佐藤忠雄	1981	仙台言放 音韻と語法	漢声出版		宮城県の中、 仙台以南の地 方	《記述的研究》音韻、テンス・アスペクト	
36	浅野建二	1981	仙台方言辞典	東京堂出版		旧仙台領一般	《記述的研究》方言集	

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
37	佐藤武義	1983	宮城県方言の歴史と国語史	宮城の研究7民族方言建築史編(宝文館)		宮城県一般	《記述的研究》意味・用法	
38	西条弥一郎	1984	南三陸地方の方言	西条弥一郎	70	北上町(石巻市)	《記述的研究》方言集	
39	仙台文化出版社	1986	仙台弁句辞典(せんだい新書1)	仙台文化出版社		仙台市	《記述的研究》その他	
40	多賀城市史編集委員会	1986	多賀城市史3民族・文学	多賀城市	205	多賀城市	《記述的研究》音韻、アクセント、意味・用法、助詞、活用、文末形式・文末表現、敬語、《世代差》意味・用法、《共通語化》意味・用法	
41	石巻市史編さん委員会	1988	石巻の歴史3民俗・生活編	石巻市	43	石巻市	《記述的研究》音韻、アクセント、方言集、助詞、文末形式・文末表現、敬語、《地理的分布》方言区画	
42	西村源太郎	1989	仙台原町方言集(せんでいはらまづほおげんすう)	西村源太郎		原町(旧小田原、旧南日、旧苦竹)	《記述的研究》方言集	
43	田村正夫	1990	滅び行く方言 岩沼地方編	田村正夫		岩沼町	《記述的研究》方言集	
44	渋谷信義	1992	ケンケン鳥お背戸のズサぬ木 明治初期仙台亘理から伊達開拓移住者達の会話	北海道新聞社出版局		亘理町	《記述的研究》方言集	
45	山浦玄嗣	1992	みんなのケセン語1	共和印刷企画センター	102	気仙沼市	《記述的研究》音声、音韻、アクセント、その他	著者が方言の勉強会のために自作したテキスト。独特の表記とカタカナなどを用いて記されており、内容は充実している。非常に詳細な記述。
46	山浦玄嗣	1992	みんなのケセン語2	共和印刷企画センター	102	気仙沼市	《記述的研究》音声、音韻、イントネーション、文法概説、助詞、活用、テンス、条件表現	1)と同じ。
47	仙台文化出版	1993	続仙台弁句辞典	仙台文化出版社	177	仙台市	《記述的研究》その他	
48	田村昭	1993	仙台方言集付・東北の方言10版改訂	宝文堂	84	仙台	《記述的研究》方言集	
49	菅原孝雄	1994	新釈三陸のことわざ	三陸新報社	194	三陸地方		
50	菊池武人	1995	近世仙台方言書翻刻編、続翻刻編	明治書院		旧仙台藩	《記述的研究》方言集	『演義』など、近世の方言書の翻刻
51	菊池武人	1995	近世仙台方言書研究編	明治書院		旧仙台藩(翻刻版の検討)	《記述的研究》方言集	方言と方言集ができた当時の時代背景
52	小山正平	1997	わたくしの言語論 三陸地方の古代史を読み解く	私家版	301	三陸地方(気仙沼市)	《記述的研究》方言集	方言語彙を音節レベルに語源解釈する。きわめて独特な見解を展開。
53	半沢康・小林初夫・武田拓	1998	宮城・福島沿岸地域におけるグロットグラム調査報告	科研報告書	49	亘理町、山元町	《グロットグラム》音韻、語彙、アスペクト、活用、助詞、待遇表現、敬語	
54	仙台市史編さん委員会	1998	音でたずねる仙台的民俗 仙台市史 特別編6 民俗 付録	仙台市	14	仙台市	《記述的研究》談話資料	小さい冊子とCDのセット。CDに方言解説と挨拶場面など10例の会話が収録されている。その他、CDには民謡、昔話も収録。
55	佐々木徳夫	1999	話すてけらしえ仙台弁	無明舎出版		仙台市全域	《記述的研究》談話資料	
56	小林隆	2000	宮城県仙台市方言の研究	東北大学大学院文学研究科国語学研究室	156	仙台市	《記述的研究》イントネーション、テンス・アスペクト、《地理的分布》テンス・アスペクト、文末形式・文末表現、語史、《世代差》音韻、アクセント、意味・用法、テンス・アスペクト、文末形式・文末表現、方言意識、敬語	音韻、テンス・アスペクト：性差
57	佐藤武義・遠藤仁・樋渡登解題	2000	御国通辞：仙台言葉以呂波寄：仙台言葉：方言運用抄：仙台方言：荘内浜萩：荘内方言音放	港の人	582	仙台	《記述的研究》方言集	
58	山県浩	2001	近世方言書類の上方語『仙台言葉以呂波寄』『燈心野語』を中心に	筑紫語学論叢、奥村三雄博士追悼記念論文集		全日本各地(大阪、京都、仙台など)	《記述的研究》意味・用法	方言書物12冊の江戸語京都語との比較
59	後藤彰三	2001	胸ば張って仙台弁 ぬくもり伝えるふるさとことば	宝文堂		仙台市全域	《記述的研究》音韻、テンス・アスペクト、《世代差》意味・用法、《共通語化》意味・用法	民俗語誌も含む
60	小林隆・竹田晃子・玉懸元・佐藤祐希子	2003	宮城県石巻市方言の研究	東北大学国語学研究室	214	石巻市	《記述的研究》音韻、アクセント、助詞、テンス・アスペクト、文末形式・文末表現、《地理的分布》語史、《世代差》音韻・意味・用法、テンス・アスペクト、文末形式・文末表現、《グロットグラム》アクセント、意味・用法、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現	気付かない方言、新方言
61	井上史雄・玉井宏児・遠水兼貴編	2003	東北・北海道方言の地理的・年齢的分布(THグロットグラム)	東京外国語大学	196	松島町	《グロットグラム》語彙、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、その他	一部被災地該当。
62	加藤正信ほか編	2004	関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線グロットグラム	いわき明星大学人文学部加藤正信研究室	379	仙台市、名取市、亘理町、山元町	《グロットグラム》音韻、アクセント、語彙、助詞、活用、テンス・アスペクト、条件表現、方言意識	前半は福島浜通、中南部～栃木・茨城県北部の言語地図。後半はグロットグラム。
63	菅原孝雄	2006	けせんぬま方言アラカルト	三陸新報社	172	気仙沼市	《記述的研究》方言集	
64	芦立光之	2006	気仙沼 お国ことば句集	開明書院	179	気仙沼市	《記述的研究》その他	

⑧ 宮城県文献リスト (論文)

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
1	研亭主人	1899	東京仙台方言くらべ拾遺	風俗画報196	12-13	仙台	《記述的研究》意味・用法	
2	馬場生	1899	東京仙台方言くらべ	風俗画報194	17-18	仙台	《記述的研究》意味・用法	
3	研亭主人	1900	東京と仙台くらべ	風俗画報212				
4	小倉進平	1910	仙台方言音域組織	国学院雑誌16-3	不明	仙台市内	《記述的研究》音韻	
5	あしのまうや	1911	宮城方言抄	風俗画報419	18-20	宮城(東北)	《記述的研究》意味・用法	
6	蘆の円屋	1915	仙台方言	風俗画報471	31	仙台	《記述的研究》意味・用法	
7	青葉山時鳥	1919-1934	仙台の方言と方言	教育	不明			
8	真山青果	1932	仙台方言雑考(一)	仙台郷土研究2-4	24-25	仙台	《記述的研究》方言集	
9	真山青果	1932	仙台方言雑考(二)	仙台郷土研究2-5	8-9	仙台	《記述的研究》方言集	
10	真山青果	1932	仙台方言雑考(三)	仙台郷土研究2-6	16-17	仙台	《記述的研究》方言集	
11	真山青果	1932	仙台方言雑考(四)	仙台郷土研究2-7	22	仙台	《記述的研究》方言集	
12	真山青果	1932	仙台方言雑考(五)	仙台郷土研究2-8	14-15	仙台	《記述的研究》方言集	
13	真山青果	1932	仙台方言雑考(六)	仙台郷土研究2-9	18-19	仙台	《記述的研究》方言集	
14	小林英夫	1932	仙台方言音韻論試作	方言2-11	13-55	仙台市	《記述的研究》音韻	
15		1932	仙台方言座談会概況	仙台郷土研究2-2	31-34	仙台	《記述的研究》方言集	
16	中市謙三	1933	東北方言の特殊音韻	国語教育18-7	80-83	仙台市	《記述的研究》音韻	
17	菊沢季生	1934	宮城方言文法の一斑	国語研究2-4		仙北・仙南・石巻・牡鹿・登米・亶理荒浜地区・白石・角田	《記述的研究》文法概説	
18	燕々軒・荒砥白翁	1935	仙台方言資料「俳諧夷艸」	国語研究3-12		仙台?		「俳諧夷艸」中に出てくる方言の意味について記述。本論文の「仙臺」と現在の「仙台」の区分が同じか不明。
19	菅野蔵治	1935	仙南地方の家族呼称	方言5-5	27-30	仙南地方(名取・柴田・伊具・刈田)	《記述的研究》音韻、方言集	家族呼称とその意味について。方言集とまではいかない
20	猪狩幸之助編、小倉進平	1935	宮城県方言考	方言5-6	6-35	宮城県全般	《記述的研究》方言集	
21	真山彬	1936	仙台方言考	宮城県人1-2				
22	倉田一郎	1937	陸前荒浜漁村語彙	方言7-9	33-46	仙台市若林区	《記述的研究》方言集	
23	カーロー	1941	日本古風土記に現れた方言研究	仙台郷土研究8-11	10-12	不明		
24	宮良当壮	1941	宮城岩手両県方言調査小報	方言研究3	61-67	亶理町、仙台市、石巻市、南三陸町(志津川)	《記述的研究》《地理的分布》音韻	記述少ない
25	土井八枝	1941	仙台弁探求の動機	朝日宮城				
26	三原良吉	1941-3	仙台語彙(一)	仙台郷土研究10-4		仙台市	《記述的研究》方言集	
27	三原良吉	1941-4	仙台語彙(二)	仙台郷土研究10-5		仙台市	《記述的研究》方言集	
28	三原良吉	1941-5	仙台語彙(三)	仙台郷土研究10-6		仙台市	《記述的研究》方言集	
29	三原良吉	1941-6	仙台語彙(四)	仙台郷土研究10-7		仙台市	《記述的研究》方言集	
30	三原良吉	1941-7	仙台語彙(五)	仙台郷土研究11-3		仙台市	《記述的研究》方言集	
31	斉藤義七郎	1942-10・11	真山青果氏「仙台方言書目」引用書目索引	国語研究(国語学研究会)10-9・10		仙台	その他	真山青果のまとめた東北方言(語彙)がどのような書物から引用されているかについて記述。
32	菊沢季生	1950	方言の旅…東北地方南部	宮城学院女子大学新聞33	2	東北	《記述的研究》音声、音韻、意味・用法、助詞、文末形式・文末表現	
33	菊沢季生	1950	方言の旅(続)	宮城学院女子大学新聞33	4	東北	《記述的研究》音声、音韻、意味・用法、助詞、文末形式・文末表現	
34	堀籠敬蔵	1951	仙南海浜地方の方言における接頭語と接尾語	教育宮城1-4				
35	浅野健二	1953	仙台俚言考(上-特に江戸時代語との関渉について-)	文芸研究16	55-64	仙台	《記述的研究》文献中の語彙について記述、文献調査	先行研究・文献をもとに記述。
36	浅野健二	1954	仙台俚言考(下-特に江戸時代語との関渉について-)	文芸研究14	53-61	仙台	《記述的研究》文献中の語彙について記述、文献調査	
37	横山辰次	1955	仙台ことば	言語生活51		仙台		
38	小林好日	1956	仙台方言集「浜荻」について	国語研究4		仙台市	《記述的研究》意味・用法	
39	岡村昭	1956	仙台方言の「あらして」について	言語生活57	75	仙台	《記述的研究》意味・用法	
40	佐藤善代治	1956	北海道・奥羽地方@宮城の旅	NHK国語講座 方言の旅	31-35	宮城	《記述的研究》音韻、文法概説、語彙	海岸地域として牡鹿半島の語も少しある。
41	鈴木 仁	1958	三陸女性の感動詞	言語生活86	75	気仙沼市	《記述的研究》感動詞	
42	平山輝男	1959	仙台方言のアクセント体系とその性格	音声学会会報100	27-30	仙台市北部	《記述的研究》アクセント	
43	伊藤裕	1960	仙台ことばと横浜ことば	ともしび9				×

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
44	千葉徳二	1961	東北弁と音楽教育—言語形成期の子供を対象として—	言語生活113		仙台市若林区南材木町、仙台市青葉区立町	《記述的研究》教育法	
45	菊沢季生	1961	宮城県方言資料文献目録	宮城学院女子大学研究論文集18		宮城県		
46	佐藤亮一	1963	宮城県における多型アクセントの南限—主として二音節名詞について—	文芸研究45	16-29	仙台市、石巻市、松島町、	《記述的研究》アクセント、イントネーション、《地理的分布》アクセント、イントネーション	
47	村山七郎	1963	ア・タターリノフの「レクシコン」の東北方言について—オ・ベ・ペトロワさんに与える—	国語学52	64-77	東北方言全般	《記述的研究》音韻、意味・用法	
48	佐藤亮一	1966	宮城県北部における三音節名詞のアクセント	国語学研究(国学院大学)6	16-29	気仙沼市・石巻市・登米市・栗原市・遠田郡・志田郡・宮城郡・玉造郡・加美郡・黒川郡・仙台市	《世代差》アクセント	
49	加藤正信	1967	動詞語尾における連母音アウ・オウの音訛—宮城県方言を中心に—	国語学研究(国学院大学)7	197-208	栗原郡・気仙沼市・登米郡・古川市・志田郡・加美町・石巻市・仙台市・牡鹿郡・玉造郡・塩竈市・七ヶ浜町・柴田郡・名取郡・宮城郡・本吉郡	《記述的研究》音声、音韻、活用、ボイス、テンス・アスペクト、《地理的分布》音声、音韻	
50	佐藤孝	1967	談話室@アルとイル	言語生活186		仙台・阿武隈川河口付近	《記述的研究》意味・用法	分量は少なめ
51	佐藤亮一	1967	アクセントの「ゆれ」の実態—宮城県北部のアクセントについて—	日本方言研究会第4回発表原稿集	18-30	気仙沼市、南三陸町、石巻市、女川町、東松島市、松島町、仙台市	《地理的研究》アクセント	
52	藤原与一	1967	東北方言「文末詞」の一研究「山形弁」「宮城弁」について	方言研究年報10(広島大学方言研究会)	57-72	松島町	《記述的研究》終助詞	
53	佐藤亮一	1968	宮城県北部におけるアクセントの一側面—語単独の相と助詞を付けたときの相との違いに関して—	聖和7	69-95	気仙沼市、本吉郡、登米郡、石巻市、栗原郡、玉造郡、桃生群、松島町、黒川群、仙台市北山、	《地理的分布》アクセント	
54	太田真喜子; 但野きよ江	1968	仙台方言のイントネーションについて	日本文学ノート3		仙台・牡鹿・丸森	《記述的研究》イントネーション	
55	熊坂津恵子	1969	仙台の方言集に関する一考察	日本文学ノート4		仙台		
56	佐藤喜代治; 加藤正信	1972	三陸地方南部の言語調査報告	日本文化研究所研究報告(東北大学)別巻8、9	116-166	気仙沼市鹿折、本吉郡唐桑町、	《記述的研究》テンス・アスペクト、条件表現、敬語、《地理的分布》音韻、アクセント、言語地図、テンス・アスペクト、条件表現、敬語	
57	青柳柳三	1973	東北の東海岸における方位潮流語彙の外観	フィールドの歩み4	49-69	唐桑町、牡鹿町、塩竈市、亶理町	《地理的分布》語彙	岩手県久慈市久喜より茨城県日立市川尻に至る22の漁港で、漁歴の長い人から聞き取り調査をしたもの。
58	佐藤忠雄	1974	仙台方言の音節とその用例	音声学会会報146	11-13	仙台市	《記述的研究》音節	
59	佐藤忠雄	1975	仙台方言の母音	音声学会会報148	15-21	仙台市	《記述的研究》音韻	
60	加藤正信	1976	江戸時代以降の仙台方言語史—転訛を中心として—	佐藤喜代治教授退官記念国語学論集	603-624	仙台市を中心に宮城県全域	《地理的分布》その他(語史)	
61	浮田ゼミ	1979	宮城県出島における言語調査 第2回	緑聖文芸10	12-16	宮城県出島(女川町)	《記述的研究》談話資料	調査対象者に文章を読んでもらったもの?
62	加藤正信	1981	あいさつお国めぐり(3)仙台の港	言語生活351	90-91	仙台・宮城県の大部分	《記述的研究》方言集	あいさつについて。方言集とまではいかないが、どのような言葉が使われているかについて記述されている
63	加藤正信; 佐藤和之; 小林隆	1982	宮城県北地方の方言調査報告	日本文化研究所研究報告(東北大学)別巻19	138-111(左1-28)	宮城県北地方20地点(桃生郡、牡鹿郡、登米郡、本吉郡、遠田郡、栗原郡、志田郡、玉造郡、加美郡のなかで20地点)	《記述的研究》音韻、意味・用法、助詞、文末形式・文末表現、敬語	
64	斎藤友季子	1985	国学院大学図書館蔵「奥州仙台こと葉いろは寄」について考察と翻刻	国学院雑誌86-7		仙台		

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
65	黄鴻信	1985	学校における待遇表現の調査研究仙台市の場合	文芸研究(日本文芸研究会)108	52-63	仙台市	《記述的研究》敬語	
66	三宅民夫	1987	各地のねぎらいのことは(7)うさねはいたね(宮城県唐桑町)	言語生活428	81	唐桑町(気仙沼市)	《記述的研究》意味・用法	
67	大西拓一郎	1987	仙台市方言における2種類の尻上がり音調について	国語学研究(東北大学)27	120-122	仙台市	《記述的研究》イントネーション	
68	大西拓一郎	1989	「宮城県北部方言の名詞のアクセント語彙」	日本文化研究所報告別巻(東北大)	19-38	宮城県北部(栗原郡築館)	《記述的研究》アクセント	
69	大西拓一郎	1989	宮城県志津川町方言の名詞のアクセント 音節単位によるモーラ方言の分析	国語学158	68-81	志津川町(南三陸町)	《記述的研究》アクセント	
70	三沢奈緒美	1990	宮城県南部の方言区画 — 語彙を中心とした考察 —	日本文学ノート(宮城学院女子大学)25	75-89	刈田郡(七ヶ宿町、蔵王町、白石市)、伊具郡(角田市、丸森町)、亶理郡(亶理町、山元町)	《地理的分布》意味・用法	
71	大西拓一郎	1990	宮城県志津川町方言の用言のアクセント動詞の変化形を中心に	日本文化研究所研究報告別巻27(東北文化研究室紀要)	15-40	本吉郡志津川町(南三陸町)	《記述的研究》アクセント	
72	大西拓一郎	1991	宮城県気仙沼市方言の動詞のアクセント	東日本の音声論文編(1)	17-24	気仙沼市階上地区	《記述的研究》アクセント	
73	大西拓一郎	1992	方言アクセントの現在 仙台市方言におけるアクセントの獲得を中心に	日本語学11-10	98-113	仙台市	《記述的研究》アクセント	
74	遠藤仁・松本宙	1994	宮城方言の言語地理学的研究	宮城教育大学所蔵資料による宮城県を中心とした教育・言語・文芸の研究	78-63(左1-16)	本吉郡32地点(新月村、唐桑町、気仙沼町、大島村、階上村、小泉村、入谷村、志津川町、大谷村、歌津村、戸倉村)、牡鹿郡15地点(石巻市、荻浜村大原町、鮎川村、女川町)、亶理郡6地点(逢隈村、亶理町、荒浜村、吉田村)、栗原郡26地点	《地理的分布》その他(語史)	宮城教育大学付属図書館に「旧宮城師範資料」として蔵せられていた『宮城県下方言調査資料 その1(社会・生活関係の部)』『宮城県下方言調査資料 その2(雑載・文法関係の部)』を使用。「この調査の目的・調査票および被調査者については不明であるが、(中略)昭和8年に生徒自らの手によって調査がなされたものと推定される」。
75	小林隆	1994	東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史	東北大学文学部研究年報44	218-244	宮城県全般	《記述的研究》文法概説、テンス・アスペクト、《地理的分布》文法概説、ボイス、テンス・アスペクト、《世代差》文法概説、ボイス、テンス・アスペクト	
76	小林隆	1995	変容する日本の方言— 仙台市 住民意識に見る方言志向・共通語志向	言語24-12	34-47	仙台市	《記述的研究》方言意識、《地理的分布》方言意識、《世代差》方言意識	
77	大西拓一郎	1995	仙台市多人数音調調査の資料一覧	東日本の音声論文編4主要都市多人数調査(弘前市・仙台市)報告	41-69	仙台市	《記述的研究》アクセント、アクセント資料一覧	
78	半沢康	1995	仙台市におけるランダム配列読み上げ調査の調査結果報告	東日本の音声論文編4主要都市多人数調査(弘前市・仙台市)報告	31-40	仙台市	《記述的研究》アクセント、《世代差》アクセント	
79	李範錫	1997	無型アクセント方言のイントネーション— 平坦な音調の形成要因について —	言語科学論集(東北大学)1	123-134	仙台市	《記述的研究》音声、イントネーション	
80	李範錫	1997	仙台無型アクセント方言話者におけるイントネーションとフォーカス	国語学研究(東北大学)36	74-82	仙台市	《記述的研究》イントネーション、談話分析	
81	大橋 純一	1997	宮城県山元町方言における語中・尾カ行子音の有声化・半有声化現象について— 多人数話者の場面差および音意識の面から —	国語学研究(東北大学)36	63-72	山元町	《記述的研究》音声、イントネーション、談話分析、《グロットグラム》音声、イントネーション、談話分析	
82	大橋純一	1997	東北方言における /ki/ の地理的・年代的諸相と展開 /k/ 子音と /i/ 母音との関連性に着目して	言語科学論集(東北大学)1	15-26	亶理郡山元町	《記述的研究》音声、音韻、《地理的分布》音声、音韻、《世代差》音声、音韻、《グロットグラム》音声、音韻	
83	小林隆・竹田晃子・玉懸元・佐藤祐希子	1998	宮城県仙台市方言の記述的調査報告	東北文化研究室紀要40	57-75	仙台市	《記述的研究》音声、イントネーション、テンス・アスペクト、表現	



No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
84	木幡弓	1999	宮城県気仙沼市方言と秋田県由利方言からみた「の」の一考察	言語科学研究<神田外語大学大学院紀要>5	31-44	気仙沼市	《記述的研究》助詞	
85	金田弘	1999	仙台藩儒松本靖斎・桜田簡斎とその言語	近代語研究10	71-85	仙台市	《記述的研究》音韻、アクセント	
86	玉懸元	1999	仙台市方言の「ペー」の用法	言語科学論集(東北大学)3	37-48	仙台市	《記述的研究》助詞、テンス・アスペクト、文末形式・文末表現	
87	李範錫	1999	無型アクセント方言話者におけるイントネーションの標準語化—仙台市方言を例として—	国語学197	131-142	仙台市	《記述的研究》音声、アクセント、イントネーション、《グロットグラム》音声、アクセント、イントネーション、《共通語化》アクセント、イントネーション	
88	李範錫	1999	無型アクセント方言におけるフォーカスと韻律的特徴との関連について—仙台市方言を例として—	国語学研究(東北大学)38	77-92	仙台市	《記述的研究》イントネーション、《世代差》イントネーション	
89	半沢康	1999	東北地方の地域方言と社会方言	日本語学18-13	176-185	福島県北部(相馬地方)から宮城県南部にかけて	《グロットグラム》音韻、テンス・アスペクト	
90	飯間明日香	2000	現代社会における方言意識 仙台方言地域の高校生を中心として	宮城学院女子大学大学院人文学会誌1	72-80			
91	小林隆	2000	仙台市方言の文末形式「ケ」	語から文章へ		仙台市全域	《記述的研究》文末形式・文末表現	
92	小林隆・竹田晃子・玉懸元・佐藤祐希子	2001	宮城県石巻市方言の記述的調査報告	東北文化研究室紀要43	59-75	石巻市	《記述的研究》助詞、テンス・アスペクト、表現	
93	玉懸元	2001	宮城県仙台市方言の終助詞「ッチャ」の用法	国語学205	30-43	仙台市	《記述的研究》文末形式・文末表現	
94	ボンダレンコ H. H.	2001	H. H. レザノフの日本語辞典における仙台方言の特徴	東北アジア研究(東北大学)5	27-45	仙台市	《記述的研究》方言集	
95	大橋純一	2001	東北方言における行鼻音の動向	文芸研究(日本文芸研究会)151	97-106	亶理郡山元町	《地理的分布》音韻、アクセント	
96	玉懸元	2002	仙台市方言の「ペー」の用法(2)「推量」「確認」「確認要求」の用法をめぐって	国語学研究(東北大学)41	44-55	仙台市	《記述的研究》文末形式・文末表現	
97	高橋ゆか	2003	接尾語「コ」の性格 宮城県石巻市の場合	日本文学ノート(宮城学院女子大学日本文学会)38	64-71	石巻市	《記述的研究》文法概説	
98	琴鍾愛	2003	仙台市方言における談話展開の方法—説明的場面で使用される談話標識から見る	文芸研究155	58-71	仙台市	《記述的研究》談話分析	
99	佐藤祐希子	2003	「気づかない方言」の意味論的考察: 仙台市における程度副詞的な「イキナリ」	國語學212	32-45	仙台市	《記述的研究》文法概説、テンス・アスペクト、方言意識	
100	玉懸元	2003	仙台市方言における格助詞相当形式「ドゴ」の用法(国語学会2002年度秋季大会研究発表会発表要旨)	國語學213	124-125	仙台市	《記述的研究》助詞	
101	作田将三郎	2003	宮城県における〈糠〉の地方語史	言語科学論集(東北大学文学部言語科学専攻編)7	59-70	宮城県全般(志津川・中田町・迫町・南方町・中新田町・河北町・石巻市・涌谷町・鹿島台町・塩竈市・宮城町・仙台市・名取市・角田市・蔵王町・白石市・丸森町)	《地理的分布》語史	
102	佐藤祐希子	2004	東北方言の「ナゲル」の形成に関する一考察 宮城県石巻市方言の分析を通して	文芸研究 文芸・言語・思想(日本文芸研究会)158	32-44	石巻市	《記述的研究》文法概説	
103	琴鍾愛	2004	仙台方言における談話展開の方法の世代差—談話標識の出現傾向から見る—	東北文化研究室紀要46	43-59	仙台市	《世代差》談話分析、談話資料(ただし少ない)	談話標識の出現傾向についての分析

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
104	琴鍾愛	2004	仙台市方言における談話標識の出現傾向	国語学研究(東北大学)43	333-344	仙台市	《記述的研究》談話分析、談話資料	
105	阿部貴人	2004	特集:スタイル切換え(3)——仙台方言話者のスタイル切換え	阪大社会言語学研究ノート(大阪大学大学院)6	2-15	仙台市	《記述的研究》談話分析	
106	琴鍾愛	2005	日本語方言における談話標識の出現傾向 東京方言、大阪方言、 仙台方言の比較	日本語の研究(日本語学会)1-2	1-17	仙台	《記述的研究》談話分析	
107	琴鍾愛	2005	高校生における談話展開の方法の特徴—宮城県仙台方言を例として—	日本語学研究(韓国日本語学会)14	51-66	仙台市	《世代差》談話分析、談話資料(ただし少ない)	
108	作田将三郎	2005	宮城県における<雷>の地方語史	国語学研究(東北大学)44	41-53	宮城県	《地理的分布》語史	
109	木村悠衣	2005	「諸国方言物類称呼」研究:仙台方言についての記述を中心に(2004年度卒業論文要旨集)	札幌国語研究10-96				
110	玉懸元	2006	方言文末形式の使用実態とその背景—仙台市方言における	国語学研究(東北大学)45	48-60	仙台市	《記述的研究》文末形式・文末表現、方言意識、敬語	
111	作田将三郎	2006	東北地方における<雷>の地方語史	文化69-3・4(東北大学文学会)	58-324	気仙沼市、南三陸町、石巻市、松島町、仙台市、名取	《記述的研究》その他、《地理的分布》語彙	
112	作田将三郎	2007	庶民記録から見た力行・タ行子音の有声化 宮城県を例に	国語学研究(東北大学大学院)46	31-44	宮城県	《記述的研究》音声、音韻	
113	斎藤佳苗	2007	宮城県における方言の社会的活用	名古屋・方言研究会会報24	47-61	宮城県全般	《記述的研究》方言集、方言意識	
114	琴鍾愛	2007	説明的場面における「ダカラ」の機能 仙台方言の高年層談話資料の分析から	日本研究(韓国外国語大学校日本研究所)33				
115	琴鍾愛	2008	談話における「ネ」の機能 仙台方言の説明的場面で使用される談話標識としての機能	日本文化學報(韓国日本文化學會)38		仙台	《世代差》談話分析	
116	川越めぐみ	2011	山形県・宮城県におけるグイラ・ボット系オノマトベについて—具体的描写性の強弱の観点から—	日本方言研究会第92回研究発表会発表原稿集	35-42	宮城県入道市、古川市、美里町(グロットグラム)、気仙沼市	《記述的研究》オノマトベ	

⑨ 宮城県文献リスト（市町村史）

No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	気仙沼町誌編集委員会	1953	気仙沼町誌	気仙沼町誌編集委員会	423-456	気仙沼市	《記述的研究》方言集	第十五章民俗 一、言語 関西地方のことばとの関わりについて言及あり。
2	唐桑町史編集委員会	1968	唐桑町史	唐桑町史編集委員会	701-714	気仙沼市	《記述的研究》方言集	第七篇 民俗 第七章 方言
3	山元町誌編集委員会	1971	山元町誌	山本町役場企画広報課	686-696	山元町	《記述的研究》方言集	
4	本吉郡誌編集委員会	1973	本吉郡誌	本吉郡誌編集委員会	846-859	気仙沼市	《記述的研究》方言集	第十三章民俗 一、言語
5	名取教育会	1973	名取郡誌 全	名取教育会	635-644	名取市	《記述的研究》方言集、意味・用法	三十四、方言俚諺
6	宮城郡利府村々誌編集委員会	1973	利府村誌	宮城郡利府村々誌編集委員会	741-743	利府町	《記述的研究》方言集	後編 第九章 行事と民風 八、利府地方の方言
7	石巻市史編さん委員会	1973	石巻市史 第五巻	石巻市史編さん委員会	106-144	石巻市	《記述的研究》方言集	第二十六篇 郷土色 第五章 方言
8	牡鹿郡役所	1975	牡鹿郡誌(全)	牡鹿郡役所	154-159	石巻市	《記述的研究》方言集	二、方言
9	大船渡市史編集委員会	1979	大船渡市史 第四巻	大船渡市	345-612	気仙郡、大船渡市	《記述的研究》言語行動	p.345-391俚諺、俗諺など、共通語形も多いが、一部に方言例あり。 p.531-612気仙地方の民謡や童唄について一部方言形。 p.393-529気仙地方の伝説、一部方言形。 その他、第一章、第二章にも「衣食住」や「生産・生業」に関する語彙が多少本文の中で紹介されている。
10	本吉町誌編集委員会	1982	本吉町誌(Ⅱ)	宮城県本吉町町長 千葉卓朗	1535-1560	気仙沼市	《記述的研究》語彙、方言集	p.1535-1545「俚諺」として本吉町内で話される諺の類について、主に共通語形式で列挙。但し一部に方言形がある。 p.1545-156「方言」として本吉町内のいわゆる俚言形を五十音順に配列。500語程度採録。 同書(Ⅰ)にも「町内の庭木」「町内に見る食用植物」「本吉町沿岸の動植物」の箇所一部方言形や地名として挙がっているが、数は多くない。
11	岩沼市史編集委員会	1984	岩沼市史	岩沼市史編集委員会	1330-1339	岩沼市	《記述的研究》方言集	第六節 岩沼の方言
12	佐々久監修 利府町誌編集委員会編	1986	利府町誌	佐々久監修 利府町誌編集委員会編	954-959	利府町	《記述的研究》方言集	第十七章 第二節 八、利府地方の方言
13	多賀城市史編集委員会	1986	多賀城市史 第三巻 民俗・文学	多賀城市史編集委員会	471-675	多賀城市	《記述的研究》音韻、文法、方言集その他 《地理的分布》語彙	多賀城市の方言
14	佐々久監修 多賀城町誌編集委員会編	1987	多賀城町誌	佐々久監修 多賀城町誌編集委員会編	780-820	多賀城市	《記述的研究》方言集	二、方言
15	石巻市史編さん委員会	1988	石巻の歴史 第三巻 民俗・生活編	石巻市史編さん委員会	636-771	石巻市	《記述的研究》方言集、音声、文法、待遇表現	第一章 石巻の方言 第二章 語彙集 東北地方、石巻市以外の宮城県方言についても記述あり。
16	志津川町誌編さん委員会	1989	生活の歎 志津川町誌Ⅱ	志津川町誌編さん委員会	252-257 656-661	南三陸町	《記述的研究》その他	第二章 第八節 第三節 昔話
17	桃生町史編集委員会	1990	桃生町史 第三巻 自然・民俗編	桃生町史編集委員会	477-499	石巻市	《記述的研究》方言集	第七章 桃生のことば
18	気仙沼市史編さん委員会	1994	気仙沼市史Ⅶ 民俗・宗教編	気仙沼市史編さん委員会	284-302	気仙沼市	《記述的研究》音声、語彙、その他	第三節 方言
19	牡鹿町誌編さん委員会	2002	牡鹿町誌	牡鹿町誌編さん委員会	614-918	石巻市	《記述的研究》方言集、音声、文法	第十三編 第二章 第四節 方言 全国、東北、宮城の方言についても記述あり。

⑩ 福島県文獻リスト（書籍）

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	新妻三男	1930	相馬方言考	新妻三男	130	相馬市	《記述的研究》方言集、音韻、文法概説	すべて手書きだが情報量が多い。前半が音韻、文法などに関する概説。後半が語彙集。
2	新妻三男	1930	相馬方言考 上	新妻三男	31	相馬市	《記述的研究》音韻、文法概説	「相馬方言考」の前半部分。
3	酒井喜勝	1930	発音及び方言ノ矯正：本年度本校教育改善努力事項ノ三	酒井喜勝		相馬郡高平村（現南相馬市原町区）	《記述的研究》音韻、方言集	音韻、言語の記述がある。「福島県方言資料集2」に収録。
4	大田栄太郎	1930	方言集覧稿 福島県方言	廣文社	49	全県	《記述的研究》方言集	
5	小林勉	1931	相馬の方言その一	小林勉	13	相馬地方（南相馬市）	《記述的研究》方言集	著者は原町（現南相馬市）の住所。
6	武藤 要編	1931	福島県中村町方言集	一言社	168	相馬市	《記述的研究》方言集	
7	鈴木久義編	1932	相馬方言訛語誤音韻矯正一覽	福島県立相馬高等女学校		相馬	《共通語化》音韻	方言の音韻と共通語の音韻。分量少ない。
8	新妻三男	1932	続相馬方言考（単語の部）	新妻三男		相馬	《記述的研究》方言集	相馬方言考の内容を増補したもの。著者住所は中村町（現伊達市保原）。「福島県方言資料集2」に収録。
9	柴田裕定	1934	石城地方中心ノ常磐地方ニ於ケル方言・訛語ノ研究	柴田裕定	108	常磐地方（石城中心）	《記述》音韻、方言集	音韻に関して若干記述あり。また意味変化の要因についての概説あり。「福島県方言資料集3」に収録。
10	兒玉卯一郎	1935	福島県方言辞典	岳陽堂書店	361	全県	《記述的研究》方言集	福島県の比較的大型の方言集。音韻・語法について概説するとともに、訳2/3を方言語彙が占める。浜、中、会など使用地域を明示するのが特徴。
11	岩崎敏夫	1953	相馬方言集	岩磐郷土研究会	37	相馬	《記述的研究》方言集	昔話、童謡も収載。「福島県方言資料集1」に収録。
12	香内佐一郎	1953	福島方言集	岩磐郷土研究会	32	全県	《記述的研究》方言集	p.13-26にかけて福島方言集として会話例あり。「福島県方言資料集2」に収録。
13	柴田裕定	1957	福島県常磐地区における方言の研究	福島県立内郷高等学校	138	いわき市（常磐地区）	《記述的研究》音韻、方言集	前編に「言語指導を通しての生活指導」があり、その後編（p.61以降）として方言の記述がある。かなり語数が多い。「福島県方言資料集3」に収録。
14	広島大学	1962	福島県方言における敬語	広島大学	4	全県	《地理的分布》敬語	福島県39地点及び隣接県各1地点。表現の形式をまとめた表と地図があるが、文章はほとんどない。「福島県方言資料集1」に収録。
15	大田栄太郎	1971	福島県方言（方言集覧稿第三編）	大田栄太郎（日本大学図書館）	49	全県	《記述的研究》方言集	第3編 石城郡誌等9書からの引用。地域名も語ごとに記してある。「福島県方言資料集2」に収録。
16	小林金次郎	1972	福島県の方言集成方言は生きている	西沢	299	全県	《記述的研究》方言集、敬語、その他、《地理的分布》その他	語彙がほとんど。語法について少し。方言雑話もあり。分量多い。
17	新妻三男	1973	相馬方言考 改訂版	相馬郷土研究会	206	相馬	《記述的研究》音韻、語彙、方言集、助詞、活用、敬語、ボイス、テンス・アスペクト、文法その他、談話	方言集自体はそれほど多くないが、音韻、文法等の解説が充実しており、会話例も掲載されている。
18	飯豊毅一	1974	福島県北部地域の面接調査 国立国語研究所報告53 言語使用の変遷	秀英出版	388	伊達市（保原町）	《記述的研究》音韻、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、その他、《世代差》音韻、語彙、助詞、ボイス、条件表現、文法その他、敬語、待遇表現、方言意識	「Ⅱ伊達郡方言の特徴」（p.30-56）に音韻、文法の記述がある。
19	高木稲水	1975	いわき方言	いわき春秋社	246	いわき市	《記述的研究》方言集	自己の方言の内省と思われる。わらべ歌も含む。
20	新妻三男	1975	相馬方言考 補遺2	相馬郷土研究会	28	相馬	《記述的研究》方言集、その他	方言雑話と単語の追加。少し説明あり。分量多い。
21	福島県助詞師範学校	1976	福島県郷土誌	歴史図書社	26	全県	《記述的研究》音韻、意味・用法、助詞、文末形式・文末表現、敬語	

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
22	新福島風土記刊行会	1978	新福島風土記 福島県の歴史と風土	創土社	8	全県		
23	新妻三男	1982	相馬方言をさかのぼる	相馬郷土研究会	265	相馬	《記述的研究》方言集、意味・用法、談話	民俗習慣の事例とともに、方言形の談話も少々あり。使い方やエピソードの記述あり。
24	福島郷土文化研究会代表小林金次郎	1986	誰にでもわかる福島県の方言	歴史春秋社	335	全県	《記述的研究》方言集	昔話を添えた方言語彙集。用例が各語についてかなり網羅的に調査しているところが特徴。浜通、県北、県中、県南、会津に分けて単語を記す。昔話・地名もあり。
25	草野二郎	1990	いわき市小川町地方の方言 改訂増補	草野二郎	186	いわき市	《記述的研究》方言集	挨拶ことば(14会話)あり。
26	加藤正信	1995	福島県相馬地方における方言の共通語化の実態とその社会的心理的背景	科研報告書	145	南相馬市(小高町、原町市)、相馬市	《共通語化》音声、アクセント、方言意識	世代差・共通語化についてかなり網羅的に調査してあるが、文法の記述は少ない。量は多い。
27	福島県水産試験場編	1995	福島県の海産動物方言集 魚の呼び名	福島県水産試験場	103			
28	高野 徳	1997	原町市の方言わたしたちの古里言葉	高野 徳	81	南相馬市原町区	《記述的研究》方言集	50音順に語彙を羅列。当該地域方言と付近共通語を区別して明示してあるのが特徴的。
29	半沢康・小林初夫・武田拓	1998	宮城・福島沿岸地域におけるグロットグラム調査報告	科研報告書	49	相馬市、南相馬市、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町	《グロットグラム》音韻、語彙、アスペクト、活用、助詞、待遇表現、敬語	
30	阿部包昭編	1998	保原町を中心としてしょうわ一桁生まれが使った方言集 第4版	阿部包昭	89	伊達市	《記述的研究》方言集	1版:平成3年、2版:平成4年、3版:平成6年
31	ヤッチキ・ヤッベGroup	1999	いわきの方言1616(いろいろ)	東北電力いわき営業所グループ・チャレンジ活動	72	いわき市	《記述的研究》方言集	50代のメンバー7名で作成。1600以上の語。
32	井上史雄・玉井宏児・遣水兼貴編	2003	東北・北海道方言の地理的・年齢的分布(THグロットグラム)	東京外国語大学	196	伊達市	《グロットグラム》語彙、助詞、活用、ボイス、テンス・アスペクト、条件表現、文末形式・文末表現、その他	一部被災地該当。
33	加藤正信ほか編	2004	関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線グロットグラム	いわき明星大学人文学部加藤正信研究室	379	新地町、相馬市、南相馬市、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、広野町、いわき市	《地理的分布》音韻、アクセント、語彙、助詞、活用、テンス/アスペクト、《グロットグラム》音韻、アクセント、語彙、助詞、活用、テンス/アスペクト、条件表現、方言意識	前半は福島浜通、中南部～栃木・茨城県北部の言語地図。後半はグロットグラム。
34	小林初夫編	2005	高平方言集	高平方言教室	52	原町市高平地区(現南相馬市原町区)	《記述的研究》方言集	説明なし。分量多い。
35	大橋純一編	2008	福島県いわき市方言の研究 関東・東北接触地域の世代別多人数調査	いわき明星大学大学院人文学研究科日本文学専攻	148	いわき市	《世代差》音韻、語彙、意味・用法、文法、方言意識	高・中・若・少男女計91名。アンケート調査。
36	田村市文化財保護審議会	2010	田村市のことば(田村市史4)	福島県田村市教育委員会	123	田村市	《記述的研究》方言集	書籍構成:方言編/民謡編/地名編。収録の方言、民謡、地名は他の文献から編集。
37	新妻三男	?	相馬方言考 補遺1	?	6	相馬	《記述的研究》方言集	少し説明あり。分量少ない。
38	小林勉	?	相馬方言に就て(草稿)	小林勉	14	相馬	《記述的研究》方言集	「福島県方言資料集2」に収録。
39	いわき市教育委員会		いわきの方言 調査報告書					



⑪ 福島県文献リスト（論文）

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
1	吉田 巖	1915	相馬方言とアイヌ語	人類学雑誌30-1	27-29	相馬地方	《記述的研究》その他	相馬方言とアイヌ語の関わりについて述べたもの。
2	松本 繁	1932	磐城相馬の植物方言	方言2-10	782-787	磐城、相馬	《記述的研究》方言集	分量少ない。説明なし。
3	新妻三男	1932	相馬方言雑記	方言と国文学3 (国語・国文学附録)	29-31	相馬地方	《記述》意味・用法、活用、音声、文末形式・文末表現	1「らん」の生存、2マヨとマヤ、3ものして、4かぶず、5なた、6ファとフェの音、7うたて、叫声説、各節短く解説。
4	新妻三男	1934	相馬に於ける敬語助詞及び助動詞(福島県)	国語研究2-4	53-57	相馬地方	《記述的研究》敬語	敬語動詞、敬語助動詞の意味と用例。分量少ない。
5	高木稲水	1934	磐城地方方言考(一)	方言4-9	46-53	磐城地方	《記述的研究》方言集	少し説明あり。分量少ない。
6	高木稲水	1935	磐城方言考(二) — 平町近在磐崎村藤原を中心とする —	方言5-3	29-38	磐城地方	《記述的研究》方言集	少し説明あり。分量少ない。
7	高木稲水	1935	磐城方言の接頭接尾語に就いて	方言5-9	15-19	平町磐崎村藤原(いわき市)	《記述的研究》その他	接頭語・接尾語を集めたもの。用例少ない。分量少ない。
8	児玉卯一郎	1935	岩磐方言に於ける特殊音韻現象 — ヤ行ザ行相通に就いて —	方言5-4	72-75	全県	《記述的研究》音韻	ヤ行ザ行相通現象。例少ない。分量少ない。
9	高木稲水	1936	磐城方言考(三) — 福島県平町近在磐崎村藤原を中心とする —	方言6-4	58-65	磐城地方	《記述的研究》方言集	少し説明あり。分量少ない。
10	広瀬敏子	1947	磐城方言の中に見える古語	日本の言葉1-3	21-22	磐城地方	《記述的研究》語彙	エッセイ的
11	蒲生 明	1955	福島方言	民間伝承19-9	119	田村郡(田村市)	《記述的研究》意味・用法	いくつかの語の説明。分量はとて少ない。
12	柴田武	1957	方言の手帳3 ブーズー弁	放送文化12-11	54-55	伊達市(保原村)	《地理的分布》音韻	ブーズー弁中心に東北地方から北陸、出雲地方の差を見たもの。
13	佐藤喜代治	1959	福島県方言の敬語法	文化23-2	411-428	石神村(現南相馬市)、大館村(現飯館村)、標葉町(現双葉町)、葛尾村	《記述的研究》敬語	福島方言の敬語についての概説。分量多い。
14	飯豊毅一	1962	方言の分布 — 推量表現「…べー」について —	相模女子大学紀要13	50-65	相馬郡相馬(相馬市)、鹿島(南相馬市鹿島区)、双葉郡津島、浪江(浪江町)、久ノ浜(いわき市)、石城郡磐城(いわき市)、勿来(いわき市)	《記述的研究》ボイス、文末形式・文末表現、《地理的分布》ボイス、文末形式・文末表現	「…べー」の概説と形式の分布。分量多い。
15	飯豊毅一	1964	福島県方言における対者尊敬表現について	国語学59	11-24	相馬郡相馬(相馬市)、鹿島(南相馬市鹿島区)、双葉郡津島、浪江(浪江町)、久ノ浜(いわき市)、石城郡磐城(いわき市)、勿来(いわき市)	《地理的分布》敬語	文末助詞による敬語の地域分布。分量多い。
16	高萩精玄	1965?	石城地方坑夫用語	石城郡誌?	778-781 (46-49)	磐城地方	《記述的研究》方言集	99語の坑夫用語を掲載。方言 — 意味の形式。
17	言語班	1967	福島県相馬地方調査・言語編 — 概説、音韻的特徴、血族関係語彙など —	ほうげん3	22-201	相馬地方	《記述的研究》音韻、《地理的分布》その他	音韻の特徴と語彙の分布が中心。分量多い。
18	岩崎敏夫・秋山政一	1967	言語生活	福島県史24	379-491	全県	《記述的研究》音韻、アクセント、イントネーション、文法概説、活用、ボイス、文末形式・文末表現、《地理的分布》音韻、イントネーション、活用、文末形式・文末表現、その他	各分野について詳細に記述。県内の分布についても。分量多い。
19	飯豊毅一	1969	福島県方言における「ル」「ラル」敬語について	国文学49	23-35	全県	《地理的分布》敬語	
20	岩崎敏夫	1971	福島県のことば	福島の研究5		全県	《記述的研究》音韻、文法概説	各分野の概説。分量少ない。

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
21	青柳精三	1973	東北の東海岸における方位潮流語彙の外観	フィールドの歩み4	49-69	相馬市、南相馬市、浪江町、いわき市	《地理的分布》語彙	岩手県久慈市久喜より茨城県日立市川尻に至る22の漁港で、漁歴の長い人から聞き取り調査をしたもの。
22	飯豊毅一	1978	東北地方における方言語彙の変遷—福島県北部地域調査を中心として—	柴田武・日本方言研究会『日本方言の語彙』三省堂	389-412	伊達市(保原)	《共通語化》語彙	
23	飯豊毅一	1981	文法形式と変容—福島県北部地域方言を主例として—	『方言学論叢: 藤原与一先生古希記念論集1』三省堂	129-148	伊達市(保原町)	《世代差》方言意識、《共通語化》音韻、語彙、文法	飯豊1974『言語使用の変遷』(国立国語研究所、秀英出版)に記載の福島県北部地域調査の結果を使用。地点は福島市と保原町(現伊達市)。世代差、位相差に着目。
24	菅野 宏	1982	12 福島県の方言	講座方言学4 北海道・東北地方の方言	363-398	全県	《記述的研究》音声・音韻、アクセント、文法概説、《地理的分布》音韻、語彙	
25	森下喜一	1985	いわき市の敬語表現について 特に接頭語「お」をめぐって	国語研究(国学院大学)49	99-108	いわき市平、江名	《記述的研究》敬語	敬語表現の接頭語について、語彙差・職業差・男女差・年代差から。分量多い。
26	森下喜一	1986	いわき市の敬語表現 命令的表現の型を中心に	岩手医科大学教養部研究年報21	183-200	いわき市平、江名	《記述的研究》敬語	地域別、性別、年齢別の敬語表現の状況。分量多い。
27	菅野 宏	1986	福島県方言の語彙語法の分布	福島の研究5	10-59	全県	《記述的研究》音韻、アクセント、イントネーション、助詞、活用、ボイス、文末形式・文末表現、敬語、《地理的分布》音韻、助詞、活用、ボイス、文末形式・文末表現、敬語、その他	福島方言の概説。分量多い。
28	佐藤雄一	1992	東北福島県の方言(列島各地の日本語—方言録音資料紹介(特集)—)(各地録音紹介—文字化と解説)	国文学解釈と鑑賞57-7	176-168		《記述的研究》談話資料	
29	森下喜一	1993	福島県方言アクセントの年齢的特徴	作新学院大学紀要文化と科学3	25-43	相馬市、いわき市	《世代差》アクセント	アクセントの年代差について。東京式と比較。分量多い。
30	加藤正信ほか	1994	福島県小高町における方言の共通語化に関する社会言語学的調査報告	東北大学日本文化研究所研究報告別巻31	80-102	小高町(南相馬市小高区)	《共通語化》音声、アクセント、その他、助詞、ボイス、方言意識	対象地域における各分野の共通語化の実態、言語意識の関わり。分量多い。
31	半沢 康	1995	伊達・中村藩境地帯の方言分布に関する調査報告	東北生活文化大学三島学園女子短期大学紀要(論文編)26	67-80	新地町、相馬市	《地理的分布》音声・音韻、語彙、文法	
32	亀田裕見	1996	福島県相馬地方の無型アクセント多人数話者における音相 基本周波数曲線の視覚的パターン分類による	東北大学日本文化研究所研究報告別巻33	80-92	小高町、原町市(どちらも現南相馬市)	《記述的研究》アクセント	一地域における多人数の無型アクセント話者の示す音相の違い。分量多い。
33	半沢康・亀田裕見	1996	方言変化に関わる社会的・心理的要因 福島県相馬地方における共通語使用に関する調査から	方言の現在	254-274	原町市、小高町(どちらも現南相馬市)	《共通語化》方言意識、その他	対象地域の共通語使用の実態とそれに関わる要因について。分量多い。
34	半沢 康	1996	福島県北部地域における多人数方言調査の報告と考察(1)	東北生活文化大学三島学園女子短期大学紀要(論文編)	57-111	伊達市、川俣町	《地理的分布》語彙、文法	多人数調査
35	半沢 康	1997	福島県北部地域における多人数方言調査の報告と考察(2)	東北生活文化大学三島学園女子短期大学紀要(論文編)28	75-86	伊達市、川俣町	《共通語化》方言意識	多人数調査
36	半沢 康	1998	方言使用と方言評価意識に関する因果分析の試み—東北地方南部高校生アンケート調査の結果から—	国語学研究37	45-56	南相馬市原町、新地町、いわき市内郷、いわき市勿来	《共通語化》方言意識	方言意識と使用の因果関係。その他の要因も少し。分量多い。
37	小野米一	2000	福島県相馬地方への旅	日本語学19-10	58-64	相馬地方	《記述的研究》アクセント、その他	著者が相馬地方を訪れた際の話。アクセントを若干。分量少ない。
38	小林初夫	2000	福島県相馬郡小高町飯崎方言の副助詞	方言資料叢刊8	49-54	小高町飯崎(現南相馬市)	《記述的研究》助詞	副助詞の用例。分量少ない。

No.	著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
39	小池壮一	2000	福島方言と共通語	国文学論輯21(国士館大学国文学会)	169-180	全県	《記述的研究》音韻	「分かんない」について福島の新方言であるとし、福島、栃木、茨城、埼玉、東京への地域差・世代差の調査も行っている。
40	半沢 康	2001	宮城・福島太平洋沿岸地域の方言動態 常磐線沿線グロットグラム調査の結果から	言文48	1-14	新地町、相馬市、鹿島町(南相馬市)、原町市(南相馬市)、小高町(南相馬市)、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、広野町、いわき市	《グロットグラム》音韻、その他	グロットグラム調査による各分野の方言の境界の成立、移動・変化。分量多い。
41	西牧 忠	2002	夜間の交通事故から身を守るために—福島方言駆使してPR	人と車38-11	10-14	南相馬市、いわき市、相馬市、伊達市、浪江町、富岡町	その他	ラジオで交通安全指導をPRするとkに方言を使ったという紹介。一部方言談話がある。
42	本多真史	2003	平行するグロットグラム—東北本線と常磐線の比較	いわき明星大学大学院人文学研究科紀要1	77-91	浜通り	《グロットグラム》	
43	大橋純一	2004	福島県相馬市方言における語中ガ行入り渡り鼻音	国語学研究43	294-306	相馬市	《記述的研究》音声	語中ガ行入り渡り鼻音の実態について。分量多い。
44	本多真史	2004	関東・東北接触地帯における話者の言語意識と方言使用の関わり	いわき明星大学大学院人文学研究科紀要2	58-77	浜通り	《地理的分布》方言意識	言語意識と方言使用の関係、その地理的分布。分量多い。
45	半沢 康	2005	東北地方南部若年層における非標準語形使用の要因分析 心理的特性とのかわり	言文44	1-15	南相馬市原町、新地町、いわき市内郷、いわき市勿来	《共通語化》その他	「非標準語形」の使用と心理的特性との関わり。分量多い。
46	大橋純一	2005	関東・東北境界域方言の分布パターン	いわき明星大学人文学部研究紀要18	108-118	福島県南東部(いわき市、ほか地点不明)『関東・東北境界域言語地図』に即する	《地理的分布》その他	語彙の地理的分布パターン。
47	本多真史	2005	平行するグロットグラムと平面分布図による言語侵入の立体的把握 北関東から福島県中通り・浜通りにかけて	いわき明星大学大学院人文学研究科紀要3	51-62	浜通り(相馬、原ノ町、小高、浪江、双葉、大野、富岡、竜田、末続、四倉、平、湯本、勿来)	《グロットグラム》その他、《共通語化》その他	グロットグラム調査による共通語侵入傾向の把握。分量多い。
48	大橋純一	2006	方言事象分布における使用語と理解語『関東・東北境界域言語地図』調査に即して	いわき明星大学人文学部研究紀要19	32-43	浜通南部、ほか地点不明『関東・東北境界域言語地図』に即する	《地理的分布》その他	使用語に対する理解語の比率、その傾向、分布パターン。分量多い。
49	本多真史・加藤浩二	2006	福島県中通り・浜通りにおける方言領域 生活圏との関わりに着目して	言文54	2-11	浜通り	《地理的分布》その他	「氷柱」を例に見た方言領域と生活圏との関係。分量少ない。
50	大橋純一	2006	福島県いわき市平下高久方言の立ち上げ	方言資料叢刊9	15-22	いわき市平下高久	《記述的研究》アクセント、意味・用法	立ち上げ詞の種類。アクセント少し。分量少ない。
51	小林初夫	2006	福島県相馬市小高町鮎崎方言の立ち上げ	方言資料叢刊9		相馬市小高区	《記述的研究》その他	
52	作田将三郎	2006	東北地方における「雷」の地方語史	文化69-3・4(東北大学文学会)	58-324	相馬市、伊達市、いわき市	《記述的研究》その他、《地理的分布》語彙	
53	本多真史	2007	福島県方言「ナイ」について—福島県北部地域を例として	言文55	16-28	飯野町	《記述的研究》文末形式	被災地に隣接
54	大橋純一	2008	福島県いわき市方言の研究 関東・東北接触地域の世代別多人数調査	いわき明星大学大学院人文学研究科日本文学専攻		いわき市	《世代差》語彙	様々な分析を行い、グラフや表が多く示されている。語彙使用の世代差を多面的に見たもの。
55	本多真史	2008	関東・東北接触地帯における新方言普及	言文56	32-42	相馬市、南相馬市、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、広野町、いわき市、飯舘村、川俣町、伊達市、田村市、葛尾村	《グロットグラム》語彙	東北本線、常磐線グロットグラム
56	半沢 康	2010	福島県南相馬市小高区方言の変容 方言実時間調査データの比較	言文57	左2-14	南相馬市小高区	《世代差》音声、アクセント、文法、語彙、方言意識	
57	本多真史	2010	福島県相馬市小高区における方言使用実態 世代差に注目して	言文57	左15-25	南相馬市小高区	《世代差》《共通語化》語彙	多人数調査

⑫ 福島県文献リスト（市町村史）

No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	福島県	1967	福島県史 第24巻 民俗2	福島県	379-491	全県	《記述的研究》《地理的分布》音韻、語彙、文法概説	第六章 言語生活 岩崎敏夫・秋山政一著
2	福島県史料叢書刊行会	1968	福島県郡誌集成15	福島県史料叢書刊行会	301-308	いわき市	《記述的研究》方言集	第四節 方言訛語
3	福島県史料叢書刊行会	1969	福島県郡誌集成16	福島県史料叢書刊行会	156-179	相馬、いわき	《記述的研究》方言集	第五節 方言訛語
4	常葉町	1974	常葉町史	常葉町	572-575	田村市	《記述的研究》音韻、助動詞、方言集	4ページに満たない記述で、それほど詳しくはない。
5	相馬市史編集会	1975	相馬市史3 各論編2・民俗・人物	相馬市史編集会	648-659	相馬市	《記述的研究》敬語、その他	第五節 相馬のことば
6	伊達郡役所	1979	伊達郡誌	伊達郡役所	214-231	川俣町	《記述的研究》音声、語彙	第十五章 方言訛語
7	飯舘村史編集委員会	1979	飯舘村史 第一巻 通史	飯舘村	829のみ	飯舘村	《記述的研究》方言集	附資料 第四節 方言訛語
8	新福島風土記編集会	1981	新福島風土記2 福島県の自然と生活	創土社	441-448	相馬、いわき	《記述的研究》音韻、語法、語彙	福島県のことば
9	保原町史編集委員会 渡辺友左（転載）	1981	保原町史 第4巻 民俗	保原町	766-799	伊達市	《記述的研究》語彙、方言集	前半（766-777）「福島北部方言の形容詞語彙体系」（転載、一部改編） 後半（778-799）保原近郷方言集
10	船引町 船引町教育委員会 船引町史編さん委員会	1982	船引町史 民俗編	船引町 船引町教育委員会 船引町史編さん委員会	725-733	田村市	《記述的研究》方言集	第十章 三 方言
11	都路村史編集委員会	1985	都路村史	都路村	635-652	田村市	《記述的研究》方言集	第四編 民俗と宗教 第六節 方言と訛語
12	田中正能監修 富岡町史編集委員会編	1987	富岡町史 第三巻 考古・民俗編	田中正能監修 富岡町史編集委員会編	925-959	富岡町	《記述的研究》方言集	第十章 第二節 方言
13	川内村史編集委員会	1988	川内村史 第三巻 民俗編	川内村史編集委員会	612-642	川内村	《記述的研究》方言集	第十二章 一 方言
14	滝根町史編さん委員会	1988	滝根町史 第3巻 民俗	田村市	805-829	田村市	《記述的研究》音声、音韻、語彙、文法	第四節 滝根のことば 方言のほぼ全般にわたる記述が行われている。
15	葛尾村史編集委員会	1991	葛尾村史	葛尾村	528-549	葛尾村	《記述的研究》方言集、文法概説	品詞ごとに記載。
16	大越町教育委員会町史編さん室	1996	大越町史 第三巻 民俗編	大越町教育委員会町史編さん室	622-644	田村市	《記述的研究》音韻、方言集、文法その他	第一節 第九章 三方言

⑬ 茨城県文献リスト（書籍）

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	井川作之助 (巴水)	1911	茨城百科全書上巻	茨城百科全書発行所	308	水戸市～全域 土浦市	《記述的研究》方言集	「茨城方言」(p.189-307)として方言語彙集(方言形一語詞一共通語)を掲げる。
2	佐藤季愛	1936	鹿島郡に於ける方言語彙の研究	私製	174	鹿島郡	《記述的研究》音韻、文法概説、方言集	
3	田口美雄	1954	地調(54) 方言の記述(茨城県新治郡田余村)		81	全域	《記述的研究》音韻、活用、助詞・助動詞	最初に「茨城県方言の概観」があり、そののち音韻、文法とつづく
4	外山善八、金沢直人	1966	水戸地方の方言資料—(附)符牒・符号および隠語—	茨城民俗学会	71	水戸市	《記述的研究》方言集	
5	郷土大観・磯浜志	1969	大洗町史料	大洗町教委	10	大洗町	《記述的研究》音声	方言訛語、俗説、歌謡などについて紹介している。
6	井上史雄・加藤正信・高田誠・徳川宗賢	1971	利根川流域の語の分布	弘文堂発行	11	利根川河口から上流の沼田市南部まで(茨城県33地点)	《記述的研究》方言集	分布地図が多い。
7	茨城教育協会	1975	茨句方言集覧	国書刊行会	255	全域	《記述的研究》方言集	
8	更科公護	1981	茨城こども歳時記(春夏編)	筑波書林(土浦) (茨城図書)ふるさと文庫	1-104	全域	《記述的研究》語彙	茨城県のかつての農村における四季折々の子供の遊びを解説したもの。春「たこあげ」～「国とり」(55項目)、夏「五月節供と武者遊び」～「子供と俗信」(73項目)、各0.5～2ページ程度の分量。解説の中に方言形(方言の呼び名)が出てくる。
9	更科公護	1982	茨城こども歳時記(秋冬編)	筑波書林(土浦) (茨城図書)ふるさと文庫	105-185	全域	《記述的研究》語彙	春夏編に同じ。春夏編とは別冊だが、ページは通し。秋「チンチロリメ捕り」～「バテン銃」(53項目)、冬「たき火」～「もちつき」(51項目)。
10	遠藤忠男	1983	茨城のことば 上	筑波書林	96	全域	《記述的研究》語彙	上巻はpp.96
11	遠藤忠男	1984	茨城のことば 下	筑波書林	194	全域	《記述的研究》語彙	下巻はpp.97～194
12	更科公護	1986	水戸市の動植物方言	筑波書林(土浦) (茨城図書)ふるさと叢書		水戸市		
13	横山俊珠	1986	なんだんべえ歳時記—茨城のことば・習俗12カ月	川又書店	199	全域	《記述的研究》語彙	
14	市村正二・瀬谷義彦・櫻井明俊	1987	茨城県風土記	旺文社	16	全域	《記述的研究》音韻、アクセント、意味・用法、助詞、活用、文末形式・文末表現、接頭語、表現:あいさつ、敬語、談話資料、その他	
15	波崎町文化財保護審議会	1990	波崎のことば	波崎町教育委員会	132	鹿島郡波崎町	《記述的研究》音韻、文法概説、方言集	波崎町方言の発音と文法の特徴を概説した上で、方言語彙集(方言形一意味一用例の3段からなる)を五十音順に掲げる。
16	赤城毅彦	1992	茨城方言民俗語辞典	大橋信夫	1015	全域	《記述的研究》方言集	辞典として、分量が多い。
17	著者:山形巍 編集・著者:黒澤利康	2003	方言事典—大津あたりの言葉と民俗—	北茨城民俗学会	550	北茨城市(旧大津町)	《記述的研究》方言集	
18	加藤正信ほか編	2004	関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線グロットグラム	いわき明星大学人文学部加藤正信研究室	379	北茨城市、高萩市、日立市、ひたちなか市、水戸市	《グロットグラム》音韻、アクセント、語彙、助詞、活用、テンス/アスペクト、条件表現、方言意識	前半は福島県、中南部～栃木・茨城県北部の言語地図。後半はグロットグラム。



⑭ 茨城県文献リスト（論文）

No.	編著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
1	浅野 長雄	1956	茨城県海産魚類の方言について	魚類学雑誌	33	全域	《記述的研究》方言集	茨城県沿岸以外に、全国の方言も収載。
2	金沢直人	1964	茨城県の竹馬方言の分布	茨城の民俗3				
3	鼓 乙音	1965	水郷玉造を中心とした方言	茨城の民俗4				
4	茨大研方言ゼミ	1966	茨城県の永柱方言の分布 資料編(口承文芸)その一 俚諺と言話(天気・時刻・昔話など)その二 方言・民謡	茨城の民俗5				
5	広瀬半之介	1966	水戸の方言	茨城の民俗5				
6	石馬賢洲	1966	大野村地方の方言	茨城の民俗5				
7	鼓 乙音	1966	水郷玉造を中心とした方言(続)	茨城の民俗5				
8	石馬賢洲	1968	植物動物方言(茨城町)	茨城の民俗6				
9	石馬賢洲	1968	大野村地方の方言(追加)	茨城の民俗6				
10	石黒賢洲	1971	鹿島郡大野地方の方言(その三)	茨城の民俗10	1	鹿島郡大野地方		
11	更科公護	1972	趣味の動・植物方言探訪	茨城の民俗11				
12	野尻洋一	1973	那珂湊の自然発話	フィールドの歩みー生活語研究の記録ー(2)	20	那珂湊市	《記述的研究》表現	
13	青柳柳三	1973	東北の東海岸における方位潮流語彙の外観	フィールドの歩み4	49-69	日立市	《地理的分布》語彙	岩手県久慈市久喜より茨城県日立市川尻に至る22の漁港で、漁歴の長い人から聞き取り調査をしたもの。
14	更科公護	1975	県南地方の動・植物方言	茨城の民俗14				
15	更科公護	1976	霞ヶ浦浮島の動・植物方言	茨城の民俗15				
16	大崎和二他	1978	茨城、千葉両県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究 第1報 田植法とそれに関係する方言の分布について	茨城大学農学部学術報告25	89-106	全県	《記述的研究》方言集	方言についてはp.99-101に「方言の分布」として掲載。
17	高井良水	1980	猪川村の方言	茨城の民俗19				
18	更科公護	1983	波崎町の動植物方言	茨城の民俗22				
19	更科公護	1985	茨城のトンボの方言	茨城の民俗24				
20	更科公護	1987	茨城のセミの方言	茨城の民俗26				
21	更科公護	1988	茨城の植物方言	茨城の民俗27				
22	更科公護	1989	バッタと鳴く虫の方言	茨城の民俗28				
23	更科公護	1991	蝶や蛾の茨城方言(付幼虫および繭)	茨城の民俗30				
24	更科公護	1993	茨城の植物方言ー水田やその周辺の草ー	茨城の民俗32				
25	大塚 徹	1994	茨城県つくば市谷田部のアスペクト	方言資料叢刊(4)	6	つくば市谷田部	《記述的研究》アクセント	
26	大塚 徹	1995	茨城県岩間町方言の否定の表現	方言資料叢刊(5)	5	茨城県岩間町	《記述的研究》その他	
27	大塚 徹	1997	茨城県西茨城郡岩間町方言の待遇表現	方言資料叢刊(7)	4	西茨城郡岩間町	《記述的研究》敬語	
28	内藤裕之	1999	使役表現「サセル」による待遇法の特徴ー北茨城市方言を対象として	地域方言調査研究法	5	北茨城市		
29	二宮 愛	2002	茨城方言の談話展開の方法ー『全国方言資料』自由会話を対象として	フェリス女学院大学日文大学院紀要(9)	5	新治郡葦郷村	《記述的研究》談話分析	
30	早野慎吾	2002	東京語話者と茨城語話者のイメージー水戸市の調査から	名古屋・方言研究会会報19	8	水戸市		
31	早野慎吾	2002	首都近郊都市における方言形の分類ー茨城県水戸市の場合ー	地域語研究論集：山田達也先生喜寿記念論文集	26	水戸市	《共通語化》その他	
32	山田 伸子	2003	茨城方言話者によるアクセントのスタイル	人文学科論集(28)	17	？	《共通語化》アクセント	
33	早野 慎吾	2006	キャンパスことばの研究常盤大学(茨城県水戸市)の調査から	宮崎大学教育文化学部紀要：人文学(通号 14)	23	水戸市	《記述的研究》その他	
34	早野慎吾	2006	無アクセントの比較研究：栃木・茨城アクセントと宮崎アクセントの比較	地域文化研究1	10			
35	本多真史	2008	関東・東北接触地帯における新方言普及	言文56	32-42	北茨城市、高萩市、日立市、東海村、ひたちなか市、水戸市	《グロットグラム》語彙	東北本線、常磐線グロットグラム

No.	編著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
36	若狭 あゆみ	2009	茨城県沼田町方言のイントネーションに関する記述音声学的研究	言語学論叢(25)	13	つくば市沼田町	《記述的研究》イントネーション	
37	更科公護	?	動物の方言ー茨城町の方言ー	?	4	東茨城郡茨城町	《記述的研究》方言集	

⑮ 茨城県文献リスト（市町村史）

No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	鹿島町史	1974	鹿島町史	鹿島町史	514-551	鹿嶋市	《記述的研究》音声、アクセント、方言集	方言
2	長生村史編集委員会	1960	長生村史	長生村	473-474	長生村	《記述的研究》語彙	「べえ」「アニ(何)」など、その他語彙の列挙。記述はコメント程度。
3	大野村史編さん委員会	1979	大野村史	大野村長	399-401	鹿島郡大野村	《記述的研究》方言集	思いつくまま収集。
4	潮来町史編さん委員会	1996	潮来町史	潮来町役場	921-927	潮来町	《記述的研究》談話	昔話、世間話 全文方言のものあり。 引用元：茨城民俗学会 『国鉄鹿島線沿線の民俗』鶴尾能子「潮来・鹿島の昔話資料」
5	高萩市史編集専門委員会	1969	高萩市史 下	高萩市役所	701-710	高萩市	《記述的研究》方言集、《地理的分布》語彙	
6	東海村史編さん委員会	1992	東海村史9 民俗編	東海村	963-980 998-1000	東海村	《記述的研究》方言集、談話、音韻、文法概説	主体的に語彙が載っている。民俗の解説、説明。 さらに当時の若い世代4人に対して使用語彙、理解語彙を尋ねている。また、節末には談話資料も掲載。充実している。 p.998-1000に当方言の音韻、文法の簡略な解説がある。

⑩ 千葉県文献リスト（書籍）

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	栗飯原金次郎 神戸直次	1911	千葉縣 方言調査書	栗飯原金次郎 神戸直次	45		《記述的研究》語彙(方言集)	
2	調査者 井田律子	1928	千葉県海上郡高神村 地方方言	郷土研究社発行	東条操 編の「方 言採集 手帖」に 調査結 果を手 書き記 入したも の	旭市	《記述的研究》語彙(方言集)	名詞・代名詞・形容詞・動 詞・雑誌などの単語や文 例について掲載。
3	本山桂川	1932	千葉県郡別方言集 上	本山桂川	56	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	4点 複写・製本
4	本山桂川	1932	千葉県郡別方言集 中	本山桂川	106	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	4点 複写・製本
5	本山桂川	1932	千葉県郡別方言集 下	本山桂川	166	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	4点 複写・製本
6	井上平四郎	1933	山武郡方言研究	井上平四郎	55	山武市	《記述的研究》アクセント／音声／音韻	4点 複写・製本
7	塚田芳太郎 編	1934	千葉方言 第1	千葉方言刊行会	165	千葉	《記述的研究》文法(文法概説)	
8	嚶鳴尋常高等 小學校編	1937	嚶鳴村方言	「嚶鳴村々誌」よりの 抜刷	?	旭市	《記述的研究》語彙(意味・用法)／音声 (音韻)	西沢良澄氏の調査による。特殊語・清音濁音・音 韻・対照語彙など
9	安藤操	1942	房総のふるさと言葉	国書刊行会(NPO 法人ふるさと文化 研究会)	245	九十九里、白 子町、いすみ 市、銚子市、 一宮町、匝瑳 市、山武市	《記述的研究》談話、言語行動、語彙(意 味・用法)	
10	上智大学史学 会、史学研究 会編	1968	東上総の社会と文化： 千葉県長生郡総合調 査	上智大学史学会、史 学研究會		長生	未確認	
11	川名興	1969	千葉県の植物方言 第一報	第3報の発行地は [鋸南町(千葉県)]	135	全域	《記述的研究》語彙(方言集)、 《地理的分布》語彙(意味・用法)	
12	川名興	1969	千葉県の動物方言 第一報	川名興	145	全域	《記述的研究》語彙(方言集)、 《地理的分布》語彙(意味・用法)	
13	川名興	1970	千葉県の動物方言、 千葉県の植物方言 第二報	川名興	76	全域	《記述的研究》語彙(方言集)、 《地理的分布》語彙(意味・用法)	
14	川名興	1971	千葉県の動物方言、 千葉県の植物方言 第三報 上	川名興	249	全域	《記述的研究》語彙(方言集)、 《地理的分布》語彙(意味・用法)	
15	川名興	1971	千葉県の動物方言、 千葉県の植物方言 第三報 中	川名興	260	全域	《記述的研究》語彙(方言集)、 《地理的分布》語彙(意味・用法)	
16	川名興	1971	千葉県の動物方言、 千葉県の植物方言 第三報 下	川名興	209	全域	《記述的研究》語彙(方言集)、 《地理的分布》語彙(意味・用法)	
17	椎野秀峯 編	1971	長生地方の童謡と民 謡方言里諺集	東総園	237	長生	《記述的研究》語彙(方言集)	
18	徳川宗賢・ 坂本真理子	1974	千葉県夷隅川流域方 言地図	学習院大学方言研 究会 (夷隅のことばをた ずねる会)	48図	いすみ	《地理的分布》語彙	動物名・植物名・日常用 語・遊び・動詞など48の 語の地図
19	塚田芳太郎 [等]編	1975	千葉方言 山武郡篇	青史社、合同出版	110	山武	《記述的研究》音韻／活用／その他	
20	川名興	1975	富津市(旧富津町)の 動物方言基礎資料； 富津市(旧富津町)の 動・植物方言 その2- その3		?	富津	《記述的研究》語彙(方言集)	「その2」は植物方言名を 併載。29種の動物名の 異名の調査。
21	戸石四郎、戸 石芳江[共]著	1981	銚子の民俗と方言	嵩書房	179	銚子	《記述的研究》語彙(方言集)／文法(文 法概説)	
22	千葉県教育委 員会	1981	千葉県方言の自然談 話1	千葉県教育委員会	778	長生郡、海上 郡(現・旭市)	《記述的研究》談話	
23	戸石史郎、戸 石芳江	1981	銚子の民俗と方言2	嵩書房	90-91	銚子市	《記述的研究》音韻、文法概説、接続表 現、助詞	「銚子方言の特色私見」 ふるさと文庫(新書)
24	山本熊之助	1982	私の銚子方言考	工面堂	111	銚子	《記述的研究》語彙(方言集)	
25	千葉県教育委 員会	1982	千葉県方言の自然談 話2	千葉県教育委員会	821	長生郡、海上 郡(現・旭市)	《記述的研究》談話	
26	川名興	1983	千葉県の方言の特徴		2	全域	《記述的研究》文法(文法概説)／語彙 (意味・用法)	
27	千葉県教育委 員会	1983	千葉県方言の自然談 話3	千葉県教育委員会	624	長生郡、海上 郡(現・旭市)	《記述的研究》談話	昔の海岸のようす、子ど もの頃の遊びといった談 話を収録
28	学習院大学方 言研究会	1983	千葉県夷隅川流域新 方言地図	学習院大学方言研 究会	頁付な し	いすみ	《地理的分布》語彙	

No.	編著者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
29	更科公護	1985	水戸市の動植物方言 動物編	筑波書房(土浦)	1-78	水戸市	《記述的研究》語彙	昆虫類、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、獣類についての解説。人々の暮らしの中の動物という視点から。共通語名を示し、その動物について百科辞典的な解説をする中で方言も示している。各項目3分の1ページ平均。他に語形索引15ページを付す。 新書(ふるさと文庫)
30	更科公護	1985	水戸市の動植物方言 植物編	筑波書房(土浦)	79-163	水戸市	《記述的研究》語彙	雑草や庭の植物、樹木、苔やきのこ、農作物についての解説。(以下、動物編に同じ)他に語形索引13ページを付す。 動物編とは別冊だが、ページは通し。
31	川名興	1986	千葉県の植物方言 (6)-(10)	野外植物研究会刊「野草」 No.399(vol.50), No.403(vol.51), No.405(vol.51)- No.406(vol.51), No.409(vol.52)よりの複写 昭和59-昭和61	8	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	
32	銚子市教育委員会 編	1988	銚子のことば	銚子市教育委員会 編	119	銚子	《記述的研究》文法(文法概説)／音声／音韻／アクセント、語彙(方言集)	
33	小高昇	1990	一宮地方方言集	一宮町	34	一宮	《記述的研究》語彙(方言集)	
34	川名興	1992	千葉県のモクスガニの方言	日本甲殻類学会発行「Cancer」第2号別刷(p3-6)		全域	《地理的分布》語彙(意味・用法)	
35	井上史雄 [ほか] 編	1995	関東方言考 2 (群馬県・埼玉県・千葉県・神奈川県) /	ゆまに書房	658	全域	《記述的研究》文法(文法概説)	
36	石橋満壽男	1996	千葉訛：方言集	東京文芸館	198	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	
37	銚子市教育委員会 編	1996	銚子のことば	銚子市教育委員会 編	124	銚子	《記述的研究》文法(文法概説)／音声／音韻／アクセント、語彙(方言集)	改訂増補第2版
38	篠崎晃一ゼミ 編	1996	千葉縣白子町方言調査報告書	東京立大学人文学部	142	白子町	《記述的研究》音声／語彙(意味・用法)／文法(助詞)／待遇表現／方言意識	
39		19-	千葉縣夷隅郡誌：方言の部	「千葉縣夷隅郡誌」方言の部を筆写したものか?	?	いすみ	《記述的研究》語彙(方言集)	



⑪ 千葉県文献リスト (論文)

No.	編著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
1	大久保初男	1889	上総国長柄郡一ノ宮	人類学雑誌4	?	一ノ宮町		
2	森山歳士	1916	九十九里浜方言考	風俗画報477		九十九里町	《記述的研究》語彙(方言集/意味・用法)	
3	日本民俗研究会	1932	千葉県郡別方言集中巻	民俗研究43	104	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	
4	日本民俗研究会	1932	千葉県郡別方言集下巻	民俗研究46	?	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	
5	浅野栄一郎	1936	千葉県長生郡の村言	方言誌16	?	長生郡	《記述的研究》語彙(方言集)	
6	林天然編	1939	房総方言集(1)	千葉文化8月号	5	長生郡	《記述的研究》語彙(方言集)	8月号～12月号で1冊
7	林天然編	1939	房総方言集(2)	千葉文化9月号	5	長生郡	《記述的研究》語彙(方言集)	8月号～12月号で1冊
8	林天然編	1939	房総方言集(3)	千葉文化10月号	5	長生郡	《記述的研究》語彙(方言集)	8月号～12月号で1冊
9	林天然編	1939	房総方言集(4)	千葉文化11月号	5	長生郡	《記述的研究》語彙(方言集)	8月号～12月号で1冊
10	林天然編	1939	房総方言集(5)	千葉文化12月号	5	長生郡	《記述的研究》語彙(方言集)	8月号～12月号で1冊
11	中村 通夫 他.	1958	千葉方言におけるいわゆる「語中K音の脱落現象」の調査(中間報告)	中央大学国文.	?	全域	《記述的研究》音声(音声)	
12	W.A. グローターズ 柴田武	1959	千葉県アクセントの言語地理学的研究	国語学37	?	全域	《地理的分布》音声(アクセント)	
13	金田一春彦	1960	房総アクセント再論ーグローターズさんの「千葉県アクセントの言語地理学的研究」を読んで	国語学40	2	房総半島	《地理的分布》音声(アクセント)	
14	中村正紀	1968	一ノ宮町東浪見地区方言集稿	上智大学方言学会会報37	16	全域	《記述的研究》方言集	
15	中条修	1971	千葉県山武町方言の音韻	都立大学方言学会会報37	?	山武町	《記述的研究》音声(音声/音韻)	
16	川名興	1971	千葉県の植物方言	『新版 千葉県植物誌』千葉県生物学会編 井上書店		全域	《記述的研究》語彙(方言集)	
17	加藤昭	1972	外川ことばの音声面における特徴	フィールドの歩み1	18	銚子	《記述的研究》音声(音背/音韻)	漁に関する語。分量少ない。
18	野尻洋一	1972	『外川の自然と人間』	フィールドの歩み1	18	銚子	《記述的研究》音声(音背/音韻)	風と潮に関する語。分量少ない。
19	大橋勝男	1972	関東地方の方言についての言語地理学的研究	新潟大学教育学部紀要14号 人文・社会科学編 / 新潟大学教育学部 編	12	全域	《地理的分布》語彙	千葉県の方言調査地点は29地点
20	川名興	1972	生物方言の教材化	理科教育研究11-5(千葉県教育センター発行)	2	富津	《記述的研究》語彙(方言集)	
21	川名興	1972	生物方言の教材化	理科教育研究11-5	6-7	安房郡	《記述的研究》語彙	
22	村上昭子	1973	外川の自然発話(1)	フィールドの歩み2	34	銚子	《記述的研究》音声(音背/音韻)	会話に見られる音韻。分量やや多い。
23	大島一郎	1973	千葉県山武町方言の語法	人文学報96	24	山武町	《記述的研究》活用	形態と表現について。分量やや多い。
24	川名興	1975	千葉県でのネコハエトリの方言	房総文化研究所発行「房総文化」第13号 よりの抜刷(p13-23)	?	全域	《地理的分布》語彙	
25	川名興	1975	千葉県の主な生物方言	日本生物教育会第30回全国大会(千葉大会)実行委員会「千葉県の生物」編集部編「千葉県の生物」(1975.8刊)別刷	14	全域	《記述的研究》語彙(方言集)	
26	川名興	1975	千葉県の植物方言	新版千葉県植物誌	316-320	安房郡、夷隅郡	《記述的研究》方言集	安房郡、夷隅郡における動植物の方言名について、地点名を載せながら数十語掲載してある。
27	川名興	1975	千葉県の主な生物方言	千葉県の生物別刷	227-241	全県	《記述的研究》方言集	千葉県の動植物名を掲載。26項目。地点名あり。
28	川名興	1975	千葉県でのネコハエトリの方言	房総文化13	13-23	富津市、全県	《記述的研究》語彙	
29	青柳精三	1977	九十九里浜片貝の網巻網漁の語彙	フィールドの歩み10	32	九十九里町片貝	《記述的研究》意味・用法	漁に関する語彙。説明あり
30	伊東裕子	1977	千葉県九十九里浜片貝の風	フィールドの歩み10	4	九十九里町片貝	《記述的研究》意味・用法	風に関する語。分量少ない
31	川名興	1977	千葉県のゴキブリの方言	千葉県生物学会発行「千葉生物誌」26巻2号 別刷(p93-	9	全域	《地理的分布》語彙	

No.	編著者	発行年	論文名	雑誌名	頁数	地域	内容	注
32	大崎 和 他	1977	茨城・千葉両県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究-1-田植法とそれに関係する方言の分布について	茨城大学農学部学術報告 / 茨城大学農学部 [編]	17	全域	《地理的分布》語彙(意味・用法)	
33	太田守	1977	千葉県九十九里浜片貝の潮	フィールドの歩み10	5	九十九里町片貝	《記述的研究》意味・用法	潮に関する語。分量少ない
34	川名興	1977	千葉県のゴキブリの方言	千葉生物誌26-2	93-102	全県	《地理的分布》語彙	ゴキブリの方言について、千葉県全域の語形分布を地図化してある。
35	川名興	1978	富津市富津の方言分布図：特に老人と中学生の場合	千葉県生物学会刊「千葉生物誌」Vol. 27 No. 1.2 (1978.2 刊)の別刷 参考文献: p123-124	12	富津	《地理的分布》語彙	
36	川名興	1978	富津市富津の方言分布地図：特に老人と中学生の場合	千葉生物誌(創立30周年記念号)別刷 27-12(通巻66)	123-133	富津市	《地理的分布》語彙、世代差	動植物の方言(26項目)について、富津市の明治生まれと当時中学3年生のその孫を対象に調査。26項目について地図を作成してある。
37	川名興	1981	富津市青木海岸の海藻・富津市西川での海産物方言	安房生物愛好会『冬虫夏草』No16	2	富津	《記述的研究》語彙(意味・用法)	
38	川名興	1981	富津市西川での海産物方言	冬虫夏草16	56-57	富津市	《記述的研究》方言集	20程度の語。
39	川名興	1982	佐倉の鳥の方言	安房生物愛好会『冬虫夏草』No18	3	富津	《記述的研究》語彙(方言集)	
40	川名興	1983	千葉県方言の特徴	房総半島の孤島性とその文化の研究	2	全域	《記述的研究》文法(文法概説)	『トヨタ財団助成研究報告書』(房総半島の孤島性研究会 研究代表者 鈴木晃)
41	伊藤一也	1983	千葉方言の文法—山武方言の名詞・動詞の形態論	琉球方言と周辺のことば	40	山武町	《記述的研究》文法概説	名詞・動詞の形態論。分量多い。用例多い。
42	伊藤一也	1984	千葉方言の文法から—「ニ」格、サ格、「ヲ」格、シコド格のはりあい関係を見る	国文学：解釈と鑑賞 / 至文堂 編	11	全域	《記述的研究》文法(助詞)	
43	川名興	1986	植物の方言にみる命名の民俗学的考察	『日本民俗学』日本民俗学会編	9	全域	《記述的研究》その他	
44	篠崎晃一	1991	千葉方言における動詞・形容詞の活用	人文学報 / 首都大学東京都市教養学部人文・社会系、東京都立大学人文学部 編	21	全域	《記述的研究》文法(活用)	
45	佐藤亮一	1991	千葉県銚子市高神東町における祝言のあいさつ	方言資料叢刊1	6	銚子市	《記述的研究》談話資料・語彙(意味・用法)	
46	篠崎晃一	1991	千葉方言における動詞・形容詞の活用	人文学報225	59-80	旭市、勝山市	《記述的研究》活用	その他、長生郡長南町小沢、印旛郡本埜村が調査地点。
47	佐藤亮一	1992	千葉県銚子市市田神東町方言における身体感覚を表すオノマトペ	方言資料叢刊2	6	銚子市	《記述的研究》語彙(意味・用法)	
48	浅尾 公司	1994	外房・大原の方言に関する一考察	環境社会学研究 / 千葉大学教育学部社会学研究室 [編]	2	いすみ	《記述的研究》語彙(意味・用法) / 談話	
49	篠崎晃一	1995	地域社会への新語の浸透—山形県東田川郡三川町と千葉県長生郡白子町との比較	人文学報266	13	白子町	《共通語化》語彙(意味・用法)	新語の浸透。分量少ない。
50	江波戸絹代	1998	千葉県下の高校生の方言使用の状況	日本文学誌要58	14	全域	《共通語化》音韻、語彙、文法、その他	卒業論文
51	小嶋小百合	2003	千葉の方言について—特に「アオナジミ」を中心として	昭和学院国語国文、(36) 2003.3	6	全域	《地理的分布》語彙	
52	川名興	2003	海辺の人々からみた天文・気象方言と天気の良い伝え 銚子、九十九里、白浜、富津、金田	千葉県立安房博物館研究要綱10、『研究紀要』(抜き刷り)	42	銚子の一部、九十九里町、白浜町、富津市、木更津市	《地理的分布》語彙(意味・用法)	
53	川名興	2003	海辺の人々からみた天文・気象方言と天気の良い伝え 銚子、九十九里、白浜、富津、金田	千葉県立安房博物館研究要綱10	3-42	銚子市、九十九里町、白浜、富津、金田	《記述的研究》《地理的分布》語彙	アンケート結果の掲載。
54	小嶋小百合	2003	千葉の方言について—特に「アオナジミ」を中心として	国語国文36(昭和学院短期大学)	28-34	富津市	《記述的研究》語彙	

⑩ 千葉県文献リスト（市町村史）

No.	編者	発行年	書名	発行所	頁数	地域	内容	注
1	山田角次郎	1900	香取郡誌 合巻	山田角次郎	93-97	香取郡	《記述的研究》方言集	方言
2	夷隅郡役所	1923	千葉県夷隅郡誌	夷隅郡役所	745-777	いすみ市	《記述的研究》方言集、意味	第二十二章 方言訛言
3	木更津市史編集委員会	1972	木更津市史	木更津市	1013-1022	木更津市	《記述的研究》方言集	木更津方言について分野別に代表的語彙を収録。方言については他文献からの引用。その他、俚語、俗語、伝説などの資料が多くある。
4	勝田市史編さん委員会	1975	勝田市史民俗編	勝田市	827-828	勝田市	《記述的研究》アクセント	四、うたと遊び 2、子どもの遊びの歌 茨城方言とわらべ歌（わらべ歌と無アクセントとの関係について短く触れている）
5	千潟町史編集委員会	1975	千潟町史	千潟町	1541-1566	旭市	《記述的研究》方言集	方言を五十音順に配列。語数は比較的多い。
6	山武郡教育委員会	1976	山武郡郷土誌	崙書房	208-221	山武郡	《記述的研究》方言集	第十六章風俗 第二節 言語 山武郡方言集として挙げられている。
7	長生村風土記編集委員会	1980	長生村風土記 明治・大正篇	長生村教育委員会	367(345～357)	長生村	《記述的研究》語彙（方言集）	
8	飯岡町史編さん委員会	1981	飯岡町史付篇	飯岡町	327-338	旭市	《記述的研究》方言集	海上郡誌、小見川町史、千潟町史より収集。俚言のみ。
9	木更津市史編集委員会	1982	木更津市史 富来田編	木更津市	512-524	木更津市	《記述的研究》方言集	木更津市内旧富来田地区で用いられている方言について、『富岡村誌』『富来田子供風土記』から引用掲載している。語数は余り多くない。
10	岬町史編さん委員会	1983	岬町史	岬町	1285-1296	いすみ市	《記述的研究》方言集	方言を五十音順で列挙。方言の出典は「古沢村誌」「中根村誌」「夷隅郡誌」など。
11	銚子市	1983	続銚子市史Ⅱ昭和後期	銚子市	796-817	銚子市	《記述的研究》音声、音韻、終助詞、語彙、敬語	方言概説
12	千倉町史編さん委員会	1985	千倉町史	千倉町	801-803	南房総市	《記述的研究》方言集	千倉町方言について分野別に代表的語彙を収録。その他、俚語、俗語、民謡、ほめ言葉などについて記載あり。
13	大網白里町史編さん委員会	1986	大網白里町史	大網白里町	1232-1239	大網白里町	《記述的研究》方言集	当地域の特色を持つ方言について方言五十音順に列挙（『山武郡郷土誌』を参照） 他に俚語などが多少記されている。
14	長生村風土記編集委員会	1988	長生村風土記 昭和篇	長生村教育委員会	222(32)	長生村	《その他》方言にまつわる随筆	
15	白子町風土記編集委員会編	1989	千葉県長生郡白子町風土記	白子町風土記編集委員会	?	白子町	《記述的研究》語彙（方言集）／文法（文法概説）	二、方言・訛語(1)方言の現状 (2)訛語の現状 (3)収録の範囲
16	九十九里町誌編集委員会編	1992	九十九里町誌 各論編 下巻	九十九里町	1246(782～797)	九十九里	《記述的研究》文法（文法概説）、語彙（方言集・意味・用法）	
17	夷隅町史編さん委員会	2004	夷隅町史通史編	夷隅町	966-980	いすみ市	《記述的研究》方言集	五十音順、会話からの聞き取りによる方言。